

百二十周年記念誌

2017

大島商船高等専門学校

校旗



校旗

校歌

大島商船高等専門学校校歌

岡本暢也 作詞
星野哲郎 補作
桜田誠一 作曲

いいのやまはみどりにあけてこう
がくのしきふもと一をかこむ
わかものたちはじだいをみつめ
せかいへむけてぎをきそいしおのかめぐるおー
おーしまのわがまなびやにのぞ
みーはたぎる

一、飯の山はみどりに明けて
向学の士氣麗を囲む
若者たちは時代をみつめ
世界へ向けて技を競い
潮の音めぐる大島の
わが學會に望みはたさる
二、笠佐の島に春かえる田山
鳴門の瀬戸に秋立つ日にも
若者たちは眞理を究め
未見の我を磨きだす
この透きとおる窓の中
懐春の情あふれてやまざ
三、七つの海に命を浮かべ
青春賭けた伝統の血は
若者たちの腕を流れ
平和の鐘をうち鳴らす
ロマンを愛す大島の
祈りははるか銀河をわたる
四、俗塵洗つ瓈珀の海に
夕陽はうたう未来への讃歌
若者たちは肩くみあって
はてなき夢を語りあう
コンパスの旗わが學舎に
理想は宿る永久を指し

航空写真



歴代校長

初代校長

馬來常徳
(明治30.10～明治31.2)
郡立大島海員学校



第3代校長

井上猪三郎
(明治32.4～明治32.7)
郡立大島海員学校



第2代校長

大田瀧熊
(明治31.2～明治32.4)
郡立大島海員学校



第4代校長

菅野紋吉
(明治32.12～大正4.1)
県立大島商船学校



第5代校長

西尾英次郎
(大正4.4～大正7.10)
県立大島商船学校

第6代校長

守永喜三郎
(大正7.11～昭和2.5)
県立大島商船学校



第7代校長

嵯子康
(昭和2.5～昭和14.8)
県立大島商船学校



第8代校長

佐藤敬三
(昭和14.8～昭和17.6)
官立大島商船学校



第9代校長

中島新太郎
(昭和17.6～昭和20.7)
官立大島商船学校



第10代校長

富岡外雄
(昭和20.8～昭和35.3)
官立大島商船学校・大島商船高等学校



第11代校長

高橋得之助
(昭和35.4～昭和39.3)
大島商船高等学校



第12代校長

北村勝夫
(昭和39.4～昭和42.5)
大島商船高等学校



第13代校長(高専初代校長)

絞鳥直人
(昭和42.6～昭和50.3)
大島商船高等専門学校



第14代校長(高専第2代校長)

岩永道臣
(昭和50.4～昭和58.3)
大島商船高等専門学校



第15代校長(高専第3代校長)

南正己
(昭和58.4～昭和63.3)
大島商船高等専門学校



第16代校長(高専第4代校長)

道賀正美
(昭和63.4～平成5.3)
大島商船高等専門学校



第17代校長(高専第5代校長)

山崎直樹
(平成5.4～平成13.3)
大島商船高等専門学校

第18代校長(高専第6代校長)
和氣博嗣
(平成13.4～平成20.3)
大島商船高等専門学校



第19代校長(高専第7代校長)
久保雅義
(平成13.4～平成25.3)
大島商船高等専門学校

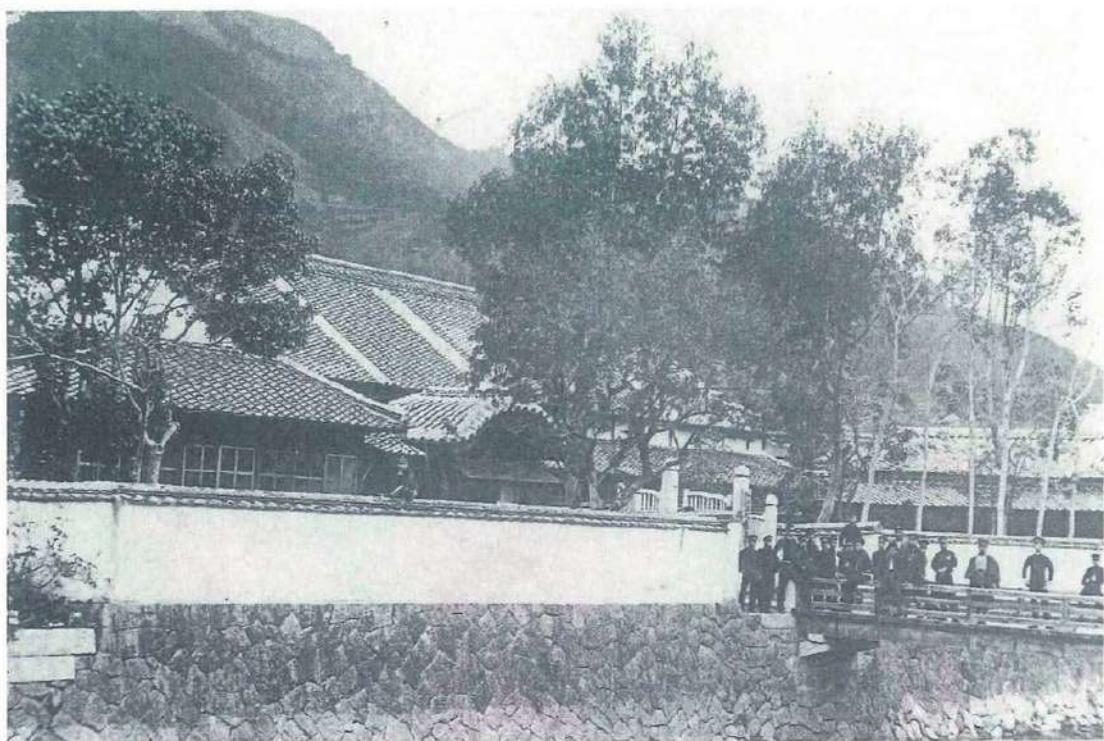


第20代校長(高専第8代校長)
石田廣史
(平成25.4～)
大島商船高等専門学校



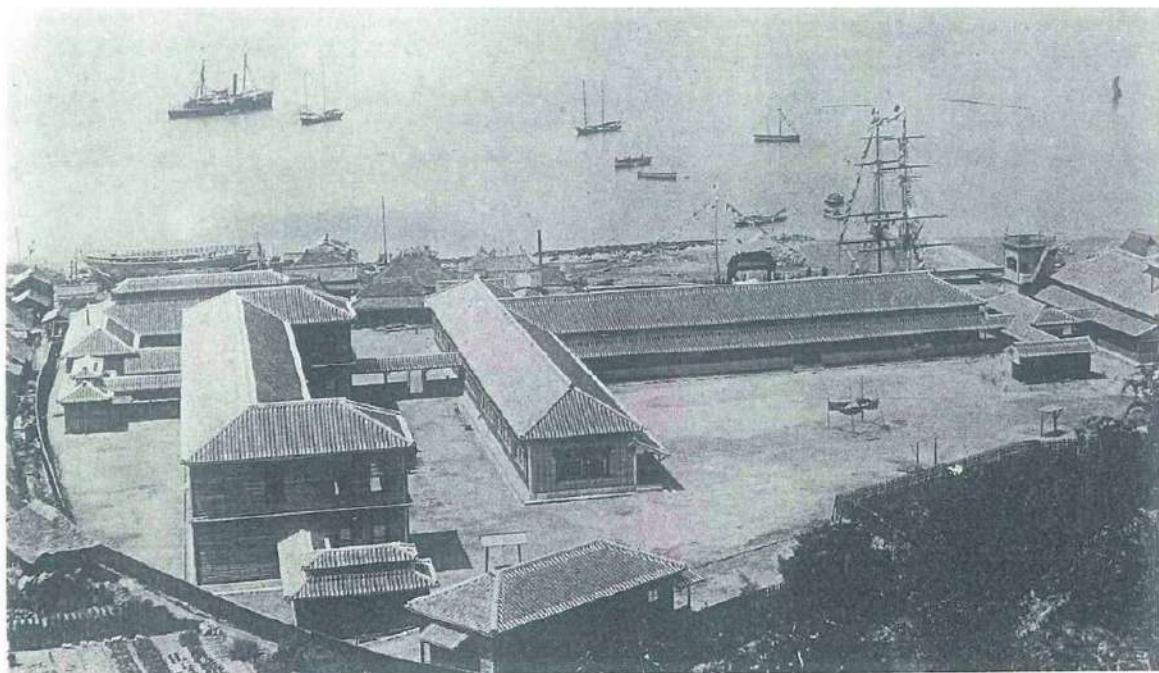
校舎の変遷

大島海員学校（明治 30 年～明治 34 年）



屋代校舎（明治 30 年）

大島商船学校（明治 34 年～昭和 26 年）



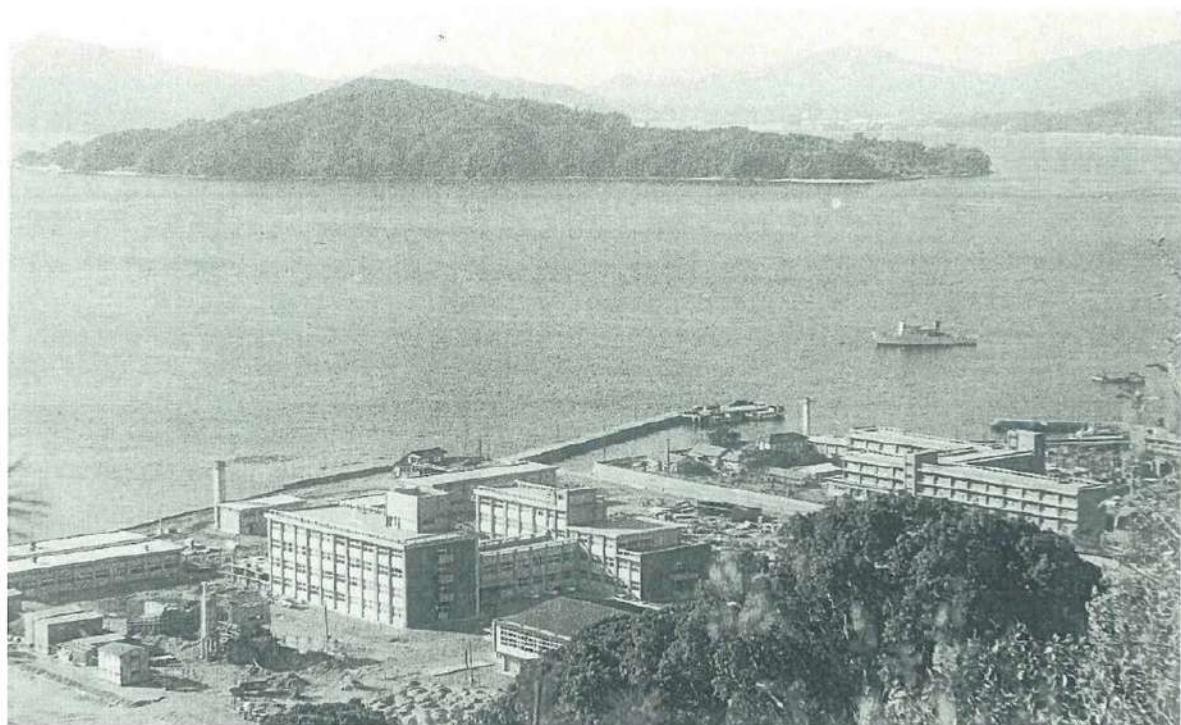
屋代校舎（明治 36 年）

大島商船高等学校（昭和 26 年～昭和 42 年）



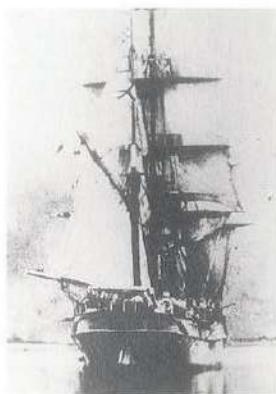
学校全景（昭和 41 年）

大島商船高等専門学校（昭和 42 年～ ）



学校全景（昭和 45 年）

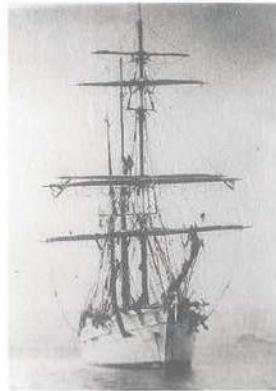
練習船



海平丸 (明治37～明治41)



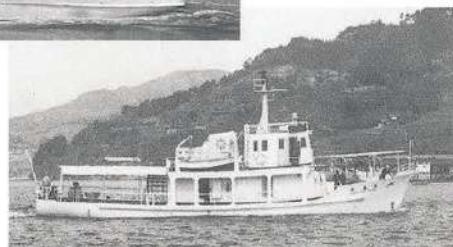
山口丸 (明治2～大正6)



防長丸 (大正13～大正14)



大徳丸
(昭和12～昭和33)



初代大島丸
(昭和34～昭和44)

大進丸

(昭和3～昭和5)



第二代大島丸
(昭和44～平成5)

実習船



ちどり (昭和55年～平成16年)

高専現況

校舎・管理棟



電子機械工学科棟



情報工学科棟



ものづくり教育研究棟



機関実習工場



荒天航泊実験室



艇庫



情報教育センター



図書館



第一体育馆



第二体育馆



武道場



小松会館



商船会館



資料館



学生寮（男子寮）



学生寮（女子寮）



課外活動施設 1



船舶格納庫施設



練習船（大島丸）



実習船（すばる）





記念誌発刊のことば

校長 石田廣史

創基 120 周年ならびに高専創立 50 周年を迎えるにあたり、ここに 120 周年記念誌を刊行できまことは誠に喜ばしく感慨深いものであります。

大島商船高等専門学校の歴史は、今から 120 年前の明治 30 年（1897 年）、ここ周防大島の地に船舶職員養成の 5 年制の大島郡立大島海員学校として創設されたのが始まりです。明治 32 年には当時の東京商船学校に次ぐ甲種商船学校として 6 年制の大島郡立甲種商船学校となりました。そして明治 34 年には、大島郡から山口県に移管され山口県立商船学校に、昭和 14 年には山口県から国に移管され官立大島商船学校となり、長く船舶職員養成の教育機関として発展してきました。そして戦後の学制改革に伴って国立大島商船高等学校となり、座学 3 年と海技免状取得のための乗船実習を含む専攻科 2 年の通算 5 年制の商船教育の体制が取られました。

その後、昭和 42 年には修業年限 5 年 6 か月の国立大島商船高等専門学校に昇格し、平成 16 年度から独立行政法人国立高等専門学校機構大島商船高等専門学校に移行しました。現在では本科に旧航海学科と旧機関学科の 2 コースを擁する商船学科と、工業系の電子機械工学科と情報工学科の 3 学科、そして専攻科には海洋交通システム学専攻と電子・情報システム工学専攻の 2 専攻を擁する高等教育機関として発展し、我が国の海事ならびに工学の高等教育機関として、多くの卒業生と修了生を関連産業界に送り出し、社会の発展に大いに貢献して参りました。

このように本校創設以来、幾多の変遷を経ながら、その都度、国ならびに地域社会を始め関連企業などの絶大な支援の下、今日の大島商船高等専門学校の発展を見る事が出来ました。関係者の皆様に衷心から御礼申し上げます。

さて、近年のグローバル化は急速に進行し、価値観の多様性と経済活動の活性化をもたらしましたが、その一方、地域文化や民族間の紛争、そして経済摩擦や環境破壊など様々な問題が顕在化しました。我が国においてはそれらの問題と同時に、産業構造の大きく変化や少子化問題など様々な問題にも直面しています。これまで本校が果たしてきた中核的、指導的海事ならびに工学技術者の育成教育の成果は高く評価されていますが、今後はこれらの新たな諸問題に取り組むのに必要な、確たる基礎知識と高い技術力、そして柔軟な思考と創造的で問題解決能力を有する技術者育成がより一層必要とされるでしょう。

この創基 120 周年・高専創立 50 周年の機会に、120 年前の遠い過去から現在、そして未来へ続く本校の歴史の一端を担う者として、もう一度、長い歴史と伝統を見つめ直し感謝し、そして未来への展望と果たすべき責務を再認識し、勇気と誇りを持って全力で努力しなければならない事を痛感いたします。

今後とも、関係者の皆様の御理解と御支援を心よりお願いし、本校の益々の発展を祈念し発刊のことばと致します。



祝　　辞

独立行政法人国立高等専門学校機構
理事長　谷　口　功

独立行政法人・国立高等専門学校機構・大島商船高等専門学校が創基百二十年と高等専門学校創立五十周年記念式典を挙行されましたこと、心よりお祝い申し上げます。

ご承知の通り、大島商船高等専門学校は、明治30年に創設された前身の大島海員学校以来、120年間の永きに亘り、優れた海事技術者並びに工学技術者を多数輩出してこられました。

これも、ひとえに歴代の校長先生をはじめ教職員の方々のご努力と、卒業生の皆様方のご支援、さらには、各方面の関係者の皆様方のご指導ご鞭撻の賜物であり、ここに、感謝申し上げますと共に、これまでのご尽力に心から敬意を表する次第です。

ご存知のとおり、国立高等専門学校は、平成16年4月から全国の高等専門学校が、独立行政法人国立高等専門学校機構のもとに一つの法人となり、それぞれの高専の個性化を進展させることと同時に、機構と一体となって、教育研究の一層の高度化を図るための取組みを進める等、新たな歩みを始めました。現在では、全国に55のキャンパスを擁する51の高専が一つの法人として一体となって活動しており、各学校の枠を超えた課題に対して、高専機構として取り組み、新しい社会に対応した、実践的で創造力に富み、感性豊かな技術者を育成するという使命を果たすべく日々努力を重ねております。

皆様のご支援のお陰で、昨今、特に、実践力と次の時代を切り拓くための創造性を兼ね備えた我が国の基盤的な人材の育成を通して、社会の発展に貢献する高等教育機関として、国立高等専門学校は、産業界はもとより、教育界に加えて、国際社会からも極めて高い評価を頂いております。今日、「KOSEN」は国際語となっています。

大島商船高等専門学校は、その伝統と実績によって、世界に冠たる海洋国としての我が国の発展を支える海洋関連人材、広くマリンエンジニアリング人「財」の育成機関として、社会からの期待が益々大きくなっています。この重要な役割をこれからもしっかりと担っていくために、大島商船高等専門学校におかれましては、社会のニーズと社会の期待に応えるための特色ある教育活動を実施し、実践性や創造性を重視した人材育成に邁進していただきたいと思っております。

結びに、大島商船高等専門学校創立五十周年と、前身の大島海員学校から数えての創基百二十年に当たり、今までご尽力いただきました関係者の皆々様に、重ねて、御礼申し上げます。また、大島商船高等専門学校に対しまして引き続き温かいご支援、ご指導をお願い申し上げますと共に、ご臨席の皆様の益々のご発展とご健勝を祈念いたしまして祝辞とさせていただきます。



祝　　辞

周防大島町長　椎　木　巧

菊花薫る今日のよき日、大島商船高等専門学校創基百二十周年並びに高専創立五十周年の輝かしい記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いを申し上げます。

さて、本校の輝かしい百二十年の星霜を顧みますれば、明治三十年十月に大島郡立大島海員学校として、高らかに呱呱の産声を上げ、その後、山口県立大島商船学校、国立大島商船高等学校と変遷を重ね、爾来、幾たびかの校舎移転や存続をかけた移管問題等を克服して、昭和四十二年六月に国立高等専門学校に昇格し、平成十六年四月に独立行政法人国立高等専門学校機構「大島商船高等専門学校」となり、今に至った非常に伝統のある学校であり、時代の進展とともに数々の変遷を経て、今日の隆盛が築かれたものであります。

これはひとえに、歴代の校長先生をはじめ諸先生方の教育に対する情熱と不断のご努力の賜物であり、それに応える学生諸君のたゆまざる勉励により、威厳に満ちた輝かしい校風を樹立され、七千有余名にのぼる優秀なる卒業生を送り出し、卒業生は、それぞれの各分野において、独創力を發揮してものごとにに対応できる人材、グローバル化に対応できる優秀な技術者として活躍されておられます。

思えば、黎明期の海国日本の羅針盤としての活躍を経て、戦後いち早く世界の海に雄飛し、世界に誇るわが国の経済発展と日本の海運界や地域産業界の発展に貢献された数々のご功績は、誠に多大のものがあります。

近年においては、電子機械工学、情報工学の分野でご活躍も目覚しいものがあります。

また、平成十七年四月に海洋交通システム学、電子・情報システム工学の二つからなる専攻科を設置し、学士の学位取得可能な新たな道程への歩みを踏み出し、赫々たる過去の伝統の上に、新たな飛躍を加えながら隆々たる校運を実現されつつありますことに対しまして、深く敬意を表するものであります。

四方を海に囲まれ、資源の乏しい我が国においては、いかに航空機の性能が向上したとしても、大量輸送、経済性ということを考えれば、船舶にまさる輸送の手段はないであろうと思っております。その指導的海運人として、次世代の海事産業の担い手を育成し、支えてきた役割は非常に大きなものがあります。

いつの時代にあっても、社会の各般から大いに求められるのは、様々な状況に対応しうる実践的学力と創造性並びに行動力を兼ね備えた人材であり、大島商船高等専門学校の教育理念、教育方針は、誠に当を得たものでございます。今後も本校から多くの優秀な技術者を世に送り出されるものと、大きく期待をいたしております。

結びにあたり、創基百二十周年を契機として、校歌にありますように山あり海ありの恵まれた自然環境を生かし、独立行政法人国立高等専門学校機構 大島商船高等専門学校の今後ますますのご隆盛と、本日ご臨席の皆様方のご健勝とご多幸を心から祈念申しあげまして、お祝いの言葉といたします。



120周年記念誌発刊によせて

(地元と共に歩んだ120年)

大島商船高等専門学校
同窓会会長 酒迎 和成

平成29年10月1日、母校は創基120周年、高専創立50周年を迎えることが出来ました。ここに同窓会を代表して関係各位に心から感謝申し上げます。

日本の近代国家への黎明期に明治政府は国策として、富国強兵、殖産興業と同時に海運を重要な産業として位置づけ、日本海運の育成に心血を注いで来ました。当時の船舶職員は外国人であったので日本人船員の養成が急務でした。明治8年、政府は三菱会社に商船学校の設立を命じました。この大きなうねりが全国に広がり、商船学校・海員学校が設立されました。我が母校は明治29年、当時屋代村にあった郡役所が移転されることになり、地元有志がその跡地利用として「商船学校設立構想」を提案し、地元の強力な陳情を受けた郡や県は財政支援を決定し、大島全島民の協力の基に明治30年10月1日大島郡立海員学校として誕生しました。そして今日に至る120年の間に学校存続の幾多の危機がありましたが、その都度、地元の絶大な支援を得て乗り越えてきました。

明治このかた隆盛を極めた海運界は、大正7年に第一次世界大戦が終結した後は海運不況が発生し、昭和7年には全国の商船学校の整理統合や存廃の危機となりました。全国に11校あった公立商船学校を5校に半減するとの政府方針に対して、母校存続の危機に立ち上がったのは、やはり地元小松町民でした。町民大会において県立大島商船学校の存続を期すと決議したのです。結果的に全国の商船学校は大島商船学校を含む5校に統合されました。その後政府は積極的な海運政策を探ると共に、重要な人的資源をなす地方商船学校教育の整備拡充に力を入れました。しかしながら太平洋戦争において我が国商船隊は壊滅し、苦難の時代を迎えました。戦後の教育改革の中で商船学校の存続の可否が運輸省の審議会で検討されましたが、同窓会は地元と共に政治力も総動員して存続運動を展開し、昭和25年5校の存続が確定しました。昭和39年母校は地元と高専昇格期成会を結成して運動を開始し昭和42年高専昇格が決定しました。ここでも地元の絶大な支援がありました。昭和29年から高度経済成長期を迎え日本海運も順調に推移していましたが、昭和46年の変動相場制への移行、昭和48年及び昭和54年のオイルショックで海運不況に入り、昭和60年のプラザ合意に伴う急激な円高で海運界は未曾有の大不況に陥りました。

このような長期海運大不況の中で学校の運営に齟齬を来たすことになり、商船学科を縮小し、海運に加えて電子機械、情報の各産業分野に対応した3学科制に移行することを決断しました。昭和60年に電子機械工学科、更に昭和63年に情報工学科を相次いで新設しました。学校設立以来8年間商船士官の養成のみであった母校は大変革を遂げ、今日に至っています。

創基120周年を迎えるにあたり、同窓会は気持ちを新たにして、これからも母校の存続と発展の為に一致団結し、そして、いつまでも地元と共に歩んで行きたいと思っています。



お慶びの言葉

大島商船高等専門学校
奨学後援会会長 三戸 剛

大島商船高等専門学校が創基 120 周年・高専創立 50 周年を迎えたことは、奨学後援会として慶賀にたえません。

本校は、明治 30 年 10 月、船舶職員養成のために大島郡立大島海員学校として創設されました。その後、明治 34 年 5 月に山口県立大島商船学校、昭和 26 年 4 月に国立大島商船高等学校、昭和 42 年 6 月に国立大島商船高等専門学校なりました。また、平成 16 年 4 月には、独立行政法人国立高等専門学校機構大島商船高等専門学校となりました。

その間、120 年にわたり海事技術者養成のための充実した教育により多くの優秀な人材を輩出し、国内外での活躍は日本の海運界の発展に寄与されてきました。また、地域産業を始めとして広く工業技術者の育成が強く要望されたことから学科改組を重ね、現在の商船学科、電子機械工学科及び情報工学科の 3 学科となりました。

これまでに送り出した卒業生は、海事関連企業や地域の工業系企業の有能な中核技術者として、また、企業経営者や研究者、大学・高専教員など幅広い分野で活躍しています。これは、歴代校長先生を始め教職員の方々の不断のご尽力、学生諸君のたゆまぬ努力、そして関係各位のご支援の賜物であります。

本校が、今日まで築いてこられた歴史と伝統を踏まえつつ、社会ニーズに対応した魅力ある学校として、商船学科、電子機械工学科及び情報工学科並びに専攻科のそれぞれの特徴をさらに伸ばし、発展させていくため、奨学後援会も微力を尽くして参ります。

ここに、記念すべき創基 120 周年・高専創立 50 周年を迎えた本校のますますのご発展を心より祈念しまして、お慶びの言葉とさせていただきます。

目 次

祝辞

記念誌発刊のことば	大島商船高等専門学校長
祝辞	独立行政法人国立高等専門学校機構理事長
祝辞	周防大島町長
120周年記念誌発刊によせて	大島商船高等専門学校同窓会会长
お慶びの言葉	大島商船高専専門学校奨学後援会会长

第1編 大島郡立海員学校	1
明治30年（1897）～明治34年（1901）	1
第1章 日本海運の歴史的背景	1
第1節 明治初期の日本海運の黎明とその後の発展	1
第2節 周防大島と海上交通	2
第2章 本校創立の由来	2
第1節 大島郡立海員学校創立までの経緯	2
第2節 校地・校舎	3
第3節 職員・生徒・学則と教育内容	6
1 職員・生徒	6
2 学則と教育内容	7
第2編 県立大島商船学校	8
明治34年（1901）～昭和14年（1939）	8
第1章 県立大島商船学校への移管の経緯	8
第1節 県立移管への動き	8
第2節 県立移管の実現	9
第2章 県立大島商船高等学校の整備と充実	9
第1節 県立大島商船学校の整備	9
1 校地・校舎・運動場	9
2 施設・設備	13
第2節 県立大島商船学校の充実	17
1 教育	17
2 校内練習船（汽船）	23
3 帆船実習の変遷	24
4 機関実習の概要	29
5 汽船実習の概要	30

6 軍事教育のはじまり	31
第3節 動乱期の県立大島商船学校	32
1 商船学校整理問題	32
2 十一会の結成	34
3 本科4年制	35
第3編 官立大島商船学校	36
昭和15年（1940）～昭和26年（1951）	36
第1章 官立商船学校（文部省所管時代）	36
第1節 文部省への移管とその背景	36
第2節 教育内容等	37
第2章 官立大島商船学校（通信省所管時代）	40
第1節 通信省への移管	40
第2節 教育内容等	40
1 新校長の着任と自由主義的教育の一掃	40
2 軍事教育の強化	40
3 新校舎の落成	41
4 同窓会の再発足	42
第3章 官立大島商船学校（運輸通信省所管時代）	43
第4章 官立大島商船学校（運輸省所管時代）	43
第1節 第2次世界大戦と商船学校	43
第2節 第2次世界大戦後の商船学校	45
1 終戦後の学則と教育内容	45
2 校長・職員・生徒	47
3 研修科設置と教育内容	47
4 鹿児島商船学校の転換に伴う生徒の受入れ	48
第3節 創立50周年と記念事業（昭和22年・1947）	49
1 行事日程	54
2 行事概要	54
第4編 国立大島商船高等学校	55
昭和26年（1951）～昭和41年（1966）	55
第1章 国立大島商船高等学校の発足	55
第1節 国立大島商船高等学校発足への経緯	55
第2節 学則と教育課程	57
1 学則	57
2 本科課程と専攻科課程	57
第2章 国立大島商船高等学校の充実と発展	60

第1節 創立60周年と記念事業（昭和32年・1957）	61
1 記念誌の発行	61
2 記念館の落成	62
第2節 寄宿生活と実習	63
1 寄宿生活	63
2 実習生活と就職状況	64
3 寄宿舎（小松寮）の落成	66
第3節 学校施設等	67
1 学校施設・設備	67
2 練習船「大島丸」初代の竣工	70
第5編 国立大島商船高等専門学校一期	71
昭和42年（1967）～昭和60年（1985）	71
第1章 国立大島商船高等専門学校の発足	71
第1節 発足の経緯	71
1 国立工業高等専門学校	71
2 国立商船高等専門学校	71
第2節 教育課程	72
1 修業年限と教育課程	72
2 全寮制	73
第3節 教育施設の整備	76
1 校舎と体育館・グラウンド	76
2 図書館と電子計算機室（現・情報教育センター）	76
3 寄宿舎	77
4 練習船「大島丸」（二代目）	77
第4節 組織の編制	78
第2章 学校行事と諸活動	80
第1節 学校行事	80
1 新入生オリエンテーション・合宿研修	80
2 商船祭	80
3 校内マラソン大会	80
4 三年生合宿研修（スキー合宿）	81
第2節 学生会	81
第3節 創立80周年と記念事業	81
1 記念行事	81
2 記念誌『八十周年史』の発行	82
第6編 国立大島商船高等専門学校（第2期）	83

昭和 60 年（1985）～平成 15 年（2003）	83
第1章 第一次改組・新学科「電子機械工学科」の誕生	83
第1節 新学科「電子機械工学科」の誕生とその経緯	83
1 学科改組の経緯	83
2 機関学科の改組	84
3 電子機械工学科の設置	86
第2節 寮制度の改革	90
1 新しい寮制度	90
2 通学生と下宿生	92
3 外国人留学生	92
第3節 女子学生の入学	95
1 女子学生にも門戸を開く	95
2 女子寮の設置	96
第4節 新しい校歌と制服	98
1 新校歌の制定	98
2 新制服の採用	100
第2章 第二次改組・「商船学科」と「情報工学科」の誕生	101
第1節 「商船学科」と「情報工学科」の誕生とその経緯	101
第2節 「商船学科」の設置	102
1 教育課程の改革①（船橋当直限定・機関当直限定）	102
2 教育課程の改革②（近代化船教育からプロパー教育へ）	108
3 教育施設と設備	112
4 練習船「大島丸」と3代目の建造	114
第3節 「情報工学科」の設置	115
1 情報工学科の発足	115
2 教育課程	116
3 教育施設と設備	121
4 校舎「情報工学科棟」竣工	122
第3章 後援会・同窓会と記念事業	124
第1節 奨学後援会・体育後援会と同窓会	124
1 奨学後援会と体育後援会	124
2 同窓会	124
第2節 記念事業	125
1 創基 90 周年・高専創立 20 周年	125
2 創基 100 周年・高専創立 30 周年	128
第7編 独立行政法人国立高等専門学校機構大島商船高等専門学校	130

平成 16 年 (2004) —	130
第1章 独立行政法人国立高等専門学校機構大島商船高等専門学校の発足	130
第1節 発足の経緯	130
第2節 教育課程の変遷	130
1 一般科目	130
2 商船学科	132
3 電子機械工学科	148
4 情報工学科	150
第3節 専攻科の発足	155
1 発足の経緯	155
2 海洋交通システム学専攻	155
3 電子・情報システム工学専攻	156
4 ものづくり教育研究棟（専攻科棟）竣工	158
第4節 寄宿舎（学寮）	158
1 学寮の概要	158
2 最近の出来事と変更点	159
3 寮生会、寮行事、留学生及び寮の運営など	160
第2章 組織の編制	161
第1節 校内施設	161
1 情報教育センター	161
2 学生相談室	162
3 地域協力センター	163
4 国際交流推進室（現 国際交流室）	165
5 技術支援センター	169
6 キャリア支援室	172
7 島スクエア起業教育研究センター	179
第2節 教育研究設備等	181
1 実習船「すばる」建造	181
2 県道バイパスの寮地区への開通と舟艇設備の改修	182
3 校舎耐震改修	182
第3章 学校行事と諸活動	183
第1節 学校行事	183
1 学生会活動とクラブ活動	183
2 商船祭	184
3 校内マラソン大会等	185
第2節 創基 110 周年・高専創立 40 周年	185

1 記念行事	185	
2 DVD『創立百周年記念』の制作	186	
第8編 創基120周年・高専創立50周年	187	
第1章 記念行事の概要	187	
第1節 記念式典・記念講演会	187	
第2節 百二十周年誌の発刊	189	
第2章 寄稿文	190	
手旗踊りのルーツと創基六十周年記念行事	内田成孝	190
回想「手旗踊り」	白井政美	194
今思うこと	柳井貴志	196
これまで、これからも	村上泰樹	197
学生時代の思い出	軍神有由美	198
在学中の思い出	鶴谷梨菜	199
外航船員として乗船して、そして陸上勤務へ	城戸裕晶	200
第9編 資料編	202	
1 現況	202	
1. 1 組織及び各種委員会等	202	
1. 1. 1 現員	202	
1. 1. 2 組織図	203	
1. 1. 3 各種委員会	204	
1. 2 施設の現況	205	
1. 2. 1 配置図	205	
1. 2. 2 施設	206	
1. 2. 3 練習船等	207	
2 学生（高専1期生から高専50期生）	207	
2. 1 出身県別入学者数	208	
2. 2 本科卒業生数	209	
2. 3 専攻科修了生数	210	
2. 4 大学編入学者数	211	
2. 5 寄生及び通学生数	213	
2. 6 外国人留学生数	216	
3 図書館統計	217	
3. 1 藏書冊数の推移	217	
3. 2 年度別学生貸出冊数	217	
4 年表（明治30年～平成29年）	218	
あとがき	288	

第1編 大島郡立海員学校

明治30年（1897）～明治34年（1901）

第1章 日本海運の歴史的背景

第1節 明治初期の日本海運の黎明とその後の発展

四面を海に囲まれた日本は古代から船が重要な輸送手段であった。縄文時代には丸木船が日本各地で発見されており、川や海の交通が行われていた。弥生時代の船の姿は鳥取県の角吉稻田遺跡の土器や福井県春江町出土の銅鐸などに描かれている。そこには多数の漕手と櫂が表現されており、かなりの大型船が利用されていたことが推定できる。これらの絵や古墳時代の船形埴輪から、弥生時代には丸太をくり抜いて造った丸木舟に堅板や、舷側板等の部品を組み合わせた準構造船という大型船があったと考えられている。飛鳥時代の西暦600年には最初の遣隋使が、西暦630年には第1回目の遣唐使が中国に派遣されている。遣唐使船の大きさは全長30m、幅7mから8m程度、現在のトン数にすると300トン前後であった。その後、江戸時代までに、朱印船、遣明船、安宅船、閔船、弁財船、北前船など種々の船が現れ発展を遂げている。江戸時代には、幕府は500石以上の航洋船舶の建造を禁止し、さらに西暦1639年には中国・オランダを除く諸外国との交易を全面的に禁止した。以後、日本の海運業は沿岸海運のみに限定され、船舶の大きさは200石から400石程度であった。

1853年6月、軍艦4隻をひきいてアメリカのペリーが浦賀に来航し、大統領の国書を提出して開港を強くせまった。1854年、再びペリーが来航すると幕府は「日米和親条約」を締結し、ついで幕府は、イギリス、ロシア、オランダとも同じような条約を結び、200余年の鎖国は終わりをつけた。汽船を先頭にたてた欧米諸国勢力の進出への対応策として、幕府・諸藩は相次いで西洋型船舶を輸入し、また大小艦船の建造にも努めたので、幕末・明治初年における日本の西洋型船舶は、汽船・帆船合わせて幕府44隻、諸藩94隻、合計138隻、約1万7000総トンに達していた。しかし、西洋型船舶のほとんどは「軍艦」と呼ばれ国防を目的とするものであり、一般旅客貨物の輸送に適した船舶ではなかった。

明治政府は明治3年（1870）に「商船規則」を発布して、民間における西洋型船の所有を保護・奨励すると同時に、「回漕会社」を設立して政府諸藩の所有船13隻を委託して東京/大阪間に月3回の定期航路の経営に当たらせた。「回漕会社」は日本最初の海運会社であった。同社は1年足らずで解散され、明治4年（1871）に新設の「回漕取引所」に船舶業務を引き渡すことになった。政府は明治5年に「回漕取引所」を拡大・強化して三井組・鴻池組・島田組・小野組などの大資本による「日本郵便蒸気船会社」を創立した。しかし、その経営は容易でなく明治8年に解散を余儀なくされた。

土佐藩の岩崎弥太郎は、明治6年（1873）に個人企業の「三菱商会」を設立した。「三菱商会」は翌明治7年「三菱汽船会社」と改称し、東京/大阪、大阪/高知、博多・伊勢湾に至る航路を開設した。また、この年、政府は台湾出兵のための輸送を香港で買付けた汽船13隻を同社に委託して運行させた。明治8年（1875）政府は同社に対して上海/横浜航路を開設することを命令した。同社は政府委託船のうち4隻で週1回の横浜/上海航路を開設した。これが日本最初の海外航路であった。この年「郵便汽船三菱会社」と改めた。その後、「西南戦争」（明治13年）で政府の軍事輸送にあたり、「高千穂丸」（総トン数2362トン）以下8隻の外国汽船を購入した。

「郵便汽船三菱会社」に対抗して、明治13年に「東京風帆船会社」、14年に「越中風帆船会社」、15年に「北海道運輸会社」が設立された。政府は明治15年には「郵便汽船三菱会社」に対抗しうる強力な海運企業の設立を推進し「共同運輸会社」が設立され、翌16年には「東京風帆船会社」・「越中風帆船会社」・「北海道運輸会社」を合併した。両者は激しい競争を繰り広げ貨客争奪戦は泥沼化し、両者いずれも巨額の損失を重ねた。明治18年（1885）政府はそうした海運業の危機の収集に乗り出し、9月に「郵便汽船三菱会社」と「共同運輸会社」は合併し「日本郵船会社」が創設された。新会社が両社より引き継いだ汽船

は、58隻、6万4609総トンであった。「日本郵船会社」は、横浜/上海線、長崎/仁川線、長崎/ウラジオストック線のほか、沿岸11線を命令航路として開設することになった。

阪神・瀬戸内海・四国・九州方面では、慶應3年（1863）・4年の兵庫・大阪両港が開港されて以来、50総トンクラスの小型蒸気船が海上輸送に従事していた。特に「西南戦争」時にはこの方面的海運が一段と活況を呈し、汽船会社の新設が相次いだ。しかし、こうして急増した船主70余名（船舶110隻）の大部分は、1隻の船しか持たない小船主であり「西南戦争」以後の不況の中で激しい運賃引き下げ競争を展開し、海難事故が相次いだ。政府は多数船主の大合同により一大汽船会社を設立する必要があるという意見が強まり明治15年12月大阪財界の有志・船主17名が発起人となり「大阪商船会社」の創立に取り組み、明治17年（1884）5月に開業の運びとなった。その後、政府から助成金を受け、新船の建造と朝鮮航路への進出が積極的に進められ、明治26年（1893）には51隻、1万7875総トンの船腹を所有していた。こうして日本の近代海運は「日本郵船会社」・「大阪商船会社」の2大船社設立によって確立期に入った。

第2節 周防大島と海上交通

本校の位置する周防大島（屋代島）は瀬戸内海の西部に位置し、淡路島、小豆島に次ぐ3番目に大きな島である。昭和51年（1976）に長さが約1kmの大島大橋で対岸の柳井市大島とは陸続きになっている。瀬戸内海は古代より大和船の帆影が多く輻輳する海域であり、内海地方の産業、経済、交通および文化等はことごとく海運に依存し、それは海運の消長そのものであった。その中でも周防大島は、すでに文治元年（1851）の源平壇の浦合戦において、源氏軍の海上拠点となり、兵船約800艘が小松開作の入江に集結していたらしいこと、さらには中世にあって「バハン」船の名で怖れられた大島海賊の根拠地であったことなどからも、早くから海上交通上の要所として着目されてきたことがわかる。

大島海賊は陶晴賢の指揮下にあって厳島合戦に敗れ、周防大島は毛利軍に加担して戦局を大勝利に導いた村上水軍の領地になった。したがって周防大島、柳井、伊保庄および上関一帯の海岸民は古くから航海、操船、水軍の術に優れていたのである。本校が創立された翌年の明治31年（1888）には組合船主31名による「小松船主組合規約書」が作成されて、30隻の船舶が登録されている。「第1号表」には、船夫の1ヵ月の給料が3円50銭より5円までと定められている。また、「酒手金」として伊勢行1航海につき2円、敦賀行1航海につき2円、鹿児島行1航海につき1円50銭と定められている。このことにより、小松船主組合所属の船舶が瀬戸内海のみならず、九州沿岸、東海地方や北陸地方まで航海していたことが明らかである。

第2章 本校創立の由来

第1節 大島郡立海員学校創立までの経緯

大島郡では明治25年（1892）頃から、屋代村を中心とする西部各村と久賀村を中心とする東部各村との間で揉め続けてきた郡役所の「移転」か「存置」かの確執は、明治29年春の郡会の大勢が屋代村から久賀村への移転に傾いてきたことで最高潮に達した。当時、県会議員兼村長の職にあった近藤慶一はいち早くこの情勢を察知し、急遽県庁に出向いて書記官連にその真偽をただしたところ、何れもその事実はないという。ところが、実はこれが真赤な嘘で、「郡役所の移転は久賀村に内定している。このことは未だ秘密にして漏らさないでほしい」と県庁の課長より郡長への連絡が入っていた。県庁の書記官達に騙された近藤は憤怒やるかたなく、その夜直ちに友人宅に駆けつけ郡役所移転の内報があったので、すぐに村の有志を集めてこのことを知らせてくれ、「余ハ是レヨリ屋代村ニ至リ有志者ヲ訪ハシ」とその足で屋代村助役を叩き起こし、書記を呼び、地元の有力者宅を訪ねたのである。その有力者を中心に対応策が協議され、ともかくも屋代村有志を招集しようということになって橋亀旅館に行くことになった。

そこで、鐘を乱打して村民を集めることになり、午前3時に鐘を打ち鳴らして村民を集めた。暁の夢を乱

鐘に叩き破られ、何事かと駆けつけて来た屋代村有志に向かって、近藤は県から移転の内報があったことを告げ、「今移転ノ内報ヲナスハ余ガ秘密ヲ洩ラスナリ未ダ公然ノ沙汰ニアラザルナリ、宜シ諸君ノ中数名郡長ニ面シ事實ヲ正スベシ」といった。そこで3名の代表が選ばれ郡長の下宿を訪ねることになる。「暴動何するものぞ、県下の警察で足りなければ5師団を呼んできて叩きつぶしてやる。かの大西卿の末路を見よ。」と郡長の鼻息は荒く初手から喧嘩腰である。郡長の啖呵に度肝を抜かれた代表が引き上げる頃には、早くも屋代・小松の村民が附近に群がり盛んに気勢を挙げている。夜に至って事態はいよいよ悪化し、寺鐘が乱打され、野次と怒号が渦巻き、民衆のエネルギーは爆発寸前まで膨れあがっていた。近藤は事態が思わざる方向に展開することを懼れるとともに、事の責任を負って村長を辞任し、一時大阪に身を避けるのであるが、間もなく屋代・小松の有志代表3名が後を追って上阪してくる。有志4人は上京し時の山口県知事に移転の中止を陳情したが、事態は変わらなかった。やがて、地元では群衆が郡役所を襲い、郡長との面会を強要して警官隊と衝突し3名が逮捕された。あわや、郡役所焼打ち事件にまでエスカレートしそうな勢いであったが、当時の民衆は所詮サーベルには叶わない。これは、日清戦争（明治27年）後急速に進んだ産業革命が労働者階級の拾頭を生み、日本にもようやく労働運動の幕開けが近づいていた頃の話である。大島郡西部（屋代・小松・蒲野・沖浦）の村民を捲き込んで荒れに荒れた郡役所騒乱事件は終息にむかった。

郡役所は直ちに久賀村に移され、その代替案として「旧郡役所ヲ学校トシ染料科ヲ置キ所謂簡易染織学校ヲ設ケ経費弐千円ヲ郡費支弁トス」ことが提案された。しかし、近藤等は小松屋代の有志と協議し「染織学校ニテハ前途發展ノ希望ナシ、抑々我郡ハ四面環海ニシテ住民舟揖ニ慣レ冒險ノ氣象ニ富ミ海員養成ニ適當ノ地ナリ、若カズ商船学校ヲ興スニハト、即チ此ノ議ヲ提出ス」。かくして郡立大島海員学校設立の構想が提案され、「爾後着々進行旧役所ヲ以テ学校ニ充テ其下傍ニ練習船ヲ据付諸般ノ設備ヲ卒へ開校スル」に至るのである。明治29年（1896）11月の臨時郡会において商船学校設立のため、旧郡役所敷地並びに建物の払い下げが認められた。更に大島郡長より郡会議長に対して、創業費2,308円36銭5厘、経常費2,790円90銭の予算が必要であること、ただし、経常費予算の半額1,395円45銭を向こう7年間、県の地方税より補助を受けるとして諮詢がなされた。これに対して郡会議長は商船学校設立を適當とし、地方税からの補助を認めた。ただし、創業費は郡が負担することは無理で、別な方法を考えるよう答申した。

更に明治30年（1897）4月、大島郡長は大島郡立商船学校設立趣意書を出し、その中に特に郡内の父兄に呼び掛け、生徒が集まらないことには、商船学校は成り立たないことを強調し、また商船学校を卒業すればその身の将来も約束されると説き、子弟の入学を奨励した。こうして全島あげて商船学校設立と動き出し、同年8月14日には待望の設立許可がおりた。その後も地元の熱心な協力もあって準備は順調に進み、明治30年（1897）年10月1日、大島郡立海員学校が発足し母校が誕生した。

第2節 校地・校舎

明治30年（1897）10月1日、大島郡立海員学校は開校した。校地は屋代村（現周防大島町屋代）の旧郡役所跡地であり、当初の敷地は1,594m²である。翌年には陸上帆檣建設のため隣接地約167m²を借りている。さらに体操場用地として、校舎地より屋代川を少し下り、約280m離れた場所に約1,382m²を借り入れている。また端艇教練場所は校舎地より約3km離れた屋代川が注ぐ開作港であった。

校舎も旧郡役所の建物をそのまま譲り受け使用した。旧郡役所事務所であった木造瓦葺平家が主たる校舎であった。その他の建物を含め延べ面積は約769m²である。屋代川に架けられた小さな橋を渡るとすぐに学校の正面であった。正面に入るすぐに校舎である。右手に大きくそびえるのが商船学校のシンボルの陸上帆檣であり、遠くからでも人目についたことであろう。しかし、今から考えると学校は海岸から遠く離れた地にあり、特に端艇訓練は不便であったろうし、施設・設備も狭小で苦勞も多かつたと思われる。しかし、開校したばかりの学校には、意欲あふれる生徒が集まり、いろいろな困難や不便に耐えて勉学に励む努力が続いたのである。本校の発祥の地である屋代校舎は明治35年（1902）3月まで使用された。（図1-1参照）

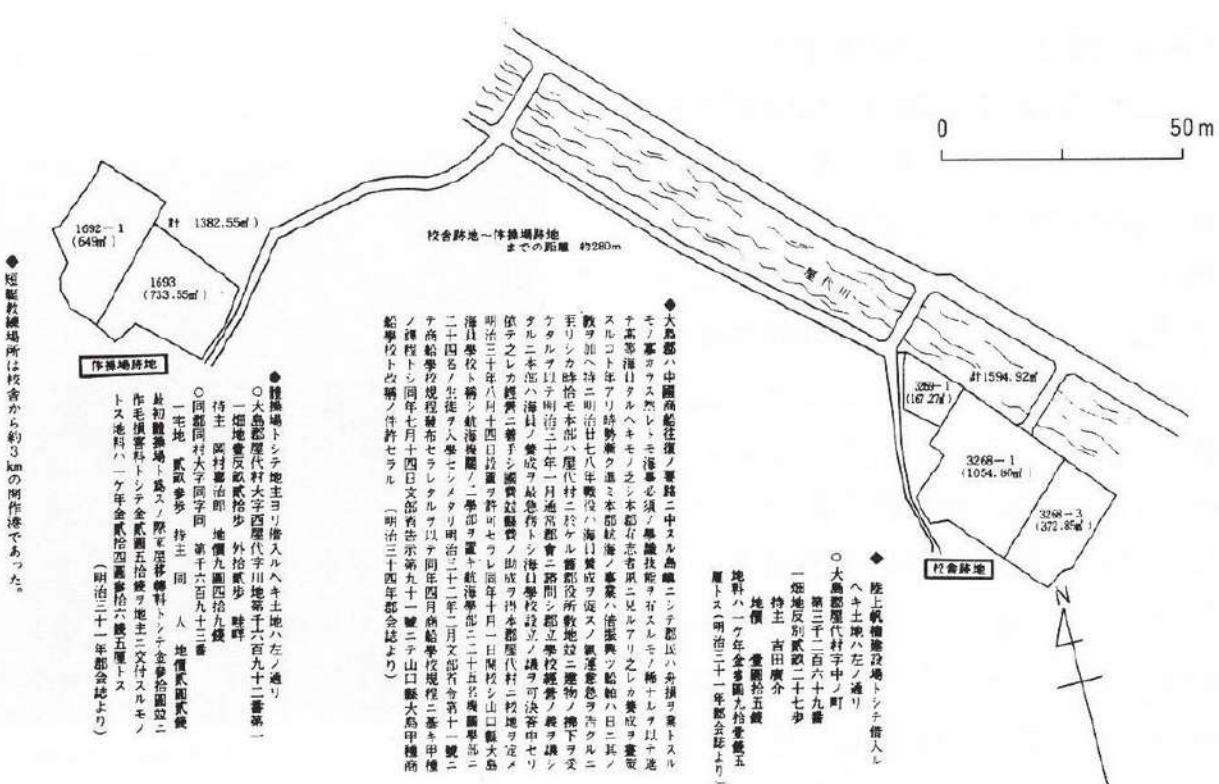


図1-1 屋代校舎・校地位置図

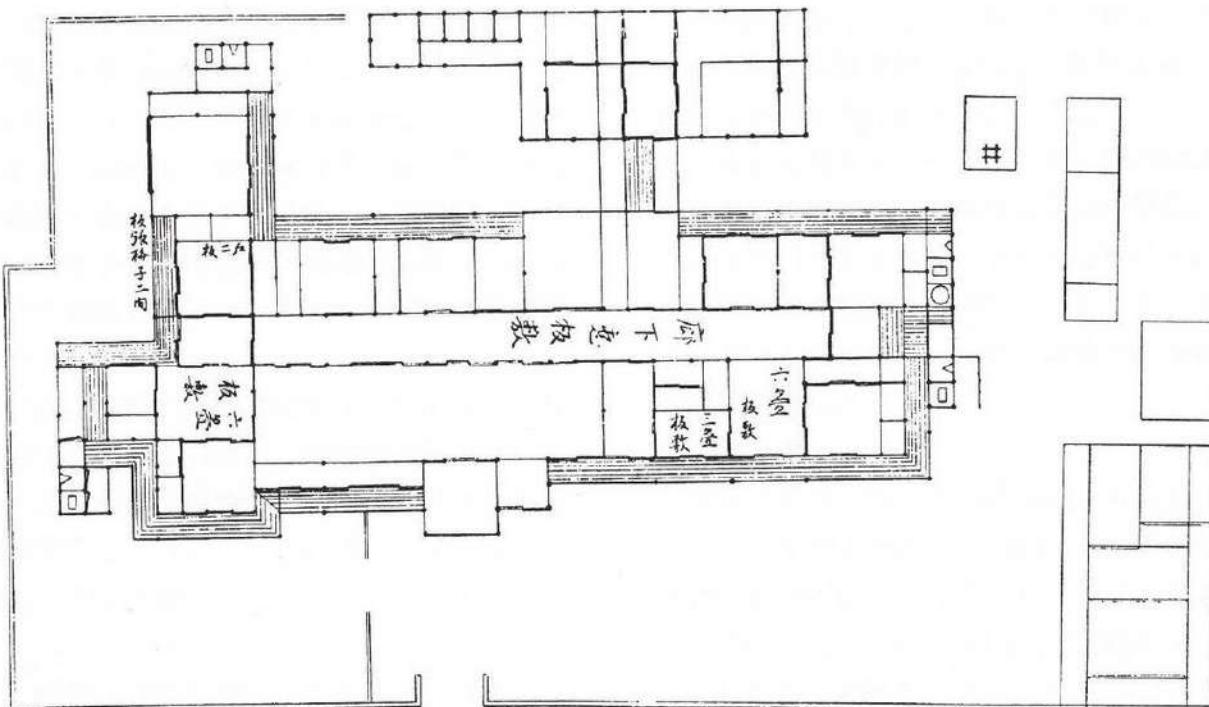


図1-2 屋代校舎平面図

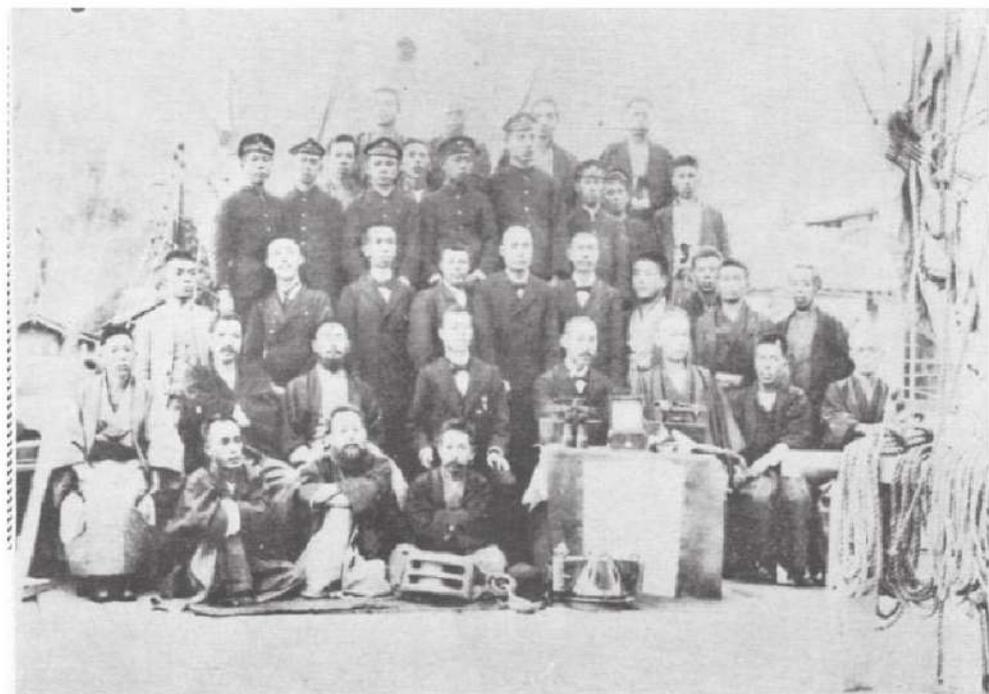


図 1-3 開校式当日の職員・生徒の一部

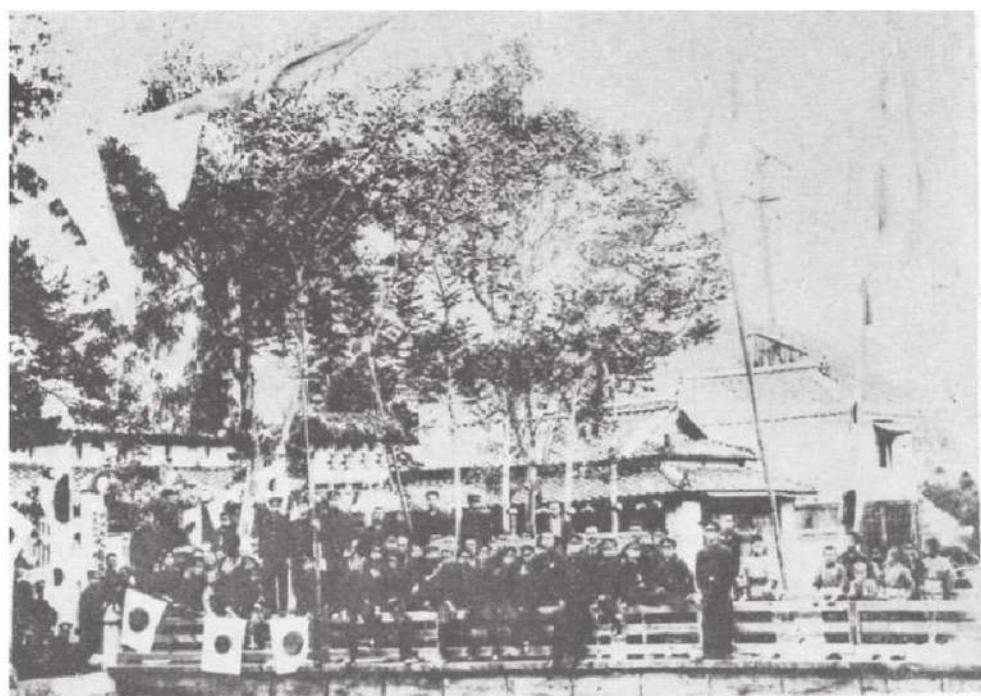


図 1-4 開校式当日の状況

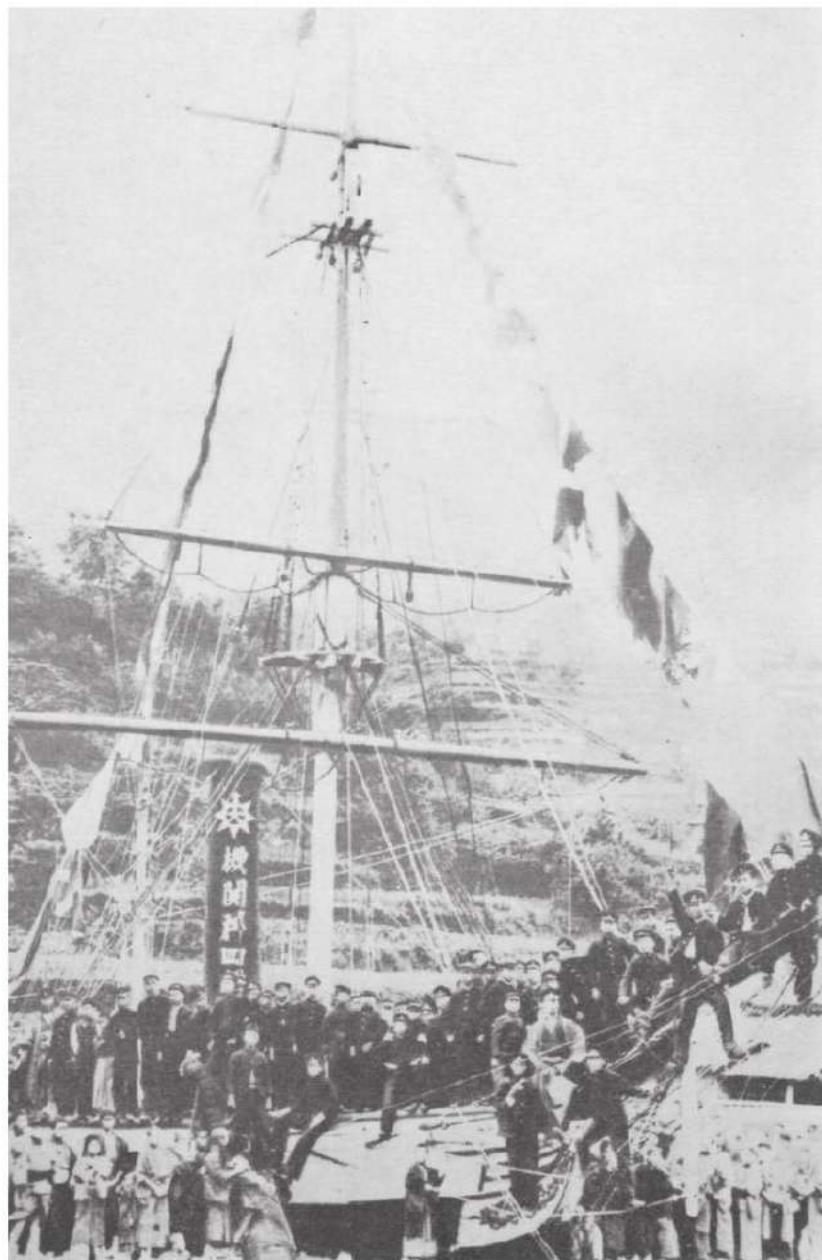


図 1-5 大島商船学校当時の職員・生徒・関係者の一部

第3節 職員・生徒・学則と教育内容

1 職員・生徒

職員は初代校長に海軍予備大尉の馬来常徳が就任した。開校当初の10月時点では職員は校長の他に教諭2名（航海1名・機関1名）と書記兼舎監1名の合計4名であった。その後、明治31年4月から同年12月までは7名、明治32年1月から同年2月は8名、明治32年3月から同年2月までは9名、明治32年3月から同年4月までは10名、明治33年5月から明治34年3月までは12名で推移している。

生徒は航海学部と機関学部の2学部で修業年限は5年（航海学部は座学2年・実習3年、機関学部は座学1年6月・実習3年6月）である。翌年（明治31年）に専修科が開講されている。第1期生は航海学部25名、機関学部24名、合計49名が入学した。

2 学則と教育内容

郡立大島海員学校規則は明治30年（1897）9月10日に制定された。発足当時の就業年限は以下のとおりである。

（1）本科：就業年限 5年

　航海学部：座学 2年 実習 3年

　機関学部：座学 1年6月 実習 3年6月

（2）別科：航海学部、機関学部とも就業年限を定めず、学術終了のち船舶司検所において技術試験に及第したときをもって卒業とした。

当時は2学期制であり、1学期が4月1日から9月30日まで、2学期が10月1日から31日まで、夏季休暇が7月25日から8月30日まで、冬季休暇が12月25日から1月7日までであった。明治31年4月22日には専修科が開講され、乙2の海上履歴を有し、海技試験を受験する者のために必要な学科を教授した。

明治32年（1899）4月1日、学則が改正され、就業年限が座学3年、実習3年の計6年に改められた。創立当時の教科と修学期間の細目は別表1、別表2のとおりである。

別表1

区分	座 学				実 習	備 考
	5級	4級	3級	2級		
期間	6月	6月	6月	6月	3年	
数学	○	○	○	○	航海実習	明治33年12月2日付けで船舶職員試験規程に充当する学校と認定された。 ○印は実施されたものを示す。 3期生の頃は、横帆装置の練習船は官立東京商船学校にしかなかったので、北洋漁業専門の漁船で航海実習した。
地理	○	○				
英語	○	○	○	○		
運用術	○	○	○	○		
航海術		○	○	○		
機関術大意			○	○		
海上気象学			○	○		
体操	○	○	○	○		
技業	○	○	○	○		

別表2

区分	座 学			実 習		備 考
	5級	4級	3級	2級	1級	
期間	6月	6月	6月	2年	1年6月	
数学	○	○	○	機関工場実習	機 関 運 転 実 習	○印は実施されたものを示す。 工場実習は佐世保、呉海軍工廠で行った。
理科	○	○				
化学			○			
英語	○	○	○			
機関術	○	○	○			
製図	○	○	○			
体操	○	○	○			
技業	○	○	○			

明治30年から同32年までの校長は、海軍予備大尉の馬木常徳、大田灌熊および井上猪三郎であったが、赴任して4ヶ月で辞任したり、また大田校長のように大島郡長兼任であったりで、教育方針として特につきり形で打ち出されたものではなく、ただ役に立つ船乗りを養成したいということが眼目であった。生徒の服装も一応制定されていたが、洋服あり、着物ありで中には軍服で髪をはやした生徒もいた。しかし、明治32年12月、菅野紋吉が4代校長として赴任してから本校は急速に整備され、本格的な船員教育機関としての基盤が築かれていった。この年の2月、実業学校令が公布されるとともに本校は甲種商船学校となり、船舶職員試験規程充当学校として認定された。ここに商船学校が事実上発足したのである。菅野校長の教育方針は学業すなわち実習であり、理論と実際を融合させて校長自らその範を垂れ卓越した手腕と熱意により、教育のすべてが逐次軌道にのってきた。教科書は殆んど原書とプリント授業が多かった。本校は明治中期の30年の爽やかな秋の10月、海辺からは遠い屋代村に郡立海員学校として高らかに呱々の声をあげたのであるが、この出生を双手を挙げて祝福したのはほかならぬ屋代、小松、三蒲、沖浦村の人達であった。その郡民注目の学校で「五月や今日も学校休みかな」式の気勢を挙げた豪傑猛者たちをよく指導し、文字通り本校育成の父としてその識見と手腕を縦横に振るわれたのが菅野紋吉校長であった。次々と優れた教員も招聘され熱意あふれる指導がなされた。運動場や陸上帆檣も設置された。さらに教具・教材等も整備され、本校教育が軌道にのったのである。そして送り出された卒業生もよく学校や郡民の期待に応えて活躍し、その技能を發揮したので、大島商船学校の声価はにわかに高まった。

第2編 県立大島商船学校

明治34年（1901）～昭和14年（1939）

第1章 県立大島商船学校への移管の経緯

第1節 県立移管への動き

本校は明治30年8月14日、設立が許可され、同年10月1日、郡立大島海員学校として開校した。当初は、航海、機関の2学部（定員各40名）で、修業年限は5年、職員は馬来校長のほかに2名の教諭と1名の書記兼舍監、生徒は航海学部25名、機関学部に24名の計49名で発足した。なお、初年度（明治30年）予算は、2,097円98銭7厘で、そのうち500円は県からの補助であった。大島郡は四面環海、地理的にも海運の適地であり、大島郡に出入りする150石以上の船舶は当時既に数百に達し、郡民もまた古くから海運の思想に富み船員養成の重要性を認識していたので、全島挙げて海員学校の助成に力を尽くし、運動場や陸上帆檣の建設をはじめ、教具教材の購入、教員の増員等に多額の郡費を投入した。

明治32年2月、文部省令第11号「商船学校規程」が発布され、商船学校が甲乙の二種に規定されたのを契機に、郡はいち早く校則を改正して修業年限を6年（席上3年、実習3年）とし、教育の規模と内容を拡張整備して甲種学校としての認可を受け、同年7月14日、校名を山口県大島甲種商船学校と改めた。

当時のわが国海運は、東洋の海運から世界の海運へ飛躍せんとする航権伸張の時代で、海員の需要はますます急を告げ、卒業生もまた郡民の期待に応えて活躍し、その技能を發揮したので、大島海員学校の声価はにわかに高まってきた。しかし、その一方で学校を維持するための郡民の負担は年々増加した。明治32年（1899）、通常県会における視学官野田藤馬の答弁に「甲種ナルタメ教員ノ資格モ高ク、授業ニ要スル機械ナドモ普通ノ中学校程度ノ学校ヨリハ余程金目ノモノヲ要シ、機械ナドモ不完全ナモノヲ以テ教授スレバ従ッテ完全ノ生徒ヲ養成シ得ザルハ自然ノ結果ナリ。例セバ、航海科ニ要スルバラメートルノ如キモ其ノ形アレバ不完全ナモノニテモ可ナリト云ウ訳ニ行カズ、高尚ナ学科ヲ授ケ充分ナル働キヲナシ得ル人物ヲ養成セント欲セバ、種々ノ機械ヲ要シ、従ッテ多額ノ費用ヲ要スル次第ナリ」とある。甲種商船学校を維持していくには、優秀な資格を有する教員が必要であり、また高価な教材等も教育に欠かせず、多額の経費を必要とした。そのため郡民の負担も過大となり、郡の事業としていざれは破綻が起きることが予想されたのであ

る。

こうして本校の県立移管の雰囲気が醸成され、郡選出県会議員の政治的な動きが活発するとともに、地元屋代・小松地区でも移管推薦の声が高まり、校舎の移転改築費と敷地3,180坪の提供が有志間で協議されたのである。こうして明治33年（1900）9月、臨時郡会は郡立大島甲種商船学校が明治34年から山口県立となることに関して、次のような寄付行為を行うことを可決したのである。すなわち、校舎位置が確実に郡内に設定される場合に限るとの条件つきで、

- (1)校舎、寄宿舎の新築事業費として金1万2,000円を県に寄付すること。
- (2)明治34年度の商船学校経費として金4,000円を県に寄付すること。

が決まった。(1)については郡債で負担されることになり、郡民の負担と支援のもと、また多くの人の厚意により、県立移管が現実となった。当時のわが国海運は、東洋の海運から世界の海運へと飛躍せんとする時代で、海員の需要はますます急を告げた。また、本校の卒業生もまた期待に応えたので、県立へと移管することで、さらに本校の商船教育が充実・発展することが期待された。

第2節 県立移管の実現

明治33年（1900）12月の山口県通常県会は、郡立大島甲種商船学校の県立移管について、次のとおり決議した。「県が引き受けるにあたり、大島郡はこの校の位置移転、校舎改築を望み、一部の地民よりは敷地の寄付、郡よりは校舎建設費及び校具の寄付申し出たり。乃ち、地を同郡の小松志佐村に移す」。

こうして、翌明治34年（1901）4月1日、県立に移管され、5月11日、校名を山口県立大島商船学校と改称した。と同時に、地元有志者の提供（寄付）による校舎地区の敷地造成工事に着工、翌35年2月22日には早くも待望の新校舎が落成し、屋代村の旧校舎から移転したのが、県立移管満1年後の同年4月2日であった。

郡立時代には、学校の近傍に民家3戸を借りてこれを生徒の寄宿舎にあてていたが、明治36年（1903）3月31日には、県立甲種学校の名に恥じない堂々たる寄宿舎と病棟が完成し、いよいよ商船学校本来の教育の場としての寄宿舎生活が、ここからスタートすることになったのである。

こうして、明治36年（1903）5月9日の吉日を以て開校式並びに祝賀会が挙行された。記録によれば、校門は緑門をもって飾り、当日は白米8斗の祝餅を撒き、30発の花火を打ち上げて祝賀ムードを盛り上げ、来賓の神田県知事、河村郡長等をはじめ地元関係者多数相会して「新生大島商船」の前途を祝し、稀にみる盛会であったという。

第2章 県立大島商船学校の整備と充実

第1節 県立大島商船学校の整備

1 校地・校舎・運動場

1-1 校地

明治34年（1901）4月1日、県は郡より大島甲種商船学校を引き受け、同年5月11日、校名を山口県立大島商船学校と改称した。

県へ移管するに当たり、大島郡は学校の移転と、校舎の改築を強く希望し、地元としても校舎移転問題については特に積極的に校地の選定に当たっても候補地を予定し、敷地の寄付まで申し出るほどであった。候補地として二カ所が予定されていたが、県は種々の条件を考慮し、小松志佐村字世並津（小松町、敷地面積2,997坪）を校地と定め、工事に着手することになった。この敷地は、その後土地買収その他により3,146.34坪に拡張された。

1-2 校舎

明治34年8月22日、地元の協力を得て工費10,690円で着工、工事は着々と進捗し、明治35年2月22日、待望の木造平屋建新校舎本館その他472.8坪が竣工した。

同年4月には屋代村から新校舎に移転し、明るい教室で授業が行なわれるようになったが、寄宿舎が完成するまでは生徒は取りあえず民家に下宿して不便を忍びながら授業を受けていた。校内設備は次々と充実され、8月31日には商船学校のシンボルとして郡立時代から地元民に親しまれてきた二本マストの陸上帆船がこの地に新しく建造された。又12月には機関科の実習工場も完成し、明治36年（1903）3月31日、待望久しかった寄宿舎木造2階建が完成した。寄宿舎内の設備は将来海上生活をおくるための実生活に即応するように設計されており、寝室では旧海軍式にならって吊床（昭和3年頃に寝台にかわった）を使用するようになっていた。この建物と同時に病棟・隔離室も完成し、施設・設備の面で残工事はあるにしても教育施設については一応完備されていた。

明治36年（1903）4月20日、関係者多数参列のうえ開校式を盛大に挙行、県立大島商船学校としての面目を一新した。

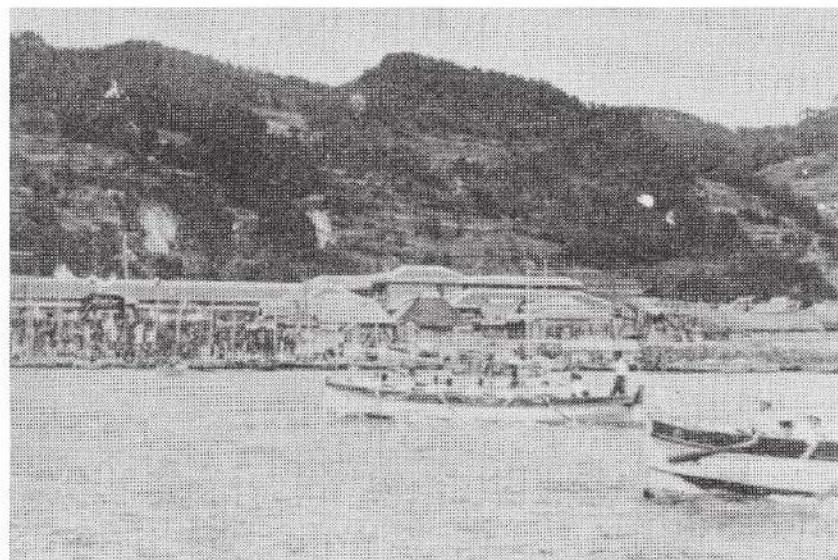


図2-1 新校舎落成記念行事（カッターレース 明治36年）

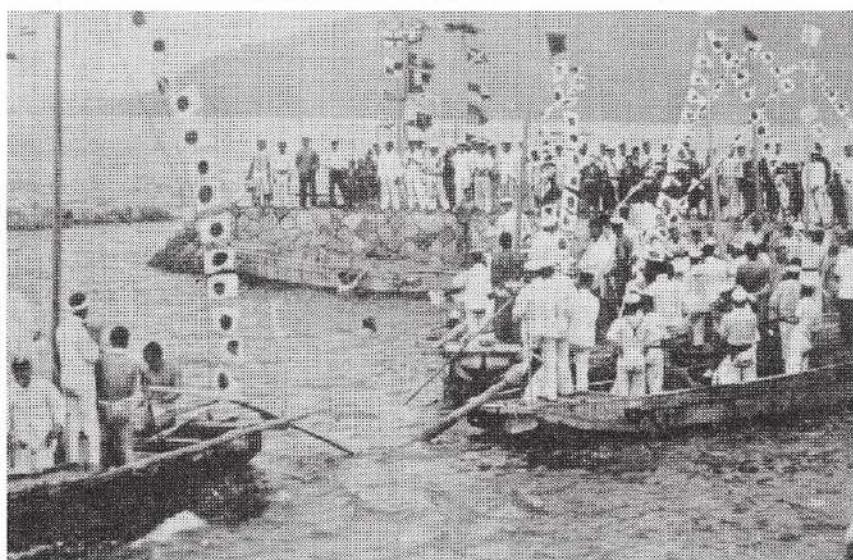


図2-2 新校舎落成記念行事（水泳競争 明治36年）

1-3 運動場の新設拡張

当時運動としては校内中庭が使用されていたが、運動場周辺は校舎建物と高地に囲まれ、しかも狭隘なため生徒の活発な運動競技等に不便を感じ支障をきたす場合も多かった。そこで学校前の海面を埋立てて運動場を新設することになり、県では付近の地所建物の買収移転について所有者との協議を行い、明治41年（1908）9月7日、それぞれの承諾が得られたので、同年12月8日から工事が開始された。埋立てに要する土砂は入道松南寄りの高地から運ばれ、工事は比較的順調に進み、明治42年4月14日、待望の増設運動場1,277坪が完成した。



図2-3 山口県立大島商船学校平面図（明治時代）

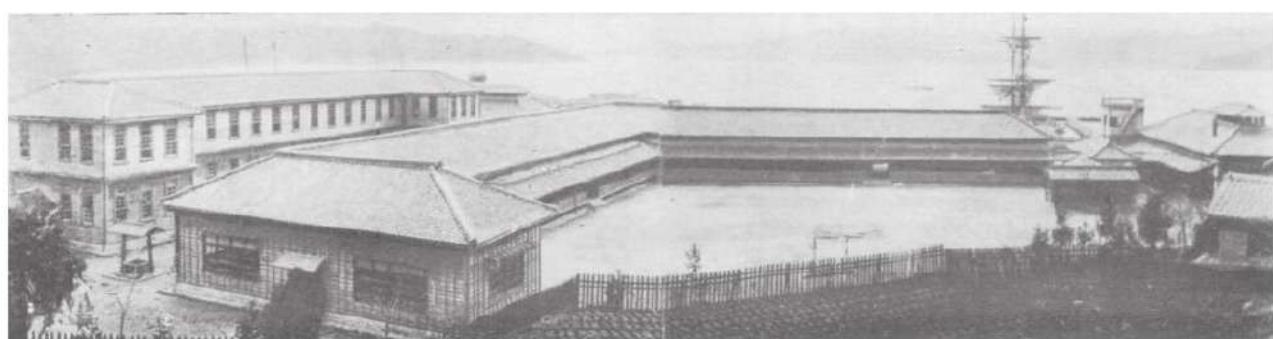


図2-4 県立時代の校舎全景

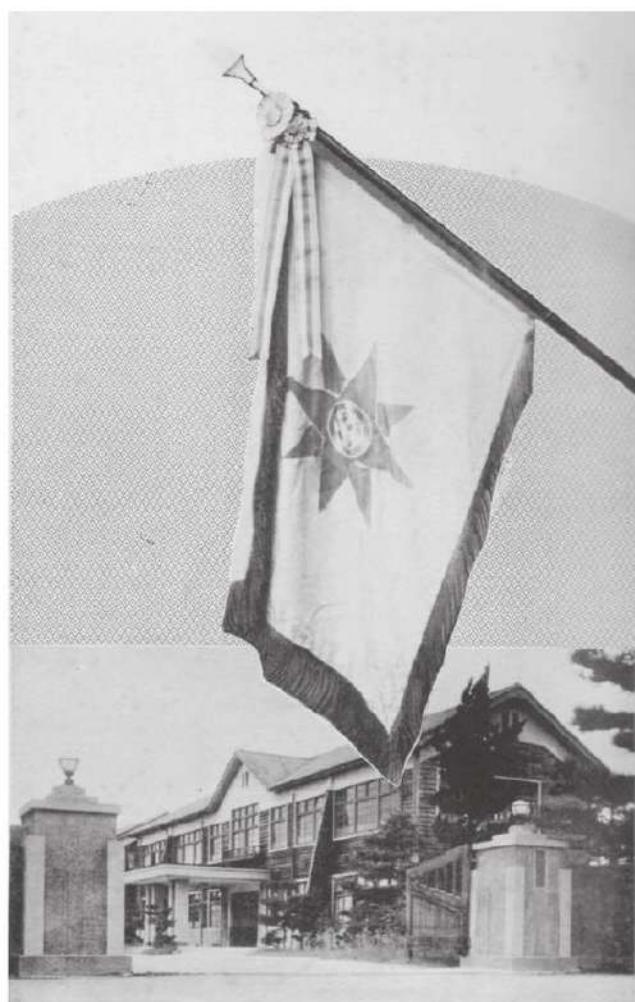


図 2-5 県立時代の校旗と正門

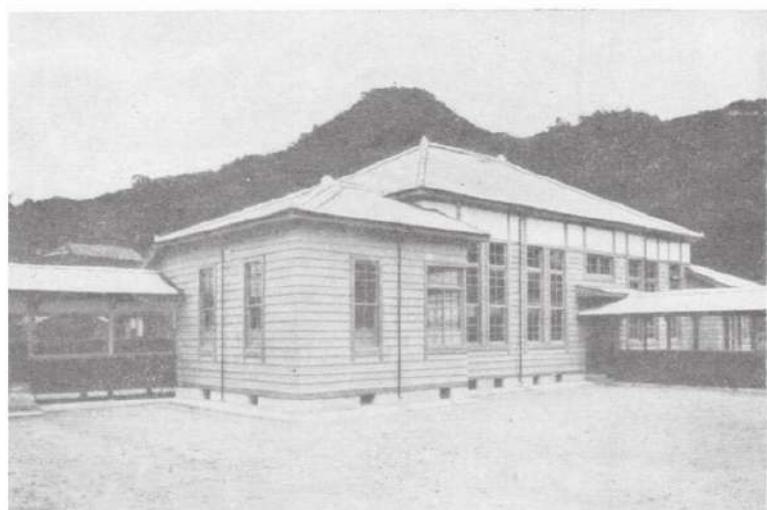


図 2-6 県立時代の講堂

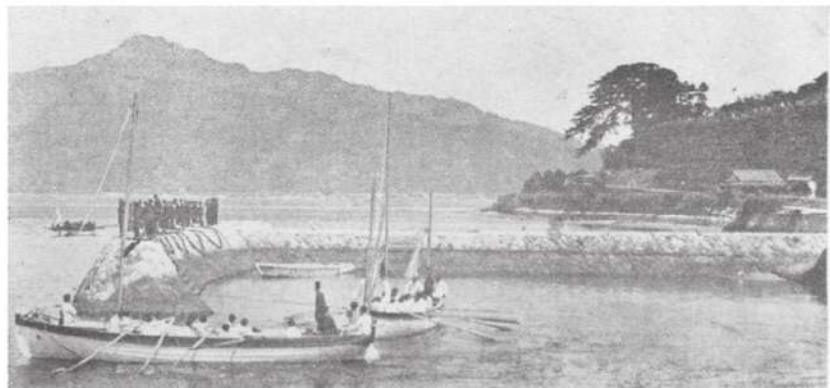


図2-7 県立時代のポンドと入道松

運動場が一挙に拡張されたために、発火演習場としても使用され、又各種運動競技の場として十二分に活用できるようになり、野球具を完備して野球大会が催されるなど、年々各種競技が盛んになった。さらに大正11年（1922）8月には防波堤の修築工事が行われ、端艇係留場附近の改修工事も行なわれた。

その後、海岸運動場をさらに拡張することになり、昭和12年（1937）10月3日、工事着手、西側の海面を460坪埋立てて、これまでの1,277坪のところ総面積1,737坪の大運動場に拡張した。

2 施設・設備

2-1 開校後の増改築等

明治36年（1903）8月10日、教室が増築され、門衛詰所も新築落成した。敷地の境界は当初木製の柵が施されていたが、経年の老朽破損により、明治43年3月31日、北方角半間より技業室後方崖までは、煉瓦塀、隔壁室敷地境界までは鉄柵とそれぞれ改修され、さらに翌年10月から11月にかけて門衛詰所角から生徒便所までは、煉瓦柵、そして裏門の改築、病室裏に鉄板塀、後方には鉄柵と境界全般に亘って堅牢な柵と塀に改築された。

大正元年8月、工費730円をかけて陸上帆船のマスト・柱等の取替えと甲板のセメント塗装など改修工事が行なわれた。

大正6年8月18日から技業室の増築入札が行われ、技業室が拡張された。大正12年10月15日には懸案となっていた校長官舎（建坪40.34坪）が工費3,889円98銭で小松に新築完成し、当時の守永校長から歴代校長が居住した。

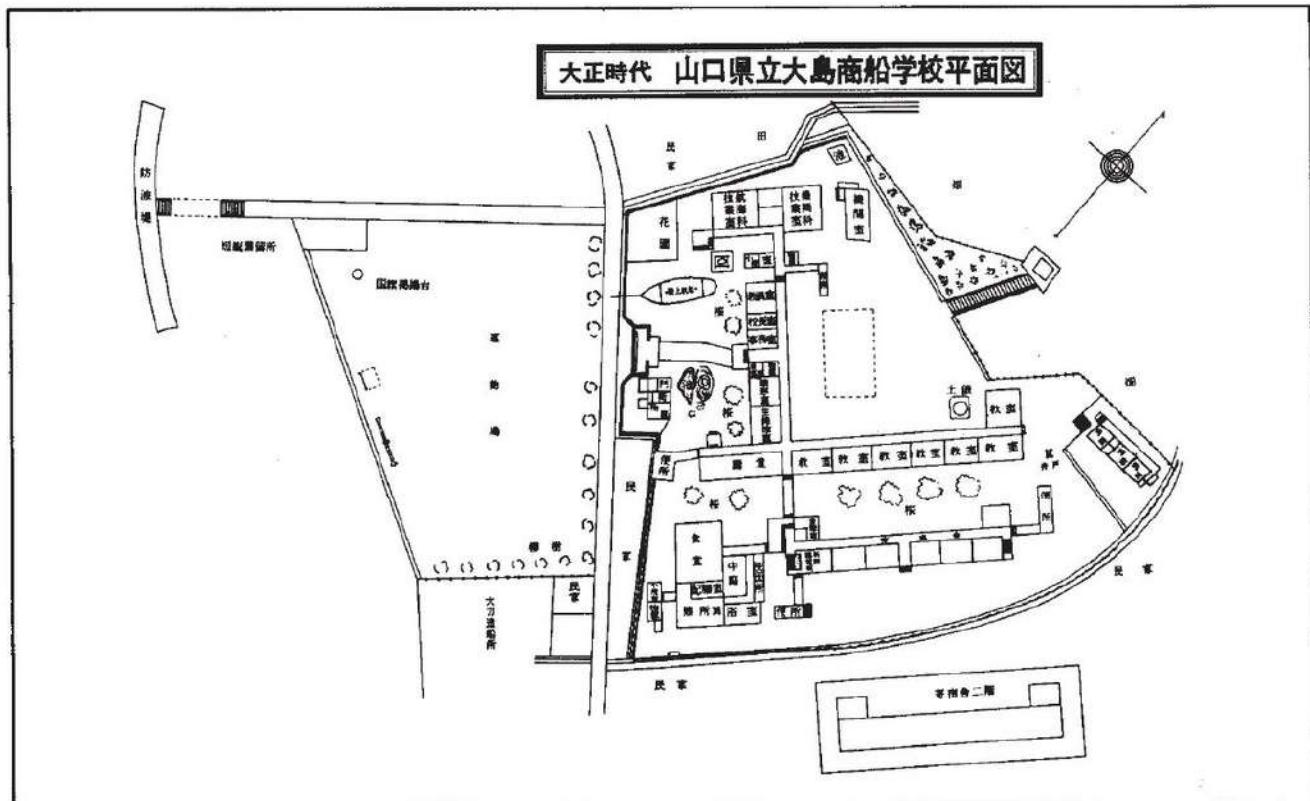


図2-8 山口県立大島商船学校平面図（大正時代）

2-2 実習機械等の整備

明治42年6月7日、東京高等商船学校長平山藤次郎氏から寄贈された三連成機関が技業室に据付けられ、又明治43年3月20日には汽罐室に新調の円筒形汽罐も据付けられたので、実際に即した実習が行なわれるようになり、これによって生徒の実習効果も倍加した。

大正12年11月9日、海軍省から保管転換を受けた旧三等駆逐艦用の汽罐および主機械を呉海軍工廠から起重機をもって回送し、陸揚げして教材とした。昭和6年3月4日、東京万全社からディーゼル機関（堅形単動）据付けのため技師來校し、発電機原動機として設備され、ディーゼル機関の基礎的知識を得るためのよい教材として実習に使用された。

2-3 寄宿舎の失火と再建

明治42年10月26日午前11時40分、寄宿舎2階5号室から失火、寄宿舎一棟を焼失した。明治42年12月15日、県会において寄宿舎の再建が可決され、その建築費は2年間で13,936円であった。

明治43年5月10日、工事に着手、同年8月24日、上棟式を挙行、11月31日には寄宿舎（47坪）が完成した。

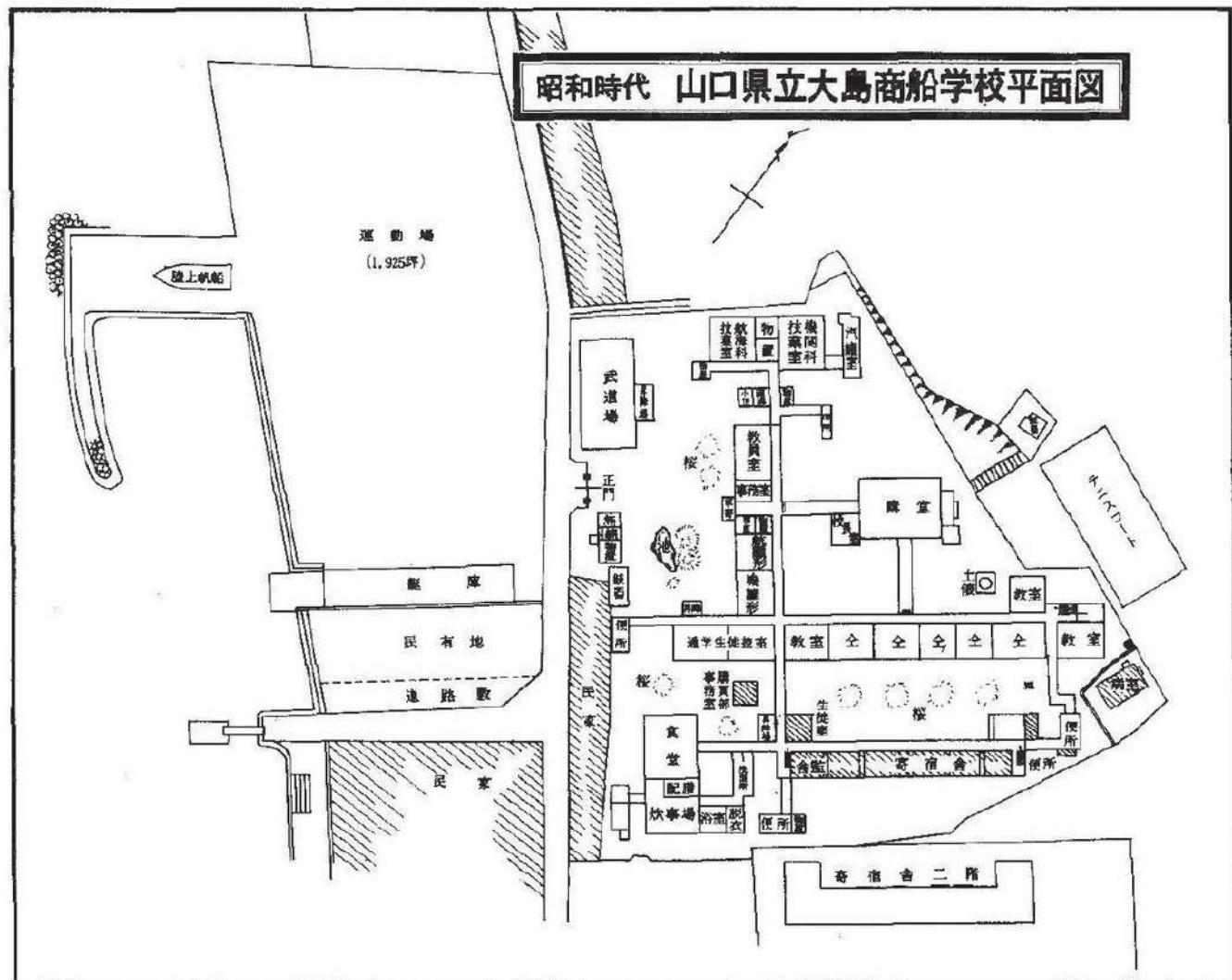


図 2-9 山口県立大島商船学校平面図（昭和時代）

2-4 校舎増築並びに講堂落成

大正 13 年 4 月 1 日、定員に関する校則の改正があり、生徒の増加に伴い教室の増築が当然必要であったので、これについては、再三県との折衝が続けられてきた。しかしながら予算その他の面で早期実現は至難とされていた。とりあえず、講堂その他教室等を利用して不便を凌ぎながら授業をおこなってきた。

昭和 5 年 10 月 14 日、ようやくにして、その悲願もかない、工費 5,450 円で二階建の二教室が校舎山手側に増築完成し、航海・機関の 4 年生の教室に当たれることになった。

一方懸案であった講堂新築については、前記教室増築と同様、県費依存は容易に解決しないので、地方有志、同窓生、職員、学生等に呼びかけ、その寄付によってこれが早急に解決を計ることとなった。幸いにして各方面からの理解と共に鳴を得て、実現可能となり、昭和 6 年 2 月 5 日、講堂新築契約が成立、2 月 21 日地鎮祭執行、同年 7 月 10 日、遂に待望の新講堂落成を見るに至った。

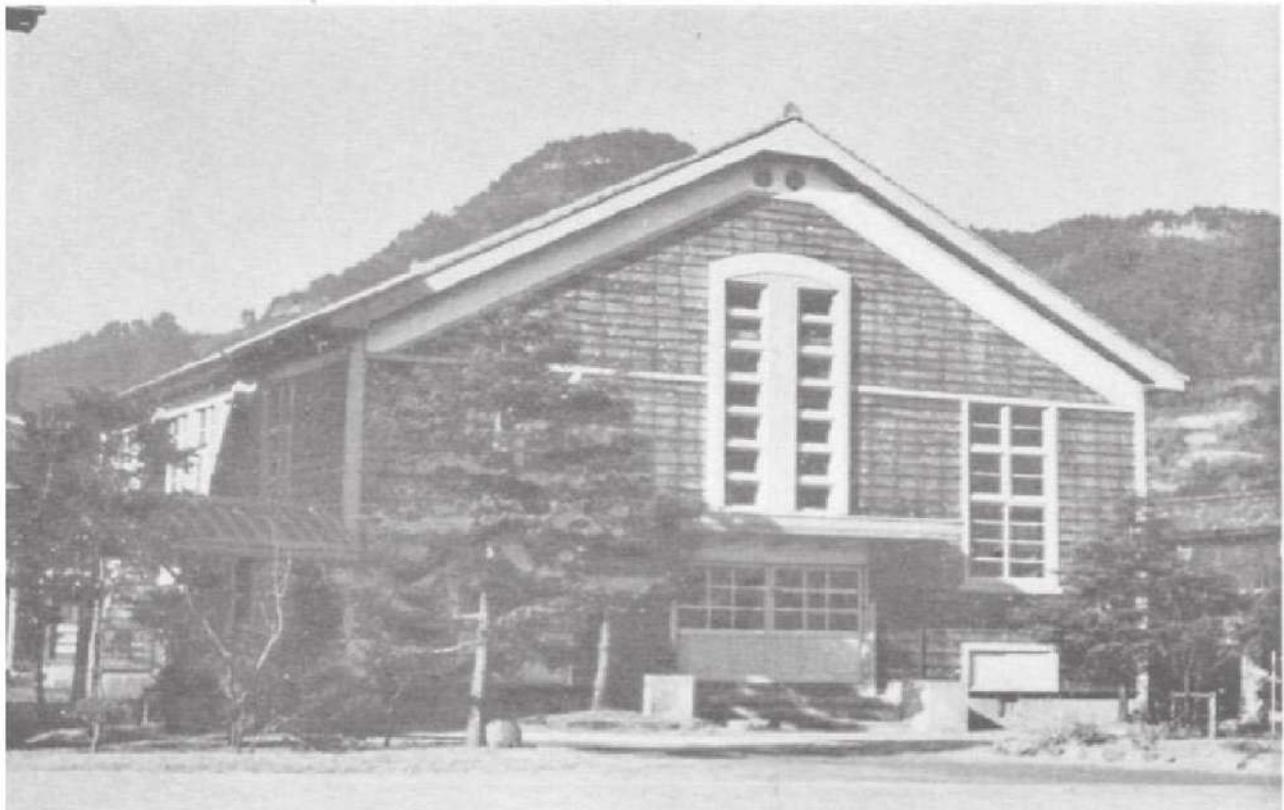


図 2-10 新講堂

2-5 武道場及び短艇庫落成

当初武道場として特に設けられていなかったので、航海技業室が兼用になっていた。講堂新築以来旧講堂内を仕切って東側を柔道、西側を剣道と二室に分けて一応専用の武道場として改修された。しかし、旧校舎そのまま使用したため、位置・設備その他の面でいろいろ問題もあって新武道場が陸上帆船の花壇の空地に建設されることになり、昭和 11 年 12 月 3 日、地鎮祭が執行された。一方これと並行して短艇庫も建設されることになった。短艇は當時防波堤内に繋がれており、短艇庫がないため、運動場の北側に陸揚げして保守手入れを行ってきたが、設備の面その他で不便な点が多くあった。それに波止場内は狭隘であるにかかわらず、水泳部の練習場にもなっていたため、短艇の陸揚げ、その他舟艇係留等で競合して支障をきたす面が多かった。ところが、運動場が北側に拡張される計画があって、短艇庫を運動場南側に建設することになり、昭和 12 年 3 月 31 日、武道場（工費 4,406 円 95 錢）と短艇庫（工費 2,460 円・建坪 79 坪 8 合）が同時に完成した。これによって波止場内での競合不便等が一举に緩和されることになった。

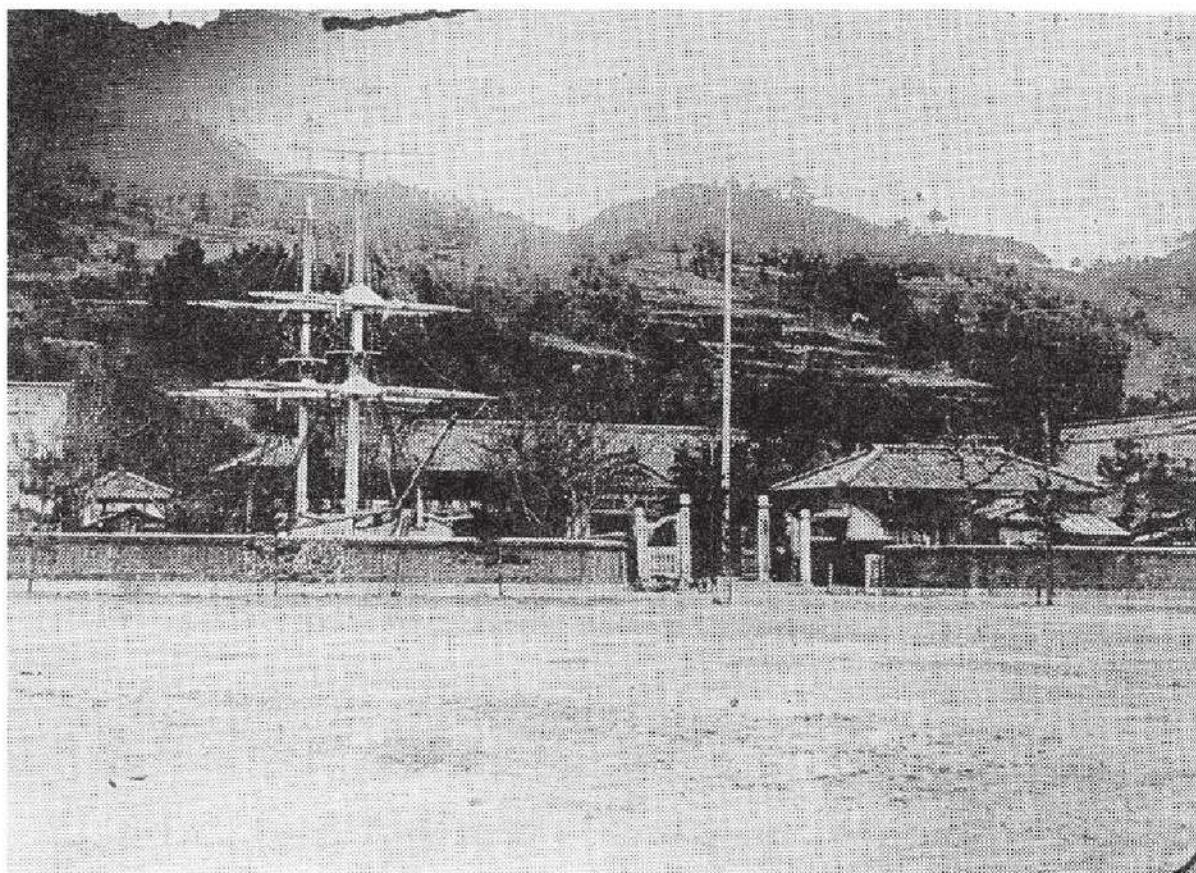


図 2-1-1 山口県立大島商船学校正門（大正時代）

2-6 陸上帆船の変遷

本校の陸上帆船の歴史は古い。明治30年に開校すると、校舎は郡役所の敷地を利用したが、陸上帆船は翌31年川地部落に新設された。横帆装置が一応整えられてその偉観は屋代平野を圧していた。その後県立に昇格して校舎が小松に移転したので、二本マストの二代目陸上帆船を新校地内に建造した。正門横にあつたこの陸帆は約20年間に亘って学生の操帆練習に貢献し、且つ学校のシンボルであった。（図2-1-1参照）

昭和12年、校地が拡張されたので三代目陸上帆船を建造し、船名を「乗風丸」と名づけた。完全に船型の整った三本マストバーク型である。その後、学生は広々とした校庭で潮風を一杯浴びながら実地に則した操帆実習を続けてきたのである。

第2節 県立大島商船学校の充実

1 教育

1-1 校長・職員

県立大島商船学校時代は明治34年（1901）4月から昭和14年（1939）8月である。時代がめまぐるしく変わっていく中で、本校もその影響を受けながら、充実と発展を遂げた時代である。

第4代校長は菅野紋吉校長（明治32年～大正4年）である。この時代に商船学校の今日ある基礎が築かれた。明治32年7月、甲種商船学校となり、船舶職員試験規定充当学校としての商船学校として発足した。菅野校長の教育方針は学業即ち実習であり、理論と実際を合致させるため練習帆船「海平丸」を建造し、校長自らその指揮にあたった。この時代において校長の卓越した手腕と熱意によって、教育のすべてが順次軌道にのり、生徒の生活や体育面についても著しく充実した。

第5代校長は西尾栄次郎校長（大正4年～大正7年）である。前校長の教育方針を踏襲してさらにこれを拡充することに努められた。当時の生徒の生活は、元気にまかせてときに脱線することもあったが、教官と生徒の間は坦に教室だけでというような関係ではなく、生徒の生活自体に直接結びついていた。体育も陸軍式体操が採用され、この頃からようやくスポーツも行われるようになった。

第6代校長は守永喜三郎校長（大正7年～昭和2年）である。至誠一貫を教育の基本とし、人間完成をその第一主義とし豊かな教養のための教育の拡充に意を注がれた。こうしてこの時代に席上課程が4年・実習課程が3年の修業年限7年に学則が変更され、より豊かな教養と技術を身につけることになった。体育はスポーツによる体位向上が目指され、武道による心身の鍛錬も盛んに行われるようになった。

第7代校長は蛭子康校長（昭和2年～昭和18年）である。最良の環境と設備で最良の教育をという理念のもとに、鋭意施設の拡充整備に努められた。講堂の建設、新校舎の新築計画、練習船の建造、機関工場の充実等々、この時代の特徴は校長の学校管理経営が、主としてこの面に発揮されたことにあった。前校長時代と同様にスポーツが盛んに行われ、また武道による心身の鍛錬も十分に行なわれた。なお、明治43年4月1日、教諭、助教諭定員11人が13人に増員となった。

1-2 生徒

明治34年の県立に移管後、定員その他について次のとおり改正が行われた。

明治34年（1901）4月11日、校則改正により、生徒定員180名となる。

明治39年（1906）3月29日、入学許可人員を、航海科40名、機関科30名とする。

明治41年（1908）1月28日、校則改正により、生徒定員180名を240名とする。

大正8年（1919）3月1日、甲種商船学校規定改正に基づき校則改正、本科及び練習科を置く。（本科3年、練習科3年、本科卒業のうえ海兵団において軍事教育3ヶ月）

大正13年（1924）4月1日、校則改正により、入学資格高一修程度、修業年限、本科4年、練習科3年、本科生徒定員320名。

昭和9年（1934）4月、軍事教育3ヶ月が6ヶ月となり、軍事教育中は海軍軍服を貸与着用することとなつた。

表2-1 入学・卒業及び退学者数

科別	航海科					機関科					応募者 合計	年度末現員 合計
	年度	応募	入学	卒業	退学	現員	応募	入学	卒業	退学	現員	
明治34年	62	43		4	90	45	27		4	68	107	158
35年	64	27		18	99	38	24		17	75	102	174
36年	56	27		23	103	43	25		14	86	99	189
37年	55	35		27	111	38	25		18	93	93	204
38年	118	37	14	12	122	71	31	14	10	100	189	222
39年	188	42	19	12	133	133	23	11	15	106	321	454
40年	185	34	21	6	140	132	28	8	13	113	317	253
41年	180	45	8	14	163	86	36	7	14	128	266	291
42年	124	47	14	15	181	58	35	8	11	144	182	325
43年	65	46	7	27	193	43	32	13	23	140	108	333
44年	99	48	25	15	201	41	57	9	19	169	140	370
大正元年	93	44	22	27	196	23	12	16	26	149	116	345
2年	54	45	24	13	202	36	30	19	23	138	90	340
3年	86	46	30	24	196	34	30	26	16	126	120	322

4年	81	65	23	36	203	42	59	23	32	130	123	333
5年	95	47	30	23	196	57	40	26	14	130	152	226
6年	125	47	17	20	206	71	35	8	14	143	196	348
7年	142	45	19	32	200	79	35	21	13	144	221	344
8年	131	47	24	22	201	69	37	10	9	162	200	363
9年	156	45	32	19	195	90	36	17	6	175	246	370
10年	182	47	22	19	201	88	35	27	13	170	270	371
11年	120	43	25	16	203	55	34	23	14	167	175	370
12年	82	35	22	15	199	47	27	24	10	160	129	459
13年	52	23	25	26	171	34	16	13	15	148	86	319
14年	52	33	27	15	162	37	27	28	14	133	89	295
15年	40	23	28	9	148	32	16	24	12	113	72	261
昭和2年	69	37	20	21	144	50	28	23	6	112	119	256
3年	56	35	23	17	139	44	31	18	5	120	100	259
4年	58	34	25	13	135	63	33	23	9	121	121	256
5年	52	34	1	14	154	52	39	0	8	152	105	306
6年	50	26	6	20	154	40	32	5	14	165	90	319
7年	39	24	17	13	148	35	24	9	10	170	70	318
8年	24	22	12	9	149	35	20	11	8	171	59	319
9年	29	20	20	22	131	25	17	11	24	152	54	284
10年	48	38	24	14	137	62	38	27	10	154	110	291
11年	36	42	38	5	136	44	20	21	11	142	80	278
12年	32	25	19	13	不明	48	30	23	10	不明	80	不明
13年	不明	33	24	19	不明	不明	22	28	14	不明	394	不明
14年	不明	10	11	3	不明	不明	15	12	3	不明	147	不明

1-3 校則と教育内容

県立大島商船学校時代は明治34年（1901）4月から昭和14年（1939）8月である。時代がめまぐるしく変わっていく中で、本校もその影響を受けながら、充実と発展を遂げた時代である。

校則

山口県大島甲種商船学校規則（山口県令第51号 明治34年4月1日）（抜粋）

第1条 本校ハ明治32年勅令第29号実業学校令ニ基ヅキ同年文部省令第11号商船学校規定ニヨリ高等ノ船舶職員トナルヘキ者ヲ養成スルヲ以テ目的トナス

第4条 本校ノ修業年限ハ実習ヲ除キ3箇年トス実習ハ航海科ニ在リテハ船内ニ於イテ3箇年機関科ニ在リテハ機関工場及汽船内ニ於イテ3箇年6箇月間之ヲ課ス

第10条 本校ノ学科課程左ノ如シ（要約）

其1

科目	第1年級	毎週時数	第2年級	毎週時数	第3年級	毎週時数	備考
修身	人倫道德要旨	1	同上	1	同上	1	
読書作文	講読、作文	4					

数 学	算術、幾何	5	幾何、代数、三角法	5	同上	2	第1年級ニテ第1学期運用術5時間ノ内3時間転用ス
物 理			物理	2			
地 球	地誌及地文	2					
英 語	綴字、習字、 読方、訳解、 書取	6	読方、訳解、 文法、書取、 作文	6	同上	3	第1年級ニテ第1学期運用術5時間ノ内3時間転用ス
図 画	自在画	1					
運用術	運用術	5	同上	5	同上	6	第1年級ニテハ第1学期間之ヲ省ク
航海術			航海術	3	同上	7	
機関術大意			機関術大意	1	同上	2	
造船学大意					造船学大意	2	
気象学			気象学	1	同上	2	
医 術					船内衛生法、 救急医療	1	
体 操		2					
実 習							

実習は1週10時間乃至15時間之ヲ課ス

其2

科 目	第1年級	毎週時数	第2年級	毎週時数	第3年級	毎週時数	備 考
修 身	人倫道徳要旨	1	同上	1	同上	1	
読書作文	講読、作文	4					
数 学	算術、幾何	5	幾何、代数、 三角法	5	同上	2	第1年級ニテ第1学期機械製図2時間ヲ転用ス
物 理			物理	2			
地 球	地誌及地文	2					
英 語	綴字、習字、 読方、訳解、 書取	6	読方、訳解、 文法、書取、 作文	6	同上	3	第1年級ニテ第1学期機関術3時間ヲ転用ス
図 画	自在画	1					
機関術	機関術	3	同上	7	同上	10	第1年級ニテハ第1学期間之ヲ省ク
機械製図	機械画法、製 図法、見取図	2	見取図、縮尺 図	3	同上	6	
力 学					力学、応用力学	2	
電気学大意					電気学大意	2	
医 術					船内衛生法、	1	

					救急医療		
体 操		2					
実 習							

実習は1週6時間乃至12時間之ヲ課ス

校則

山口県立大島商船学校規則改正（山口県令第17号 大正13年2月15日）（抜粋）

第2条 本学ニ航海科、機関科ヲ置キ各之ヲ本科及練習科ニ分ツ

本科ノ修業年限ハ4箇年トス

練習科ニハ本科卒業生ヲ編入シ左ノ期間実習ヲ課ス

航海科 3箇年（帆船1箇年、汽船2箇年）

機関科 3箇年（工場1年6箇月、汽船1年6箇月）

第4条 本科ノ学科課程及毎週教授時数ハ左表ニ依ル

航海科

学科目	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年	
	毎週時数	課程	毎週時数	課程	毎週時数	課程	毎週時数	課程
修 身	1	道徳ノ要旨	1	同上	1	同上	1	同上
国 語	5	講読、作文	4	同上	3	同上	2	同上
数 学	7	算術、幾何、代数	7	幾何、代数、三角法	5	同上	4	代数、高等数学初步
物 理 化 学			2	物理	1	化学		
英 語	7	綴字、発音、読方、書取、習字、作文、訳解、文法、話方	7	訳解、書取、作文、会話、文法	7	同上	7	訳解、通解、書取、会話、作文、文法
法 制 経 済	2		1	法制経済大意	1	同上		
地 理	2	外国地理						
歴 史	2	外国歴史						
製 図	2	用器画法、製図						
運用術	2	船体艤装	2	船体艤装 船具用法	3	船具用法 帆船運用法	4	衝突予防法 汽船運用法
航海術			4	測器、水路図誌、推測法	6	測器、水路図誌、推測法、天測法	6	天測法、自差修正法
機関術					2	氣機、汽罐	1	電氣学大意
気象学					1	海上気象学大意	1	同上
造船学					1	構造大意	1	理論大意
力 学							1	応用力学大意
海事要項							2	海法、海上運

								送大意
船舶衛生							1	船舶衛生大意
体 操	2	普通体操 海軍銃隊教練	2	同上	2	普通体操、海軍銃隊教練、 海軍諸法大意	2	同上
計	30		30		33		33	
技 業	10	運用、信号、端艇、 水泳、雜業	7	同上	7	同上	7	同上
総 計	40		40		40		40	

機関科

学科目	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年	
	毎週時数	課程	毎週時数	課程	毎週時数	課程	毎週時数	課程
修 身	1	道徳ノ要旨	1	同上	1	同上	1	同上
国 語	5	講読、作文	4	同上	3	同上	2	同上
数 学	7	算術、幾何、代数	7	幾何、代数、 三角法	5	同上	4	代数、高等数学初步
物 理 化 学			1	物理	1	化学	1	
英 語	7	綴字、発音、読方、 書取、習字、作文、 訳解、文法、話方	7	訳解、書取、 作文、会話、 文法	6	同上	6	訳解、通解、 書取、会話、 作文、文法
法 制 経 済			1	法制経済大意	1	同上	1	
地 理	2	外国地理						
歴 史	2	外国歴史						
機関術	2	汽機、汽罐	4	同上	8	汽機、汽罐、 算法	10	同上
製 図	2	用器画法 見取図	2	見取図 製図	2	同上	2	同上
造船学			1	構造大意	1		1	
力 学			2		2	力学	2	応用力学
電気学							3	応用電気
海事要項					1	海法大意		
船舶衛生							1	船舶衛生大意
体 操	2	普通体操 海軍銃隊教練	2	同上	2	普通体操、海軍銃隊教練、 海軍諸法大意	2	同上
計	30		30		33		33	

技業	10	鍊鉄、斬金、鑪工具使用法、端艇、水泳、信号、雜業	7	鍊鉄、工具、製作、機関保存手入、端艇、水泳、信号、雜業	7	銅工、旋盤、工具製作、機関ノ分解、組立運転、端艇、水泳、信号、雜業	7	機関ノ分解、組立運転、端艇、水泳、信号、雜業
総計	40		40		40		40	

1-4 校訓と教育方針

校訓

I 至誠 II 和親 III 元氣 IV 規律 V 勤勉

教育方針

I 德育

純潔ナル感情ヲ養ヒ剛毅ナル意志ヲ陶冶シ至誠力行ノ人格ヲ養成セントス

II 体育

身体各部ノ均齊的発達ヲ図リ元気ヲ旺盛ニシ以テ心身ノ活動力ヲ増進セシメントス

III 智育

精選セル教材ノ徹底的教授ニ努メ活用自在ナル実力ヲ養成セントス

1-5 服装

① 本科生

冬服は黒色、小倉服を着用し、胸には5つボタンで帽章は真鍛製コンパスマークであった。夏服は白色、小倉服を着用し、帽子に白色覆いをつけた。

32期生から胸ボタンは6個となり袖に3つボタンをつけた。

②練習科生

冬服は紺サージで、袖に3つボタンをつけて海軍予備員を示し、帽章は金モールであった。夏は白麻地の正服を着用した。

四季を通じて校内では技業服（俗にジャンパーと称した）を着用した。

2 校内練習船（汽船）

校内練習船は大別して汽船（蒸気機関・内燃機関・焼玉機関）と西洋型帆船に分けられる。その中で汽船については以下のとおりである。

表2-2 校内練習船（汽船）

船名	トン数	機関の種類	収容人員	備考
大進丸	約 50.00	2連成往復汽罐 2基 円筒形汽罐 1基	不明	昭和3年4月13日陸軍運輸部から払い下げ
大典丸	4.80	焼玉機関 20馬力	10名	昭和4年7月10日建造
第二菊水丸	不明	内燃機関 1基	不明	昭和6年9月陸軍運輸部から払い下げ
桜丸	不明	2連成往復汽罐 1基 円筒形汽罐 1基	不明	昭和8年7月陸軍運輸部から払い下げ
大勝丸	不明	2連成往復汽罐 1基	不明	不明

		円筒形汽罐	1基		
大徳丸	34.34	焼玉機関1基	35馬力	50名	昭和12年5月11日建造

3 帆船実習の変遷

本校は創立当初から本科3年に対し、練習科3年乃至3年半で、商船学校教育の特徴は練習科課程にあるといわれるほど、本科課程の座学もさることながら練習科課程習得に長年月を要した。

このことは、常に千変万化し、計り知ることのできない猛威を振る大自然に翻弄され、しかも陸地と隔絶された職場に生活を営む船員を教育する以上当然のことといえよう。以下試練と苦闘の歴史を歩み続けた練習船と練習課程を時代別に追ってみる。

3-1 明治時代の練習帆船

(練習船「海平丸」の登場)

明治29年(1896)、法律第68号によって定められた船舶職員法によると、甲種商船学校(本校は明治32年、甲種の課程となった)卒業者は、無試験で甲種2等運転士の免状を得られることになっていたが、この免状を取得するためには、一定の期間、横帆装置の帆船において、実習練習をすることが必要条件となっていた。

しかし、各商船学校が横帆装置の練習船を備えることは、経費の関係でほとんど不可能に近く、かといって帆船練習を民間の船舶運航業者にのみ委託することは、横帆装置の帆船が汽船程多くないので事は容易ではなかった。また、仮にこれが実現したとしても、修養中の生徒を、ともすれば放縦に流れ易い帆船船員の間に放任することは、すこぶる寒心に堪えない等の事情もあって、学校は常にこの点に苦しみ、汽船実習をもって帆船実習に代えることを強く希望し、文部省においてもこれを諒として屢々通信省当局に交渉したが、通信省としては、帆船実習は海員精神鍛錬に絶対必要であるとして譲歩の色を示さなかった。

そこで、明治35年(1902)、当時の菅野校長は山口県当局と折衝し練習船建造を画策したが、数万円を要する多額の県費支出は到底不可能であるとして採択されなかつた。しかし校長はその後も希望を捨てず、熱情を傾けて同年の県議会に乗り込み、帆船建造の絶対必要である旨を力説し、「菅野は練習船建造の暁は、自ら船長となって航海し、若し収支がつぐなわない場合には、自己の俸給を以て支弁しても県当局に御迷惑はかけない。」と熱意の程を披瀝した。この熱意に燃える陳情には、さしもの県会議員一同大いに感銘し、満場一致をもって練習船建造を可決したのである

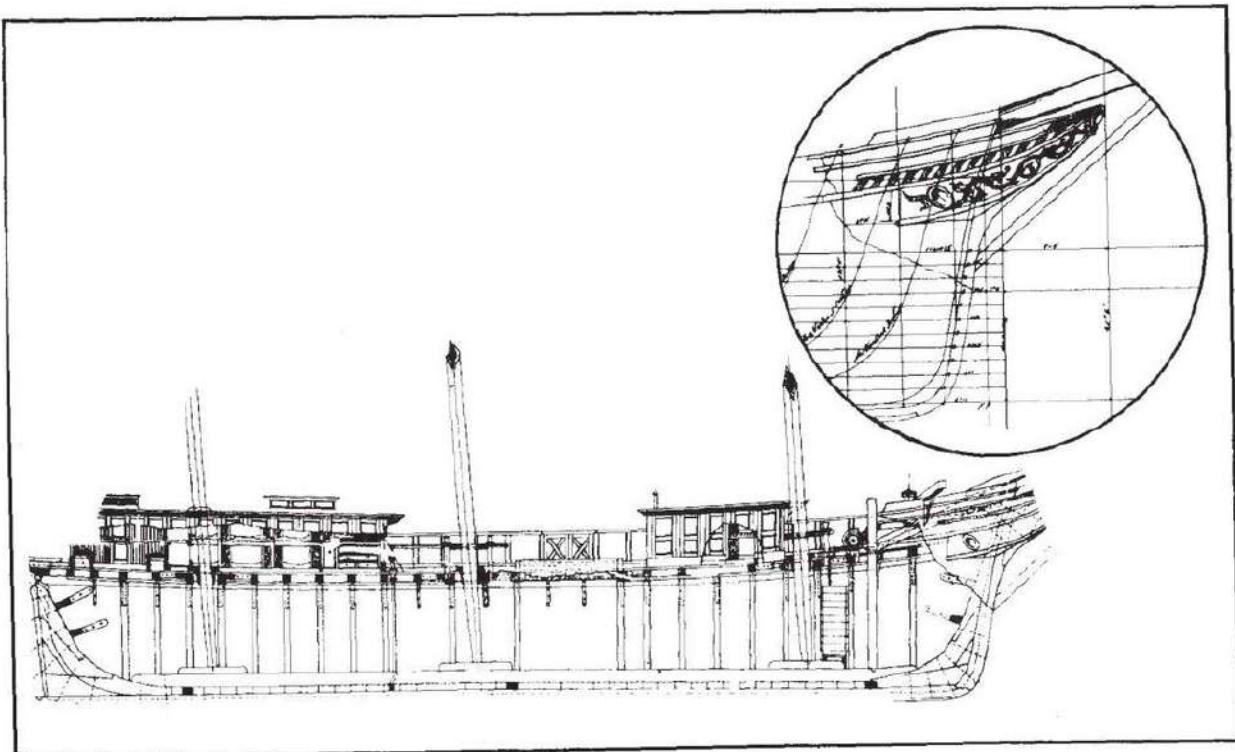


図 2-12 「海平丸」船体構造図

こうして明治36年11月、金1万5千円の県費をもって練習船購入契約が成立し、明治37年（1904）5月1日、小松志佐村原造船所において、船名を「海平丸」と命名する265.44トン、木造バーク型の練習船が、来賓に県知事、県議員、県視学、玖珂郡長、熊毛郡長、大島郡長ならびに参事会会員等多数を迎えて、華やかに進水したのである。

こうして、「海平丸」は関係者の期待を背負って登場し、同年10月の処女航海（下関）から、同船による帆船実習が実施されることになったのである。「海平丸」は菅野校長が自ら船長として運航の任に当たられ、（途中で久保庭貞蔵氏と交代）日本近海の練習航海に活躍したが、明治41年（1908）、軍艦「赤城」と衝突して沈没した。

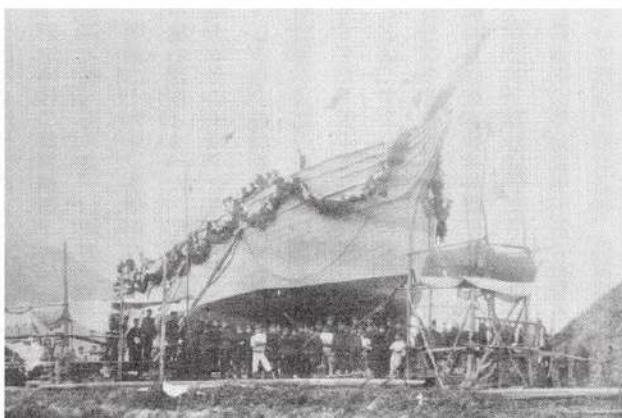


図 2-13 「海平丸」進水式当日の模様

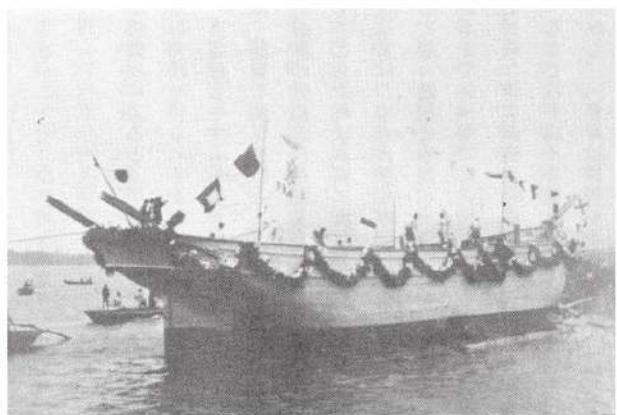


図 2-14 「海平丸」進水の光景

3-2 大正時代の練習帆船

(練習船「山口丸」の誕生)

「海平丸」の悲運に対して学校等当局はこの件に対する調査に没頭する一方、県議会に陳情、県は軍と交渉し、明治41年12月10日、県会で練習船建造費5万円余の支出を得た。

明治42年1月2日、新船を発注し、同年7月20日、大阪の三原造船所で「山口丸」が進水した。本船は同年12月4日、小松港に入港したが、そのときの模様を「40年史」は次のように報じている。

『12月4日前半、校門の堤頭、突如夜陰を破って汽笛の響きを伝う。やがて、船員2名上陸し練習船「山口丸」着港を報ず。けだし、練習船は汽船に曳かれて本校に初の着港をなせしものにして、汽船は直ちに帰航す。当直員2名国行、猪口両教員及び加藤教諭は端艇を以て本船を訪問す。天高く波平かに天地寂漠たる處、雄大にして巍峨たる船体は玲瓏たる残月の光に欲してその巨体を小松湾頭に横たえた。嘻、壯なる哉。』

彩雲、空に揺曳して満船の装飾は運動場の「アーチ」と相対し、隣々たる奏楽の妙音は嬉々たる歓呼の声と相和して、次第に明けゆく曙の空に、たたずめる群集の心に、無量の感慨をそそり立たしむ。

午前10時、歓迎式を行う。出迎えの3端艇本船に着すや、祝砲に代ゆる小銃の一斉射撃は轟然として空

に響き、万歳の声は湾頭に響き渡れり。斯くして乗員は奏楽と歓呼裡に上陸をなし、別に設くる休憩室に入る。午後、航海員長途の航海慰労のため、午後1時より野球大会を開催し、午後5時より茶話会を開催す。余興百出し、観客立錐の余地も無く盛況裡に午後1時、散会す。』

待望の練習船「山口丸」に生徒達は若き血をたぎらせた。3本マスト、バーク型の素晴らしい帆船であった。以来、「山口丸」は北は奥尻より南は鹿児島県甑島まで、ある時はほとんどの乗組員が脚気病に悩ませながらも若い練習生達はこれら幾多の受難にもめげず、図2-15のような練習航海を役7年間に亘って続けたのである。

しかし、天運利あらず、三原造船所が当時の近海航路帆船として白眉であると折紙をつけて建造し、多数の若人を養成した練習船「山口丸」は大正6年(1917)3月2日、南海の孤島の南鳥島で遭難し沈没したのである。

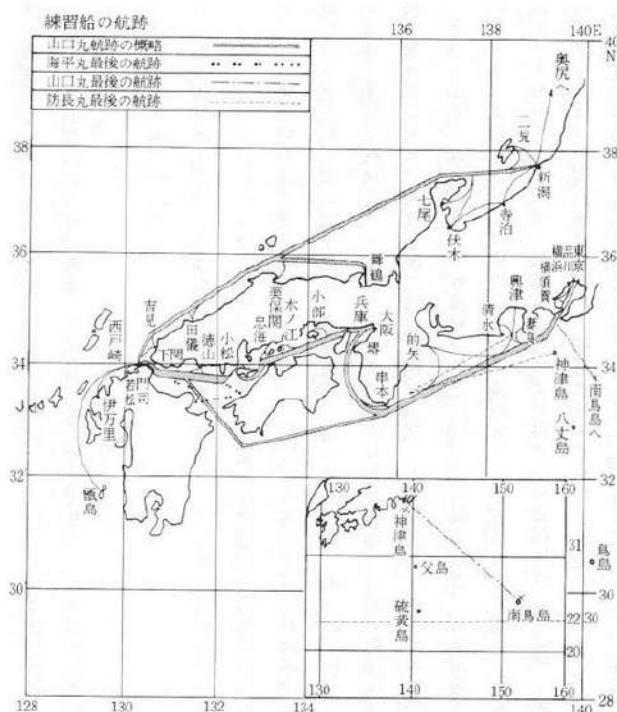


図2-15 練習船の航跡

(悲運の練習船「防長丸」)

「海平丸」に続いて「山口丸」を失った本校は、第3の練習船の建造を求め、県と折衝を続けた。しかし、経費その他のことでのなかなか良い返事が得られなかった。その間は後述の民間委託船で実習が行われた。その後も必死となって県と折衝を続けた結果、ようやく大正13年(1924)になって、本校第3の練習船「防長丸」が誕生した。

大正13年3月21日、練習船「防長丸」はその雄姿を小松の海に現した。船長として住沢半七が就任、早速練習航海が実施された。「防長丸」はバラスト代わりに僅かに鉱石などを搭載し、主として瀬戸内海を東京に向けて練習航海に従事した。ところが1年もすぎぬ大正14年(1925)2月24日、伊豆沖神津島、松山海岸で暴風のため沈没し、船長以下職員生徒6名が殉職するという本校練習船受難の最大悲惨事が起き

たのである。殉職した船長住沢半七、1等運転士江崎福蔵並びに乗り組み実習生4名に対しては校葬を執行して哀悼の意を表したのである。県知事、県会議員、大島郡各町村長、その他有志多数参列のもと本校は悲しみ一色に包まれたのである。

(民間委託船)

本校の練習船は初代「海平丸」、2代「山口丸」、3代「防長丸」と続いたが、前述のようにいずれも遭難、沈没の悲運に見舞われている。このため、昭和5年(1930)に文部省練習船「日本丸」、「海王丸」登場するまでの間、以後、帆船実習は、民間船に委託された。本校3隻の練習船による帆船実習は約14年間で、実習した生徒は約300名である。これに比べて民間委託船による帆船実習は約16年間で、実習した生徒は約370名にのぼる。本校の商船教育に当時の民間委託船が果たした役割は大なるものがあった。

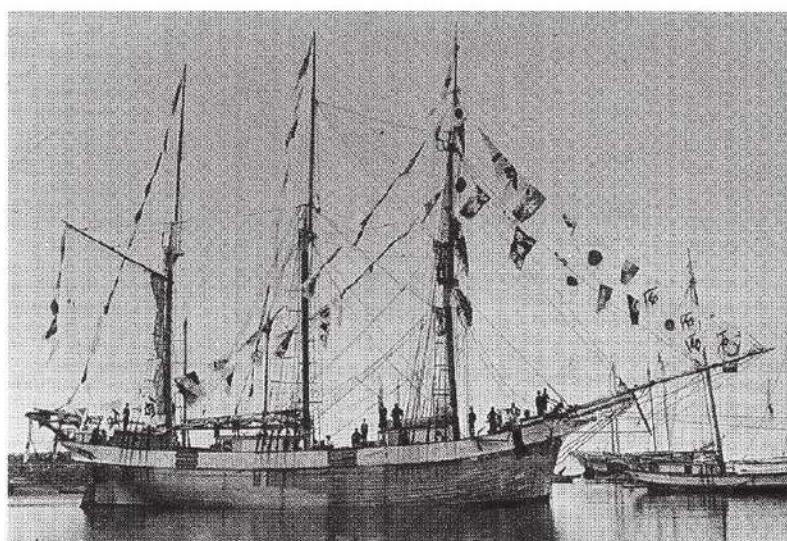


図2-16 民間委託船

民間委託帆船は、約200から300トン程度の横帆船がほとんどであったが、中には約数千トン級の外国帆船で活躍した強者練習生もいた。帆装は、2本マスト、3本マスト、または4本マストの「パーク」、「バーカンチン」、「ブリガンチン」型等であった。

北前船の航路に乗船した者は、夏季は日本海を北上して鮭の積取りにカムチャツカ方面に向い、激しい作業を含む練習航海が続けられたという。北前船の航路の帆船に連絡のつかない生徒は、関門港の「関忠」に依頼して、青島、清津、東京間の岩塩輸送の帆船に乗船して実習に従事した。また、国内航路に飽き足りぬ生徒の中には、単身、外国航路に赴いた強者もいた。

総帆をかけて走るこれら一見優美な帆船も荒れ狂う時期に遭遇すれば、生死の境を彷徨する苦難の航海であり、パロメーターと觀天望氣にのみ頼る当時の帆船実習は、實に冒險そのものであった。半面、待てば海路の日和的、楽天的で気儘な面もあったが、長年月、国を後に外人相手の海の上、内面的な心の悩みもあり、多感な青年の心情は如何ばかりであったろうか。わが国の商船教育では、今日でも帆船による実習が伝統とともに生き続けているが、この時機ほど、困苦と苦難の航海に喘いだ時代はなかつたであろうと推察される。

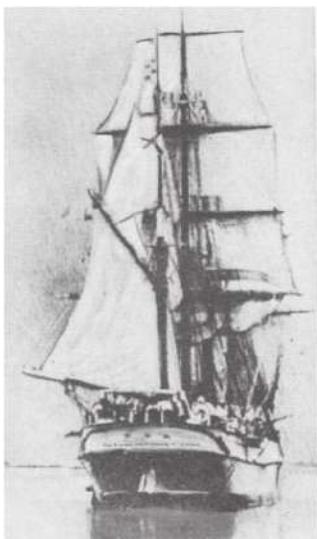


図 2-17 海平丸

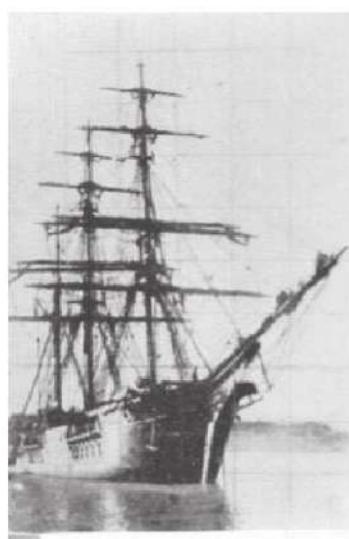


図 2-18 山口丸

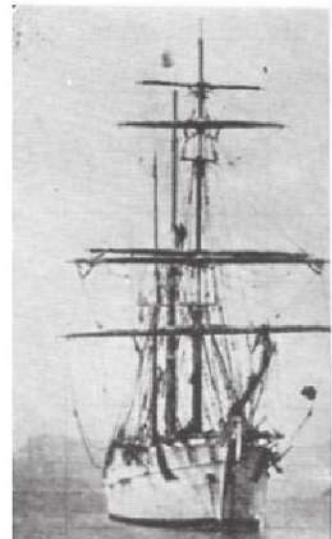


図 2-19 防長丸

3-3 昭和時代（初頭）の練習船

（文部省練習船初代「日本丸」・初代「海王丸」）

本校創立より今日まで、本校生徒が海上実習中に蒙った試練と犠牲はあまりにも大きく、訓練のためとはいえ余りにも苛酷であった。しかし、本校代々の校長の教育に対する熱意と、地元官民をはじめとして県当局の船員養成への理解は深く、この点では極めて恵まれた環境にあった。すなわち前述のように本校練習船として初代「海平丸」、2代「山口丸」、3代「防長丸」が登場し、多くの若人と帆船実習を重ねたのであるが、いずれも遭難、沈没という悲運の歴史を記した。

さすがに県も以後の練習船建造には一切応ぜず、やむなく実習は民間運航業者所有の横帆船に委ねられた。しかし、この帆船実習は実に苦難の行で幾多前途有為の青年がその貴い命を犠牲にした。

一方、他校でも練習船の事故が相次いで起こった。すなわち、栗島、鳥羽商船学校の「西別丸」及び「あまぎ丸」があり、殊に昭和2年（1927）3月9日、千葉県銚子沖合で暴風に遭い、教職員及び生徒53名が船と運命を共にし、空しく海底の藻屑と化した鹿児島県水産学校の練習船「霧島丸」（総トン数999トン、4檣「バーケンタイン」型、補助機関付帆船）の海難事故は、当時世人の耳目を驚かせた。

かねてから公立商船学校に大型練習船の必要を痛感していた全国公立商船学校十一会は、この「霧島丸」の遭難を契機として政府に練習船建造の必要を陳情するなど、積極的に運動を始め、関係方面有識者にもこれが認められるに至った。

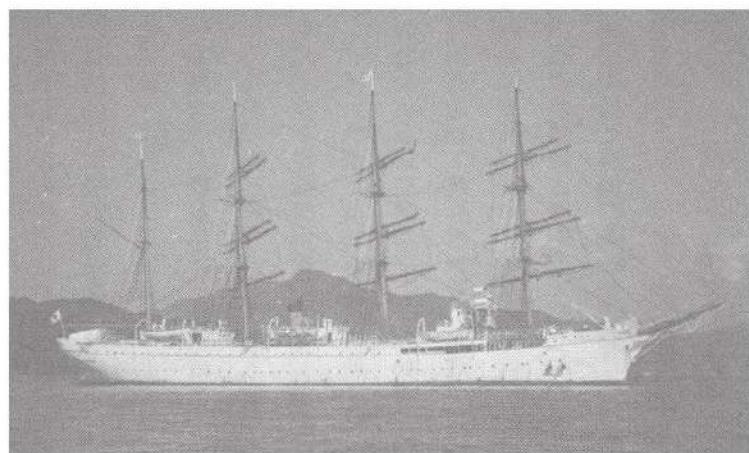


図 2-20 初代「日本丸」（旧・航海訓練所）

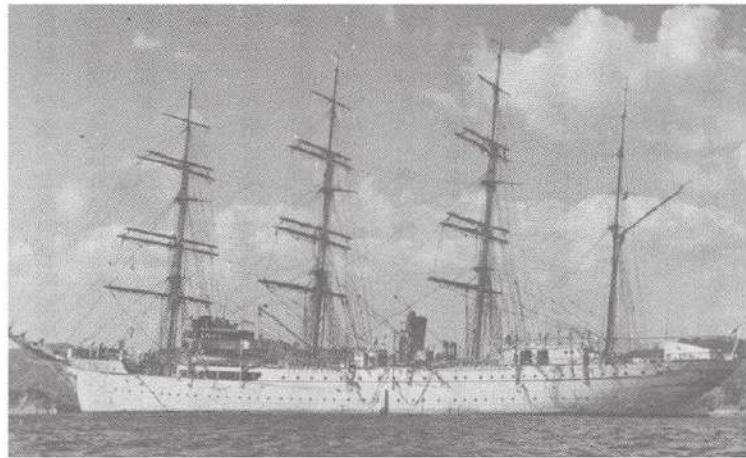


図 2-21 初代「海王丸」(旧・航海訓練所)

四圍の事情が以上の如くであったので、政府においてもこれを採択し、地方公立商船学校生徒の練習用として大型練習船 2 隻建造の計画を立てた。そしてこれに要する経費を昭和 3、4 年度 2か年の継続費として 187 万 4,600 円を計上し、第 55 回帝国議会においてその協賛を得た。

こうして昭和 5 年（1930）3 月 21 日に初代「日本丸」（総トン数 2,285.77 トン）が、同年 5 月 19 日に初代「海王丸」（総トン数 2,284.56 トン）が建造費 182 万円で竣工した。同年 5 月に勅令 182 号を以て、航海訓練所官制が定められた。そして同年 6 月、文部省告示第 166 号を以て地方商船学校 11 校の生徒の航海練習に供せられることに決定、昭和 5 年度より乗船させることになった。本校では、第 29 期生が両船の艦装のため実習を兼ねて派遣され、第 30 期生が処女航海の途についた。

4 機関実習の概要

4-1 海軍工廠実習

呉海兵團における海軍予備練習生の課程を修了して後、機関科は 6 か月から（後に予備練習生の期間延長に伴い 10 か月から）1 ケ年の海軍工廠の実習が課せられていた。（但し大正 7 年迄は本科を修了して直ちに海軍工廠実習であった）もっとも、事情によって先に汽船または工場実習を行う者もあった。

海軍工廠は、横須賀、呉、佐世保にあり、舞鶴に要港部工作部があつて、本校生は前記各工廠工作部に分散して配属されたが、後には瀬戸内海の各商船学校生とともに、もっぱら呉海軍工廠で実施した。

当時、呉工廠は呉軍港に面する呉市宮原通りの海岸沿いの一帯を占め、数十万坪の広大な敷地を擁していた。その組織は、海軍（技術）中将が工廠長で、配下に造船部、造機部、水雷部、電気部、砲頭部、制銅部および潜水艦部等があり、その後、実験部門が強化されていった。

工廠内における実習生の配属は造機部であった。初期には配属や監督者もまちまちであったが、漸次、制度も軌道に乗り、体制も整備されていった。

造機部に出勤した初日には、前庭で造機部長（海軍技術少将）の訓示があり、実習中の心構えについて論された。厳格な海兵團教育を修得した直後であったから実習生にもそれなりの余裕があった。

実習業務の概要是、ハンマー（大、中、小）、ヤスリ、スパナの取扱いなどの初步的単純作業に始まって、鉄接合及び溶接作業と旋盤工場における技術の習得、クランク軸など鍛造作業補助、鋳物工場、銅工場の作業補助、電気工場におけるコイル巻き作業、仕上げ工場・組立工場の作業補助等、学校の実習工場では想像もつかない広大な作業場で、多勢の実習生が一齊に大ハンマーを振りかざすハンマー操法、またすさまじいばかりの火花が飛び散る中での汗にまみれた鉄打ち作業などはまさに実習の圧巻であった。

道具類の取扱いや操作技術がひと通り修得されると、実習生は小人数に分けられて、機械の部品製作工場

と外業に廻された。

外業では、軍艦の艤装作業の補助がほとんどで、また日本有数の工廠内を広く見学もでき、多くの貴重な知識を得た。

工廠へ通うための本校の寄宿舎は、創立当時の記録は明確でないが、大正時代には、清水通り（後の八幡通り）の民家を借り寄宿舎としていたが、昭和6年（1931）頃から和庄通りの民家を寄宿舎とした。和庄通りの寄宿舎はなだらかな坂道にあり、木造2階建の本館と別館2棟の住み心地のよいものであった。この一部に、舎監を兼ねた工廠従業員一世帯が同居して、朝夕の食事、清掃などもろもろの管理業務をやってくれた。

4-2 造船工場実習

呉海軍工廠の課程を終了すれば、一旦帰校して報告の後、引続いて通信省の認定する工場での実習が課せられた。本校生徒の実習を委託された主要工場は次の通りである。（旧名）

神戸三菱造船所、神戸川崎造船所、相生・播磨造船所、因島造船所、長崎三菱造船所、下関三菱造船所、大阪・桜島大阪鉄工所、大阪・藤永田造船所等で期間は半年であった。

海軍予備練習生を修了し、しかも海軍工廠も修了している生徒の民間工場実習であるから、半社会人とみなされ、学校における指導とは趣を異にした。社内各工場での待遇は、各社で差はあるが、明治時代は工員、大正時代からは職員並みに扱われ、出勤、退出時間は、後には事務室のタイムレコーダーで記録された。

実習の内容は、旋盤作業とその取扱い、各種鉛接合及び溶接作業とその取扱い、および鍛造工作その他で、これらに習熟した後、外業で実地に艤装や入渠修理作業に従事した。

5 汽船実習の概要

航海科では帆船実習後に、機関科では工場実習の後で汽船実習が実施された。昭和初期まではさまざまな事情で、海兵团、帆船、工場及び汽船実習の順序が、相前後した場合も多かった。それというのも、実習生の年齢や希望した航路等に左右されるという発足当初の特殊な事情があったようである。第1期生及び2期生は、いわば本校における実習の草分けであり、第3期生から本格的に日本郵船をはじめ大阪商船、東洋汽船、辰馬汽船等遠洋航路を持つ各船会社、とはいっても当時未だ数少ない外航各社であり先輩もいないという心細い状況の中で、若い胸を不安と期待に踊らせながらの汽船実習であった。なお、日本郵船では明治28年より東京商船学校と大島商船学校に依頼し、生徒中より給費生を募集している。この制度は明治42年不況対策として人員削減が実施されるまでつづけられた。

汽船実習は本人の希望と会社側の条件を考慮してきめたが、生徒自身が例えば門司港に赴き「関忠」に頼んで希望の船に乗り込んだ者もかなりいたようであり、外国船に英語の勉強のために乗船した者も多かった。

乗船地は国内各港に及び、通船発着地でサンパンにとまどい、遠洋航路から帰国した沖がかりの船に、あるいは入渠中の船に「柳行李」をかついで乗船した。

船では実習生のことを「アップさん」という愛称で呼んだ。「アプレンチスオフィサー」もしくは「アプレンチスエンジニア」の略称である。

航海科のアップさんは3等運転士（現在の3等航海士）の見習いとして、船位測定とその関係業務、航海当直は1等運転士（現在の1等航海士）の副直であった。停泊中は乏しい英語でクリカラモモンの沖仲仕相手の荷役監督の補佐であり、「ホールド」内で「ダンビロマン」と作業監視である。会社によってはセーラーワークまでさせられたところもあった。

機関科のアップさんは、機関当直の副直を命ぜられ、主機、補機の運転操作はもちろんのこと、整備作業にも従事した。燃料を石炭に頼る時代のことである。全身を黒一色に染め、目だけ白く光らせてのボイラールーム内の作業はまさに地獄の様相を呈し、燃料が石油に転換されてからでも、汚れた身体を石油を満たしたドラム罐で洗い、もう一度入浴しなければ油がとれないまでの作業に熱中、部員は高温下の超重労働の

ため気絶状態になる者もいた。

汽船実習は、船というものを総合的な形で理解するために有効であった。船内で、停泊または荷役中どのように諸般の業務が進められているか、また、機関の整備はどのような手順でなされるか、それぞれの連繋方法はどのような仕組みになっているか、航海中の当直勤務、休養、食事などがどのような流れの中で消化されるのか、といった具体的な業務の姿と内容とが自然に把握されるわけである。

アップさんの居住は、個室かまたは2人用のものが提供された。食堂は「メスルーム」の末席ではあったが、士官待遇である。生徒時代の腕白小僧から海兵団のアルミニュームの盛り飯にハンモック、さらに帆船時代の素足にランプの耐乏生活から一転して「ボーイ」つき「フォーク」に「ナイフ」の洋食マナーが要求される高級船員に格上げされ、生活の急変に御機嫌な悲鳴をあげるのもこの時機である。業務の他に、上席者や部員との人間関係も会得され、士官にふさわしい「マナー」が必然的に身についていく頃であった。

船内事情がおぼろげにわかり、生活様式に慣れてくると、外地停泊中は荷役の合間に華やかなネオンに彩られているニューヨークなどの夜の街へ繰り出し、昼間は古都の史跡を散策して見聞を広げるのも実習中の収穫であった。

昭和12年（1937）を過ぎて、大陸に戦雲がたちこめ、船腹の需要が急増して船員不足の時代になると、短期間の「アップさん」勤務の後に、多くの外航船では1人当直の「アクチングサード」の任命を受け、「フォアヌーン」「ファーストナイト」のワッチに責任を持つ当直士官となった。責任は重大であるが、夢を追う「アップさん」にとっては望むところであった。近海航路の5、6千トン級の貨物船、特に航海科では「アクチングサード」として単独当直の船が多くた。みな20歳前後の青年である。このような状態は太平洋戦争まで続いた。当時の船長、機関長はどのような気持ちで「アップさん」に信頼をおいていたのであろうか。

本校創立当初から明治の末期にかけて、西洋から百年遅れているといわれたわが国海運界で、開拓精神を発揮した先輩諸氏、第1次世界大戦の好況からの反動として急転直下奈落の谷に落ち込みながらも見事に立ち直った大正の年代、そして不況から脱却しながらやがて優秀新鋭の日本商船隊の登場で活躍した第2次世界大戦勃発までの昭和時代、この歴史の目まぐるしい変遷の中で、燃料革命や技術革新が織りなす幾多の断層と曲折を踏み越えて、世界有数の海運国に成長する過程での汽船実習、県立時代のこの汽船実習こそ将来商船士官として縦横に手腕を発揮しうる有能な士官生徒の濫觴であったといつても過言ではあるまい。

6 軍事教育のはじまり

6-1 学内教育

第1期生及び実習生が海上に送られるのと相前後して、明治37年に日露戦争が起こったので、卒業生は好むと好まざるとにかかわらず陸海軍の御用船に乗組み、兵器兵員輸送の一翼を担って活躍することとなつた。

明治36年3月10日、「海軍予備員条令」が公布され、これによって本校生徒には非常時における軍の予備員的役割が義務づけられることとなった。創設当時の本校における軍事教育の詳細は定かでないが、創立以来の寄宿舎の生活様式が兵学校様式といわれていたこと及び初代校長が海軍予備大尉であったこと、あるいはまた明治39年には起床、点検、食事などの通報が、打鐘からラッパに変更されたことや、明治42年「山口丸」入港には小銃の一斉発泡で迎えた例、海軍のハンモックを利用していた点などから判断すれば、既に軍事に類する学内教育が行われていたものと推察される。

大正6年（1919）の「県立大島商船学校規則」によれば、海軍兵式体操・海軍銃隊様式・海軍諸例規大要が正式に取り入れられており、大正7年には、校長として海軍中佐守永喜三郎が任せられ、本校の軍事教育は一段と強化されるに至つたのである。

大正8年3月12日、海軍省令第5号「海軍予備練習生規則」が制定されて、本校第20期生が初めて第1期海軍予備練習生として呉海兵団に入団し、海軍軍人としての正規の教育と訓練を受けることになったので、

爾來海軍に対する認識と関心はさらに深められ、校内でも厳格な軍隊式規律が要求されるようになってきた。

そのため、初冬になると、恒例の行事として屋代平野、三蒲、あるいは海を渡って神代周辺での野外演習が実施されるようになった。行軍の先頭いつも守衛（当時）と生徒ラッパ手であった。帰路、疲れ果てた足を引き摺りながらでも、行進ラッパが鳴り響くと自然に歩調が揃い隊伍が整つたものである。

昭和に入ると、ほとんど毎年のように呉鎮守府司令長官及びその一行が来校し、校内査閲が実施された。したがってその直前には、手旗信号及び銃隊訓練で連日徹底的に鍛えられた。教練後の武器弾薬の整備、点検も厳しかった。古くは日露戦争時の捕獲小銃を使用したが、後には菊の御紋章入りの三八式小銃が払い下げられ、紋章入りの小銃の場合は殊の外取扱いが厳しく、あくまで慎重、丁寧でなければならなかつた。銃器庫への格納保存等も厳しくチェックされた。

昭和10年（1935）、「海軍現役武官商船学校等配属令」が公布されてからは、それまでの教練指導の特務少尉の他に、海軍少佐が着任した。日中戦争（1937）の直前である。この少佐の指導によって初めて、近代的、本格的な軍事教練が実施されるようになった。程なく昭和12年に日中戦争が勃発し、軍事教練も日増しに厳しさと真剣味を増していった。

6-2 海軍予備練習生

大正8年（1933）6月2日、海軍予備員令（勅令267号）の公布に続いて大正8年3月11日、勅令26号、海軍予備練習生のに関する法令が公布された。「海軍予備員タルニ必要ナル教育ヲ施ス為メ、海軍予備練習生ヲ置ク」というものである。さらに翌3月12日には、海軍省令第5号「海軍予備練習生規則」が公布されたので、本校本科修了生はこれにもとづいて海兵团で軍事教練を受けることになった。そこで、大正8年4月、第20期生が第1期海軍予備練習生として、児島、栗島、弓削、広島の各商船学校本科修了生約100名とともに呉海兵团に入団した。期間は3ヶ月である。もっとも、健康上の理由で入団しなかつた者もあり、19才に満たない者は、航海科では帆船実習を先に済ませてから入団する者もあった。

団内教育は海事教育局編纂の兵器術、水雷術教科書などを用いた座学を始めとして、新兵同様の訓練が課せられたが、海兵团に籍を置いたままで、艦船実習のために戦艦、巡洋艦、潜水母艦及び練習艦等に乗船して、短期間ではあるが実地演習を見学するなどの艦船勤務を体験させられた。

昭和9年（1934）、第34期生（予備練16期生）から3ヶ月の海兵团のほかにされに3ヶ月の軍艦勤務が課せられて、期間は半年に延長された。すなわち第16期予備練習生は3ヶ月の海兵团勤務に続いて3ヶ月艦戦艦「伊勢」に乗船、17期予備練習生は潜水母艦「大鯨」と練習艦「朝日」に、18期は潜水母艦「長鯨」に19期生は潜水母艦「長鯨」と戦艦「伊勢」に、20期生は戦艦「扶桑」、重巡「最上」及び「加古」に、そして21期生は潜水母艦「迅鯨」に乗船した。

このように、第21期海軍予備練習生すなわち本校第39期生までは、半年間の艦船勤務が課せられたのであるが、その後戦雲急を告げ、海軍艦船の活躍が活発となって軍艦に余裕がなくなったために、艦船勤務が打ち切られ、第40期生から横須賀海兵团に全国商船学校本科修了生を集めて訓練することになった。

第3節 動乱期の県立大島商船学校

1 商船学校整理問題

日清、日露、第1次世界大戦を契機として、航権伸張と海運増強の必要性が叫ばれ、明治28年（1895）、閉鎖中の鳥羽商船学校が東海商船学校として再興されたのを皮切りに、大正10年の島根県立島根商船水産学校（隠岐商船学校）の創立に至るまで、20年間に11の地方商船学校が新設される勢いを示した。しかし、大正7年、第1次世界大戦終結とともに、隆盛を極めた海運は不振の様相を呈しあじめ、昭和に入っていよいよ苦境に陥り、係船は続出して37万余トンに達し（昭和10年）、船員の失業者は増える一方であった。こうして、本校にも苦難と動乱の時代がやってきたのである。

1-1 政府の動き

昭和5年（1930）年、金輸出が解除され、貿易不振と為替相場の上昇は海運界に甚大な打撃を与え、運賃は急落して係船が続出し、減配、無配が相次ぎ、船員の失業はその極に達した。ここにおいて、文部省は遂に商船学校の整理を企画するに至り、昭和7年7月11日、次のことを決定した。（以下、当時の新聞記事による）

高等及び普通商船学校を半減するため下記の手段を取ること。

(イ) 東京、神戸両高等商船学校（現在の東京海洋大学海洋工学部、神戸大学海事科学部）の入学者を来年度から半減すること。

(ロ) 公立商船学校（当時の地方商船学校）の入学者を減少する方法を考慮するが、現在11校のうち島根の1校は、募集を中止して事実上廃止の手続きをとっているから、残余の10校のうち5校を廃止すること。但し廃止については地勢、歴史、学校の成績を考慮すること。また、地方長官会議に出席する関係県の知事と相談すること。

政府の方針は入学者の抑制のみならず、思い切った廃校まで示した厳しいものであった。なかでも本校を含めた公立商船学校は半減するというもので、深刻な事態を迎えたのである。各校は生き残りをかけて地元や県の協力のもとに、必死の存続運動に取り組んだのである。

1-2 山口県議会の動向（某県会議員談話）

(イ) 県立大島商船学校が廃校にならないように努力したい。

(ロ) 大島商船、久賀高女、安下庄中学の3校が県立である。いずれも弱々しいもので廃校説もある。しかし、積極的によい方法はない。防御的地位に立って、現状維持に努めてみる外に仕方がないでしょう。特に大島商船は伝統的に困ったものである。

(ハ) 山口県費で、他県の人を多数教育する。

(ニ) 卒業生の大多数は県内の仕事はしない。

(ホ) 特殊学校だけに金が沢山かかる。

(ヘ) 地元の助力は至って薄い。

(ト) 県下各地に起こっている中学校の県立要望が先決。

(チ) 本県には、国立の高商（現在の山口大学経済学部）がありながら、県立の商業学校がない。

(リ) 水産県でも県立の水産学校がない。

(ヌ) 各県とも商船学校には疲れ切って、廃校するところも出始めた。本県もその方が賢明であろう。教育の合理化と県の財政という立場から、弱い学校や必要を切実に感じない学校は整理し、強い優れた学校や必要を切実に感ずる学校に変えるのがよい。

これらの談話では本音といえるところがある。すなわち商船学校に支出する県費が多大で相当な負担になっていること。切実に必要を感じないこと等、場合によっては整理・廃校もやむを得ないと言っているのである。

1-3 小松町の動き

諸般の情勢が本校にとって憂慮すべき事態であると察知した小松町は、昭和7年（1932）7月3日、町民大会を開催し、次のような宣言文を決議して関係当局に強く要望したのである。

宣言

要旨 我が大島商船学校は、35年の古き歴史を有し、その卒業生は我国海運界に有力なる地位を保ち、その成績の良好なること他に比して一頭地を抜くものあるを以て、商船学校の整理される場合においても同校は必ず存置さるべきものなることを信ずるも、而も之が存廃はかかるて本町の盛衰に関する事となれば、今日徒らに座して成行（なりゆき）を見るべきに非ず、悉（つく）すべき善後の方法を講じ、万難を

排して庶幾の目的を貫徹せんとす。

小松町民大会

決議

一、小松町民は県立大島商船学校の存置を期す。

右決議す。

本校の生みの親、育ての親ともいえる地元小松町は全力をあげて、存置運動に取り組んだのである。当然のこととはいえ地元の熱心な存置運動の果たした役割は大なるものがある。

当時の蛭子校長は、政府の意向を打診すると直ちに、7月12日、県庁の学務部長を訪問し、存置理由を詳細に述べたが、同部長の言によると、県側の意向は次のようにあった。

「本県においては廃止の意向は毛頭ない。従って文部省が廃止を強いることはなかろうと思う。知事ともよく相談して上京の際、十分県の態度を明白にしたい。卒業生が多くて、就職上困るというなら、取るべき処置は外にあるのだ。創立以来35年、千名の卒業生を出している全国にも稀な商船学校として、社会的にも非常な貢献をしているのだ。」（当時の新聞記事による）

1-4 十一会の動き

十一会（全国商船学校十一会・現全日本船舶職員協議会）の商船学校整理問題に果たした役割も大きかつたのである。

十一会主事東村大三郎（航海科13期卒）は、船員対策上の商船教育改革案を樹立し、世論に訴えた。すなわち十一会創刊号によれば、

- (一) 公立商船学校整理統合は地方事情によって不可能
- (二) 公立商船学校の使命
- (三) 商船教育の根本方針確立要望
- (四) 吾人の商船学校統制案

そしてその統制案として

- (イ) 二つの官立高等商船学校の内一つを組織変更して、海技研究所に改めること。
- (ロ) 海技研究所は、公立商船学校卒業生及びこれらと同等以上の資格を有する者を収容すること。
- (ハ) 海技研究所の修業年限は入学資格により1年ないし2年とする。而（しこう）してその学費は国庫より支給すること。

- (ニ) 海技研究所の卒業生に対しては、船舶職員法第5条第2項の特典を付与すること。

上記の考えのもとに十一会は積極的、具体的な行動を起こしたのである。10月1日より県会議員、関係各県選出代議士及び政府関係要路者の了解と賛成を求めるため、あらゆる方法を以て目的貫徹に努力した。その結果、県議会は、建議案としてこれを採択し、政府もまた大いに共鳴するところがあった。こうして地方商船学校は、函館、富山、鳥羽、隱岐、児島、広島、大島、粟島、弓削、佐賀、鹿児島の十一会公立地方商船学校のうち、昭和8年（1933）に佐賀、隱岐、昭和10年に函館が相次いで廃校の憂目を見るに至り、ここにおいて、わが国の商船教育機関は、東京、神戸の2高等商船学校（文部省）と本校など8商船学校（県立）に整理されたのである。

2 十一会の結成

大正末期から昭和初期にかけて吹き荒れた海運不況の嵐の中にあって卒業生は深刻な就職難に直面し、加えて練習船を失った本校などでは実習する船にも事欠き、苦難に苦難が重なった。

練習船の遭難事故は、本校の「防長丸」ばかりでなく、粟島の「西別丸」、鳥羽の「あまぎ丸」、そして鹿児島の「霧島丸」と続発した。中でも「霧島丸」の遭難は、昭和2年3月9日、大暴風雨に遭って消息を絶

ち、船長以下教職員生徒53名中1名の生存者もなく、ために世論は沸騰した。

この「霧島丸」遭難を契機として、政府に対し、練習船建造の議が関係各方面有識者間より盛んに建議され、政府においてもこれを採択して、地方商船学校のための大型練習船2隻の建造計画を樹てるに至った。昭和2年の山口県会史には、「文部省は、式千噸帆船2隻を建造して、地方商船に使用せしめる事が決定した。」との記録が残されている。

このようにして、昭和5年3月に「日本丸」が、次いで同年5月には「海王丸」が竣工し、それと同時に航海練習所官制が交付されて両船は文部省航海練習所に所属し、昭和5年4月から当時11の商船学校航海科生徒の練習船として発足、その後幾多の変遷を経て現在に至っている。因みに本校では航海科30期生がはじめて「日本丸」・「海王丸」に分かれて乗船したのである。

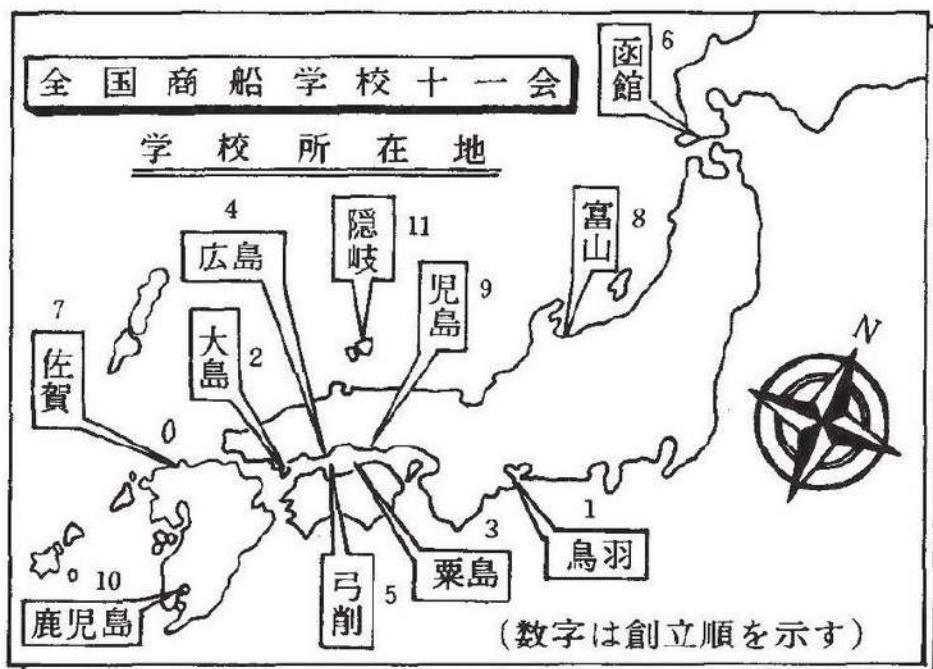


図2-22 全国商船学校十一会

こうして、大型練習船建造の猛運動とその成功は、地方商船学校関係者の間に大同団結の気運を生み、遂に昭和5年、「全国商船学校十一会」が結成されるに至ったのである。

練習船の問題はひとまず解決したが、海運界や海事行政の分野にはまだまだ解決すべき幾多の問題があった。例えば、船舶職員の60パーセントは地方商船学校出身者で占められているにもかかわらず、海技試験の不公平や各種の差別待遇等のため、卒業生はその昇進の道がはばまれ、ことごとに不利な立場におかれている現状を改善すべしとの意見が関係者間で早くから議論されており、当初は各校同窓会がバラバラに運動していたが、練習船建造を契機に団結して対処すべきことの必要性を痛感するに至ったのが、十一会結成の動きであった。会の正式名称は後日決めるということで、とりあえず学校数で命名したのが、この風変わりな「十一会」の名の始まりである。

3 本科4年制

第一次世界大戦の勃発によって飛躍的な発展を遂げ、急速に膨張したわが国の海運界は、大正7年（1918）、大戦が収束するとにわかに反動の様相を呈し、船腹の過剰と世界的海運市況の冷え込みは、海運各社に経営の整理縮小と転換を厳しく迫るに至った。関東大震災（大正12年）とその復興は海運界に思わざる好況をもたらしあしたけれど、あくまで一時的な刺激に過ぎなかった。

このような海運界の現状に対応して、各商船学校では大正13年（1924）4月1日から校則を改正して、修業年限を1年間延期して4年とし、教育内容の整備充実を図る等の措置が講ぜられた。これは、わが国商船教育の量から質への転換を示したものであった。

その結果、昭和2年（1927）4月から本科の航海科・機関科4年生ができたことは、新たに2教室が必要になってくることで、右手では廃校問題と戦いながら左手では校舎の増築をしなければならない本校は、皮肉にも廃校問題と校舎増築の二つの難題を同時に抱え込む羽目になってしまったのである。

こうして、昭和5年も暮近く、ようやくにして航・機4年生の2教室増築が実現、さらには念願の講堂も昭和6年7月10日に落成し、10月1日の創立記念日を期して落成式と祝賀の宴が催されたのである。

第3編 官立大島商船学校

昭和15年（1940）～昭和26年（1951）

第1章 官立大島商船学校（文部省所管時代）

第1節 文部省への移管とその背景

昭和14年（1939）4月、日中戦争の戦火は拡大するばかりであったが、国営移管運動がようやく実を結び、大島、鹿児島、鳥羽、および富山の4校の文部省移管が決定した。この4校は従来どおり商船学校として存続させるが、その他の商船学校は海員養成所に格下げという実質的には廃校に等しい厳しいものであった。

すなわち、「広島」、「栗島」、「弓削」の格下げはまず交通の便が悪いという点にあった。さらに瀬戸内では地域的に見て、「大島」の1校を残せば事足りると推断されたからにはかならない。

こうして、「広島」を中心とする商船学校存続運動がおこり、運動は日を追って激しさを加えていったが、「栗島」は大勢の赴くところをすでに察知したのか、次第に消極的となり、ついにこの運動から脱落するに至った。なお、上記の3校は昭和15年4月、運動が成功し晴れて文部省移管ならびに商船学校としての存続が決定した。

昭和14年8月14日、蛭子校長が退任して現役の海軍大佐佐藤敬三が校長に任せられるとともに同月18日付けをもって、山口県立大島商船学校は廃校となり、翌19日、文部省直轄学校官制の一部改正（勅令586号）によって大島商船学校がこれにくわえられた。

1-1 文部省移管の背景

地方商船学校の所管問題については、海運が国家的産業であり、その海運に従事する船舶職員の養成機関として重要な地位を占める地方商船学校の経営は、本来地方財政にゆだねられるべきでないというのが当時の関係者の声であった。

その背後には常に商船学校廃止問題があった。この頃まで、商船学校が存在していた県では、県財政が苦しくなると例外なく学校廃止問題をひき起こし、昭和8年から11年にかけて相次いでその姿を消していく。岡山県立「児島商船学校」、島根県立「隱岐商船学校」、佐賀県立「佐賀商船学校」そして北海道庁立「函館商船学校」等は、当時海運不況という背景があったにしても、いずれもこのような県の財政難による犠牲といえるであろう。商船学校廃止問題には、このほか、商船学校はもともと全国的なものであって、県がその卒業生から受ける直接の恩恵は比較的少なく、しかも県内の子弟が通う学校すら十分でないにもかかわらず、他府県からの入学者の多い商船学校の経営に大きな犠牲を強いられるいわれはまったくないなどと、ことごとく厄介視されていたのが実状であった。したがって、学校関係者や卒業生有志は機会があるごとに国の直営とすべきことを力説し、要望してきたが、種々の障害に妨げられその実現は容易なことではなかった。

しかしながら、日中戦争がおきる数年前から大東亜建設の旗印のもとに大陸発展の国策は、軍備の拡張と

とともに着々と進展し、地方商船学校生徒に対しても海軍予備練習生として座学修了後海兵团における3ヶ月の軍事訓練が課せられ、卒業と同時に海軍予備役の兵籍に編入され一朝有事の際の人的資源として温存されていたのである。

こうして昭和12年（1931）に日中戦争がおきると、政府は積極的な海運政策をとるとともに、重要な人的資源をなす地方商船学校教育の整備拡充の必要性を痛感し、国策に沿って昭和13年、通常議会に国営移管の議を上程、一鎮守府、一商船学校の原則にもとづき、県立商船学校4校（大島・鳥羽・富山・鹿児島）の国営移管が満場一致で可決し翌昭和14年（1939）度から文部省の直轄学校として新発足することになったのである。これを受け山口県は敷地の拡張、校舎の増改築、教材整備の充実を計った上、国に移管すべく、昭和13年4月の臨時県会に大島商船学校国営に伴う増改築を提出し、次のことを可決した。

一、大島郡小松町に国立商船学校設置については、同校の敷地、校舎、其の他の設備を国に寄附するものとする。

二、土地面積約六千二百五十坪は大島郡小松町長谷田部宗太郎より大島商船学校国営移管に伴う拡張敷地として寄附願出に付無償受くるものとす。（原文のまま）

一方、地元小松町においては、

- (1)現存の位置は町の西端波止場の直前にあって、人馬交通の要衝に当たり、且つ土地も狭隘で、四隅を拡充しなければ所要の面積を調達することはできない。
- (2)現在の建物を改築するには長日時を必要とするのみか、教育上にも多大の支障がある。
- (3)故に学校百年の大計のためにも附近に将来性を多分に有する適当な土地（現寄宿舎地域）に移転することを可とする計画を立て、その実現を計った。

しかし、巨額な出費を伴うこの事業は、町当局にとって決して生やさしいことではなかった。このとき蛭子校長は自ら小松町長谷田部宗太郎に折衝して「大島商船学校建築助成会」を組織し、その会長を負うとともに副会長に谷田部宗太郎、理事に岡村佐八、坂井竹吉、川村秀雄、西野政志、磯中常一等の就任を得て、海運各社を歴訪、その贊助を求めるなど挺身資金募集に奔走した。

このようにして集めた浄財が遂に21万9千円の巨額に達するに至って、事業もようやく軌道に乗り、小松が浜にそびえ立つ新校舎が相次いで落成し、初期の目的を達することができたのである。

その後、当初は国立移管の選に漏れた広島・栗島・弓削の商船学校も、「十一会」を中心に、猛烈な存続運動がなされ、その結果、昭和15年（1940）4月に3校とも晴れて文部省移管並びに商船学校としての存続が決定した。

第2節 教育内容等

2-1 教育方針と教育内容

文部省直轄学校となった本校の教育方針は要約、次のとおりであった。

すなわち、今回政府が4つの公立商船学校を文部省直轄として高等海員養成に乗り出したのは、戦時体制下における海運の重大性と一朝事ある時は、海軍予備員として国防の第一線に立つことの緊要性に鑑みたためであって、よく此の国家の期待にそう如く一意精励、使命達成に邁進すべきである。使命達成のためには、すべからく日本精神を体認具現することである。生徒が其の中心に日本精神を把握し、當時の行動にこれを顕現する時、海軍予備員としてはたまたま高等海員として、その責務が全うされるのである。そのためには平素からよく頑張りの利く身体と精神を養成し、男としての度胸を作つておくことである。

しかして、教育は校長、教官、生徒の三者が渾然一体となり水ももらさない緊密裡に、熱と力をもつて火の出るような努力を続けて行くことにより、最大の成果を挙げることができる。そのためには、教官と生徒の間は常に親心、子心の関係でいかねばならない。教授に於いても、訓育に於いても、単に小手先の利く人物や皮相的的人物を作るのでなく、本当に國家の役に立つ底力のある人物を作るのである。

このような、本校教育の理念は次のようにして着々と実行に移されていった。

(1) 従来の画一教育を打破し、生徒の学力程度に応じ各人が進んで自発的に研究勉強する心を旺盛ならしめ、自ら理解し、自ら語り、自ら解決する力を引き起こすこと。機械的記憶にとどまらず、自己の苦心の結果会得した記憶によりさらに次の研究の基礎たるべきこと。

注入より開発、説明より問答、直接指導より誘導、観察識別、類推、総合の力を養うこと。授けたる知識の総量の多きことを尊ぶよりも、知らざることを知らんとする努力を尊重すること。

(2) 訓育は教授と密接不離なもので、互いに相助けて以て一丸となるべきものであつて之を別個にすべきものではない。故に教官たるものはその何人たるを問わず、教授、訓育ともに之に従事すべく、本校に於いては之を専任的に分けることをしない。二、三要務のある者を除き、教官全員生徒寮当直をするのはその例といえる。そして、生徒の生活からいえば其の全部が訓育の機会であり、ある特定の日時を設けてするのみで事足りとせず、随所隨時之を行うのである。

体育は、競技偏重選手偏重に陥らず、生徒全員が全身体の健康発育を合理的に増進し、将来海員として、皆落伍者なく的確に勤務し得るに至るよう、運動競技以上に体操を奨励実施する。技術練習に於いては、教官はなるべく間接的指導の立場に立ち、生徒に体験させることを主眼とし、教官自らこれを行い、生徒に見学傍観させるようなことは努めてこれを避けること。

以上のほか、本校に於いては教育目的達成上有効適切な方法は極力之を実行し、いたずらに世間の因襲や評判に捉われて、なすべきことを躊躇することのないよう、まっしぐらに所信を断行しつつ任務達成に向かって勇往邁進しなければならない。

ということを、校長をはじめ職員、生徒一同すべて実践躬行したのである。

2-2 校長・職員および生徒

本校が、文部省直轄学校として発足すると、その教育指導は次のような方針で実施されていった。

- (1) 職員、生徒すべては生活を共にして親子の情をもって相接し、渾然融和、教育の徹底を期すること。
- (2) 同級生、同室生活をなし、同級生間の結束を計ること。
- (3) 水泳、体操、外気日光浴、薄着の奨励等により強健な身体の養成に努めること。
- (4) 特定の舍監制度を廃し、教官総員訓育にあたり、輪番生徒が寮当直をすること。
- (5) 玄米食を開始、栄養不足のないようにすること。

なお、教職員の組織は教官20名、事務職員14名で、その組織は充実合理化され、一致協力邁進の意気旺盛なるものがあった。

生徒は、全員13分隊に編成し、各分隊は各学年生徒をもって編成され、生徒寮生活を通じて自治の精神を涵養した。



図3-1 外出点検



図 3-2 夜の自習時間

また、次のようなことを校長、教員、生徒が打って一丸となって推進することに努めた。

- (1) 教授様式を改革して、自学自習を強調すること。
- (2) 「デンマーク」体操および西式健康法を採用して、体位の向上を計ること。
- (3) 野外演習、登山、防空訓練を行うなど、訓練を強化すること。
- (4) 乗船実習をして学習の実際化を図ること。
- (5) 音楽教育を実施して情操陶冶を図ること。
- (6) 一日二食主義を実行して体位向上を図るとともに忍耐の修練をすること。
- (7) 毎月身体検査を施行し、体位の測定をすること。等。

こうして、上級生は緊張、自覚、率先、躬行、範を下級生に垂れ、教官と生徒との融合和親と健康状態の改善もまた大いに見るべきものがあった。



図 3-3 就寝前の体操



図 3-4 夜の自習時間

第2章 官立大島商船学校（通信省所管時代）

第1節 通信省への移管

官立移管以後、文部省の管轄下にあった本校など7商船学校は、昭和17年（1942）1月1日、勅令1147号によって通信省所管となった。

それは太平洋戦争開戦と同時に、戦時海運管理令にもとづく船舶の強力な国家管理や海上要員の整備、教育等の海事行政が一元的に行われることとなり、文部省所管の高等商船学校2校と商船学校7校（大島、鳥羽、広島、弓削、富山、鹿児島ならびに香川県立の栗島）を戦時下のみという条件で通信省に移管し、戦時の商船教育行政は一貫して通信省海務員（後の海運総局）がつかさどることになったためである。

第2節 教育内容等

1 新校長の着任と自由主義的教育の一掃

昭和17年6月25日、佐藤敬三校長が退任し、代わって海軍大佐中島新太郎が校長に任せられた。これより先、昭和14年9月、第2次世界大戦勃発、次いで昭和16年12月8日、米、英に宣戦布告して太平洋戦争に突入するとともに、わが国の戦時熱は急速に高まって举国一致、滅私奉公の軍国一色に塗替えられた。商船士官養成を目的とした商船学校は、いち早く海軍予備練習生の養成機関となり、軍事教育が遅かに強化されていった。

すなわち、佐藤前校長の自由主義的教育方針は一掃され、西式の玄米食等の健康法は直ちに廃止、体育も食料増産の名目で勤労体育に転換されていった。

しかし、教育施設の整備拡充は幾多の困難があったけれども新校舎の建築、運動場の整備等逐次具体化されていった。

2 軍事教育の強化

商船学校では昭和11年11月、「海軍現役武官商船学校等配属令」にともなう海軍武官の配属が実施されていたが、昭和17年には下士官も配属されるようになって教練その他の軍事教育が一層強化されるようになった。

一方、戦線の拡大と船腹の増強、船員の確保に迫られた政府は昭和17年7月16日、商船学校卒業者に対する認定条件を緩和し、次のように改正した。

- 1 航海科にありては、二千屯以上の航洋帆船に約6月、五百屯以上の航洋汽船に約3月、通計9月以上の履歴を有する者、尚右練習中二千屯以上の大航洋帆船に6月の実習をしない者で、卒業証書受有後遠洋区域又は近海区域の千トン以上の船舶に1年以上運転士として執職した者は、学術試験を行わず甲二運免状を授与す。
- 2 機関科にありては、六百馬力以上の航洋汽船又は航洋発動機船に約3月以上、認定工場に約6月以上、通計9月以上の履歴を有する者に対しては、学術試験を行わずして二機免状を授与す。尚、右により、一機試験又は発一機試験中筆記試験は省略す。

この改定は9月3日、船舶職員試験規程特例によってさらに改正され、甲一試験中の筆記試験が免除されることになった。

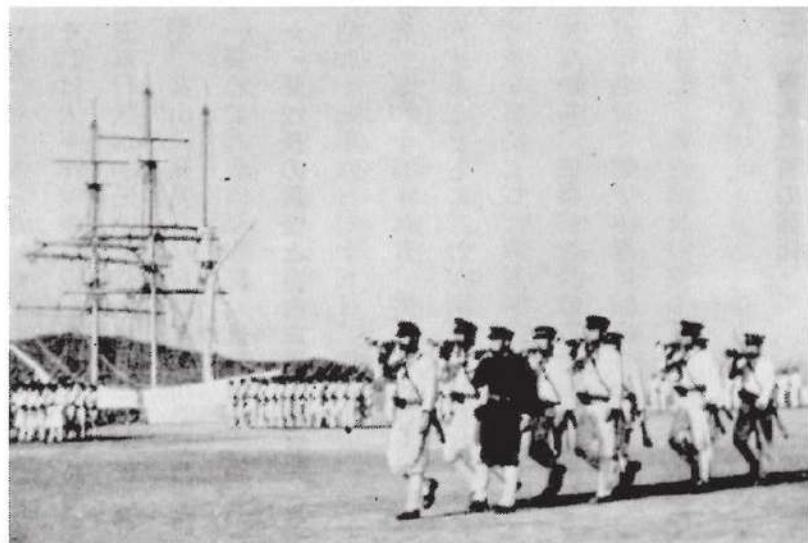


図 3-5 校庭における軍事教練（後方は陸上帆船と笠佐島）

3 新校舎の落成

官立移管と同時に、新校舎建築が決定され、氷坂方面の土砂をもって埋立て工事が完了し、校舎建築に着手していたが、資材関係などのために工事は遅々として進まなかった。

そこで、中島校長をはじめ有志一同は銳意県との折衝を重ね、特に5万8千円の県臨時予算を得て、その竣工を急いでいたところ、昭和17年8月27日、当地を襲った台風と2mに及ぶ高潮のために、建築中の校舎（本館、寄宿舎1棟）は倒壊し、汽艇（1隻沈没し廃船となる）などに相当な被害を蒙った。

しかしながら、関係者の熱意と必死の努力に加えて、内外の協力と援助により、明けて昭和18年、待望久しかった新校舎が完工、4月1日に落成式が挙行され、新校舎に移転した。

新校舎の概況は次の通りである。

本館94坪延べ190坪、教室（普通教室14室294坪、特別教室3室93坪）、雨天体操場80坪、技業室20坪、機関工場252坪、寄宿舎（舎室32室512坪、宿直室20坪、病室20坪、食堂及び賄所82坪、浴場17坪、洗面所12.5坪）、運動場5,500坪。

大島商船学校平面図

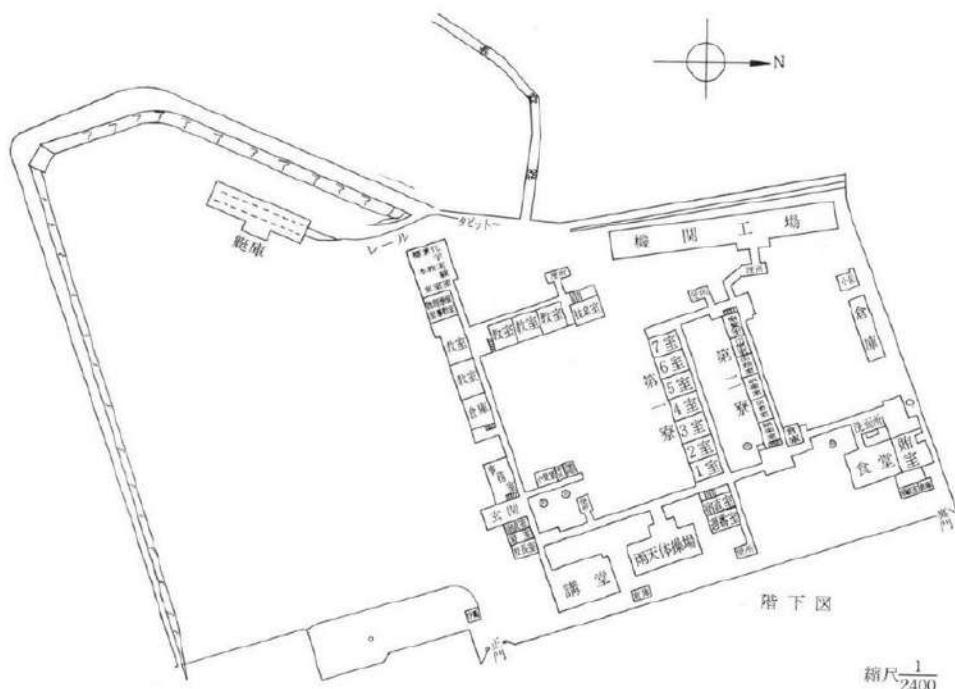


図3-6 大島商船学校平面図（階下図）

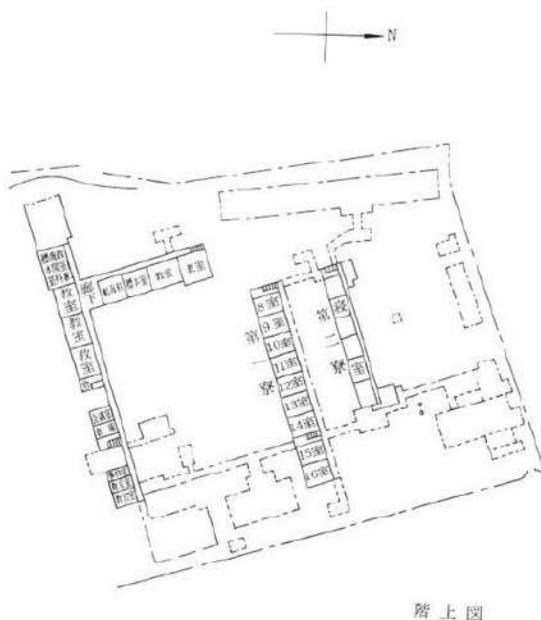


図3-7 大島商船学校（階上図）

4 同窓会の再発足

学校と卒業生をつなぐ古い歴史をもつ校友会は昭和14年8月廃止され、これにかわる学友会が在籍生徒ならびに職員参加の機関として生まれたが、これも廃止され、昭和16年11月1日、在校生徒・職員をもって一団とする報国団が結成されるに至った。

このため、学校と卒業生相互間の連絡その他が次第に疎遠となっていたので、中島校長着任を機会に同窓会設立の声が起こり、校長をはじめ有馬亘、松田治助、松岡知一、蓮池兼十、松田久治、小林新一の校内同

窓ならびに当方同窓、星出忠人、国行惣助、川村秀雄、さらには遠く阪神より西野正志、磯中常一、東村大三郎、また関門北九州方面からは松本香、藤谷弘人、木下保直、梶田俊助、市山登の同窓有志代表によつて昭和17年7月16日、校内に設立委員会が発足し、和やかにまた熱心に設立に関する協議が進められ、全員一致でその原案に賛同し大綱を定めた。

さらに、7月25・26日、神戸に於いて、学校側松岡知一、松田治助の両代表と、阪神地方ならびに下関における関門北九州地方の有志による両協議会において、前会一致の賛意を得、また8月23日、松岡汽船専務福屋武一が来校、9月7日に中島校長が上神して、阪神地方関係各位との懇談に入り、同窓会則を定めて、創立45年の古き歴史に育てられた卒業生と在校生を打って一丸とする強力な機関を設立することになった。

第3章 官立大島商船学校（運輸通信省所管時代）

昭和18年（1943）11月1日、勅令856号によって管制が改正されたために、本校は運輸通信省所管となり、同年12月27日、海員教1979号によって、商船学校卒業生に対する認定条件はさらに緩和され、次のように改正された。

- 1、航海科にあっては、500トン以上の航洋船舶に6月以上の実習履歴を有する者に対しては、学術試験を行なわずして甲二航免状を授与する。
- 2、機関科にあっては、700馬力以上の航洋船舶又は認定工場に6月以上若しくは両者通計6月以上の履歴を有する者に対しては、二機免状受有後、規定の受験履歴を得たときは、履歴により一機試験又は発一機試験を省略する。

この年、アツツ島守備隊全滅、ソロモン諸島のガダルカナル島敗退の悲報が相次ぎ、敗戦の気配はいよいよ濃厚となり、戦争によって喪われる徵用船舶もまた加速度的に増加していった。本校が勅令第304号による管制の改正に伴つて運輸省所管となつたのは、終戦直前の昭和20年（1945）5月18日であった。

第4章 官立大島商船学校（運輸省所管時代）

第1節 第2次世界大戦と商船学校

太平洋戦争もすでに末期的様相を呈し始めた昭和19年になると、食料は極度に不足した。主食が配給制になってからも、商船学校は規定の配給量に加えて1日5合になるよう海軍から押麦が補給されていたが、戦局がいよいよ不利になるにつれて、主食の増配など思いもよらない状態となつた。

当時の商船学校は、各校とも全寮制であったから、生徒に三度の食事をさせるための食料の確保や衣料問題は、筆舌に尽くせないほど困難な仕事であった。

特に食うことは待ったがないことだけに、食べ盛りの多くの生徒を抱えた校長はじめ教職員にとって、教育とはまず食わせることから始めなければならなかつたと言えるであろう。しかしながら幸か不幸か、本校は現役の海軍大佐が校長であったがために、食料や衣料については終戦までまったく苦勞がなかつたのである。食料は1日6合たっぷりとあり、衣料は正服や通常服などすべて海軍から支給され、終戦時にはかなりのストックがあつたようである。



図3-8 屋代川畔での軍事教練

戦時下における商船学校は、もはや商船士官というよりは海軍予備員の養成が主たる目的となり、教室の授業と軍事教練および防空壕造りと退避訓練に明け暮れする毎日であった。

商船学校の規程も本年度に限るとしながらも、入学資格年齢13歳以上、国民学校高等科1年修了以上と改正され、昭和19年3月18日には閣議決定による決戦教育措置要項に基づき、一般学徒は4月1日から国土防衛ならびに緊急生産業務に総動員され、授業も停止せざるを得なくなつたが、船員教育養成機関在中の学生生徒だけは引き続き授業を継続することができた。

しかし、日曜はもとより休暇の一部を返上して、農家や開墾地へ勤労奉仕に出勤し、食料の増産や、ガソリンの代用となる松脂採取、松根採掘に汗を流した。

昭和20年7月1日、中島校長が退任し教諭土屋巴が校長心得を命ぜられた。中島校長の唐突ともいえる退任の理由が、海軍の都合によるものかどうかは知る由もないが、本校ではかねてから、配属武官と文官である学校の教職員との間に生徒の教育について意見の対立や確執があり、戦争が終局に近づくにつれてエスカレートし、遂に生徒まで波及し、平素から抱いていた不満や誤解が一挙に爆発して、暴力デモとなつた。生徒達は、突撃ラッパで気勢をあげ、団交と称して教官全員を中庭に呼び出し、エキサイトした学生たちは、教官に後から体当たり喰わせるなどして暴力を振いデモを繰り返した。

この事件は、時局柄直ちに司直の知るところとなり、学校側の善後措置と並行して、職員・生徒とも厳しい取調べが行われ、結局、生徒の中から大量の犠牲者を出し、相互に消えない大きな不信感を残しただけに終わった。思えばこの事件は、戦争末期の虚無感と精神の荒廃が生んだ忌まわしい事件の一つであったと言えるのではなかろうか。

こうして、同年8月1日には、鳥羽商船学校長の富岡外雄が本校校長として赴任した。この頃、敵機来襲は頻繁であったが、その被害は皆無であった。そして、8月6日に広島に原爆の閃光が炸裂し、遂に8月14日、日本はポツダム宣言を受諾して、無条件降伏し、この長い戦争に終始符をうつのである。

すべてが終わったという虚脱感の中で、各商船学校の校長は終戦後ただちに本省に召集され、無期休校、生徒や卒業生に関する書類の焼却、無線電信送受信機の破壊、銃器類の返却等数々の指示を受けて急遽帰校した。

生徒たちは、校外各個錬成、援農、戦災復興協力、戦災家族見舞ならびに墓参、家庭との連絡という名目で1週間の帰省が許可された。また、これと同時に海軍予備練習生の資格は喪失した。

そして、敗戦という劇的な情勢の急変に対応すべく商船教育もまた一大転換を迫られたが、昭和20年9月18日に至って運輸省船員局教育課長通達（海員教511号）が発表され、下記の通り生徒定員を削減する等の具体的な措置が講ぜられることになった。

1、在籍生徒中席上課程修了生徒は直ちに卒業せしめ、然らざる者に対しては、昭和21年1月初めより

3ヶ月間、練習船実習を施行する。第3学年の生徒は希望者のみ退学せしめ、残留生徒は昭和21年3月席上課程を修了し、以後2カ年半の実習課程施行の上卒業せしむ。また、第1学年・第2学年の生徒は、在校生徒の二分の一を退校せしめ、残留生徒は席上3年、実習2年半の合計5年半の上卒業せしめることとし、退校生徒が決定次第速やかに授業を開始する。

1、昭和21年3月迄の授業内容は各校に於て案劃し現在までの不足を補う。

以上の、通達要旨に基づいて、本校では生徒の希望を斟酌し、運輸省斡旋により文部省管轄諸学校へ転学せしむる等の措置を講じたのである。

当時の減員状況は下記のとおりである。

表3-1 減員状況

	転退学者数			残留者数		
	航海	機関	計	航海	機関	計
1年	54	54	108	30	30	60
2年	42	39	81	30	30	60
3年	18	16	34	44	49	93
計	114	109	223	104	109	213

第2節 第2次世界大戦後の商船学校

1 終戦後の学則と教育内容

昭和20年(1945)10月20日、残留の生徒が登校し授業が再開されたが、学則や教育内容は連合軍最高司令部の指令に基づき全面的に改められることになった。

授業科目の内容については、一切の軍事的教育および武道を廃し、生徒は純然たる商船乗組海員として育成する。また、校長訓話あるいは関係学科教授に当たり、代議政治組織、国際平和、個人の人格尊重、人間としての基本的権利等についてその理念を教え、同時にこれが助長に努め、寮生活においては、生徒委員を選出して、自律自治の精神を基調とする生活の改善を図り、もって従来の弾圧的傾向を一掃し、新訓育体制の樹立を目指すことが指示された。教授法についても、軍事学、教練、武道を廃止した外、教授に当たってはすべて平和を愛好する民主主義国民たらしむる如く、教科書教材を選択した。

しかし、歴史、地理、修身については、連合国総司令部の指令に基づく次のような公文書によって、授業中止となった。

修身、国史、地理科停止ニ関スル件通牒

連合国軍最高司令部指令ニ基づク修身、国史、地理ノ停止ニ關シテハ下記ニ依リ措置相成度。

記

1、従来ノ修身、国史、地理科ノ課程ヲ即時ニ停止シ、何分ノ指示アル迄他ノ学科ヲ以テ之ニ充足セシムルコト

2、従来ノ修身、国史、地理科ノ教科書、教師用参考書(掛図等ヲ含ム)ハ可及的ニ回収ノ上焼却シ、生徒教官ハ図書館等ニ於テ之等書籍ヲ所有セシメザル様措置スルコト。

備考

修身、国史、地理ニ關スル教師用参考書ハ文部省ニ於テ作成中ニ付出来次第送付新学年ヨリ教育開始ノ予定。

しかしながら、思想的背景をもたない地理科の授業のみは、下記により程なく開始された。

海員教第353号

昭和 21 年 7 月 13 日

各海員養成所長、各商船校長 殿

教育課長

地理授業再開について

右については連合軍総司令部より昨年 12 月 31 日付指令を以て歴史、修身の科目と共に授業の中止を命ぜられていたのであるが、今般地理科授業だけは切離して再開を許可する旨同司令部民間情報教育長より指令があつたから了知されたい。

なお、右に関する日本国政府に対する覚書の要旨は次のようなものであった。

連合軍最高指令部

日本帝国政府に関する覚書

学校に於ける地理の授業再開に関する件

1、地理の授業再開に関する 1946 年 6 月 12 日付中央連絡事務局経由第 2833 号日本帝国政府の手紙を参照のこと。

2、文部省の発行又は許可した教科書により官私立を含む各学校に於て地理の授業を再開することを許可する。

但し、その教科書は文部省作成の教科書であつて連合国最高司令部の承認を受けたもの以外使用してはいけない。

備考

6 月 12 日付中央連絡事務局経由第 2833 号日本帝国政府の手紙とは文部省地理科の教科書の原稿を総司令部民間情報教育局に提出、承認を求めた手紙のことである。

日本歴史の授業は同年 10 月 12 日に最高司令官代理高級副官ジョン・ピー・クレーイ大佐から日本帝国政府宛に次のような覚書を発して再開を許可している。

連合国最高司令官総司令部発（民間情報局教育部）AG（8号）

昭和 21 年 10 月 12 日（司令部官閲 1266 号）

日本帝国政府宛覚書

終戦連絡中央事務局経由

最高司令官代理 高級副官大佐 ジョン・ピー・クレーイ

日本歴史の授業再開について

1、「日本歴史の授業再開」に関する昭和 21 年 9 月 20 日付の日本帝国政府終戦連絡中央事務局提出の書簡（C.L.04839 号）参照。

2、文部省によって準備され連合国軍最高司令部の承認を得た教科書のみが用いられるという条件で国定又は検定の教科書を再開することを許可する。

この覚書に基づいて、次の公文が通達された。

発教 118 号

昭和 21 年 10 月 19 日

地方長官・直轄関係諸学校長 殿

文部次官

国史の授業再開について

昨年 12 月 31 日付連合国最高司令部指令並にこれに基づく本年 1 月 11 日付発学 8 号文部次官通牒（前掲の海員教 16 号昭和 21 年 1 月 17 日の船員局長からの通牒は、直接的には昭和 21 年 1 月 11 日付発学 8 号文部次官通牒に基づき、さらに根本的には、昭和 20 年 12 月 31 日付連合国軍最高司令部指令に基づいている）によって停止されていた国史については、別紙のとおり連合国最高司令部より授業再開の許可があつたから左記事項に御留意の上、其の実施に遺憾のないように取計られたい。

1、授業の再開は文部省に於いて編纂し連合国軍最高司令部の認可した教科書を使用することを条件とするものである。

前項の教科書は国民学校用「くにのあゆみ」上・中・下、中学校用「日本の歴史」上・下及び師範学校用教科書は既に製造を終り輸送中であるが、其の他は多少遅れる見込みである。授業では全て之等の教科書が到達した時から再開すること。

このような通達は2号、3号とつぎつぎに発せられて、歴史の授業も再開されるに至ったが、修身科のみは連合軍側にも日本においても種々の問題があり、結局、地理は昭和21年7月13日、国史は同年11月27日授業再開を許可されたが、修身科の授業は再開されることなしに終わった。

なお、軍事教育や武道の授業は、終戦とともに廃止されたのは勿論である。

2 校長・職員・生徒

富岡校長は、終戦直前から戦後のめまぐるしい教育の大変革と、教育とはなによりもまず生徒に食わせることを第一義とするようなすさまじい食料難の中で、「中道」を教育方針として、地味ではあるが困難な諸問題の解決に精魂をかたむけ、昭和35年3月定年退職するまで、混迷と苦難の時代をねぼり強く学校とともに生きぬかれたのである。

本校は昭和20年10月20日授業が再開されてから、生徒数は減員により200名程度になってはいたが、商船学校は全寮制度のため、生徒の食料確保については並大抵の苦労ではなかった。校庭は中庭から運動場の一部に至るまで掘り起こされ、麦や甘藷が栽培された。しかし、これらは配給食料にわずかにプラスする程度で、配給だけが命の綱であったが、戦後、労働者などに特配として受けていた加配米1人1日当たり200グラムの確保についても困難な問題があった。当時、食料同様きわめて不足していた衣類などは、補給がつかなければ我慢することができたけれども、食うことは待ったがないだけに、食べ盛りの生徒には空腹との戦いが最大の関心事となっていたのもまことに無理からぬことであった。

したがって、富岡校長をはじめ関係職員の関心もまたここに集中し、教育もさることながらいかにして生徒たちの空腹を満たし、また栄養低下を防ぐかということに骨身をけずったと言ってよい。

この間、昭和21年1月4日、本校教職員は、ポツダム宣言受諾に伴う勅令第1号（公職に関する退官職等に関する件）の適用により全員適合審査を受けたが、幸いにして全員適合となり、同年3月8日には第46期生の修了証書授与式を挙行することができた。

3 研修科設置と教育内容

昭和21年7月、船員の教育制度を刷新し、時代に即応してこれを民主化して行くため運輸省に船員教育委員会が設置されたが、同年10月3日、同委員会委員長福原敬次は関係大臣宛下記の建議をした。

我が国内外の情勢と海運界の現状に鑑み、戦時中に急速大量に養成せられ船員はもとより、其の他の船員に対しても、此の際全面的な再教育（臨時補修教育）を開始し、以て民主的文化国家の船員として新時代に即応した教育及び技能の向上を図ることが刻下の急務であると考えるので、政府は国費を以て速かに船員の再教育機関を設置されんことを望む。

右建議する。

理由

1、前後8年に亘る今次戦争によって、長い平和時代に培い育てられた優秀船員は、その4割3分が斃れ、

5割近くが傷病を受けたために、終戦後の船員は僅かに残った1、2割程度の熟練者を除いて殆んど全部が戦時中の急速大量養成の年少者か若しくは長い間陸海軍に応召していた復員者で占められている有様となつた。

従つて現在の船員は、技術的にも、精神的にも、著しく素質が低下していることは争われない事実であるから、此の際全面的に再教育を行う必要がある。

2、終戦後の海難其の他の事故の状況を観るに、戦前よりも船舶の稼働は少ないにもかかわらず船舶の事故は多く、而もその性質たるや明らかに船員の技術低下、精神力の弛緩からと認められるものが多いので、

船員の再教育は海上に於ける巨万の財宝と多数の人命を保護する社会公安の見地からも絶対に必要であり、且つ急がなければならない。

- 3、現在民主的文化国家建設の途上にある我が国としては、国民教育を振起して、民主的思想の普及徹底と道義心の向上を図ることが急務であるが、海上生活を常とする船員は此の種の教育を昂るのに最も不利の環境にあるのみならず、集団的生活を営んでいる関係上、善にも悪にも進み易い傾向が多いので、速かに再教育を実施して、民主主義の真意を理解せしめ、高度の知性と道義心に立脚する社会の責任ある構成員たらしめねばならない。
- 4、今後我が国に何程の船腹が許されるか不明であるが、四面環海の我が国としては、国民生活維持のためにも相当の船腹を必要とすることは明らかであるので、今後の我が国海運は当然中型大型の船腹を極度に運航して行かねばならない。それには技術的にも精神的にも一層優秀なる船員を必要とするので、此の際船員の再教育を行ってこれに備える必要がある。而も船舶稼働の状況と船員需給の関係等より見て、現在が再教育実施には絶好の機会であるので、即刻開始すべきである。

付帯意見

- 1、再教育を実施するに当たっては、船員をして積極的に喜んで教育を受けようとする意欲を持たしめることが第一条件であると考えられるので、次の諸点に特に留意することが必要である。
 - (イ) 再教育機関に在学中は予備船員としてその生活が組織ある確実な方法に依って保証せられること。
 - (ロ) 教育を修了せる後に於ける身分が保証せられていること。
- 2、本教育を実施するに当たっては、既設教育機関の整備復旧を図ると共に休航船舶、遊休施設の全幅的活用を図り急速に教育を開始すること。
- 3、本教育に従事する教官に対しては、予め十分な準備教育を施すことが必要である。又本教育のために臨時補充せられた教官に対しては、本教育機関閉鎖前後に於いてもその生活に不安なからしめるよう考慮すること。
- 4、船舶運営会、船主、船員団体、其の他関係諸機関は、全面的に本施策に協力すること。

4 鹿児島商船学校の転換に伴う生徒の受入

さきに戦後措置として、高等普通商船学校生徒50名を文部省所管の諸学校に転学させる等の応急措置をとり、生徒養成数が減少したので次のような通牒により養成機関の縮小を余儀なくされた。

昭和21年1月18日

船員局長

各商船学校長・航海訓練所長 殿

商船学校整理統合ニ関スル件（通牒）

高等船員教育ニ對スル戦後措置トシテ曩ニ高等商船学校並ニ商船学校生徒約5000名ヲ文部省所管の諸学校ニ転校セシムルノ措置を執リ明年度ノ新採用生徒ハ高等商船学校160名、商船学校250名採用ト決定シタルガ、カカル生徒養成数ノ減少ニ伴ヒ教育機関ノ縮少ヲ余儀ナクサレ而モ文部省關係校へ転学セシメタル生徒ノ収容ニ充ツルタメト連合軍進駐ニ伴フ教育機関不足ヲ補フタメ余剩施設ヲ他ニ振向ケ全面活用ヲ図ルノ要アル為左記要領ニヨリ商船学校ノ整理統合ヲ実施スペキニ付諒知相成度。

記

1、新ニ転換スペキ教育施設

イ、鹿児島商船学校（文部省ニ移管）

ロ、航海訓練所所属改E型

ハ、栗島商船学校（海員養成所ニ転換）

2、実施要領

イ、鹿児島商船学校ハ昭和21年4月1日ヲ以テ文部省ニ移管シ同省關係教育機関トシテ活用セシム

- 口、栗島商船学校ハ昭和21年4月1日ヲ以テ海員養成所トシテ使用スル予定
 ハ、航海訓練所所属改E型練習船1隻ハ昭和21年4月1日ヲ以テ文部省ニ移管シテ使用ス
 ニ、栗島商船学校ハ昭和21年4月1日ヲ以テ弓削商船学校ト統合ス
 ホ、鹿児島及栗島商船学校生徒ハ昭和21年3月迄現在校ニ於テ教育シ同年4月1日ヲ以テ生徒ノ希望ニ依リ他ノ商船学校ニ移校ス 12月1日現在迄現在生徒数別表ノ如シ
 ヘ、鹿児島及栗島商船学校職員ハ成ルベク施設ト共ニ転籍セシムル様措置ス
 ド、施設ノ移管
 両商船学校ノ専門備品、教材及舟艇等ハ至急詳細ナル調査書ヲ作成関係ノ向キト協議打合ニ依リ之ヲ定ム

(別表) 商船学校生徒数調 昭和20年12月1日現在

学校名	1学年	2学年	3学年	計	収容力
富山	54	58	128	240	500
鳥羽	56	60	123	239	500
大島	48	48	86	182	500
鹿児島	55	57	104	216	250
広島	30	20	63	113	250
栗島	29	29	71	129	250
弓削	30	30	71	131	250
計	302	302	646	1,250	2,500

このようにして、鹿児島商船学校は文部省所管高等水産専門学校に、また栗島商船学校は海員養成所としてそれぞれ新発足することが決定し、友校鹿児島商船学校生徒（席上110名、実習93名）は希望により全員本校へ転学することとなり、4月8日、転校式を挙行し、夕食後親睦演芸会を開催した。

また、4月19日には、元鹿児島商船学校校長西沢貞徳が来校し、転入生に訓示をするなど転入生が1日も早く本校生徒になじみ、相互の融和がスムーズに行くような配慮や努力がなされたのである。

第3節 創立50周年と記念事業（昭和22年・1947年）

明治30年（1897）10月1日、郡立大島海員学校として屋代村に呱々の声をあげた本校は、明治34年には県立大島商船学校となり、その後、栄光と苦難の道を歩みながら、昭和14年には官立大島商船学校となった。

かくて昭和22年（1948）10月1日、栄えある創立50周年を迎えるため、同日より3日間、秋晴れの好天のもと、盛大な祝典行事が繰り広げられた。

この催しに対し、地元小松町は多大の厚意を寄せ、式典に先立ち、祝賀のアーチや万国旗で町内を飾り、式典当日は各部落有志のシャギリ演芸を繰り出すなど、お祭り気分はいやが上にも盛り上がった。



図3-9 創立50周年記念式

創立記念祭 スナップ

〔その一〕



学校長式辞



慰靈祭



感謝状贈呈



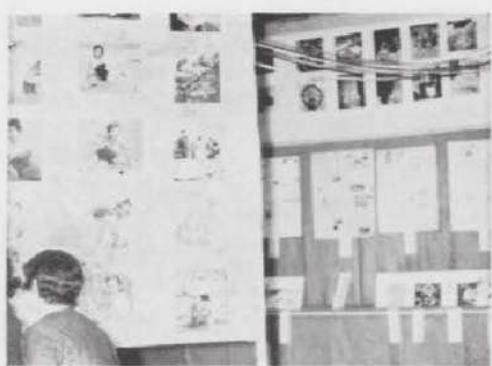
相撲大会



祝宴(本校食堂)

図3-10 創立記念祭スナップ(その1)

〔そ の 二〕



写 真 展 (町内写友会)



香りもゆかし生花展



町ぐるみ祝賀一色 (南二区)



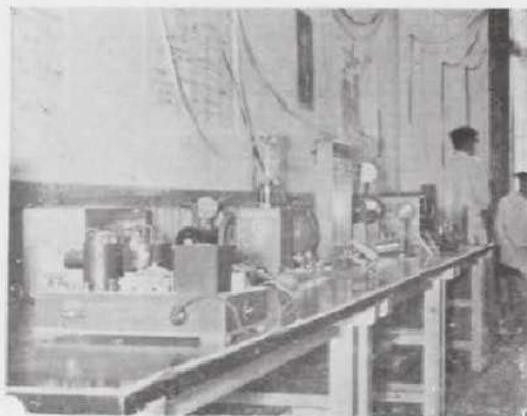
絵 画 展 (大島美育連盟)
大島美術クラブ



新 聞・文芸誌展 (70校参加)

図 3-1 1 創立記念祭スナップ (その 2)

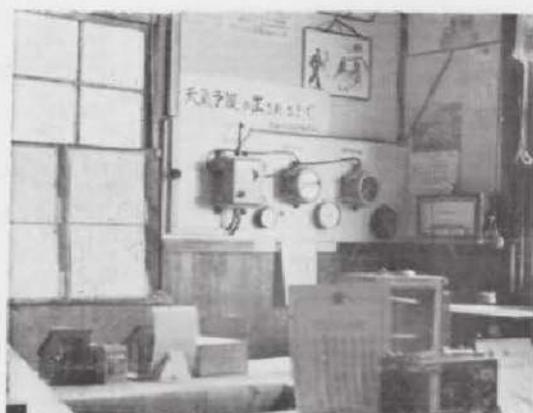
〔そ の 三〕



物理展示会場



絵画書道展 (画廊)



航海科第一会場 (気象)



化学展示会場



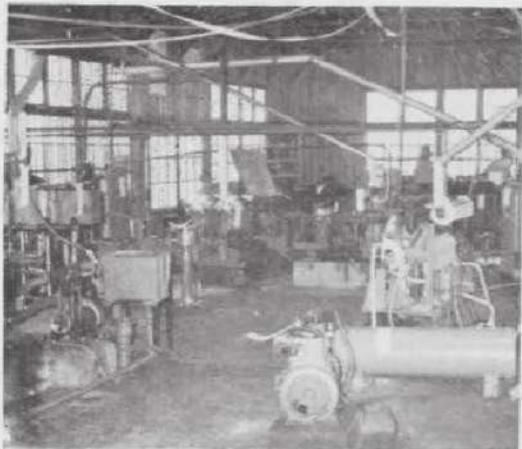
海事一般



航海科第三会場 (航海・計器)

図3-12 創立記念祭スナップ (その3)

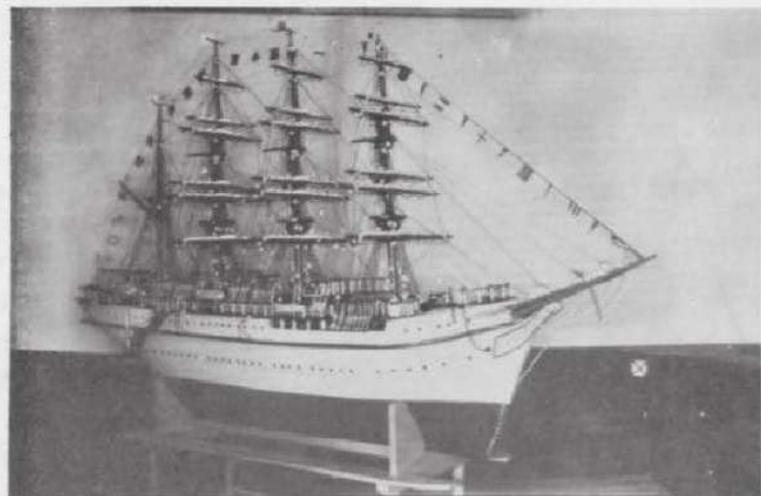
〔その四〕



機関科第三会場 (原動機)



機関科第一会場 (模型)



日本丸模型 (本校職員田村栄治氏作)



記念音楽会



六十年の歩み (新・旧校舎大パノラマ)

図3-13 創立記念祭スナップ (その4)

1 行事日程

- 10月1日 記念式典、祝賀会、慰靈祭、展示会、音楽会、角力大会、同窓会総会
- 10月2日 端艇・伝馬船競漕、大運動会、展示会、記念演芸会
- 10月3日 記念演芸会

2 行事概要

2-1 記念式ならびに祝賀会

栄えある創立50周年記念式は定刻10時、山口軍政部隊長ロバートソン少佐、同民間情報教育部長オブライ恩大尉夫妻、運輸大臣代理渡辺教育課長、山口県知事田中龍夫、中国海運局長代理、広島鉄道局長代理、山口高等師範学校長、海技専門学院長、各商船学校長、その他各種官公立学校長、県議員、地方有志、旧職員、卒業生など来賓約400名が列席、校長式辞のあと、軍令部隊長、教育部长、大臣、県知事、来賓十数名の祝辞があり、ついで卒業生、在校生徒代表の祝辞と祝電（32通）が披露された。

なお、永年勤続職員田村英治の表彰ならびに記念品贈呈がおこなわれた後、旧職員でありまた同窓生でもある国行惣助の回顧談があつて、厳粛盛大な記念式は幕を閉じた。

ひきつづいて祝賀会が開催され、全員祝宴会場に入場し、校長挨拶や乾杯が行われるなど、にぎやかな祝宴が張られ、一同杯をかわし、歓をつくして午後1時散会した。

2-2 音楽会

12時40分から講堂で開催され、研修科生ならびに本校生徒、高等女学校、小・中学校生徒、地元童楽団、その他有志による合唱、独唱、ピアノその他の独奏や合奏が行われた。

聴衆は場外にまで溢れるほどの超満員で、約5時間にわたり、三十数番の演奏プログラムを見事にこなし、成功裡にその幕を閉じた。

2-3 角力大会

角力大会は13時から中庭の新設土俵2カ所で行われた。本校からは航海・機関各数組と研修科選手が出場し、招待選手として青年団や小・中学校代表選手が出場し、白熱の好試合が展開され17時終了した。

2-4 慰靈祭

同窓会主催で本町妙善寺において遺族を始め来賓、同窓会員、その他関係有志など多数参列して、13時より挙行、肅然たる読経の中で参列者の焼香が行われ、16時厳粛裡に終了。

ひきつづき、席をあらためて、来賓、遺族、同窓会代表ならびに有志による茶話会が開催され、物故者の思い出話に花を咲かせて散会した。

2-5 同窓会総会

17時より講堂において開催。開会の辞に続いて、議長に東村大三郎が指名され、同氏の挨拶があつてから、議案の審議に入った。まず、事業報告ならびに会計報告が承認され、会則の改正に移ったが、審議の結果原案通り可決され、最後に役員の改選になった。しかし、この議案は結局詮衝委員を選出してこれに一任、委員会で審議決定した。

なお、同日夕刻より会員の親睦会が開催され、時節柄、簡素な酒肴ではあったが久々の会合であり、時のたつのを忘れるほどきわめて盛大な宴となつた。

2-6 端艇・伝馬船競漕

第2日目祝賀行事のトップを切って、8時から本校ポンド沖合で開始された。

端艇競争は200mの折返し、伝馬船は200mで、青赤の2組ずつで競技が行われた。本校生徒各チームの競艇を皮切りに、続いて最寄りの新制中学男子、青年団および女学校のチームが出場して勝負を競った。

2-7 大運動会

早朝より一般観衆が押し寄せ、開会時には指定席はもとより、トラックの周囲も、ゴザやムシロの席で埋めつくされ、10時頃になると運動場はもはや人垣で溢れるほどの盛況となり、さすが一般に最も期待されていた行事だけのことはあるといえるにぎやかさであった。

競技種目は、トラック、フィールドあわせて三十数種で、まず100m競争から競技の幕は切っておとされた。プログラムの番組が進むごとに観衆の熱狂はいよいよ高まり、鳴物入り航機対抗応援合戦や各種学校生徒の声援で白熱の競技が展開されたが、13時より行われた仮装行列の余興は特に見もので、観衆の拍手喝采はしばらく鳴り止まなかった。

午後の番組は各種目の決勝戦が多いだけに一般観衆の緊張度も一段と加わり、手に汗にぎる場面が随所に展開された。こうして、定刻16時、航機対抗リレーをもって全競技を終了。優勝旗授与があつて盛況裡に大会の幕を閉じた。

2-8 記念演芸会

第2・3日目の両日にわたり、夕刻より緑座劇場において、本校・小松町合同主催で盛大な演芸会が挙行された。

出演者は、本校生徒ならびに研修科生をはじめとし、もより町村青年団、杵屋及び花柳両社中の有志で、舞踊、歌謡曲、寸劇、落語、漫才等があり、6時間ぶつ通しの熱演は上々の人気を呼び、入場者は両日とも超満員の盛況で、観衆は約1,500名を超えるほどであった。

第4編 国立大島商船高等学校

昭和26年（1951）～昭和41年（1966）

第1章 国立大島商船高等学校の発足

第1節 国立大島商船高等学校発足への経緯

戦後我が国の教育制度が6・3・3・4制に改変されるに伴い、船員教育機関もこれに順応する必要を感じ、昭和22年（1947）10月、船員教育委員会において、商船高等学校としての入学資格、修業年限および卒業資格の案を決定し、昭和23年度の新入学者から、地方商船学校を商船高等学校の教育内容に則してすでに発足させたにもかかわらず、昭和24年3月、GHQ（連合国軍総司令部）の意向として「日本にはこのような高度の船員教育を必要とする段階でない」という理由で拒否され、船員教育問題は大きな暗礁に乗り上げる結果となった。そして、商船学校はこのまま存続するかどうかの見通しすらたたなくなり、廃校かまたは格下げの危機に直面するに至った。

しかし、清水高等商船学校では、商船大学設置運動を全国的に展開し、遂にこれが効を奏してGHQを動かし、臨時国会において商船大学設置法案を上程、商船大学への昇格が実現した。

しかしながら、商船高等学校案については、当局の「大学と商船学校は一連のもので大学案が通過すれば商船高等学校は当然実現する云々」の言明に反し、GHQにおいては「商船高等学校に就いてはまだ十分に研究していないから後廻しにせよ」との理由により、完全に大学とは切り離されてしまったのである。

その後、昭和24年12月、船員教育審議会が設けられ、地方商船学校については主としてその所管問題が論議されていたが、同年6月、第三審議会において、某委員より「船員教育機関の問題についてはもっと根本的に掘り下げて商船学校なるものは存続の必要があるか否かを検討してみる必要がありはしないか」と

いう提案がなされ、このような現実と世論を無視した暴論が委員会を左右するに及び地方商船学校は遂に存廃の危機に直面することとなった。

そこで各校同窓会は十一会の協力を求め、5校は結束を強めながら緊密な連絡のもとに防戦に努めたが、形勢はいよいよ不利となつた。

しかし、このことがかえって地方商船学校を存置せよという世論に発展し、5県連合（学校当局、地元市町村、県当局、関係各県選出代議士、各校同窓会、十一会）を結成し、全海協と共に商船学校存続の一大猛運動が展開されるに至つた。

それ以後、衆議院文教委員会では昭和25年6月下旬から同年9月下旬まで回を重ねること7回に及び、ようやく存置の基本線が明確になり、再び出発点に帰ったのと同結果となつたが、いかなる制度のものにするかについては同年10月5日第9回委員会終了まで結論が得られないまま、委員会は実質的に無期延期の形になってしまった。

ところが、他方においては、同年9月頃から表面化した存置運動がどんどん進展して政治問題化し、遂に解決の見通しが確実となり、委員会もこれに追従せざるを得ない立場に追い込まれ、12月4日、第10回衆議院文教委員会終了のあと「国立学校設置法案等の一部を改正する法律案について」の答申を行い、12月13日、第4回審議会もこれを可決し、同年末の国会で同法案が上程され、衆参両院において満場一致でこの法案の成立通過をみたのである。

国立学校設置法等の一部を改正する法律案について

（商船学校学制改革について）

1、商船学校の学制については、船員教育審議会（政令387号）の小委員会において、下記の通り決定した。

- (1) 学校教育法による商船高等学校とする。
- (2) 修業年限は本科3年、専攻科1年以上とし、実習課程については、専攻科修了のとき甲二程度の海技免状を取得するための受験資格が得られるように措置する。
- (3) 国立てなければならない。

（理由）

- (1) 商船高等学校とする理由

2カ年にわたって審議決定された先の船員教育委員会を覆すに十分な理由を見出し得なかつた。

他の職業教育を同様に船員教育においても、大学、高等学校の教育機関を設けることが必要であると思料する。

- (2) 専攻科修了のときに海技免状取得のための受験資格を附予する理由

在学期間を通じ4カ年の乗船履歴を該当するものと認められるような実習課程を設け、修了のとき海技免状取得の受験資格を附予するようにしないと、出身者が船舶に乗り組む機会を失い、一生船員となる機会が与えられないようになる。かかりことは、本人の不幸であるばかりでなく、教育機関としても当を得たものではない。

- (3) 国立てなければならない理由

この学校に入學する生徒は、全国から募集され、卒業後は全国的な産業に従事する。しかも学校経費は他の学校に比して多額を必要とするから、国立てなければならない適切な教育は実施できない。

2、商船学校を新制高等学校に切替えた場合は、次のような点を考慮し、措置する必要がある。

- (1) 新制高等学校の学制では、85単位を修得すれば卒業資格があたえられる。従つて現行の如く全生徒に対して甲二程度の海技免状を目指とした教育は実施困難である。
- (2) 本科を卒業したのみでは、船舶職員として何等の資格も得られない。従つて、専攻科等を設け実習課程を置く必要がある。その期間は、海技免状を取得するために必要な期間であつて、これは、現在海上保安庁の船舶職員法令分科専門委員会において審議中であるので、来る通常国会までにはその必

要な実習期間が決定される予定である。

- (3) 教職員免許法に制約されて、船長、機関長等の経験豊富な者、又は実地出身の技術優秀な者等でも一定の学歴のない者は、専門学校教官となる資格がない。従って、法令の改正をしなければ、専門学校教官の採用が困難である。
- (4) 現在在住の83名の教官中約20名は教職員免状を得る資格を持たないから、商船学校が存続する間は差支えないが、それ以後においては何等かの法的処置を講じない限り犠牲者を出さなければならぬ。
- (5) 現在在学中の生徒は、卒業と同時に甲二の免状を無試験で得る資格を持っているので、商船高等學校に切り替える際は、これを失うことのないように処置する必要がある。

要するに当時のGHQ民間情報教育部の意向としては、本格的に学校という以上は、当然文部省が管轄するべきものであり、運輸省の管轄する学校は狭義の職業訓練を担当すべきだという見解を持っており、運輸省は現状のまま商船学校として在置する方がかえって得策である旨を表明したが、学校としてはあえてこれに反対する意向もなく消極的であった。

要するに、このようなことが存続問題の原因となり、そこへ世論に立脚せず現実を無視した廃止論がおこったため、これに対して存置運動が澎湃としておこり、かえって文部省所管の国立商船高等学校への切替えが促進されたのである。

ともあれ、足かけ3年に亘って論議されたこの難問題も、波乱万丈紆余曲折を経てようやく解決し、ここに学校教育法による商船高等学校に実現をみるに至り、昭和26年(1951)4月1日を以て文部省に移管され、国立大島商船高等学校として発足することになった。

第2節 学則と教育課程

1 学則

商船学校と商船高等学校との学則上の主な相違は以下のとおりである。

- (1) 教育目標が高等普通教育と航海、機関に関する精深な程度の専門教育を施すことをあきらかにしていること。
- (2) 修業年限が半年短縮されて本科3年、専攻科2年の5年制となり、それぞれ本科卒業、専攻科卒業をもって教育課程が完結するのであるが、専攻科2カ年は実習課程1年4ヶ月以上、席上課程6ヶ月以上からなり、卒業までの席上課程6ヶ月は船舶職員としての完成教育を目指すものであること。
- (3) 教育効果をあげるための現場(船)と学校とを直結した「サンドイッチシステム」の短期乗船実習(航海訓練所)が本科1年生、2年生で30日ずつ、計60日間課せられたこと、この制度は高校教育の特色の一つとして改善されたものであったが、商船学校から商船高校への転換が3カ年遅れたために、この制度だけは高校課程実施以前からすでに行われ、学年も時によって変わり、本科3カ年の中で60日間が実施された。(昭和37年度から30日間に短縮された)
- (4) 修業年限の短縮や教科課程の改変に伴い、海技免状の取得条件が違ってきたこと。すなわち、商船学校卒業生は無試験で甲二免状(現3級海技士免状)が取得できていたが、商船高等学校卒業生は甲種二等航海士、機関士の受験資格が付与されるだけにとどまつたこと。
- (5) 本科入学資格は、中学卒業者またはこれと同等以上の学力があると認められた者で、年齢満18年までの者となったこと。また、専攻科への入学は、本科を卒業した者であること。
- (6) 入学定員は、終戦後船舶が激減したため、航海科、機関科とも25名であったが、これが各30名に増員されたこと等である。

2 本科課程と専攻科課程

商船高等学校時代は昭和26年4月1日から昭和42年5月末日までの16年間であるが、この間本科入

学定員は、時勢の変遷とともに次のように改正された。

昭和21年～26年 航海科 25名 機関科 25名 合計50名

昭和27年～36年 航海科 30名 機関科 30名 合計60名

昭和37年～42年 航海科 40名 機関科 40名 合計80名

したがって、本科全体でも150名から240名定員の小規模学校であったが、本科入学のための応募者数は次表のとおりで、きわめて高い入学倍率を維持し、時には十数名に一人という競争率を誇っていた。

表4-1 入学応募者数

期別	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69
年度	昭和															
	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
応募者数	587	751	484	504	468	584	827	793	621	484	358	342	380	385	449	448
定員	50	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	80	80	80	80	80
倍率	11.7	12.5	8.1	8.4	7.8	9.7	13.8	13.2	10.4	8.1	6.0	4.3	4.8	4.8	5.6	5.6

当時の学校行事としては、季節別に要約すればおおよそ、次のとおりである。

(1) 春

○遠足（文殊、嘉納、琴石登山）

毎年4月、新入生の歓迎遠足がおこなわれた。これは、昭和31年まで続いた。全員が弁当箱を手にして土筆やレンゲ、タンポポの咲き乱れる屋代川ぞいを、春の陽を浴びて3年、2年、1年の順に長蛇をして登って行く姿は実にのどかなものであった。

○瀬戸内3商船高等学校漕艇大会

この大会は、もとは尾道市の商工会議所の要請に応え、商工会議所主催の港まつりに参加協力するところからはじまった。尾道港の満潮時におこなわれたものであるが、その後本来の趣旨を生かし、現在は全国大会に発展している。昭和29年の第1回大会では本校が優勝した。

(2) 夏

○夏休み前後における遠足、水泳日課および水泳大会

○海の記念日におこなわれた近隣中学生の相撲大会（昭和33年以降は中止）

○平郡、室津方面等への2泊3日のカッター巡航

行事としてのカッター巡航は、記録によると昭和29年から実施され、3年生は短期実習乗船中であつたため2年生がこれに参加した。額の汗が乾き塩の粉となってギラギラ光っていた光景は今もまぶたに焼きついている。

(3) 秋

○秋季大運動会

秋は何といつても名物の本校大運動会が代表するが、その他にも

○カッターレース

野島一周レースや短距離レースが実施された。これは昭和30年頃にはじまったものである。

○京阪、四国方面の修学旅行

修学旅行は、短期実習で日本全国をまわる本校では長続きしなかった。

(4) 冬

○校内マラソン大会

現在も実施されているが、昭和29年に始まったものである。

○寒稽古

現在は行われていないが、昭和32年（1957）に始まって平成3年（1991）までおこなわれた。

表4-2 本科課程（昭和26年度）

航海課程			機関課程		
教科	科目	単位	教科	科目	単位
国語	国語	9	国語	国語	9
社会	一般社会	5	社会	一般社会	5
	人文地理・時事問題	5		人文地理・時事問題	5
数学	解析（1）	5	数学	解析（1）	5
理科	物理	5	理科	物理	5
保健体育	保健体育 (船舶衛生を含む)	9	保健体育	保健体育 (船舶衛生を含む)	9
小計		38	小計		38
必修専門 教科科目	航海	14	必修専門 教科科目	舶用機関	15
	運用	12		舶用電気	5
	関係法規	4		応用数学	5
	実習	15		関係法規	2
	外国語	12		製図	6
小計		57		実習	14
海運	0~7			外国語	10
選択科目	応用力学	小計		57	
	舶用機関	選択科目	航海	0~7	
	電気一般		幾何		
			化学		
合計		95~102	合計		95~102
特別教育活動		6	特別教育活動		6
短期乗船実習		60日	短期乗船実習		30日

専攻科の第1回卒業証書授与式は昭和31年3月（第54期生）であるが、本科卒業式も同時に挙行された。

専攻科生は、建前上は全員、寮（当時の第二寮）に起居することになっていたが、実状は地元に下宿するものがほとんどであった。通学時の服装は全員制服を着用していたが、国家試験受験前の期間でもあったので、学習態度には真剣味があり教官室を訪たり廊下で教官に質問している姿がよく見受けられた。

国家試験の合格率は商船大学卒業者を上回ることも度々であったが、受験対策という面からみれば、この座学の半年間はきわめて効果的な学習期間であったといえよう。

昭和25年6月の朝鮮動乱は、我が国における経済復興の気運を刺激し、設備投資による好況がさらに好況を生んで、昭和31年の神武景気、続いて昭和34年の岩戸景気を迎えるようになり、工業立国としての基盤が着々として進み、経済復興も戦前水準に達し、敗戦直後の様相は一変した。しかし、塗炭の苦しみを生き抜いた国民であったが、物質的な豊かさは却って人間を駄目にするものか、この頃から自由のはき違えや、身勝手な考え方、行動が目立つようになり、学校でも教官と生徒の間にしつくりしない傾向が現れはじめた。

商船高校時代を通じての生徒の気風、態度についての回想は、服装・態度がきりつとして男らしく、どこからでも他校の生徒と見分けがついたほどで、他校の先生はもとより町の人たちにも評判がよく、ことごと

に、「商船」「商船」とかわいがられたものである。生徒の方も、伝統ある「大島商船」の生徒であることに、エリートとしての誇りと自覚と責任を持ち、海の男としての使命感に燃え、どことなく一本筋の通った頼もしさ、たくましさを身につけていたと言えるのではなかろうか。

表 4-3 専攻科課程（昭和 26 年度）

航海課程			機関課程		
教科	科目	単位	教科	科目	単位
普通 教科科目	社会（時事問題）	1	普通 教科科目	社会（時事問題）	1
	外国語（英語）	2		外国語（英語）	2
	保健体育	1		保健体育	1
専門科目	航海	6	専門科目	舶用機関	8
	運用	4		舶用電気	2
	応用力学	1		応用力学	2
	関係法規	2		関係法規	1
合 計		17	合 計		17
特別教育活動		1	特別教育活動		1

第 2 章 国立大島商船高等学校の充実と発展

太平洋戦争の終結とともに日本の全船舶は、連合軍総司令部の厳重な監督下におかれ、日本の配船運航はもとより、改造修理等に至るまで全ての管理権が日本商船管理局(SCAJAP: Shipping Control Authority for Japanese Merchant Marin)に握られていたが、昭和 25 年（1950）3 月、船舶運航管理令が廃止され、船舶運航令が公布されるに及んで、同年 4 月、海運界待望の民営移管が実現したのである。本校が国立の新制高等学校として発足したのは丁度その 1 年後であり、さらに 1 年後の昭和 27 年 4 月には対日平和条約が発行し、わが国は遂に独立国としての主権を回復した。したがって、わが国海運が外航復帰の態勢を整えて、戦後再建の第一歩を踏み出したのもまたこの時からであった。

海運の基盤を強化し、貿易規模の拡大と船腹の増強を計って日本海運の再建を達成するためには、大学・高校における計画的な船員養成が絶対要件であることは言うまでもない。昭和 26 年 10 月の運輸省船員局の発表によれば、昭和 26 年以降の保有船腹量にたいする高級船員の需要数は表 4-4 のとおりである。

表 4-4 高級船員の需要数

年度別	26 年度	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度	31 年度
保有船腹 G/T	2,400,000	2,800,000	3,200,000	3,600,000	3,800,000	3,800,000
需 要 数	所要員数	7,871	8,488	9,105	9,722	10,031
	現在員数	7,103	7,478	8,068	8,650	9,236
	差 引	-768	-1,010	-1,037	-1,072	-795
						-501

このため、商船高等学校における入学定員は、航海・機関各 25 名から各 30 名となり、さらに昭和 37 年度からは各 40 名に増員され、昭和 40 年 6 月、240 名収容（4 人部屋、61 室）の寄宿舎「小松寮」（改・増築前の現男子寮）が完成した。

一方、レーダー、ロラン等の航海計器の出現をはじめ、エズ動乱（第二次中東戦争、1956）以後におけるタンカーや専用船の大型化、貨物船「金華山丸」（三井船舶・現商船三井）を頂点とする船舶の自動化・高速化等、昭和 30 年代は技術革新を競う華やかな舞台であった。

そのため、有能にして適格なる高級船員の供給源たる商船高等学校における技術教育は、逐次刷新・強化され、実験・実習器材も「実験実習施設・設備の基準」に基づいて更新され、量・質ともに新時代に即応しうるよう着々と整備充実されたのである。

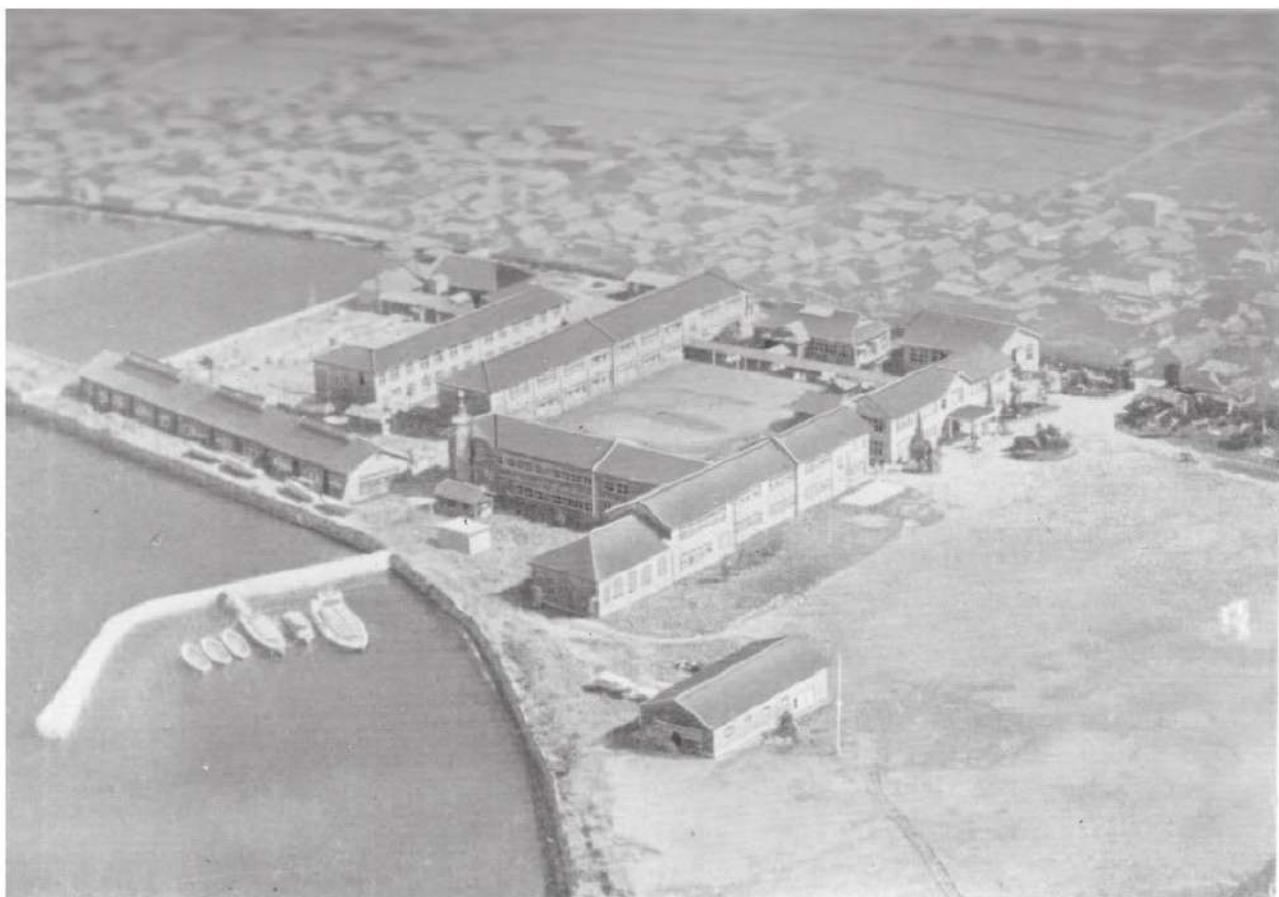


図4-1 校舎全景（創立60周年当時）

第1節 創立60周年と記念事業（昭和32年・1957）

昭和32年（1957）1月、この年、創立60周年を迎えるにあたって大島商船高等学校60周年記念事業協賛会（会長山口県知事小沢太郎）が発足し、（1）記念館の建設（2）新教材ならびに図書の購入及び設備の充実（3）祝賀記念行事（4）戦没ならびに物故者の慰靈祭等からなる事業計画を立て、必要な資金の募集を行なった。

記念行事は、10月6日の記念式典を中心に5日から8日までの4日間にわたりて多彩にくりひろげられ、特に祝典には小沢県知事をはじめ浦谷文部省職業教育課長、関谷航海訓練所長ら多数の来賓のほか、航海訓練所練習船「銀河丸」がこののために遠路はるばる馳せ参じて、その瀟洒な姿を学校沖合に浮かべたことで祝賀ムードはいやが上に盛り上がった。

1 記念誌の発行

昭和32年12月25日、創立60周年記念誌が発行された。先に発行した「五十五年の足跡」が本校55年の沿革史であるのに対して、本誌は創立60周年を記念する記念特集号として編纂された。したがって、その大部分は記念式を中心とした記念祝典と行事関係の記録であるが、他にも校勢現状や卒業生の寄稿によるエピソード等を収め、校史としての一面をもあわせ有するよう編集されている。

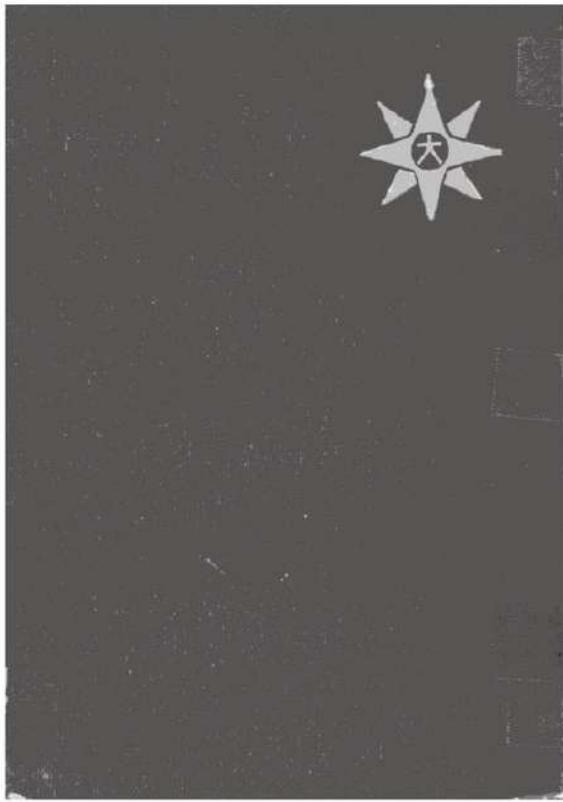


図4-2 55年の足跡（表紙）



図4-3 創立60周年記念誌

2 記念館の落成

創立60周年記念事業の一つとして計画され、昭和33年12月5日に落成した。35.5坪、木造2階建モルタル仕上げの建物で、総工費約270万円、模型・教材等の陳列・展示と同窓生、保護者はもとより学校関係者（来客や非常勤講師など）の宿泊、休憩等に利用され、現在は内部を改修してクラブ活動等の合宿等に使用され現在に至っている。

3 創立65周年と記念事業

昭和37年（1962）、創立65周年を記念して慰靈塔の建立が計画され、同年8月7日に完成した。この慰靈塔は当時の高橋徳之助校長の卓抜な発想と同窓諸先輩の物心両面にわたる協力と援助によってはじめて完成されたものである。

慰靈塔建立の趣旨とその意義については、時の同窓会長国行惣助自作の碑文がそのすべてを物語っているといってよい。碑文に曰く「生は個なりと雖も魂は永遠に此の處に結ぶ」と。若い人達のために、これを敢えて意訳させていただくならば「生きている時はバラバラでもいい/でも/死んだら/おいみんな/この母校の庭に集まろうぜ」

これは、陸を離れて、海を宿命の職場とし、海に人生を賭ける者たちだけに木霊する呼びであり、呼びかけであり、そしてまさしく海に生きる者たちの鎮魂歌である。また、設計・製作者がほかならぬ本校航海科第18期卒業の彫刻家の重鎮津上昌平であるということが、この碑の存在をひときわ輝かしいものにしている。

なお、この慰靈塔を守護するものとして、本校航海科第14期卒業生、船長鹿島光太郎が精魂を傾けて製作したトーテムポールが、校内道路をへだて相対峙して建立されたが、さしもの直径40cmの及ぶ樺太材も十有余年の風雪には抗し難く、そして、作者鹿島船長すでに亡し。そのトーテムポールの位置は、現女子寮

東側の1階出入口付近であった。



図 4-4 大島商船高等学校平面図（昭和 35 年）

第2節 寮生活と実習

1 睽生活

新制度による商船高等学校の第1回生は、昭和26年4月16日の入学生すなわち第54期生であった。この新制度は本科3年、専攻科2年の計5カ年の修業年限であった。これまでの商船学校は運輸省の所管であり、昭和26年4月1日をもって文部省所管となった。従ってこの年の入学生は文部省の学制に従った高等学校生徒となるわけであるが、商船学校（運輸省）の修業年限は5年6ヶ月であったのに対し、商船高等学校（文部省）は前記のように5カ年の修業年限、しかも旧制の場合は卒業時に「甲二（甲種二等航海士・甲種二等機関士）」の海技免状が無試験で与えられたのに対し、新制度では単に国家試験（海技従事者国家試験）の受験資格が与えられるにすぎない。そこで学校としては、これら過渡期の生徒の取扱いについて保護者のアンケート等も参考にし、ようやく昭和26年6月に至って、第1回生に限り旧制度で取扱うことを決定した。したがって、昭和31年10月に専攻科卒業の第1回生は、商船高等学校の生徒でありながら、旧制度の商船学校生徒と同じく卒業時に「甲二」の免状が与えられたので、実際には第2回生すなわち55期生から本格的な新制度に切り替えられた。

この時期の寮生活も必然的に商船高等学校と商船学校の新旧両制度による生徒が混ざり合っていたわけで、昭和28年3月、商船学校制度最後の本科生が卒業して、同年4月から高等学校の生徒だけとなつたのである。しかし、この間における寮日課等に関しては、別に変更されることなく、従前どおりの寮日課が実施された。

○冬季日課（10月1日から4月16日）	07:40	朝食
06:30 起床	08:20	登校
06:35 点検・体操	08:30～12:20	午前授業
06:45～07:05 掃除	12:30	昼食
07:05～07:30 洗面	13:30～16:20	午後授業

17:00 帰寮点検・夕食	07:40 朝食
18:00～21:00 自習 (19:20～19:30 休憩)	08:20 登校 08:30～12:20 午前授業
21:30 巡査	12:30 昼食
21:45 消灯	13:30～16:20 午後授業
○夏季日課（4月15日～9月30日）	17:30 帰寮点検・夕食 18:30～21:00 自習 (19:50～20:00 休憩)
06:00 起床	21:20 巡査
06:05 点検・体操	21:45 消灯
06:15～06:35 掃除	
06:35～07:00 洗面	
07:00～07:30 自由自習	

なお、日曜日（休日）にかぎり起床、06:30（夏季）07:00（冬季）、外出許可は08:00から、帰寮点検は17:45、入浴日は月・水・金の週3回、土曜日の自習は自由自習、土曜日の放課後から外泊許可（但し日曜日17:45までに帰寮できる距離にある三親等以内の家庭に限る）、大掃除は金曜日。また、外出時の服装は島内では白のジャンパーが許されており、島外外出には正服着用となっていた。島外外出者は規定の書式に従い、「島外外出届」を当直教官に提出して許可を受け、また外泊者は規定の書式による「外泊願」を級主任に提出して許可を得た後当直教官に提出することになっていた。また、病気のための就床、離床についてもその都度、当直教官または週番生徒に届けることになっていた。

一方、専攻科生は第2学年次の後期6ヶ月が席上課程で、この期間中は本科生と同じ寮生活が建前となつており、第二寮がこれに当てられた。第二寮における専攻科生の寮日課は次のとおりである。

○専攻科生寮日課	12:30 昼食
07:00 起床	13:30～16:20 午後授業
07:10 点検・体操・掃除	17:00 夕食
07:40 朝食	16:30～21:00 自習
08:20 登校	21:20 巡査（土・日に限り22:10）
08:30～12:20 午前授業	

専攻科生に関しては、日曜日の夕食を17:45とし、土・日曜日の外出は22:00まで許可された。大掃除は月曜日に校舎を、金曜日に寮を実施した。外泊は土曜日または休・祭日に、所定の手続きを経て許可を受けることになっていた。入浴日は月・水・金の週3回、土・日曜日の巡査に限り22:10まで延長された。このように専攻科生に対する寮日課は本科生に比べ幾分ゆるやかなものではあったが、運用上種々の問題があつて、1年足らずで下宿が許可されることになった。以後、順次下宿生活に移行し、寮生活は全面的に打ち切られることになったのである。この頃の下宿代（部屋代）は初めのうちこそ千円程度であったが、毎年値上がりし、昭和45年頃には5千円にもなったという。下宿生活とはいっても、食事は学校の食堂を利用していたので、その方の苦労はなかったわけである。

2 実習生活と就職状況

商船高等学校時代の実習には短期実習と長期実習があり、短期実習は航海・機関とも1、2年でそれぞれ30日間、計60日間を航海訓練所の練習船で行うことになっていた。

このように座学と練習船実習を交互に実施するいわゆるサンドイッチシステムが採用されたのは、低学年

期における慣海性の涵養と効果的修得を意図したものであったが、もし病気などのために乗船できなかつた場合には、卒業までのあいだに改めてその分を補わなければならなかつた。短期実習の乗船には、練習船がわざわざ本校沖合まで迎えにきてくれたり、或いは本校練習船で宇品港まで出向いて碇泊待機中の練習船まで送りとどける等、短期実習ならでの風景であった。

長期実習については、航海科は練習船実習1年、汽船（社船）実習6ヶ月の計1年6ヶ月で、練習船は、航海訓練所の帆船「日本丸」・「海王丸」、汽船「進徳丸」・「大成丸」・「北斗丸」・「銀河丸」等であった。その実習内容については、航海訓練所規則にもとづいた「実習訓練に関する教授会の申し合せ」にしたがつて実施された。

一方、機関科では練習船実習6ヶ月、工場実習6ヶ月および汽船（社船）実習6ヶ月の計1年6ヶ月の実習が課せられ、本校が依託した認定実習工場は播磨重工業（株）呉工場、（株）広島三菱造船所、（株）下関三菱重工業ならびに（株）長崎三菱造船所の4カ所であった。各造船所への割当てについては、生徒の希望なども勘案し甚だしい不均衡を生じないように特に配慮された。各造船所の入所式は4月初旬で、入所後の起居は長崎造船所では鞆の浦寮、下関造船所では至誠寮および広島造船所では観音寮など工員寮の一室または二室が与えられた。特に呉造船所の実習生に対しては、本校所管の寄宿舎があつて、昭和34年、大蔵省に返還するまではここに寄宿し、その後は商船大学の寄宿舎に移り、さらに間もなく造船所の廣寮（工員寮）に入寮することになった。

以上のように商船高等学校時代は、本科修了後1年6ヶ月は実習生として社会に出、残余の6ヶ月は再び学校に帰って席上課程を履修するという制度になっていたのであるが、実習生の中には、最後の汽船（社船）実習の下船日が航海の都合でうまくいかないために、10月の席上課程の開始日に遅れて帰校する者もいた。

ここで当時の海運界の状況にふれておこう。昭和25年6月の朝鮮動乱勃発によって俄かに活況を呈した海運界であったが、昭和27年に休戦成立の見通しとともに世界経済は沈滞し、海上運賃は下落して海運界は再び未曾有の不況に見舞われることとなった。しかし、昭和30年になると世界経済は次第に景気を回復し、海運市況にも上昇の気運が兆しあじめ、運輸省は保有船腹450万総トンの船腹拡充5カ年計画を発表、さらに昭和31年には2年続きの豊作、鉄工生産の急騰、貿易規模の拡大等々、日本経済は「神武景気」、「高原景気」を謳歌するまでに至った。しかもこの年に起こったスエズ動乱は忽ち世界的なタンカー不足を招き、大型タンカーの建造が相次ぎ、わが国は世界造船実績進水高において世界1位を占めるまでになった。

昭和36年（1961）、日本経済は未曾有の高度成長を記録し、運輸省もまた外航船腹400万総トン建造の船腹整備5カ年計画を発表するなど、海運・造船は飛躍的な成長と発展への道をめざして、船舶の大型化、高速化、自動化など技術革新の新時代を迎えることになったのである。

昭和33年、わが国最大の鉱石専用船「剛邦丸」（46,736重量トン、飯野海運）竣工、昭和34年、輸出量戦前水準に回復、昭和36年、世界初の自動化貨物船「金華山丸」（三井船舶）就航、そして昭和37年世界最大のタンカー（当時）「日昇丸」（出光興産）進水等々はなやかな新造船のニュースが相次ぎ、世人の注目と歓声を浴びたのもこの頃のことであった。

因みに、昭和34年度から昭和43年度までの10年間における海運会社の本校卒業生に対する求人率は表4-5のとおりである。したがつて専攻科生は卒業までに就職先も全員内定し、甲二以上の海技免状を受け、船舶職員としての晴れの人生航路に船出するわけである。

表4-5 海運会社の求人率（%）

年度（昭和）	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	平均
航海科	120	250	330	180	280	390	220	240	280	250	254
機関科	350	340	420	350	340	450	340	330	360	280	356

3 寄宿舎（小松寮）の落成

寄宿舎としては、旧商船学校時代からの木造2回建の第1寮と第2寮（昭和17年度から昭和18年度にかけて建造されたもの）のほか高等学校時代に新築された南寮（現在の男子寮、小松寮、昭和39年10月着工、昭和40年5月25日竣工）、さらに高専時代に建造された北寮（現在の女子寮、5階建）がある。

南寮の建設位置はもともと塩田として使用されていたために地盤が軟弱であった。そこで、学校敷地とするために、旧校長官舎に隣接する北側の山土をもってトロッコ運搬で長い年月をかけて埋立て造成したのであるが、その後次第に地盤が沈下して、昭和17年8月27日の台風では運動場の水位が2mにも達し、昭和19年、24年、25年および26年と相次いで当地を襲った台風のたびに校庭は一面に冠水し、各所に被害を蒙り、地盤の低さに泣かされたものである。したがって盛土を兼ねて、当時高潮時にはボート等舟艇の出入りさえもできない程に干上がっていたポンドの浚渫作業も行って、一石二鳥の盛土がおこなわれ、かれこれ1m近く嵩上げすることができたわけである。こうして鉄筋3階建ての洒落な寮が建設されたのであるが、この寮は総面積3,786.44m²、定員4名の居室90室、それに当直教官室、週番室、タクマ式自動ボイラ室、食堂、浴室、洗面所、便所及び倉庫等を含んでいた。しかし、この施設のうちのボイラ室、食堂、および浴室は高等専門学校昇格と同時に取り壊し、学生増に備えて居室等に改装され、南寮の間取りができるようになったのである。（なお昭和45年4月3日には北寮の竣工式が行われ、5階建ての北寮は小松が浜にその威容を誇り、ここにおいて全学収容の学寮が完成した。）

寮の区分については、南寮は低学年即ち1年、2年、3年生の居住区、北寮は4年、5年生の高学年寮として使用された。

もちろん、日々の寮日課も南寮と北寮ではやや異なっており、北寮では年齢相応の自治的要素をかなり取り入れた日課となっていた。なお、昭和47年12月3日には低学年用2階建12室（1室6名定員）が増築された。

第3節 学校施設等

1 学校施設・設備

高等学校の施設配置図は図4-5（昭和40年、1965）のとおりであるが、これにもとづいて以下各施設・設備の概要を説明する。

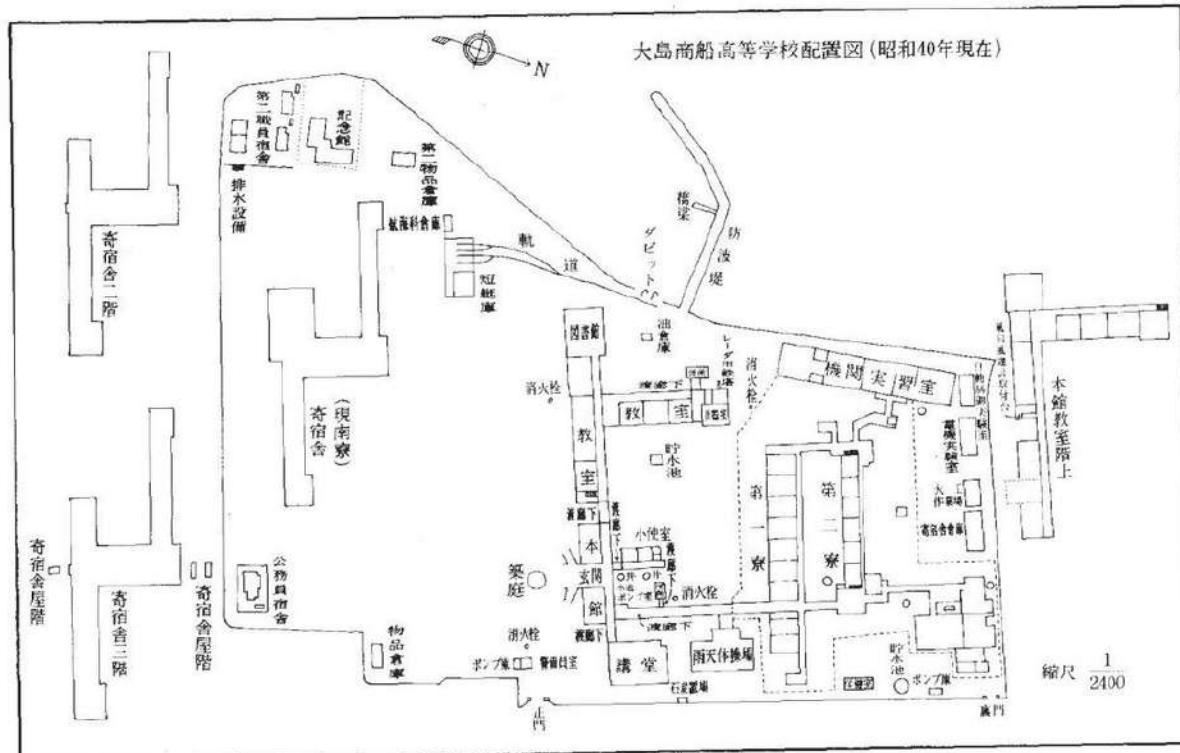


図4-5 大島商船高等学校平面図（昭和40年）

1-1 機関工場

昭和18年に建造された木造平屋建（254坪）の工場は、現在の位置でいえば舟艇器具庫から第三職員宿舎の海側にかけての海岸沿いの一角にあって、南側から順次、仕上工場、鍛造工場、鋳造場、ボイラ室および運転実験室の5区画があった。しかし、この木造建物は台風による度々の冠水（海水）や白蟻の被害等のため柱や梁の老朽も一段とひどく、そのため昭和34年12月に北側の運転実験室とボイラ室を除く老朽区画が経費37万円で取り壊され、その跡地に昭和35年2月、写真のような鉄骨組立ての平屋建210坪（991万円）が新築された。しかし、7年後には商船高専への昇格が実現したために、その内部設備の大部分を新設実習工場に移設した後、解体された。

1-2 艇庫

昭和29年12月16日に竣工した約 257m^2 の木造平屋建で建築費200万円、一段と高くなった床板張りの技業室とコンクリート床の舟艇並びに器具庫があり、板張りの一角は実習係員の控室になっていた。この艇庫からダビット（昭和23年3月設置）の処まではボート出し入れのためのレールが敷設されていた。現在の寮のボイラ室のあたりである。ダビットによるボート揚げ降し作業は、当初生徒の手によって行われていたが、その後3トン巻電動油圧ワインチに切替えられた。このワインチについては、昭和39年2月、下関三菱造船所から購入したものであるが、当時、我国では電動式に代わって電動油圧式機械の優秀性を評価する機運が高まっていた。下関三菱造船所はいち早く油圧ワインチの開発に乗り出し、三菱福岡工場制三菱ジャネーポンプを用いた三菱電動油圧ワインチの製作に成功した。本校は209万円でこの新製品一式を購入した。

1-3 練習船

商船高等学校時代に活躍した練習船を年代順に挙げてみると、「大典丸」、「大徳丸」、「はるかぜ」、「ちどり」(第1船から第3船まであった)、さらに初代「大島丸」と続く。まず、「大典丸」であるが、これは商船学校時代を経て商船高等学校時に至る長期間に亘って活躍した僅か6トン程度の木造の小機艇であるが、卒業生にとっては最も馴染みが深く懐かしい練習船である。昭和4年、御大典に因んで命名、進水し、昭和41年2月に売船されるまで、あるときは練習船として、あるときは交通艇として大いに活躍した。エンジンは10馬力の焼玉機関で、始動が振り掛け式であったため始動にかなりの力と要領が必要で、これを始動できる生徒はごく限られた生徒だけであった。その後、昭和29年8月18日、井川ヤンマー(大島)から購入の20馬力ヤンマーディーゼル機関に換装され、空気始動になったので取扱いも随分と楽になった。

1-4 校舎ならびに図書室等

昭和18年4月1日、新校舎落成式が挙行され、新校舎に移転することとなったが、竣工当時の概要については、本館190坪(昭和17年度予算で建築中だった第1寮と本館が骨組みを組んで順調に工事が進んでいた矢先の8月27日、台風に見舞われてすべてが倒壊してしまった。従って、その後の工事は柱を約30cm短くしたために、他の部分に比べて低くなってしまった。教室(普通教室14室294坪、特別教室3室93坪)、雨天体操場(80坪)、航海技業室(20坪)、機関工場(254坪)、寄宿舎(34室512坪、宿直室(20坪)病室(20坪)食堂および賄所(82坪)、浴場(17坪)、洗面所(12.5坪)運動場(5,500)坪、図書室(これは県立時代の講堂を移転改築したもので、高校時代の昭和40年度総蔵書数12,600冊であった)。

1-5 寄宿舎

昭和40年5月、3階建て鉄筋コンクリートで総面積3,786.44m²、総工費930万円の寄宿舎が完成し、職員・生徒に公募して「小松寮」と命名された。台風来襲(昭和24年6月20日の暴風雨、昭和25年9月24日のキジヤ台風、昭和26年10月14日夜半当地方を通過したルース台風など)のたびに1m余の冠水被害に悩まされたという経緯があって、敷地造成には多量の盛土が必要であった。

ところがポンド(係船場)が浅すぎて干潮時には9mカッターでさえ底が当たって出し入れがしにくいという状況であったために、ここを浚渫して海底泥土をポンプアップし、これをもって南寮敷地を造成すればまさに一石二鳥であり、このようにして約1mに及ぶ地揚げ工事が進められた。もともと地盤が軟弱であったために、30mの鉄筋コンクリート柱数百本が打込まれ、これがコンクリートで固められてようやく基礎工事が完了した。当時、3階建ての鉄筋コンクリート建物としては、この寄宿舎が旧大島町唯一最大のもので、竣工披露には老若男女の見学者が殺到したほどである。

「小松寮」は1室4人の定員で、旧寄宿舎に比べれば別世界の感があった。その上食堂等給食設備は完備し、田熊汽罐製造(株)製の「クレイトンスチームゼネレータ」(型式R0-15、蒸発量253Kg/hの自動ボイラ)によって炊飯も至便かつ迅速に行われるようになった。その後昭和45年3月、部屋数増の一部改装工事施工に伴い、このボイラ室と食堂・厨房区画はともに学生居住区となったが、現在の男子寮1階南の西側区画がそれである。なお、前記のボイラは当時の機関工場蒸気タービン実験室に移設されている。

この「小松寮」への移転後は毎朝の総員起こしと集合、点検および体操はすべて3階屋上中央広場で実施することとなり、朝の清々しい空気を吸いながら小松が浜を背に、立ち並ぶ民家を見渡して「点検終り」、「掃除かれ」の号令で一日の日課がスタートした。しかし、昭和37年に入学定員が40名となり、昭和40年以降生徒数240名となってからは、屋上での点検、体操が不可能となって、体操は中止され、点検も教官による巡査形式に変更された。

1-6 消防ポンプ庫

昭和29年に建てられた4坪程度のもので、現在の職員宿舎の北側入口（旧裏門）の位置にあった。商船学校当時は旧式の手押しポンプを酷使したものであるが、昭和28年2月、本校に初めて機動消防ポンプ5馬力（東京発動機製、価格15万円）が購入され、このポンプはその後数回に亘って民家の火災に出動して活躍した実績がある。なお、その後昭和30年頃、ロビンエンジン（富士重工製）17馬力の消防ポンプを購入、昭和41年まで活躍したが、ポンプケーシング不良（鋳物巣あり）のため廃棄処分した。続いて昭和40年3月、8馬力（東京発動機製、価格21万円）、昭和41年12月、25馬力（富士重工製、価格23万円、昭和49年3月、8馬力（東京発動機製、価格33万円）がそれぞれ購入され、計3台の機動ポンプが新設消防ポンプ庫（現艇庫の北側）に収納され、有事の出動に万全を期している。

1-7 病室（保健室）

昭和31年10月、木造15坪の平屋建（建築費42万円）病室が旧消防ポンプ庫に隣接して建築された。ベット数が3のほかレントゲン室と診療室があった。しかし南寮（現男子寮）への移転とともに解体され、その跡には現在の職員宿舎（4階建）が建てられている。当時は生徒が病気になれば夜具一式とともに直ちにこの病室に移されたものである。また、生徒・教職員のレントゲン撮影や夏期の予防注射時には、この病室もたいへん賑わったものである。

1-8 電気実験室

昭和33年12月竣工の30坪の木造平屋建実験室で、建屋は創立60周年記念事業協賛会からの寄付金で建築されたものである。実験装置としては、三菱ダイヤディゼール駆動の並行運転用25kW交流発電機2基のほか、交流・直流の各種機械や機材が設備され、生徒の実験実習に使用するほか、停電時における賄用電力を自家発電して供給していた。なお、室の一部を間仕切りしてアムスラー万能試験機等を設置し、材料実験室としても使用されていた。これらの機械は、高専昇格時に電工実験室と材料実験室にそれぞれ移設されている。

1-9 自動制御実験室

昭和38年3月竣工の約30坪の木造平屋建。現在の第3職員宿舎地区の最西側（海側）の一角にあった。実験装置としては、富士電機（株）が教育用モデルプラントとして開発したプロセス制御装置一式があり、制御方式としては空気式と電気式とがそれぞれ採用され、当時としては本校が他に誇る実験装置の一つであった。この装置はそのまま高専昇格後の校舎の制御実験室に移設された。

1-10 第1職員宿舎

小松北二の高台に昭和20年12月に、木造平屋建6戸が竣工、内4戸が昭和39年、老朽のため取り壊され、その跡地にブロック2階建2棟が昭和41年に建築された。

1-11 第2職員宿舎

昭和33年12月竣工、 56.46m^2 2戸、 33.12m^2 2戸1棟。

1-12 その他の施設

(1) 炊事員控室

高校時代の食料倉庫（第3職員宿舎入口付近にあった）の一部を間仕切りしてこれに当てられていた。ここは、職員の休憩室であるとともにミシン1台が据えられ、賄婦が休憩の合間に生徒の作業衣の補修を行っていた。この時代の賄員は6人で、朝5時半までに1人早番で段取りをし、6時半に全員が出勤。夜は夕食

の後始末と翌朝の支度をしてほぼ7時45分頃に当直員1人を残して退出。当直員は20時に生徒のお茶汲みが終わるのを待つて賄所を閉鎖、帰宅した。

(2) 用務員室

当時は小便室呼んでいたが、ここは面積20坪の平屋で渡り廊下によって本館に接続され、職員用浴室、台所のほか8畳2間があり、当直室や職員の休憩室などに利用された。当時は校内にポストがなかったので、生徒の郵便物発送はここで引き受けていた。

(3) 大工作業場

当時はほとんど木造建物であったため、15坪の木造平屋建の大工作業場が電気実験室に隣接して建っており、大工1名が勤務していた。

(4) 守衛所

現在の女子寮側門は高校時代には正門だった所であるが、その正門を入ってすぐ左手（南側）に約4坪の守衛所があった。当時の勤務体制は3人交代制で、Aは日勤（8時～16時30分）、BとCは午後4時半に出勤して翌朝（16時30分～8時）まで勤務した。ただし、B・Cの夜勤（巡回）は一日交代とし、これを5日周期で交替勤務する仕組みになっていた。

(5) 水道ポンプ室

当時、町内には簡易水道施設がなかったため、学校では昭和29年3月に3m²のポンプ室を設け、3馬力電動直結多段タービンポンプ2基を据えて地下水を汲み上げ、これを15m²鉄塔上の高架1トンタンクに貯水して校内各所に給水するとともに、消防用水としても直接供給できるよう配管されていた。

(6) 油倉庫

機関科倉庫として面積5坪の油倉庫が昭和27年12月完成した（建築費35万円）。現在の舟艇器具庫横の高架道路下のトンネル入口付近にあった。

(7) ボイラ室

南寮（現男子寮）ボイラ室（34坪、工費361万円）は昭和43年3月に建設され、田熊汽罐製造（株）製の田熊ボイラ（WH-100、蒸発量1,487kg/h）1基が据付けられたが、昭和45年寮暖房工事施工にともないさらに同型ボイラ1基と浴室給湯用の温水ボイラ1基が増設された。

(8) ダビット

ポンド岸壁にあったダビットは、旧海軍の払下げ品で昭和23年3月、約8万円をかけて設置されたものであり、高校時代はボートの揚げ降ろし作業にすべてこれを用い、ここから旧艇庫まで軌道が敷設されていた。このダビットは、寮区域海側の県道バイパス工事が行われた時に撤去された。

(9) 罹災教室

昭和40年1月21日夜半、本校始まって以来の火災が発生し、当時の木造2階建西側教室を1階・2階ともほとんど焼失した。2階は専攻科生教室2室で、階下が化学教室と暗室、北端が航海科模型室であった。この罹災教室は昭和41年、一旦改築されたが高専現校舎に移転後に解体された。

2 練習船「大島丸」初代の竣工

初代「大島丸」は昭和33年12月、今治市の来島船渠株式会社で竣工、12月24日、本校沖合に回航、初めてその純白の勇姿を我々の前に現した。本船は総トン数56トン、船体は平甲板型で油圧操舵装置並びにレーダーを搭載し、主機関は6気筒4サイクル赤坂ディーゼル220馬力で、速力は最大11ノット、逆転装置はミーツアンドワイズクラッチであった。

発電機は三菱ダイヤディーゼル駆動の三相交流発電機25キロワット1基を備え、その他実習船に相応しい最新の設備が整えられていた。建造費は最終的には1,900万円であった。本船の就航によって実習航海の航海区域も大幅に伸び、遠く大分方面から琴平方面にまで及ぶようになったが、高専昇格に伴い、昭和44年、船齢10年余にして井森組（柳井市）に売却された。

第5編 国立大島商船高等専門学校（第1期）

昭和42年（1967）～昭和60年（1985）

第1章 国立大島商船高等専門学校の発足

第1節 発足の経緯

1 国立工業高等専門学校

戦後の学校教育制度において当初は、上級技術者の供給源である工学系大学と初級技術者（技能者）の供給源である工業高等学校が設置されたのみで、戦前に存在した工業専門学校のようないわゆる中級技術者の養成施設としては、工業系の短期大学のみであった。しかし短期大学の二年という教育期間では、大学並みの幅広い一般教養と専門知識・技術を習得した即戦力の中級技術者の養成にとって十分ではないとの指摘があった。

例えば、日本経営者団体連盟（日経連）の教育委員会が1956年（昭和31）12月に発表した「新時代の要請に対応する技術教育に関する意見」では、「産業界においては、戦前旧制工業専門学校の供給した中級技術者は、今日の産業界においてもその必要性を痛感しているが、現在の二年制短期大学では到底この要求を満足しえない」とし、中学校卒業を入学資格とする5年制の新しい高等教育機関を設置すべきであるとの意見を述べている。

そこで、中央教育審議会が1957年（昭和32）11月11日に答申した「科学技術教育の振興方策について」の「短期大学における科学技術教育について」の項で①短期大学の目的・性格を明らかにし、その制度および内容の改善を図ることと、②短期大学と高等学校を合わせた五年制または六年制の技術専門の学校を早急に設けることを提唱している。

文部省はその答申を尊重し、1958年（昭和33）3月、「学校教育法の一部を改正する法律案」（いわゆる専科大学法案）を国会に提出し、短期大学の恒久化を図るとともに中級技術者養成のための専門教育機関を創設することを明らかにした。しかしこの法案は、専科大学を四年制大学とは別個の目的を有する高等教育機関であるとしたため、短期大学をあくまで現行制度における大学として恒久化することを望んでいる短期大学関係者の強い反対にあって審議未了となり、その後も再三国会に提出されたが、ついに成立しなかった。

しかし、1960年（昭和35）の国民所得倍増計画をめぐって、技術者養成に対する各方面からの要請がますます活発になると、文部省は短期大学恒久化の問題を切り離し、新たに工業教育を主体とする高等専門学校の創設について、翌年4月学校教育法の一部改正案として提出した。そして同年6月17日改正学校教育法が公布施行され、1962年（昭和37）4月に「工業高等専門学校」（国立12校、公立2校、私立5校、計19校）が発足した。

2 国立商船高等専門学校

商船教育関係では、1957年（昭和32）9月全国商船学校十一会（現：全日本船舶職員協会）が、「技術革新対応の必要上、商船学校の教育内容を充実し、専科大学もしくは短大に昇格せしむるべきである」との陳情を政府と関係各方面に行っている。当時、高等学校が三年制であるのに、商船高等学校だけは五年の教育期間（席上課程三年、練習船実習一年、汽船実習六ヶ月、さらに席上課程六ヶ月、いわゆるサンドイッチシステム）となっていた。しかし、文部省は実習期間を教育課程の枠外として単位認定していなかったため、席

上課程を六ヶ月延長して教育期間を五年六ヶ月とする「商船専門学校」にしようというのが、この十一会の提案であった。これは、前述の専科大学法案と絡めて、商船専科大学期成同盟結成運動にまで発展したが、同法案が廃案となったため陽の目を見るに至らなかった。

1962年（昭和37）工業高専新設と呼応して、商船高等学校を「商船高等専門学校」に昇格させる動きが急速に強まり、十一会をはじめとして学校所在県である山口、広島、愛媛、三重、富山の五県はもちろん、日本船主協会など海運関連機関・団体から早期実現の要望が相次いで出された。

1963年（昭和38）に運輸大臣の諮問を受けた海技審議会は、翌年7月28日に「商船高校教育は、近年における海運の発展および近代化に即応するために、教育水準の一般的高度化に対応して、教育内容を充実向上させが必要であり、そのためには現行の工業高等専門学校の制度に準拠することが妥当である」と答申し、文部大臣に建議した。

1964年（昭和39）12月から翌年2月にかけて、大島、広島、弓削、鳥羽、富山の五校所在の市・町と各校校友会は、それぞれ高専昇格期成会を発足させ、高専昇格の必要性と早急の実施を文部省、運輸省と国会議員に陳情した。

前述の海技審議会の建議を受けた文部省では、1965年（昭和40）5月19日商船高校を所管する初等中等教育局に調査研究会を設け、間もなくこれを大学学術局に移し、同年6月8日「商船高等専門学校教育の基準に関する調査研究会」とした。

また海技審議会の養成計画小委員会は、運輸省海運局の船員増強見通しを基礎に審議し、商船高校（商船高専）五校の1967年（昭和42）度全定員を700名とし、300名（航海科150名、機関科150名）の増員を決定し、同年7月海技審議会はこれを原案通り可決し、運輸大臣に答申するとともに文部大臣に建議した。これにより各校の定員は140名となり、工業高専（120名から160名）と同程度の規模となることと、五校同時昇格が計画上確定したのである。

1967年（昭和42）5月31日、第55回特別国会において、学校教育法とその他の関係法令の改正案が可決成立し、本校と他の4校（広島、弓削、鳥羽、富山）は商船高等学校から商船高等専門学校への昇格が承認され、国立大島商船高等専門学校は発足した。これは当時、海運業界、海技審議会（運輸省）などから高度の専門知識と技術を身につけた優秀な外航船舶職員養成のための商船高等専門学校創設の要望が強く出されていたためである。

翌6月1日に高専開校式が行われ、同年4月に入学した商船高等学校生徒は、ここに高専の第1期学生としての身分を与えられた。なお当初、新校長の発令・着任はなく、商船高等学校時の北村勝夫校長が本校学長事務取扱（高等学校校長併任）として発足時の諸事務執行にあたっている。

同年6月16日、初代校長に鮫島直人（東京商船大学名誉教授）が着任し、北村校長事務取扱は教務主事専任となる。

第2節 教育課程

1 修業年限と教育課程

わが国の産業経済の発展と科学技術の進歩に対応するため船員教育における授業内容の充実と向上の必要性が広く世間から要請されていた状況の中で、文部省は、工業高専設立時と同様に、1965年（昭和40）6月に商船高専教育課程の基準の調査研究に関する会議を省内に設置し、商船高専創設に必要な事項（教育課程、施設、設備等の基準）について検討を重ね、翌年10月には調査研究の報告をまとめ、同年12月「高等専門学校教育課程の標準の改訂および商船高等専門学校教育課程の作成に関する会議」を設け、1968年（昭

和 43) 3 月「高等専門学校教育課程の標準」が完成した。この標準をもとにして各校が指導計画を立て、独自の特色ある高専教育を実施することになった。

商船高専の修業年限は、船員教育の特殊性に鑑み、四年六ヶ月の席上課程と一年間の実習課程を合わせた五年六ヶ月とされた。そして、その間の一貫教育によって豊かな教養を身につけるとともに、船舶の航海、運用、船用機関の運転管理等に関する基本的知識と技術を習得させ、国際航海に従事するすぐれた船舶職員として必要な資質を養うことが目標として定められたのである。そのため席上課程において、一般科目は高校普通科課程と同程度とし、専門科目は大学と同程度の技術能力を養うことをめざして授業科目が整備され、いわゆる「楔形カリキュラム」として一般科目と専門科目を編成しているのである。

また実習課程では、航海学科は五ヶ月以上の帆船乗船を含む通算一年の航海訓練所での乗船実習が課され、他方、機関学科は三ヶ月以上のタービン船乗船と五ヶ月のディーゼル船乗船を含む同所での乗船実習と三ヶ月の民間造船所での工場実習が課されていた。

学科は、航海学科と機関学科の 2 学科 2 学級（各学級 40 名、1 学年 80 名）で発足した。1968 年（昭和 43）8 月運輸省の要請を受けて開かれた高等専門学校審議会の特別部会である「商船高等専門学校の基準に関する調査研究会」で審議され、翌年 4 月から機関学科が 1 学級増となり、1 学年 120 名、全定員 600 名となった。ちなみに、広島・富山では航海学科、弓削・鳥羽では機関学科がそれぞれ 1 学級増となっている。

その後、商船高専の教育課程は時代の進展と海運業界の情勢変化に伴って改訂されてきた。例えば、海運産業を再活性化し国際競争力を回復するために船員制度近代化政策を推進する必要に迫られて、1982 年（昭和 57）5 月船員法と船舶職員法が改正された（運航士制度の導入、当直限定免許制度の採用）ことを受けて、商船高専 5 校は「船舶職員法改正に伴う教育課程検討委員会」を設け、教育課程の改訂作業を行った。そして翌年度新入生から運航士の養成を目標とする航海機関両用教育が開始され、ここで機関学科では実習課程の工場実習が廃止され、航海訓練所での乗船実習に変更されたのである。

2 全寮制

当初から商船高専の学生寮は、単なる学生の厚生施設ではなく、船員として必要な資質を身につけることを目的とした教育施設であるとされた。なぜなら、商船教育における全寮制はわが国の商船学校開設以来の長い間の伝統であり、船上生活の特性に鑑みて船員教育においては不可欠のものとみなされてきたからである。したがってその維持のために、学寮費用に対する国費や公費の支弁が実施されたり、また全学生を給費生として食費・医療費の官給はもちろん、養成手当の支給が行われたりするなどの特別待遇が設けられたこともあった。

1969 年（昭和 44）機関学科の学級増を機会に、学生主事の所管であった寮生指導のために寮務主事が校内発令で新たに設置され、1971 年（昭和 46）に教務主事・学生主事とともに寮務主事が文部大臣任命となつた（3 主事体制の確立）。これにより学寮の管理運営と寮生の厚生補導を効果的に行う指導体制が整つた。

学寮は、高学年寮（北寮）と低学年寮（南寮）に分かれている。高学年（4・5 年）は、各室 1 名または 2 名（同学年）で居住し（横割り制）、低学年（1・2・3 年）は各室 3~4 名の居住で 3 年生の室長を置く（縦割り制）。全教官による輪番で、毎日 3 名（北寮 1 名、南寮 2 名）が当直して生活指導にあたり、事務官 1 名が当直して寄宿舎の管理に従事する体制である。

1965 年（昭和 40）に鉄筋コンクリートの「小松寮」が竣工した。翌年ボイラ室が設置されてスチーム暖房が実現すると、それまで下級生が行っていた石炭や石油の寮室への運搬やストーブの後始末は廃止、さらに 1969 年（昭和 44）9 月から寮食堂でのセルフサービス給食が開始されて、1 年生の配膳（食事当番）が

廃止された。

南寮日課表

日課	週番学生号令
	6:50 総員起し
	6:55 点検 5 分前
	7:00 点検
6:50 起床	7:10 点検終り、掃除かかれ
7:00 点検・掃除	7:30 掃除止め、用具おさめ
7:30 掃除止め	8:10 寮離れ 5 分前
7:30～8:10 朝食	8:15 寮離れ
8:15 寮離れ	12:55 整理当番かかれ
8:30～12:20 午前授業	13:05 寮離れ 5 分前
12:00～13:00 昼食	13:10 寮離れ
13:10 寮離れ	19:00 整理当番かかれ
13:20～16:10 午後授業	郵便物取りに來い
17:30～19:00 夕食	19:15 帰寮点検 5 分前
19:20 帰寮点検	19:20 点検
19:30 自習始め	19:30 点検終り
22:20 自習止め	19:30 自習かかれ 22:20 自習止め、整理当番かかれ
22:30 巡検	22:25 巡検 5 分前
23:00 消灯（天井灯）	22:30 巡検 22:40 巡検終り 22:55 消灯 5 分前 23:00 消灯

備考

- 1 日曜日および休日は 7:10 起床、7:20 点検。掃除を省略する。朝食後から 17:00 まで外出を許可する。但し、島外外出は本人の届出により 20:00 まで許可する。
- 2 土曜日またはこれに準ずる日の放課後から外泊を許可する。但し、原則として翌日の 21:00 までに帰寮できる範囲で、三親等以内の家庭に限り許可する。
- 3 土曜日の自習は自由自習とし、島外外出は 21:00 までとする。
- 4 入浴日は日曜日を除き週 6 日、原則として放課後から 20:00 までとする。

- 5 毎週金曜日を大掃除とし、掃除止めを 7:35 とする。
- 6 消灯後の食堂利用（自習室として）は、定期試験期間中を除き原則として 24:00 までとする。それ以後の利用は当直教官の許可を受けなければならない。
- 7 居室におけるスタンドの使用は 24:00 までとし、定期試験期間中にかぎり終夜点灯を認める。なお、いずれの場合も天井灯の消灯は 23:00 とする。
- 8 土曜日を除きテレビの視聴時間は 21:00 までとする。
- 9 每月、第 3 月曜日の 8:15 服装点検（または総員集合）を実施する。
- 10 この日課は昭和 47 年 4 月 1 日から実施する。

北寮日課表

日課		週番学生号令
7:00	起床	7:00 総員起し
7:05	掃除	7:05 掃除かれ
7:20	点検	7:15 掃除止め、点検 5 分前
7:30～8:10	朝食	
8:15	寮離れ	8:10 寮離れ 5 分前
12:00～13:00	昼食	8:15 寮離れ
13:10	寮離れ	13:05 寮離れ 5 分前
17:30～19:00	夕食	13:10 寮離れ
19:30～22:00	静粛時間	22:05 帰寮点検 5 分前
22:00	門限（帰寮時間）	22:40 点検
22:10	帰寮点検	22:55 消灯 5 分前
23:00	消灯（天井灯）	23:00 消灯

備考

- 1 点検は週番学生の先導により当直教官が実施する。
- 2 各階洗面所、便所、補食室の掃除はその階の学生 2 名が輪番で毎日実施する。
- 3 談話室の掃除は各室輪番で毎日実施する。
- 4 日曜日および休日は 7:15 起床、7:25 点検とし、掃除を省略する。
- 5 入浴日は南寮に同じ。
- 6 毎週金曜日を大掃除とする。
大掃除の実施要領、配置等については別に定める。
- 7 この日課は昭和 46 年 4 月 1 日から実施する。

第3節 教育施設の整備

1 校舎と体育館・グラウンド

大島商船高等専門学校の設置に伴い、学校敷地の買収、拡張工事と校舎等の新営工事が、急ピッチで進められた。高専の敷地は、高専設置基準で最低必要面積が 10 万m²と定められていたので、不足分の 7 万m²を補うため、隣接の塩田、宅地、畠地等を買収した。この買収にあたっては、地元大島町と山口県の協力が大であった。

1969 年（昭和 44）第一期工事（校舎、学生寮、第一体育館などの建設）と、翌年第二期工事（新校舎への移転、学生寮の増設など）を経て、1971 年（昭和 46）11 月 19 日校舎落成式と祝賀会が挙行された。

グラウンドは、1972 年（昭和 47）に竣工整備され、1976 年（昭和 51）に日本陸上競技連盟第四種公認競技場として認定された。

校舎と体育館・グラウンドの整備状況は、以下のとおりである。

1968 年（昭和 43）3 月 16 日 学校敷地拡張工事の起工式

1969 年（昭和 44）3 月 20 日 学校敷地造成工事の竣工

同年 10 月 28 日 第一期工事竣工（校舎・第一体育館・機関実習工場・艇庫等）

1970 年（昭和 45）3 月 30 日 第二期工事竣工（校舎・機関実習工場の増築、車庫等）

1971 年（昭和 46）11 月 15 日 武道場・プール新営工事の竣工

1972 年（昭和 47）10 月 31 日 運動場造成工事の竣工（400m トラック・野球場）

1974 年（昭和 49）3 月 30 日 荒天航泊実験室・テニスコート・野球場バックネット設置

第一体育館



2 図書館と電子計算機室（現・情報教育センター）

高専の施設として学生の自発的学習意欲の高揚と幅広い文化活動の指導研修の場として不可欠の図書館は、石油危機の影響による財政難のため建設予定が立たず、予算の内示を受けたのは 1975 年（昭和 50）度中であり、それまで蔵書の保管や図書の閲覧は校舎内の図書室で行われていた。また、当時の船舶の大型化や自

動化に伴い電子計算機の搭載船が急速に増加したことを踏まえ、五商船高専共通の特別施設として電子計算機設備を要求したところ、予算の内示があり、電子計算機室も併せて新設されることになった。

1976年（昭和51）7月に着工し、翌年3月図書館と隣接の電算機室が竣工した。

図書館は二階建てで、1階にはロビー、視聴覚教室、学生課事務室、談話室など、2階に書庫、図書閲覧室、会議室等が配置された。

図書館



3 寄宿舎

高専昇格後も、全寮制を継続することになったが、既存の小松寮だけでは収容できなくなり、1970年（昭和45）北寮（高学年寮）が完成した。その後、高専3期生から機関学科が1学級増設された1973年（昭和48）に低学年寮が増築された。

寄宿舎の整備状況は、以下のとおりである。

- 1965年（昭和40） 寄宿舎「小松寮」竣工、寄宿舎ボイラ室新設
- 1970年（昭和45） 北寮竣工、南寮食堂の居室転換
- 1973年（昭和48） 低学年寮の増築竣工
- 1982年（昭和57） 低学年寮改修竣工（2人部屋に改修）

4 練習船「大島丸」（二代目）

高専昇格に伴い、1957年（昭和32）建造の「大島丸」(56.96t)に代わる練習船が必要となり、1968年（昭和43）3月に練習船建造委員会が発足し、新造船の準備に入った。同年10月、他の四校よりも一年早く起工し、翌年1月進水、3月に竣工を迎えた。

二代目に「大島丸」の概要は、以下のとおりである。

船型 最低船首樓船

全長 41.50m 総トン数 327.97t

型幅 7.80m 型深 4.10m 定員 65名

しかし、当時の突堤は旧高校時代のもので水深が浅く、新船の接岸は不可能であった。そのため、約200m沖合のブイに係留していたので、学生、乗組員の乗下船や管理運営が困難であり、漁業組合への補償問題

を含め諸経費もかさむため、棧橋の新設が必要であった。

1972年（昭和47）10月に着工、翌年3月に大島丸係留棧橋は竣工した。なお、工事による海水の汚染や杭打ちに関し漁業組合からの補償問題が起ったが、数度の交渉により問題を解決した。

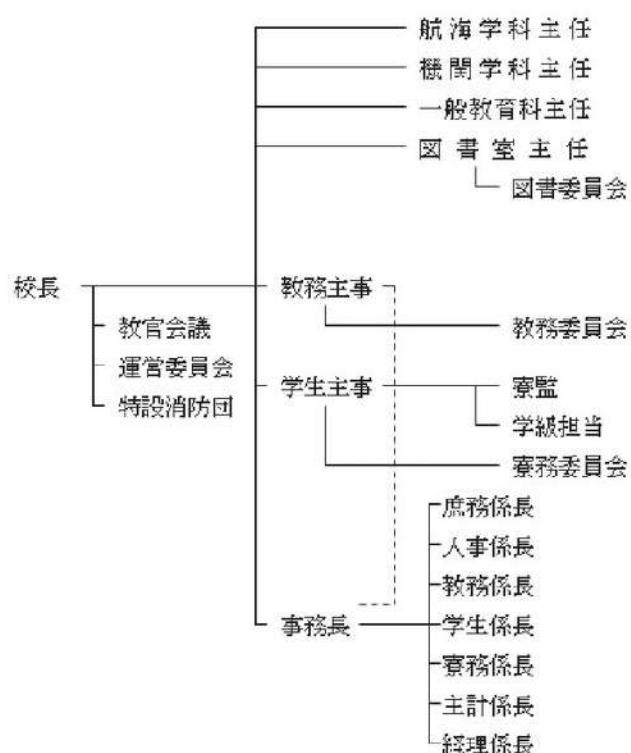
大島丸



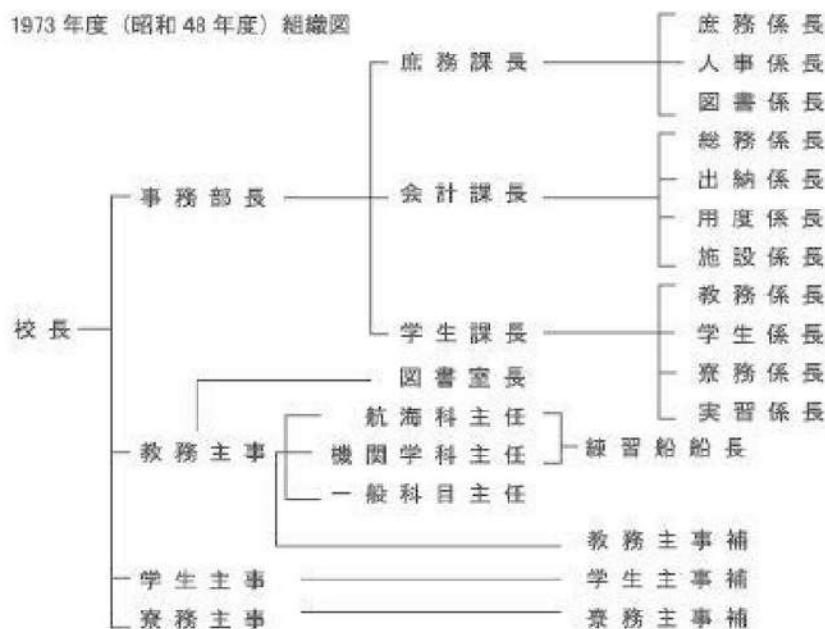
第4節 組織の編制

1967年（昭和42）6月高専発足にともない学校運営管理の組織体制も変革した。当初、校長のもとに教育研究部門では教務主事と学生主事の二主事が置かれ、航海学科、機関学科、一般教育科及び図書室にそれぞれ主任が任命された。事務部門では事務長をトップとして庶務、教務、学生、寮務、合計の五係が置かれた。1969年（昭和44）4月、全寮制を実施している高専における寮生指導の重要性に鑑み寮務主事が置かれるようになった。1970年（昭和45）4月事務部制が発足し庶務課及び合計課が新設された。さらに1973年（昭和48）4月に1学年3学級定員が5年次まで学年進行し学生総定員が600名を超えたのを機に学生課が新設され、事務部は三課十一係に再編成された。1976年（昭和51）4月図書館が新設され図書館主事が置かれた。主な年度の組織は次のとおりである。

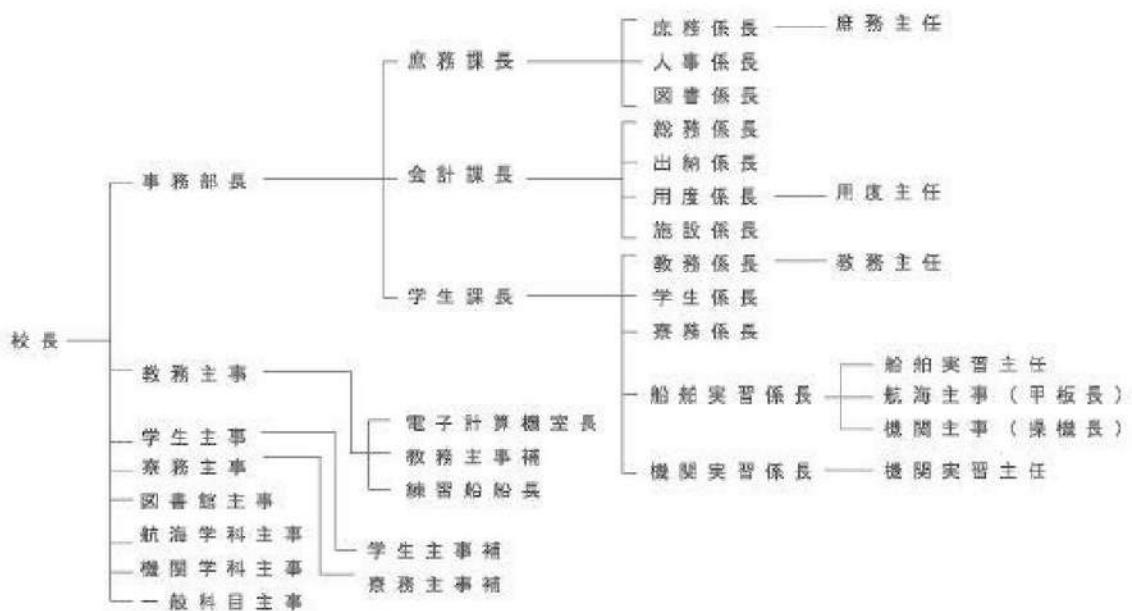
1968年度（昭和43年度）の組織図



1973年度（昭和48年度）組織図



1984年度（昭和59年度）組織図



第2章 学校行事と諸活動

第1節 学校行事

1 新入生オリエンテーション・合宿研修

新入生には入学後、学校概要、教務関係、学生生活、寮務関係などの説明会が二日間開かれていた。1970年（昭和45）度からはクラス内の親睦を深めるため、広島県の江田島青年の家で1泊2日の合宿研修を行うようになった。なお1985年（昭和60）からは山口県十種ヶ峰青少年野外センターに場所を変更した。

2 商船祭

1969年（昭和44）11月に第1回商船祭が行われて以来、毎年「文化の日」を中心に、学生会主催の文化行事が開催されている。前夜祭では仮装パレードが町内を練り歩いて気勢を上げ、当日は各種の研究発表や展示会、スポーツ競技、有志による音楽イベント等が行われる。本校学生だけでなく、近隣の住民や小中高校生が自由に校内を見学し、会場のバザーや喫茶店などが人気を集めていた。

3 校内マラソン大会

冬季のスポーツイベントとして毎年校内マラソン大会が実施されている。1月に朝食前の寒稽古（カッターニー訓練、柔剣道、ロードワークの種目別）があり、最終日に飯野山往復早朝ロードワークが行われた。こうして、1月末から2月初旬に校内マラソン大会が開催されることになった。1973年（昭和48）のマラソン大会では、前年までの10kmコースから、本校から志佐方面に向かい旧志佐トンネルを抜けて大島中学校の

横を通り、奥畑を折り返す 20km コースに変更された。学生は寒風の中を自身の体力と気力の限界に挑戦し、教職員の有志も共に走った。

4 三年生合宿研修（スキー合宿）

3 年生の合宿研修は、1976 年度（昭和 51）まで鹿野町の漢陽寺（2 泊 3 日）で行っていたが、翌年度からスキー研修に切り替わった。第 1 回は国立三瓶青年の家（島根県）で、1978 年 1 月 30 日から航海学科、2 月 1 日から機関学科に分かれて実施された。初日は、歩くスキーを青年の家周辺で体験し、翌日からはスキー場でゲレンデスキーに挑戦した。天候によってはスキーができず、民芸品の工作作業になった。

第 2 節 学生会

1967 年（昭和 42）4 月の入学生は商船高校の生徒として入学し、6 月 1 日の高専発足と同時に高専一期生となり、授業は直ちに高専教育課程に切り替えられたが、学生会はしばらくの間従来の組織と機構を引き継いで活動していた。

学生会会則と細則が制定されたのは、1970 年（昭和 45）4 月のこと、ここに高専としての学生会が正式に発足した。体育系クラブは同年から全国高専体育連盟に加入し、中国地区高専体育大会に参加するようになり、文科系クラブは中国地区高専文化連盟に加入し、他校との交流を深める活動をするようになった。

第 3 節 創立八十周年と記念事業

1 記念行事

1977 年（昭和 52）10 月 8 日から 3 日間、本校を主会場に記念行事が開催された。

まず同日 10 時 30 分から第一体育館において「記念式典」（出席者 758 名）が挙行された。式次第は下記のとおりである。

式次第

- 一 開式の辞
- 二 君が代齊唱
- 三 校長式辞
- 四 文部大臣祝辞
- 五 来賓祝辞
- 六 創立八十周年記念事業協賛会会长挨拶
- 七 校歌齊唱
- 八 閉式の辞

記念式典終了後、正午から大島町老人福祉センターで、来賓・同窓生等約 450 名の参加で「記念祝賀会」が挙行された。

13 時から航海訓練所練習船「青雲丸」の見学会が行われ、約 300 名（翌日約 900 名）の見学者があった。なお、青雲丸が沖合投錨であったため、練習船「ちどり」を見学者の交通艇としてピストン運航した。

翌 9 日 13 時から第一体育館で、「海は生命」の演題で永六輔氏による講演会を開いた。聴衆は 800 余名であった。

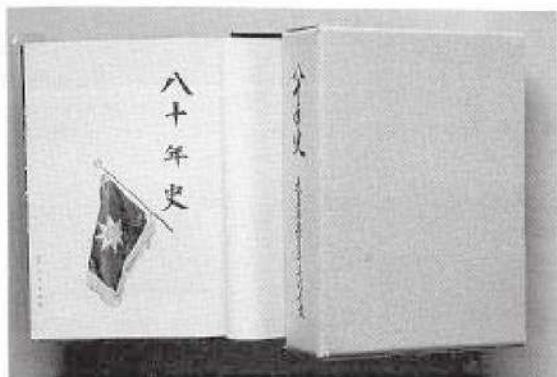
最終日の 10 日 14 時から第一体育館で、エリザベト音楽大学（広島市）学生による記念音楽会を開催した。入場者は 459 名であった。

また、9~10日の両日 10時から 16時まで、「学校公開」として航海学科・機関学科・一般科目の実験室、電子計算機室等が公開され、クラブ・同好会の発表会、バザー等学生会行事も実施された。

2 記念誌『八十年史』の発行

3年間に及ぶ編集作業を経て、1977年（昭和 52）9月 25 日、記念誌『八十年史』（A5版総頁 906 頁、収録写真 190 点）が本校 80 年の集大成として発行された。

1974年（昭和 49）9月 17 日、鮫島校長から八十周年記念史編纂委員として 15 名が任命され、翌 18 日に第一回編纂委員会が召集され、委員会名を「八十年史編纂委員会」と改称し、主査を大原教官、副主査を針本教官とすることが決定された。その後、人事異動等による委員変更があり、1976年（昭和 51）4月大原主査が教務主事に任命されたことに伴い、針本副主査が主査となり、また新委員を補充し委員構成を改組し、4月 22 日第 10 回委員会が開かれ、編集作業予定表が提示された。しかし様々な事情で作業が遅れ、全原稿と写真を一括して印刷会社へ手渡したのは、予定より約 2 カ月遅れの 1977 年（昭和 52）5 月 23 日であった。大著である『八十年史』が完成を見たのは、同誌あとがきにあるように故・針本主査の並々ならぬご尽力によるものである。



記念誌「八十年史」

第6編 国立大島商船高等専門学校（第2期）

昭和60年（1985）～平成15年（2003）

第1章 第一次改組・新学科「電子機械工学科」の誕生

第1節 新学科「電子機械工学科」の誕生とその経緯

1 学科改組の経緯

1983年（昭和58）4月に着任した南校長は、かつて11校あった商船学校が5校に統合されたことに鑑み、優秀な卒業生を送り出している本校といえども統廃合されることはあるので、学科の改組を行ってでも商船教育の火を消してはならないという強い決意を示し、本格的に改組に取り組むことになった。そこで、他の4校にも情報を提供し、1984年（昭和59）商船高専5校が足並みをそろえ、新学科の検討を行い、5校同時改組を要望した。

1984年（昭和59）1月21日の五商船校長会議で次のとおり確認された。

①5校とも改組にあたり、第2学級のある学科の第2学級を対象とする。

②船舶職員たりうる高専の航海・機関の学生入学定員は、400名が必要である。

③新設学科は工業系なので、学校名称は商船高等専門学校に固執せず彈力的に考える。

次に1984年（昭和59）3月8日の大学設置審議会に、商船高等専門学校校長会議の名で、下記の「商船高等専門学校学科改組について（要望）」が出された。

（1）商船高等専門学校の学科改組を要望する理由

1 商船高等専門学校は、学校教育法に定める国立の高等専門学校として、船舶職員を養成することを目的としている。しかし、海運産業からの求人は1976年（昭和51）を境に急速に減少し、卒業期に船舶職員として就職できる者の数が、著しく落ち込み、爾来、多少の変動はあるものの、希望する多くの者がこの職務に従事できない事態が続いている。

2 このため、1977年（昭和52）より入学志願者も目立って減少し、入学定員600名のところ採用500名程度に抑える措置をとり、高等専門学校の学力レベル維持を図ってきてている。それにもかかわらず、工業高等専門学校に比べ、中途退学者・留年者の高くなっている、学生の成業率（卒業生／入学者数）の向上が緊急課題となってきた。

3 将来にわたる全船舶職員の需給の在り方については、運輸省の専門機関の検討策定に待つほかないが少なくとも高等専門学校における養成規模については商船高等専門学校自体の問題としてとらえなければならない。最近における日本海運の国際競争力の低下は、新興海運国や社会主义国の国際海運への進出、コンテナ化普及による輸送技術の簡易化・均質化、低税制・低船員費の便宜置籍船の大量進出によるコスト競争、並びに世界的な産業構造の変化に起因すると考えられ、国際的な問題だけに早急な解決は困難である。日本船の国際競争力を回復するため、現在、我が国の官公庁が一体となって船員制度の近代化を目指して実験を進めているが、これは端的に言えば、高性能化船と少数精銳船員をもって対処しようとするものである。

4 以上のことから、商船高等専門学校における船舶職員となる者の養成規模は縮小して、教育方法・教育内容を改善して質的向上に最善を尽くすべきものと考える。同時に長い歴史の間に蓄積した知識・人材を活用して一部を改組し、広く社会が高等教育機関わけても高等専門学校に期待する新しい任務について、その責任の一端を果たすべきであると確信する。

（2）商船高等専門学校の学科改組の基本方針

1 資源の乏しい島国である我が国にとって、海運産業は国民の生活と福祉の向上を図るために不可欠な基幹産業の一つであるが、我が国の経済が高度成長期から安定成長期に移行したことを踏まえ、商船高等専門学校における船舶職員となる者の養成は、1969年（昭和44）の増員以前の規模、年間400名に戻すことが適切であるとの判断に立ち、各校は、航海学科・機関学科各1学級の規模として、その充実を図る。

2 改組による新学科は、各校のこれまで蓄積した特色を生かして、しかも、それが我が国の産業構造の変化進展に

沿う性格・内容であり、同時に将来の船舶運航の技術と深くかかわりのある分野であって、既存の学科と相連携し刺激し合って相互の発展の加速が期待されることが肝要である。

以上のことから、修業年限5年の工業に関するものとし、電子・情報・機械技術の総合エンジニアリングすなわち、メカトロニクス系又は情報系を考える。

3 商船高等専門学校は、歴史的に都道府県を越えた高域より学生を募っているが、この特色は維持すべきで、地域の工業高等専門学校の既設の学科との重合は、可及的に避ける学科を選ぶ。

4 商船高等専門学校の工業系学科を開設するに当たっては、法的立場と受け入れる学生指導の立場から学校名称について再検討の要があろうが、例えば商船工業高等専門学校のごとく、その呼称について弾力的に対応する。

(3) 現在計画している学科（案）

1 航海学科を改組するもの

学校名	現在	改組後
富山	航海学科（40名） 航海学科（40名）→ 機関学科（40名）	航海学科（40名） → <u>情報電子工学科</u> （40名） 機関学科（40名）
広島	航海学科（40名） 航海学科（40名）→ 機関学科（40名）	航海学科（40名） → <u>流通情報工学科</u> （40名） 機関学科（40名）

2 機関学科を改組するもの

学校名	現在	改組後
鳥羽	航海学科（40名） 機関学科（40名） 機関学科（40名）→	航海学科（40名） 機関学科（40名） → <u>機械電子工学科</u> （40名）
大島	航海学科（40名） 機関学科（40名） 機関学科（40名）→	航海学科（40名） 機関学科（40名） → <u>電子機械工学科</u> （40名）
弓削	航海学科（40名） 機関学科（40名） 機関学科（40名）→	航海学科（40名） 機関学科（40名） → <u>機械制御工学科</u> （40名）

3 計画している学科（案）内容の概要

別添資料に示すとおりである。（本稿において省略）

(4) 改組希望の年度

昭和60年度より改組できることを要望する。

2 機関学科の改組

1984年（昭和59）5月18日～19日、大島・弓削・鳥羽三商船高専の教務主事と担当者が大島商船高専会議室において機関学科改組委員会（仮称）が開催された。

そこで機関学科の改組について審議され、以下の結論に至った。

1. 学科名

電子機械工学科の線に沿う。

2. 授業科目（基本的授業科目及び通達要望単位並びに各校教育課程表）

別紙（1）

3. 施設

別紙(2)

4. 施設要求総額

総額 100,000 千円 (単位千円)

要求年次	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次
要求金額	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000

- ・数値制御工作機械
- ・実習用産業ロボット
- ・電磁気実験装置
- ・回路実験装置
- ・ロジックトレーナー
- ・教育用マイクロコンピューター
- ・信号解析装置
- など

5. 教官配置

機関学科からの移行 8人

定員増（純増） 2人

応用物理教官 1人

計 11人

6. 要望事項

- 1 改組学科名を「電子機械工学科」に統一した3校を初年度に改組していただきたい。
- 2 学生志願者数の少ない機関学科の改組を早くして、当学科の入学倍率を高め、質の向上を図るために、初年度に是非とも3校同時に改組をしていただきたい。
- 3 その為に、3校は活発な意見を出しながらも、小異を捨てて、大同についた。

別紙(1) 電子機械工学科教育課程表

授業科目名	履修単位数	基本的授業 科目単位数
応用数学	4	4
応用物理	4	4
機械力学	2	
材料力学	4	4
流体力学	2	2
熱力学	2	2
材料学	3	2
機械工作法	4	2
設計製図	8	8
計測工学	2	
制御工学	4	2
電気基礎	4	
電気回路	4	2
電気機器	2	
電子工学	2	2
電子回路	2	2
電子計算機	3	
情報処理	4	2

工作実習	6	6
工学実験	10	6
卒業研究	7	6
小計	83	56
履修選択科目	9以上	
合計	92以上	

※注 (1) 履修授業科目合計単位数の要件は、92 単位以上

$$(2) \text{ 充當率} = \frac{\text{基本的授業科目単位数(確保要望単位)}}{\text{履修授業科目単位数}} = \frac{56}{92} \times 100 = 61\%$$

別紙(2) 施設

応用物理実験室	90 m ²
機械学実験室	90 m ²
材料学実験室	90 m ²
熱流体実験室	90 m ²
機械工作総合実験室	180 m ²
制御システム実験室	90 m ²
電気実験室	90 m ²
電子実験室	90 m ²
計算機システム実験室	90 m ²
研究室	60 m ²
器材室	40 m ²
計	1,000 m ²

要求施設面積

$$1,000 \times 1.33 = 1,330 \text{ m}^2$$

また、次のような要望書が出された。

「機関学科改組についての要望書」

鳥羽・弓削・大島 商船高等専門学校機関学科改組委員会（仮称）

二度の機関学科改組についての3校合同会議（4月18日、5月18日、19日）の結果、学科名称、教育目標など、改組における諸問題について、基本的に統一見解を得ました。

改組学科名称を「電子機械工学科」に統一した3校を、初年度に同時に改組できることを下記理由により強く要望します。

- 1 志望学科として、クラス数が多く、比較的入学志願者の少ない機関学科の改組を早期に実現して、高専としての質的向上、活性化を図ることが必要である。
- 2 実施年度に差が生じた場合、次年度校には、機関学科入学志願者に、心理的悪影響を与え、志願者数の低下が予想される。
- 3 機関学科は、すでに工業界に多くの卒業生を送り実績を持っている。
- 4 以上の点で3校は、活発な意見を出しながらも、一齊改組の熱情に燃え小異を捨てて大同についた。」

3 電子機械工学科の設置

学科名称は当初、三商船高専とも電子機械工学科に統一された。

電子機械工学科の性格は、技術の根幹をなす機械工学の体系にエレクトロニクスを取り入れた、いわば機械工学と電子

工学との境界領域の技術に対応する新しい工学教育である。

したがって、将来のいわゆるメカトロニクス時代に対応するため、強度計算、エネルギー変換、材料及び機械製作等の機械工学の基礎的知識の上に、計測・制御、電気・電子工学の基礎的知識をもたせ、機械装置を含めた電子制御技術をもって、機械装置の知能化に十分な見識を与えることをねらいとしている。すなわち、5年間の一貫教育の特色を生かして従来の機械分野のみならず、電子工学の分野をも自己の専門分野として実際問題に取り組んでいける実践的技術者の養成を目的とする。

(1) 教育課程

表1 一般科目

区分	授業科目	単位数	学年別配当				
			1年	2年	3年	4年	5年
人文・社会	国語	9	3	3	2	1	
	倫理・社会	2					
	哲学	1					
	政治・経済	2			2		
	法学	1					1
	経済学	1			2		
	歴史	4	2	2		1	1
自然	地理	2	2				
	数学	18	7	6	5		
	物理	4	2	2			
	化学	4	2	2			
生物		2	1	1			
保健・体育		10	2	2	2	2	2
芸術	音楽	2	1	1			
外国語	英語	19	6	6	5	2	
	ドイツ語	4				2	2
計		85	28	25	18	8	6

特別教育活動	単位時間	学年別配当				
		1年	2年	3年	4年	5年
		90	30	30	30	

表2 専門科目

授業科目	単位数	学年別配当				
		1年	2年	3年	4年	5年
必修科目	応用数学	4				3
	応用物理	4			2	2
	情報処理	4	2	2		
	機構学	2			2	
	工業力学	2			2	
	材料力学	4				2
	流体力学	2				2
	熱力学	2				2

	材料学	3			1	2	
	機械工作法	2		2		2	
	設計製図	10	2	2	2	2	2
	計測工学	2			1	1	
	制御工学	4				2	2
	電気基礎	2		2			
	電気回路	2			2		
	電気機器	2				2	
	電子工学	2				1	1
	電子回路	2			2		
	デジタル回路	2				2	
	電子計算機	2					2
	計算機システム	2					2
	工作実習	6	3	3			
	工学実験	8			3	3	2
	卒業研究	8					8
必須専門科目計		83	7	11	17	26	22
選択科目	情報数学	1					
	振動論	1				1	
	流体機械	2				1	2
	油圧工学	1				1	1
	熱機関	2					2
	工作機械	2					2
	冷凍・空調工学	1					
	化学工学概論	1				1	
	システム制御工学	2				1	2
	センサ工学	2				1	2
	通信システム	2					2
	電子応用	1					
	ロボット工学	2				1	2
	品質管理	1					1
	工業英語	2					2
開設選択科目計		23				5	18
履修選択科目計		9	0	0	0	2	7
専門科目小計		92	7	11	17	28	29
一般科目小計		85	28	25	18	8	6
合計		177	35	36	35	36	35
校外実習		4年又は5年で2単位(選択)					

(2) 施設

表3 施設

番号	区分	室数	面積 m ²	関連授業科目
----	----	----	----------------------	--------

1	応用物理実験室	1	120	応用物理
2	機械学実験室	1	120	機構学, 工業力学, 振動論
3	材料学実験室	1	共用	材料式学, 材料学
4	熱流体実験室	1	120	流体力学, 熱力学, 流体機械, 油圧工学, 热機関, 冷凍・空調工学
5	機械工作総合実験室	1	180	機械工作法, 工作機械, 工作実習
6	制御システム実験室	1	120	計測工学, 制御工学, システム制御工学, センサ工学, ロボット工学
7	電気実験室	1	共用	電気基礎, 電気回路, 電気機器
8	電子実験室	1	120	電子工学, 電子回路, ディジタル回路, 電子応用, 通信システム
9	計算機システム実験室 器材室	1	120	電子計算機, 計算機システム
10	研究室 (20 m ²)	1	40	
11	製図室	3	60	設計製図
12	機械工場	1	共用	工作機械
13	電子計算機室	1	共用	情報処理, 電子計算機
14	廊下等	1	共用	
15			330	
				1,330

(4) 設備

表4 要求設備費

実験室名	(千円)
応用物理実験室	10,000
機械学実験室	10,000
材料学実験室	共用
熱流体実験室	14,000
機械工作総合実験室	10,000
制御システム実験室	10,000
電気実験室	共用
電子実験室	17,000
計算機システム実験室	12,000
器材室	400
	計 83,400

設備費総額 $83,400 \times 1.2 = 100,080 = 100,000$ (千円)

1年間の平均 $100,000 \div 5 = 20,000$ (千円)

総額 100,000 千円 (単位千円)

要求年次	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次
要求金額	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000

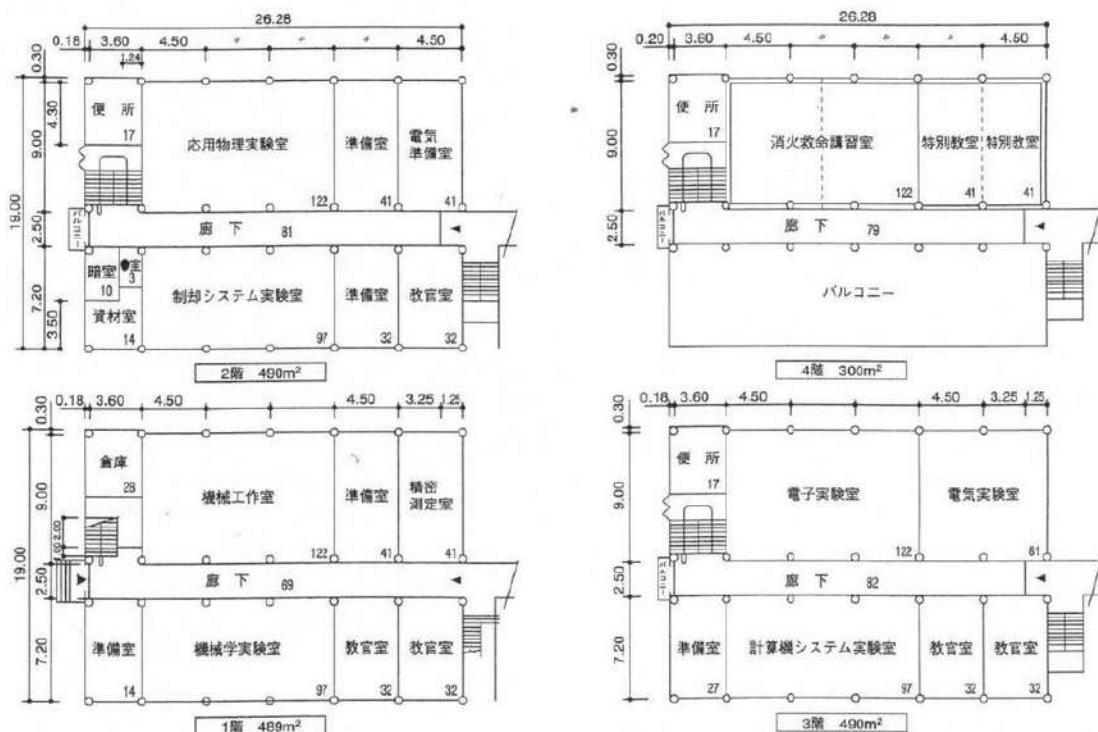
主たる設備

X線回折装置, 振動試験装置, 数値制御工作機械, シーケンス制御実験装置,

信号解析装置、回路実験装置、ミニコンピュータ等

(5) 電子機械工学科実験棟

図1 電子機械工学科実験棟平面図



第2節 寮制度の改革

1 新しい寮制度

全学全寮制は、管理運営や教育指導の面で様々な困難性を有するので、高専昇格後も何度も何度となく改革論・廃止論が持ち上がっていたが、商船教育において全寮制は不可欠なものがあるという商船高校時代とほぼ同様の理念に基づいて引き続き実施してきた。しかし1985年（昭和60）の学科改組により、従来の高級船舶職員の養成の他に、工業技術者を養成する電子機械工学科を開設するにあたり、その準備作業の一環として校内に全寮制度改善検討委員会が設置され、これを機会に全寮制教育の在り方を検討することになった。

この委員会では全寮制教育における様々な問題点を洗い出してその改善策を見出すこと、他高専の寮制度及び学寮の実態調査を実施し、本稿の学寮制度及び寮生指導の基本方針を確立すること等を目的として協議検討されたのである。その結果この委員会は1984年（昭和59）9月10日に「学寮運営の将来的構想について」と題する次のような報告書をまとめたのである。

学寮運営の将来的構想について（学科改組に伴う全寮制度の改善）昭和59年10月

大島商船高等専門学校全寮制度改善検討委員会

改善に至った経緯について：

商船高専における全寮制度は船舶職員を養成することを目的として全年全寮制度が維持されてきた。本校においては昭和54年4月に「商船高専における全寮制実施の必要性について」が編集され、これに従って全寮制の理念が確立維持されてきたものである。この中には船員の特殊性、特に離家族性、天象海象に対応する訓練等が中心になっている。しかし、4年生の長期に渡る全寮制度にはいくつかの弊害を生じてきている。

①近年における船舶運行技術の進歩により、仕事内容を科学的な思考過程のなかで処理していくという姿に変ってきて いる時代的背景の変化である。

②広汎の年齢の差がある。15歳から20歳までの学生を一律に教育することは、心身の発達段階から極めて困難である。

③長期間全寮制度を行うことは生活のマンネリ化を起こさせる原因となっている。ほぼ5年間にわたる全寮制度下の学生の実態を見ると、高学年になるに従い生活のマンネリ化や馴れ合いを生じ、更に長期間の同世代だけの生活は学生を無気力、無感動でモラルの低下を導き、いずれにしても長期間にわたる学寮生活はマイナス面を生じている。」

かようなことから商船教育における全寮制度は見直しの時期にきていたのだ。

近年船舶の運航技術の革新に伴い、船舶職員の需要が減少し、全員が船舶職員として就職できる状況でなくなり、多くの者が陸上の諸種の企業に就職している現状である。

このような状況の中で大学設置審議会高専部会においては、商船高専の航海学科並びに機関学科を各2組もつ学校はその1組を他の工業系学科へ改組することが検討され答申された。また海安審の教育部会も了承していることである。そうすると商船高専に工業系学科が設置されることとなれば、目的が船舶職員と同時に工業技術者の養成という二つになってくる。したがって学則もこれに応じて変わるであろう。

これらのことから従来の商船教育における全寮制教育の訓練は練習船実習の航海訓練所で教育を行うこととして、工業系学科を含む商船高専の寮制度は昭和43年3月13日付の文大技第230号各高専校長あての大学学術局長通達の「国立高等専門学校低学年全寮制の実施について」に示されている。国立高等専門学校低学年全寮制実施要項に従って本校の寮制度を考えるのが妥当であろう。船舶職員並びに工業技術者を養成することは立派な社会人を作ることであるので、明るく健康で規律正しい集団訓練によって教育効果を増進し、学生の教養と健康を高め、ルールとチームワークとモラルを重んじる気風を養うことを目的とした学校の管理運営する教育施設とする。したがって低学年の1・2年生全員を入寮させる。

本校の学寮制度のあり方：

船舶職員や工業技術者を養成することは立派な社会人を作ることである。ゆえに本校の学寮は学校の管理運営する教育施設として、明るく健康で規律正しい集団訓練により教育効果を増進し学生の教養と健康を高め、ルールとチームワークとモラルを重んじる気風を養うことを目的とする。

①低学年全寮制度

1、2年生全員を入寮させる。なお健康上の理由その他により校長が特に必要と認めた者及び保証人の家庭より通学できるものは別途考慮する。(南寮に別居させる。)

②高学年許可入寮制度

3、4、5年学生のうち入寮希望者に対して選考のうえ許可入寮を認める。(北寮に別居させる。)

なお健康上の見地又は寮秩序維持の見地より共同生活に支障をきたすと認められた者に対しては寮務委員会において審議し校長が退寮を命ずる。(この規定は別に定める。)

③離寮制度の導入

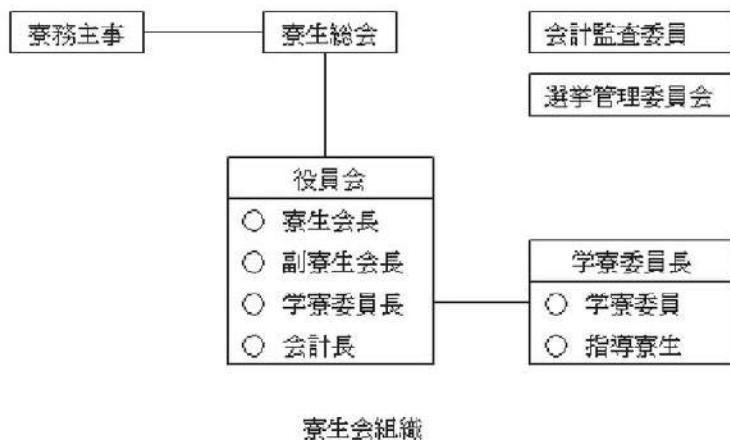
①の学生で健康上の理由その他必要と認めたもの及び保証人の家庭より通学できる者については寮務委員会で審議し校長に上申して校長が許可する。

④環境条件の整備

全寮制度の実施に当たってその効果をあげるために寮にかかる教官の定員、予算、施設、設備の充実整備は当然ながら必要とされる。(寮監、寮母)

全寮制度改善検討委員会は、以上のような学寮制度の改善案を作成発表し全体的な共通理解と合意を得よう努めた。学寮運営の基本方針と寮生指導の新しい目標を掲げて1985年(昭和60)4月1日学科改組によって電子機械工学科の開設とともに、全学全寮制から低学年全寮(高学年許可入寮寮制)へと移行したのである。更に全寮制の下での寮生組織は学生会の中の一部組織であったが、通学を認める状況が生じると学生会とは別に寮生のみで構成し活動する寮生会を発足させ各種の委員会活動を通じて寮生の自治的能力を高め、学寮運営を円滑にし寮生活をより有意義なものとするよう

新しい寮づくりを始めたのである。



1988年（昭和63）第二次学科改組により航海・機関の両学科が併合され商船学科となり、第二の工業学科として情報工学科が開設されることになり、女子学生の増加及び通学可能領域からの入学者が急増することが予測されたのである。こうした状況に対応するため、従来から要望されていた女子寮が、寮生が減少した男子寮の遊休区画を改修して、1988年（昭和63）4月1日第二次学科改組実施と同時に開設されたのである。

2 通学生と下宿生

明治時代の創立以来、本校の長年の間船員教育のみに徹してきたのであるが、1985年（昭和60）学科改組による工業学科の併設という一大転換期を迎えたのである。これによって学校の設置目的や教育目標も改訂され、そのための新しい対応が必要となった。種々なことがらの中でも、とりわけ女子学生の受け入れ開始と全寮制の改善は急を要する避けられない事柄であった。女子学生の入学については工業系の大学や高専ではもとより、商船大学でも既に開始されており航海訓練所の練習船においても女子学生の乗船実習の実績があったので公的教育機関としては早晚時間の問題であった。全寮制度の改善については学寮運営や寮生指導において種々困難な問題点も多く商船5校の間では、高専発足依頼度となく改善検討委員会が開かれたことはあったが、一致した結論は得られなかったのである。本校では学科改組を機械に、低学年全寮制・高学年許可入寮制に移行し一部通学も導入したことは前述したとおりである。ここに本校創立以来はじめて女子学生が入学することになり、また戦前（昭和初期）の一時期を除き、はじめて通学生が出現することとなったのである。こうした新しい事態に対応するため諸規制の制定や厚生補導面の施設・設備の整備が必要であった。

①諸規定の制定

改組以前の全学全寮制の下では学則、学生準則の他は学生の生活規範となるものは寮生心得等の学寮に関する規則のみで十分であったのである。しかし、新しい事態に対応するために、学生生活全般にわたって学生の順守すべき基本的な事項を定めた「学生心得」、男女学生の「制服に関する内規」、及び自転車やバイク通学に関する「車両通学に関する規則」等が制定されたのである。

②施設・設備の整備

自転車やバイクを利用して通学する学生のために、自転車置き場やバイク置き場を新設しなければならなかった。女子学生用の更衣室や便所の親切、男子通学生用のロッカー設置等が必要であった。

1985年（昭和60）、1988年（昭和63）と二度にわたって学科改組が実施され、学年進行とともに通学生、女子学生ともに急激に増加し、施設設備も増設し新たな対応が必要であった。

3 外国人留学生

文部省では、1983年（昭和58）8月の「21世紀への留学生政策に関する提言」及び1984年（昭和59）6月の「21世紀への留学生政策の展開について」の2つの提言等を踏まえ、「留学生受入れ10万人計画」を推進しており、本校におい

では国費留学生を昭和58年度から、マレーシア政府派遣留学生は昭和59年度から受け入れている。受入状況は、表1のとおりである。

国費留学生は（財）国際学友会日本語学校において日本語予備教育を半年間（平成7年度からは1年間に延長）受けた後に高専3年次に編入学する。マレーシア政府派遣留学生は、当初国際学友会日本語学校において1年間日本語・物理・化学・英語等の予備教育を受けていたが、平成6年度からはマレーシア工科大学予備教育部で2年間予備教育を受けて来日し、高専3年次に編入学する。マレーシアからの留学生はマレーシア政府派遣の他にマラ教育財団（Yayasan Pelajaran Mara（YPM））から支援を得た学生もいる。

入学後は、学級担任教官が学業及び生活面の指導にあたるとともに、同級生からチューターを選び、個人的な相談に応じる等クラスメートとの融和を図る体制をとっている。また、入学後最初の1年間は原則として寮生活させており、2年目からは希望によって下宿も認めている。入寮中は、日本人学生と同様の日課及び規則を適用している。ただし、宗教・風俗・習慣等によって制限に触れる給食メニューの場合は食材料を手配して各自で調理する等別途考慮している。

留学生の教育課程は、海技技術者を目指す商船系については海技従事者国家試験の学科試験免除を受ける関係で、1年から5年までの専門科目を履修する必要があるため、工業系の学科とは編成方針が異なっている。専門科目は、日本人学生と同一カリキュラム・同一時間割とし、日本人学生が受講する一般科目の一部の授業時間に2年生以下の専門科目と留学生用特別科目として、日本語・日本事情や理科系の基礎科目（数学、物理、化学）等を実施している。また、留学生の学力等に応じて課外補講も実施している。

留学生に対し日本の文化や歴史に関して学習する機会を提供するために、毎年、チューターとともに1泊2日の留学生研修旅行を実施している。また、日頃お世話になっている周防大島町の関係者を招いて外国人留学生交流会を実施している。



留学生研修旅行（平成27年・松江市）



周防大島町との留学生交流会

表1 外国人留学生一覧

番号	性別	国籍	入学年度	学 科	卒業(修了)年度	卒業後の進路等
1	男	中華人民共和国	S58	航海学科	S61	南京海員学校教官
2	男	マレイシア	S59	機関学科	S62	朝日電気（マレイシア）
3	男	中華人民共和国	S60	機関学科	S63	豊橋技術科学大学3年次編入学
4	男	中華人民共和国	S61	航海学科	H元	神戸商船大学3年次編入学

5	男	中華人民共和国	S62	航海学科	H2	東京商船大学3年次編入学
6	男	中華人民共和国	S63	航海学科	H3	東京商船大学3年次編入学
7	男	マレイシア	H3	電子機械工学科	H5	アルプス電気(マレイシア)
8	男	マレイシア	H3	電子機械工学科	H5	マックス株
9	男	マレイシア	H5	電子機械工学科	H7	東京フェライト製造株
10	女	ブラジル	H5	情報工学科	H7	(有)ゴーイングジャパン
11	男	アルゼンチン	H6	電子機械工学科	H8	長岡技術科学大学3年次編入学
12	男	マレイシア	H6	電子機械工学科	H8	三協プレシジョンマレーシア
13	女	マレイシア	H7	電子機械工学科	H9	徳島大学工学部3年次編入学
14	男	フィリピン	H7	情報工学科	H9	ソフトウェア・ベンチャー株
15	男	マレイシア	H8	商船学科(Eコース)	H11	帰国
16	男	ヴィエトナム	H8	電子機械工学科	H10	電気通信大学3年次編入学
17	男	ヴィエトナム	H9	商船学科(Nコース)	H12	東京商船大学3年次編入学
18	男	スリランカ	H9	電子機械工学科	H11	山梨大学3年次編入学
19	男	フィリピン	H10	情報工学科	H12	山口大学3年次編入学
20	女	マレイシア	H10	情報工学科	H12	電気通信大学3年次編入学
21	男	バングラデシュ	H11	商船学科(Nコース)	H14	東京商船大学3年次編入学
22	男	スリランカ	H12	電子機械工学科	H14	豊橋技術科学大学3年次編入学
23	男	マレーシア	H12	商船学科(Eコース)	H15	帰国
24	男	マレーシア	H12	電子機械工学科		帰国
25	男	ヴィエトナム	H13	情報工学科	H15	電気通信大学3年次編入学
26	女	イラン	H14	情報工学科	H16	電気通信大学3年次編入学
27	女	マレーシア	H15	情報工学科	H17	熊本大学3年次編入学
28	男	フィリピン	H15	情報工学科	H17	(株)アテックス
29	女	マレーシア	H16	電子機械工学科	H18	長岡技術科学大学3年次編入学
30	男	インドネシア	H16	情報工学科	H18	千葉大学3年次編入学
31	女	コロンビア	H17	商船学科(Nコース)	H20	東京海洋大学3年次編入学
32	男	スリランカ	H17	専攻科	H18	Enterprise Technology (Pvt)Lrd
33	男	カンボジア	H18	情報工学科	H20	群馬大学3年次編入学
34	男	マレーシア	H18	電子機械工学科	H20	豊橋技術科学大学3年次編入学
35	女	ラオス	H19	電子機械工学科	H21	九州工業大学3年次編入学
36	男	ミャンマー	H19	商船学科(Eコース)	H22	神戸大学3年次編入学
37	男	モンゴル	H21	情報工学科	H23	途中帰国
38	男	ラオス	H21	電子機械工学科	H23	豊橋技術科学大学3年次編入学
39	女	インドネシア	H22	情報工学科	H24	電気通信大学3年次編入学
40	男	カメルーン	H23	商船学科(Eコース)	H26	東京海洋大学3年次編入学
41	男	ラオス	H23	情報工学科	H26	宇都宮大学3年次編入学
42	男	モンゴル	H24	情報工学科	H27	電気通信大学3年次編入学
43	男	インドネシア	H25	情報工学科	H28	豊橋技術科学大学3年次編入学
44	男	カンボジア	H26	電子機械工学科	H28	千葉大学3年次編入学
45	男	マレーシア	H26	商船学科(Nコース)	H29	東京海洋大学3年次編入学
46	男	カンボジア	H27	商船学科(Eコース)		5学年在学中

47	男	ラオス	H27	専攻科	H28	日本インシュレーション
48	男	マレーシア	H29	商船学科(Eコース)		3学年在学中
49	男	カメルーン	H29	電子機械工学科		3学年在学中
50	女	モンゴル	H29	情報工学科		3学年在学中

第3節 女子学生の入学

1 女子学生にも門戸を開く

東京と神戸の両商船大学が女子に門戸を開いたのを受けて、全国5商船高等専門学校においても女子に門戸を開こうという機運が高まつた。本校においても、1985年(昭和60)に機関学科1クラスを電子機械工学科に改組したのを期に、商船系の学科も含めて女子に門戸を開いた。最初、航海学科2名、機関学科0名、電子機械工学科6名、計8名の女子学生入学から始まつた門戸開放も1988年(昭和63)設立された情報工学科に女子が多数入学してきたこともあり、今では毎年30から40名程度の女子が入学してきており、定員600名のうちおよそ3割が女子学生である。

女子に門戸を開くとひとことで言っても、その受入体制は大変で、実際に女子学生を入学させながら何年もかけて整えている。まず、施設面でいえば、女子トイレ及び女子更衣室の設置が急がれた。女子学生が増えていくのに合わせて増設していくたのだが、現在は北棟2階のトイレの一部を女子トイレの一部を女子トイレに改修しているのをはじめに、南棟3階北側にあった航海学科の標本模型室を移転してその一部を女子トイレと情報工学科の女子更衣室に、北棟3階北側にあった非常勤講師室を商船学科と電子機械工学科の女子更衣室に改修している。練習船「大島丸」もその例外でなく、商船系の学科に女子生徒が入学したのに合わせて、トイレの一部を女子専用にしたり、学生の寝室の一部を女子学生のために内側から鍵がかけられるように改修したりした。もちろん、1987年(昭和62)にできた情報機械工学科棟や、1991年(平成3)にできた情報工学科棟には、最初から女子学生も考えに入れた設計にしているが、それでもまだ学校全体でみると、女子学生に関する施設改善の要望が少なからずある。

1985年(昭和60)まで、いわゆる商船教育を男子学生だけを相手に教育・指導してきた教職員にとっても、女子学生入学は戸惑いと試行錯誤の連続であった。特に、体育は男子と女子の体力の差もあるので合同で行うことはできず、男子と女子に別々の種目をさせて1人の教官が両方を指導したり、ある時期は2クラス合同で体育の授業を行い2人の教官が男子と女子を別々に指導していたこともある。また、水泳の授業で男子といっしょに泳ぐのは恥ずかしいという女子学生がいたため、女子だけ放課後の時間に水泳の授業を行っていたこともある。実験・実習なども1クラスをいくつかの班に分けて行うことがあるが、1つの班に女子が1人だけでは何かと心細いだろうと、女子が入る班は少なくとも2人以上女子が入るように班編成を考えた時期もある。さらに、女子生徒が増えてゆくにつれて、校内におけるカップルもだんだんと増えてきて、男女交際のあり方が何度か会議の話題になったこともある。

事務的なことにも、例えば、クラスの出席番号の付け方ひとつとっても、現在は男女混合で氏名のあいうえお順にならべているが、最初の2年間は男子を並べた後に女子を並べていた。また、現在女子の高学年生が着ている制服も、最初に入学してきた女子学生が3年生のときに、女子学生の意見もいろいろ取り入れながら制定した経緯がある。

1985年(昭和60)女子学生が初めて入学してきたときの上級生たちも戸惑いをおぼえたことだろう。それまで男子しかおらずかつ全員寮生だった学校に、女子学生が入学しかつ通学も許可されたのである。上級生による下級生への指導(良い意味での「しつけ」もあり、悪い意味での「押しつけ」もあったが)をどこまで女子学生に適用することができるのかというの、いちばん悩むところであったと思う。これも試行錯誤していくなか、商船学科の特に寮生に対してはいまだその指導方式は少なからず残っているが、工業系の女子学生に対してはほとんど残っていないと思う。例えば、11月にある商船祭の名物「手旗踊り」を取り上げてみても、同年の商船祭実行委員は、それまでの3年生以下全員参加の基本路線を崩さないとの思いで、女子学生にも踊ってもらった。ただし、電子機械工学科にはセイラージャンパーを配布していかなかったので、全員紺の制服を着て踊った。しかし、終わってみると、女子と男子の歩幅が違うので行進が大変だったこと、手旗の授業がない電子機械工学科の学生が手旗をしなければならなかつたこと、そして女子学生が男子の制服を着なければならなかつたことなど、女子学生からも教官の間からも不評の声があがつた。今では、商船学科の学生だけで行

っている実状である。

学校関係者および上級生たちの戸惑いもさることながら、いちばん大変だったのは1985年（昭和60）から数年間の間に入学してきた女子学生たち本人だったことは間違いないはずである。男子だけの学校だったところへ女子学生が入学したというだけで、学校内外で何かと注目された。入学式や卒業式の取材にマスコミが女子学生を大きく取り上げたことはもとより、彼女らの一挙手一投足（例えば、通学態度、下宿生活、学校生活など）が近隣地区及び教職員の注目するところであったし、話題にものぼった。彼女ら自身にすれば、やりきれないことも数々あったであろう。その上、女子の上級生がいなかつたので、何か困ったことがあっても相談できる人は限られていたようである。しかし、学校自体が試行錯誤の中にあり、施設的のも制度的にも充実していなかつたで、いろいろな面で我慢してもらわなければならないことが多くあつたであろうことは想像に難くない。

唯一、肉体的にも精神的にも発散の場になつたはずのクラブ活動も、女子学生入学当初は女子部がなかつたために、ほとんどの女子学生がマネージャーになるしかなかつた。けれども、女子学生が増えしていくにしたがい、また、中国地区及び全国の高専体育大会で女子種目が設置されたのも手伝って、ソフトテニス・卓球・陸上競技・剣道・空手・水泳・バドミントンなど多くのクラブで、女子学生が男子と同じようにクラブで汗をかくことができるようになり、各種大会で優秀な成績を残してくれた女子学生も数多くいる。もちろん文化部でも、吹奏楽・園芸・コンピュータ・アマチュア無線・軽音部などの各クラブで女子学生が活躍している。

戸惑っているばかりでもなく、積極的にいろいろなことに取り組む女子学生も出てきた。例えば、1990年（平成2）の夏休みには、3人の女子学生が自分でプログラムを見つけてきて、それぞれイギリス、オーストラリア、アメリカへホームステイを体験しにってきた。また、ある女子学生は、これも自分で応募して、同年の9月から翌年の7月まで1年間オーストラリアへ留学してきた。このように長期留学を希望する学生のために、進級内規を一部改正した経緯もある。いろいろと男子学生よりも女子学生の方が積極的ではないかと思える場面も多い。

最後になったが、それまでに受け入れていた男子留学生に加えて、1993年（平成5）には情報工学科3年に1人、1995年（平成7）には電子機械工学科3年に1人、女子外国人留学生も編入してくるようになり、言葉のハンディを乗り越えながら頑張っていることもつけ加えておく。

2 「女子寮」の設置

1985年（昭和60）に本校が女子に門戸を開くにあたり、改組により工業系の学科ができたことから、女子学生が増えしていくであろうことは予想できたし、また、大島島内であつても東半分からの通学条件は非常に悪く、本土側も山陽本線沿線から少しばしはざれただけで交通手段が貧弱で通学困難であることなどにより、女子寮の必要性は早くから考えられていた。予算的なことから、女子寮を開設することができたのは1988年（昭和63）4月であったが、それまでの3年間下宿生活を余儀なくされた女子学生も少なからずいた。下宿も探すに際しては、本校の教職員の特家に間借りしていた学生もいた。その生活全般にわたり、教職員が何かと気を使うことも多かつたようである。

1986年（昭和61）年ごろから本格的に女子寮の開設の検討が始められ、本来ならば、男子寮と離しての新設がベストだったであろうが、敷地・予算措置などの問題もからみ、南寮南東側一棟を女子寮に当てることし1987年（昭和62）後半より改修工事に着手した。まず1988年（昭和63）4月に開設した女子寮は次のようなものである。

南寮南東側の東の端からの一部を女子寮に改修し、1階には南向きに玄関とホールを、それ以外に当直教官室、週番室、浴室、脱衣室、洗濯室を作り、2・3階に自習室兼捕食室1つと2人部屋の居室を7つ作った。もちろんトイレは各階にあり、洗面所も居室のある2・3階に設置した。男子寮のイメージを一新すべく、各居室は従来よりも広くし、机、ロッカー、ベッドなどすべてそれまで使っていなかつた新しい形のものを取り入れた。居室を広くしたのは、文部省が決めている学寮における学生1人当たりの居住面積基準が、従来1.2m²だったものが1.8m²に改訂されたことにも対応したことであり、男子寮のとき4部屋あった空間をむりやり3等分して居室を作った。壁の色もカーテンの色も明るいものを選び、特に男子寮と違うのは、各人の下足箱を用意し土足厳禁にしたことである。

女子入学者数が増えるに従って、1988年（昭和63）4月在籍数14人で始まった女子寮も、1989年（平成元）4月には32人、1990年（平成2）4月には54人と入寮希望者が年々増えていき、1994年（平成6）4月には最高76人にま

で達した。また、女子寮入寮希望者が増えるに従い、1988年（昭和63）から1990年（平成2）までの間、継続的に女子寮拡張の改修工事を行い、1991年（平成3）4月には、南寮の南棟すべて（「ポケット」と呼ばれているところも含む）及び中央部分（「メイン」と呼ばれているところ）の洗面所のところまで女子寮になった。その間、居室を増やしたのはもとより、浴室、脱衣室、トイレ、洗面所、洗濯室、捕食室の数を増やし、乾燥室、自習室、和室を新しく作った。1993年（平成5）には、それまであった乾燥室の1つをパソコン室とし、パソコン10台を購入して寮生がいつでもパソコンを使って勉強できるようにした。防犯施設も、廊下や屋上の男子寮との境となるところに、壁やフェンスを取り付けたのはもちろんのこと、2・3階の窓から進入できないように赤外線の防犯装置を取り付けたり、各出入り口にも誰かが通れば当直教官室にわかるような防犯装置も取り付けたりした。

このように南寮のおよそ半分を女子寮に改修しての運営が1996年（平成8）3月まで続いたが、男子寮を含めての寮全体の大改修を計画するに当たり、当直教官室の位置、寮務係の位置、当直教官2人体制への推移、それまでは女子寮が食事に行くのに雨が降っても必ず外を通って行かなければならなかった不便さなど総合的に検討し直した。その結果、5階建ての北寮を女子寮にし、南寮を男子寮にしようではないかという結論に達し、1995年（平成7）に北寮、食堂、寮務係、男子寮浴室、新寮などの改修工事が行われ、1996年（平成8）4月から北寮における女子寮の運営が始まった。北寮ロビーだったところへ寮務係が移動てきて、男子寮からも女子寮からも寮務係及び食堂へ行き来できるようになり、また、この2つが男子寮と女子寮との境にもなっている。女子寮の1階に当直教官室を作り、外や食堂から女子寮へ出入りするドアはすべて当直教官室から施錠・解錠できるようになっているし、その他女子寮における施設等は、8年間南寮側に女子寮があつたときのノウハウをいかし、いろいろな面でそれまでと比べて遜色のないように考えられている。

女子寮の運営の方も糸余曲折があった。女子寮が開設されるにあたり、基本的には男子寮の日課、週番制度、指導寮生をおいた体制を女子寮にも適用し、もし、不都合が生じればそのとき対応しようということであった。ところが、1988年（昭和63）4月にいざ女子寮を開設しようとしたとき、新入生の入寮希望者は12人いたが、それまで下宿を余儀なくされていた2年生から4年生までの女子学生からは入寮希望がでなかつたのである。これでは週番制度も指導寮生体制もあつたものではなく、あわてて3年生2人に声をかけてほとんど無理矢理に入寮してもらった次第である。とはいっても、3年生も1年生も寮生活は初体験だったので、3年生による1年生の寮生活の指導はとても負担であったようである。結局、1989年（平成元）4月にはその上級生2人は退寮てしまい、新しく入寮した1年生とそれまでいた2年生合わせて32名で再スタートすることになった。今のように1年生から5年生までがそろっている体制になつたのは、1992年（平成4）4月からである。



女子寮居室



学寮食堂

また、日課については次のようなこともあった。女子寮開設当初の日課は男子寮にあわせて、日曜・祝日の帰寮は21:10までに、帰寮点呼は21:20となっていたが、1989年（平成元）のある日曜日、ある女子寮生が事件に巻き込まれてしまった。幸い身体的にどうこうしたという事件ではなかつたが、この事件をきっかけに、親元を離れて寮で預かってい

る女子学生を 21：10 という暗くなってしまう時間までどこでどうしているか把握できない状態のままにしておいて、取り返しのつかない事件・事故に巻き込まれたのでは保護者の方に申し訳ないという意見が出てきた。それ以降は、女子寮生に関しては、日曜・祝日といえども帰寮は 19：20 までに、帰寮点呼は 19：30、ただし、帰省していて保護者の方が寮まで直接送つてくるとき限り 21：00 までに帰寮すればよい、という男子寮と比べて厳しい日課を適用するようになった。しかし、この日課もアンケートとしてみると、女子寮及びその保護者の方たちの間で厳しすぎるという意見が多いということがわかり、1996 年（平成 8）になってから少し緩和された。

時間にしばられ日課に追われるわざらわしさ、女子寮生同士の人間関係の難しさなどで退寮していった学生も少なからずいるし、寮という狭い空間での団体生活に適応できない学生もいた。しかし、女子寮生の寮生活に対する意識もだんだん高まってきたと思う。毎日の 2 時間余りの自習時間など、当直教官が見回ってもほとんど注意を与えることはなくなったり、女子寮生と女子通学生の成績を比べてみても、平均すると寮生の方が良かったことのほうが多い。男子寮に比べて女子寮を卒業していった学生の数は微々たるものである。女子寮で過ごした日々が彼女らのこれから的人生の糧となり、また、女子寮で同じ釜のめしを食った仲間たちが、生涯を通じた友達になることを心から祈念してやまない。

第4節 新しい校歌と制服

1 新校歌の制定

1922 年（大正 11）10 月に制定された従来の校歌には「海を生命の健男兒」と歌い、もっぱら船員職員の育成のみを目的としていた本校に、昭和 60 年度の改組によって工業系学科が誕生した。従来の商船に関する航海学科・機関学科に加え電子機械工学科が発足し、長年にわたって男子ばかりの学校に女子学生も入学してきた。

さらに昭和 63 年度には、航海学科・機関学科を統合して商船学科に改組し、新たに情報工学科が設置された。学生比率も海 1・陸 2 になり女子学生も平成元年度には 75 人に達した。1990 年（平成 2）3 月電子機械工学科の第 1 回卒業式を迎えるにあたり、従来の校歌を改めて本校の現状に適合した、新しい理想を歌い校風を発揚するにふさわしい新校歌を制定することになり、1989 年（平成元）4 月 1 日「新校歌選定委員会」（委員長：図書館主事 委員：各学年主任および一般科目主任・庶務課長・会計課長・幹事：庶務係長）の発足となった。作業は

- (1) 校歌のイメージ設定を行わず、創造性の豊かなものを広く一般から公募する。
- (2) 応募作品から将来にふさわしい代表作数編を選定して、国語担当の先生の意見を徵し最終的には 2 編程度に絞りその後は専門家に依頼する。
- (3) 代表作 2 編を専門家に依頼し、最終審査と添削及び作曲家を選んでいただくようお願いする。
- (4) 事前に校内発表会を開催し、公式発表の合唱は平成 2 年 3 月の卒業式とする。

に従って進められ、数編の中から 2 編を選考した。大島郡出身で数多くの名作を発表しておられる作詞家星野哲郎先生の特別の御尽力により、その中から本校の非常勤講師岡本暢也先生の原作に補作をしていただき、作曲家櫻田誠一先生によって変ロ長調 4 拍子の新校歌が誕生した。

発表会は、1990 年（平成 2）2 月 3 日節分の日に原作者、補作者、作曲者、同窓会員、奨学後援会員、各教育関係者等約 100 名を招き、全学生と教職員が参加して、第一体育館において行われた。声楽専門の非常勤講師高田先生から、音楽の時間に前もって指導を受けた 1 年生 18 名、女子 12 名が堂々と合唱した。一節ごとに気軽に指導される櫻田先生、学生に混じって合唱される星野先生によって発表会は一層盛り上がった。何事も上級生優先の校風の中で、この度は下級生が先に練習し発表することに、下級生自身戸惑いを感じていたが、学生会長がこれをむしろ激励するという麗しい場面さえあった。このようにして新校歌は短い期間にめでたく制定されたわけであるが、それには学校当局はもちろんのこと、同窓会・同窓生のひとたたらぬ御支援をいたしていたことがわかった。同窓会 O B 発刊による「消息の葉」や当時の同窓会長の思い出話を総合すると次のようなエピソードが浮かんできた。

同窓会に対して正式に新校歌作成の協力要請があったのは、工業系第 1 期生が来春卒業するという前年の 9 月であった。既に同窓会としては、男子のみの集団に学科改組で入学してきた男女を準会員として迎えるにあたり、「海を生命の健男兒」の校歌では名が体を表わさないことになるという問題提起がなされていた。

同窓会長は、作詞の補作と作曲、発表会を勘案してかねてからの意中の作詞家星野哲郎先生に依頼する以外にないと考

えたが、その筋からの情報によると作詞・作曲家と共に一度は現地に案内し、思索を練るために手配が必要であることがわかった。しかし、時間的余裕はない。はたと行き詰まって思案投げ首で困っていた矢先、機関誌44期の西山荒清氏が星野先生と同郷で、小学校時代からの竹馬の友であることがわかり、京浜地区の会長でもある同氏に、今年は午の年、竹馬の友が動けばうまく行くに違いないと語呂合わせのような期待を抱きながら早速連絡を取った。強引な要請をして先生との交渉にあたつていただいたが、西山氏の努力によりとんとん拍子に事態は進展し、星野事務所関係者を交えての交渉となった。一番気がかりな報酬の件も星野先生の「私への心遣いは無用です。その謝礼は櫻田氏に差し上げて下さい」の言葉に救われた。思えば、これも読売新聞に掲載された先生の心境を語った次のような一文によるものと思われる。

「私は山口県大島郡の海辺の町に生まれ、朝夕海と船を見ながら育ち青春の志を船乗りに求め、清水の高等商船学校に入学した。ところが、志中途にして病に倒れ、傷心の身を故郷で静養した。生まれ故郷の清い空気と温かい風土は、疲れを癒してくれた私の心を癒してくれた。その後は船を断念してこの道に入った。今でも心身が疲れると故郷に帰ることにしている。……自分のもつている能力を通じて、故郷に恩返しがしたい。……」先生の故郷を思う心と、初志への憧憬が、この無茶なお願いをかなえてくださったに違いないと思う。補角において先生は、飯の山、笠佐島、鳴門の瀬戸(万葉の辞)、七つの海やコンパスの旗の文句を取り入れられ、わが校の伝統精神と風土を土台において、新しい時代の担い手たる若者たちの夢を歌い上げてくださった。

同窓会長は、新校歌発表会の席で上記の新聞記事を話題にあげ、星野先生の有言実行について披露し先生を称えた。

大島商船高等専門学校校歌

岡本暢也 作詞
星野哲郎 楽曲
櫻井誠一 作曲

The musical score consists of five staves of music for voice and piano. The lyrics are written in both Japanese and English below each staff. The Japanese lyrics describe a scene at a harbor, while the English lyrics provide a narrative about a young man's desire to travel and explore the world.

日本語歌詞 (Japanese lyrics):

いののやまはみどリにあけてこう
がくのしきふもと一をかこむ
わかものたちはじだいをみつめ
せあへむけて言をきそいしおのかめくるおー^ル
おーしまのわがまなびやにのぞ
みーはたぎる

英語歌詞 (English lyrics):

三 七つの海に命を浮かべ
青春賭けた伝統の血は
若者たちの喉を流れ
平和の鐘をうら鳴らす
ロマンを愛す大島の
折りはるか懸念をわたる
向学の上気
胸を回む
若者たちは時代をみづめ
世界へ向けて技を競い
潮の騒ぐる大島の
わが学舎に望みはたゞる

新校歌発表会



2 新制服の採用

1985年(昭和60)度から工業系学生が入学するのを契機に、かねてから学生の要望でもあった服装規程の見直し及び女子学生の服装について、学生主事を中心に各学科から選定された委員による「服装検討小委員会」で検討が進められた。女子学生の制服については、近郊高校の制服と運輸省航海訓練所の服装が参考にされた。

1985年(昭和60)1月ホームルームの時間を利用して全学生のアンケート調査を行い、4月1日から高生に背広型の制服と女子学生の制服が制定された。

1990年(平成2)4月1日の改正で制帽を廃止し、現在の制服等の制式は次のとおりである。

制服等の制式

種類	地質	型式	摘要	
制服	(4・5学年男子) 上衣 ズボン	濃紺サージ 濃紺サージ	ダブル背広型 ネクタイ 普通仕立	襟章は左に校章を、右に学科章をつける。
	(1~3学年男子) 上衣 ズボン	濃紺サージ 濃紺サージ	詰襟後背広型 長ズボン普通仕立 ベルト 紺	襟章は左に校章を、右に学科章をつける。 袖は折り返しなし
	(4・5学年女子) 上衣 (ベスト付)	濃紺サージ ブロード	スーツ ダブル ブラウス白 ネクタイ	襟章は左に校章、学科章をつける。
	スカート	濃紺サージ	箱スカート	ストッキングを着用する場合は、黒又は肌色に限る
	(1~3学年女子) 上衣 (ベスト付)	濃紺サージ ブロード	スーツ シングル ブラウス白 ネクタイ	襟章は左に校章、学科章をつける。
	スカート	濃紺サージ	箱スカート	ストッキングを着用する場合は、肌色に限る
夏制服	(全学年男子) 上衣 ズボン	白テトロンツイル 濃紺ポーラ	半袖カッターシャツ 冬制服ズボンに同じ	
	(全学年女子) 上衣 スカート	白テトロンツイル 濃紺ポーラ	ブラウス 白 冬スカートに同じ	
	制靴 (男子全学年)	黒牛革	普通型短靴 ひも付き	
作業服 (商船学科・ 電子機械工学科)	(女子全学年)	黒牛革	普通型短靴 ひも付き	
	上衣	綿 綿	ジャンパー型 長ズボン	

ズボン 帽 子	綿	作業帽型	
海洋作業服 (商船学科)			上衣・ズボンを貸与
上 衣	白色 綿	ジャンパー型	襟を紐で結ぶ。
ズボン	白色 綿	長ズボン	
帽 子	白色 綿	作業帽型	帽章はコンパスマーク共切れつき。
体操服(全学年男・女)		別に定める	

制服等の着用基準

夏・冬制服 制 靴	イ. 儀式のとき。 ロ. 登校及び下校のとき。 (制靴については、制靴及びこれに準 ずるもの。運動靴については認めない) ハ. その他学校が指示したとき。
作業服又は 海洋作業服	イ. 実技実習を伴う授業のとき。 ロ. 大島丸実習のとき。 ハ. その他学校が指示したとき。
体 操 服	イ. 体育授業のとき。 ロ. その他学校が指示したとき。

第2章 第二次改組・「商船学科」と「情報工学科」の誕生

第1節 「商船学科」と「情報工学科」の誕生とその経緯

第1次石油危機に端を発した世界経済の停滞は深刻な不況をもたらした。高成長経済へと向かいつつあった我が国も安定成長経済へと進路を転換していった。海運解においても、タンカー市況の暴落をはじめとして、世界経済後退による貿易量の減少から海運市況全般に長期低迷の様相を呈し、企業経営は大きな危機を迎えた。加えて、発展途上国を中心として拡大する自国貨・自国船主義、資源ナショナリズムの台頭、東欧ソ連圏諸国海運の進出など、日本海運の存続を脅かす外的要因も一層強まった。こうしたなかで我が国外航海運は国際競争力を高めるため、極度の省略化、省エネルギー化による合理化を行いながらも、技術革新船に適合した新しい船員制度を策定し、日本人船員の乗る日本船を増加して職域を確保するという、いわゆる船員制度近代化の実験が進められた。

このような環境化で本校においても低成長経済に対応するため、1985年（昭和60）機関学科2学級のところを1学級に減じるとともに、同時に女人禁制としていた本校も全学科に女子学生を受け入れることになった。船員制度近代化の推進と自然衰耗による船員の雇用調整に基づく合理化で、日本船の国際競争力はなんとか維持できる状況にあったところ、1985年（昭和60）のG5合意以後の急激な円高の進行で、日本船の国際競争力が著しく低下するとともに海運企業の日本船離れが進んでいった。この深刻な状態から脱出するため、各海運企業は、大幅な減量・合理化に着手し、自己完結性の強い純日本人乗組船から、近代化18名船、バイオニアシップ11名船、混乗での日本人乗組4名船へと、経済的要求に適合すべく乗組員の少数化が進展した。このような海運の構造的な不況における減量化対策は、本校の将来構想にも大きなインパクトを受けることになり、長い歴史を持つ航海学科（定員40名）、機関学科（定員40名）の両学科を統合して商船学科（航海コース20名、機関コース20名）に改組し、新たに情報工学科（定員40名）が、1988年（昭和63）4月に発足した。

商船学科の発足に際して新しいカリキュラムを望んでいたが、1982年（昭和57）6月にSTCW条約（船員の訓練及び資格証明並びに当直の基準に関する国際条約；The International Convention on Standards of Training, Certification and Watchkeeping for Seafarers, 1978）批准及び船員制度近代化に伴う「船員法及び船舶職員法の一部を改正する法律」が公布され、国際化と船員制度の近代化に対応するため、1983年（昭和58）の入学生から運航士教育のカリキュラムが始まったばかりであり、新カリキュラムは作成されなかった。養成施設の必要履修単位は、プロパー52単位、反対当直限定29単位と免許講習科目56時間が要求されており、新しい科目を取り入れる余裕はなかったのである。

このため、養成施設としての指定科目単位の一部を航海訓練所練習船に移行するよう運輸省に要望していたところ、プロパー12単位、反対当直限定6単位、合計18単位のカリキュラムが航海訓練所練習船に移行されることになり、技術革新に伴う新知識を吸収するための工学基礎や、国際化に伴う一般知識を養うなど海技技術者として、いかにあるべきか望ましい商船教育の在り方を検討して、商船学科としてのカリキュラムの改定を1992年（平成4）に行った。

一方で我が国の産業構造が、従来の労働力集約型から知識集約型に変革を迫られ知識・情報を正確にかつ迅速に交換する情報通信システムとそれを分析評価する情報処理システムが必要となってきた。これらのシステムを設計、製作あるいは運用する情報技術者の養成が急がれるようになり、1988年（昭和63）4月1日に航海学科1学級、機関学科1学級を商船学科1学級40名、情報工学科1学級40名に改組した。

情報工学科の教育目標はハードウェア技術者よりもソフトウェア技術者の養成を考えた。企業の業務を理解し計算機システムの有効利用を計画できるソフト系情報技術者である。1年次からプログラミング教育を行い、経営工学に関する科目も習得させるようにしている。

第2節 「商船学科」の設置

1 教育過程の改革①（船橋当直限定・機関当直限定）

1988年（昭和63）4月、学科改組によりに発足した商船学科の修業年限は、従前どおり5年6か月で、内訳も4年6か月の海上過程に引き続き十二か月間の航海訓練所所属の大型練習船での実習過程終了後に卒業という流れであった。

商船学科は、学生が卒業後ただちに船舶職員として必要な資格、三級海技士（航海）および機関当直三級海技士または三級海技士（機関）および船橋当直三級海技士を得るために、登録船舶職員養成施設の指定を受けており、そのため当時の船舶職員法（現在の名称は「船舶職員及び小型船舶操縦者法」）に基づく「船舶職員養成施設の教育の内容の基準等」（昭和58年4月28日運輸省告示第199号）に従って履修科目及び単位数が規制されている。履修すべき必要履修科目と単位数を第一表に示す。

第一表 養成施設指定の履修すべき必要科目と単位数

航海に関する科目	運用に関する科目	法規に関する科目	機関に関する科目	執務一般に関する科目	英語に関する科目	合計
三級海技士（航海）	20 以上	24 以上	5 以上		3 以上	52 以上
船橋当直 三級海技士（航海）	12 以上	11 以上	3 以上		3 以上	29 以上
三級海技士（機関）				38 以上	11 以上	52 以上
機関当直 三級海技士（機関）				19 以上	7 以上	29 以上

近代化船に乗り組む運航士になるには、航海コースの学生は三級海技士（航海）と機関当直三級海技士（機関）を、機関コースの学生は三級海技士（機関）と船橋当直三級海技士（航海）の科目を履修する必要がある。そのため両コースとも指定履修単位は81単位であるが、実際には共通していると認められる重複単位が13単位、認められており、養成施設単位は62単位以上を履修することになる。このため商船学科ではこれらを考慮して1983年（昭和58）から第二表に示すカリキュラムを設置していた。

第二表 商船学科カリキュラム（一般科目85単位、専門科目79.5単位）

一般科目（商船学科）

授業科目	単位数	学年別配当					備考
		1年	2年	3年	4年	5年	
国語	9	3	3	2	1		
倫理・社会	2						
哲学	1					1	
政治・経済	2			2			
法学	1				1		
経済学	1					1	
歴史	4	2	2				
地理	2	2					
数学	18	7	6	5			
物理	4	2	2				
化学	4	2	2				
生物	2	1	1				
保健・体育	10	2	2	2	2	2	
芸術	2	1	1				音楽又は美術を選択
英語	23	6	6	4	1		
計	85	28	25	19	8	5	

専門科目（商船学科）

授業科目	単位数	学年別配当					備考
		1年	2年	3年	4年	5年	
必修科目 共通	応用数学	3				2	1
	情報処理I	2	2				
	応用力学	2			2		
	熱力学	1		1			
	電気・電子工学I	2		2			
	計測・自動制御	3				3	
	商船原論	2	2				
	安全工学	1					1
	海事法規	2					2
	船舶工学	2			1	1	
	漕艇・通信	2	2				

船舶衛生学	測位論	2.5				2	0.5	
	航海計器 I	3	1	1	1			
		2		1	1			
	海洋気象学	1			1			
		3		1	1	1		
	航海法規 I	2		1	1			
	原動機 I	4		1	2	1		
		2			1	1		
	工業材料 I	1				1		
	設計製図 I	2			1	1		
	実験実習 I	2		2				
	校内練習船実習 I	2.5	0.5	1	1			
	小計	49	7.5	11	13	13	0.5	
航海コース	応用力学 II	2				2		
	流体力学	2				2		
	電気・電子工学 II	4			2	2		
	情報処理 II	2				2		
	航海学 II	航路論	2			1	1	
		航海計器 II	1			1		
	船舶管理論 II	2				1	1	
	航海法規 II	1				1		
	実験実習 II	6			3	3		
	校内練習船実習 II	1.5				1.5		
	卒業研究	4					4	
	小計	27.5			5	16.5	6	
機関コース	応用力学 II	2				2		
	流体力学	2				2		
	電気・電子工学 II	4			2	2		
	原動機 II	熱機関 II	3			3		
		舶用機械 II	1			1		
	工業材料 II	2				2		
	設計製図 II	2					2	
	実験実習 II	6			3	3		
	校内練習船 II	1.5				1.5		
	卒業研究	4					4	
	小計	27.5			5	165	6	
必修科目計	航海コース	76.5	7.5	11	18	29.5	10.5	
	機関コース	76.5	7.5	11	18	29.5	10.5	
選択科目	共通	電気工学特論	1				1	
		電子工学特論	1				1	
		自動制御特論	1				1	

	電子計算機	1					1	
	信頼性工学	1					1	
	海運論	1					1	
	解説科目小計	6					6	
航海コース	航路環境論	1					1	共通選択科目を含めた中から3単位履修
	船体運動論	1					1	
	物流システム論	1					1	
	流通経済論	1					1	
	貨物管理論	1					1	
	海商法特論	1					1	
	国際法特論	1					1	
	解説科目小計	7					7	
機関コース	情報処理特論	1					1	共通選択科目を含めた中から3単位履修
	内燃機関特論	1					1	
	蒸気機関特論	1					1	
	舶用機械特論	1					1	
	冷凍・空調工学	1					1	
	伝熱工学	1					1	
	計調特論	1					1	
	開設科目小計	7					7	
開設選択科目計	航海コース	13					13	
	機関コース	13					13	

各商船高専とも養成施設単位の充足のため規定の専門科目 72 単位に対し、77～80 単位を開設し、履修せざるをえない状況にあり、新しいものを取り込む余裕がなく、商船学科としての独自のカリキュラムが組めず状態であったため、規制緩和を望んでいた。

1991年(平成3)7月、文部省は週五日制を前提に高等専門学校設置基準の一部を改正した。当時、新たなカリキュラムに関する留意点としては、卒業要件である課程修了認定の147単位以上は変更せず、年間授業日数210日の枠を外し、また履修単位157単位以上の考え方を廃止した。

この履修単位制を残すか否かは各校の判断に任された。商船学科では、週5日制になると月曜日から金曜日まで毎日7時間授業を行うことになり、そのなかで毎週1時間は特別教育として開設しなければならず、結果、1週間の授業時間数34時間(年間34単位)となり、4年6か月の席上課程では153単位が履修単位となった。第三表に週6日制と週5日制とのそれぞれの単位をまとめて示す。

第三表 課程終了の認定単位と履修可能単位

	課程終了の認定単位数	履修可能単位数
週六日制	一般科目 75 単位以上 専門科目 62 単位以上 147 単位以上	一般科目 85 単位以上 専門科目 72 単位以上 157 単位以上
週五日制	一般科目 75 単位以上 専門科目 62 単位以上 147 単位以上	一般科目 81 単位以上 専門科目 72 単位以上 153 単位以上

ここで商船学科には校内練習船「大島丸」による乗船実習の4単位分が懸念されたが、これは特定日に集中的に実施され時間割に組み込まれていない形となっている。また卒業研究の週3時間(3単位)では時間不足で、4学年の後期および5学年の夏休み期間中にも行われていたため、1単位分をプラスしている。この5単位を153単位に加えて表示履修単位を158単位としている。

一方、運輸省においても1992年(平成4)3月26日、運輸省告示第185号で「船舶職員養成施設の教育の内容の基準等」の一部改正があり、練習船による実習を航海訓練所に所属する練習船により行われた場合、要請施設の指定科目18単位が航海訓練所に移行することが認められた。すなわち、専門科目の規制が緩和されたため、翌月4月から商船学科としての新カリキュラムを策定し実施することになった。

カリキュラムの改定にあたり目標としたのは、以下の通りである。

- (1) 海運企業は将来「知識集約型物流企業」に変貌するであろう。
- (2) 陸上においても海上と同等に活躍できる、いわば海陸両用の技術者を育成する。
- (3) 混乗船にあっても、外国人船員と共同生活を遂行できる国際感覚と適応力を持ち、彼等を管理・指導する能力を持たせる。

以上を念頭において検討した。そこで、航海訓練所と重複する科目等を削減し、科目的名称をわかり易くするなど、商船学科の教育内容の見直しを行った。この新カリキュラムを第四表に示す。1992年度(平成4)以降、これに従って授業を行うことになった。

第四表 商船学科カリキュラム(一般科目81単位、専門科目77単位)

一般科目(商船学科)

授業科目		単位数	学年別配当					備考
			1年	2年	3年	4年	5年	
必修科目	国語	9	3	3	2	1		音楽又は美術を選択
	倫理・社会	2			2			
	法学	1				1		
	政治・経済	2			2			
	歴史	4	2	2				
	地理	2	2					
	数学	17	6	6	5			
	物理	5	5	3				
	化学	5	3	2				
	保健・体育	9	2	2	2	2	1	
選択科目	芸術	2	1	1				2科目から 1科目を選択
	英語	22	6	6	5	4	1	
	必修科目計	80	27	25	18	8	2	
	開設科目計	2					2	
一般科目計		81	27	25	18	8	3	

専門科目（商船学科）

授業科目			単位数	学年別配当					備考
				一年	二年	三年	四年	五年	
必修科目	共通	応用数学	3				2	1	
		情報処理	4	2			1	1	
		工業力学	2			2			
		熱力学	1			1			
		材料力学	2				2		
		流体力学	2				2		
		電気・電子工学 I	6		2	2	2		
		計測・自動制御	3				3		
		船舶工学	1				1		
		工業材料	1				1		
		設計製図	2		1	1			
		商船学概論	2	2					
		船舶衛生学	2.5				2	0.5	
		実験実習	10.5	2.5	2	3	3		
		校内練習船実習	4	0.5	1	1	1.5		
		卒業研究	4					4	
小計		50	7	6	10	20.5	6.5		
航海コース	航海	測位システム	2		1	1			
		航海計測学	2		1	1			
		航路論	2				1	1	
		船体運動論	2			1	1	1	
		貨物管理論	2				1		
		海洋気象学	2		1	1			
		物流システム	2				1	1	
		海事法規	4		1	1	1	1	
		原動機	3			1	1	1	
		舶用機械	2			1	1		
		小計	23		4	7	7	5	
機関コース	機関	内燃機関学	3			1	2		
		蒸気機関学	4			1	2	1	
		補助機械工学	2				1	1	
		冷凍空調工学	1			1			
		燃料・潤滑工学	1				1		
		機械設計	2				1		
		海事法規	3		1	1		1	
		航海学	3		1	1		1	
		運用学	4		2	2			
		小計	23		4	7	7	5	

必修		航海コース	73	7	10	17	27.5	11.5	
科目計		機関コース	73	7	10	17	27.5	11.5	
選 択 科 目	電気機器	1					1	4 単位	
	電子工学特論	1					1	選択履修	
	システム制御工学	1					1	する	
	電子計算機	1					1		
	信頼性工学	1					1		
	オーラルコミュニケーション	1					1		
	交通工学	1					1		
	海洋工学概論	1					1		
	貨物管理特論	1					1		
	国際法特論	1					1		
	海運論	1					1		
	蒸気工学特論	1					1		
	補助機械特論	1					1		
	冷凍空調工学特論	1					1		
	エネルギー管理工学	1					1		
	振動工学	1					1		
	伝熱工学	1					1		
計測工学		1					1		
開設	航海コース	18					18		
	機関コース	18					18		
履修	航海コース	4					4		
	機関コース	4					4		
専門		航海コース	77	7	10	17	27.5	15.5	
科目計		機関コース	77	7	10	17	27.5	15.5	
一般科目計			81	27	25	18	8	3	
合計	航海コース	158	34	35	35	35.5	18.5		
	機関コース	158	34	35	35	35.5	18.5		
大型練習船実習			上記単位数以外で12月実施する						

2 教育課程の改革②（近代化船教育からプロパー教育へ）

1995年（平成7）頃からの商船学科卒業生の船員としての求人減少や日本外航船の近代化への傾向により、1999年（平成11）に1983年（昭和58）から実施してきた航海・機関の両用教育を廃止し、1982年（昭和57）以前に行ってきた航海・機関のプロパー制に変更した。これは、当時の東京商船大学（後の東京海洋大学海洋工学部）及び神戸商船大学（後の神戸大学海事科学部）も同時に両用教育を廃止したことを受け、本校においてもプロパー教育を受けた学生を商船系の大学生と同じ年度に卒業させるためであった。そのため、在学中の学生のカリキュラム変更が必要になり、以降3年間は、3種類の船員教育カリキュラム（※）が存在することになった。（※3種類の船員教育カリキュラム：入学年度により順に適用カリキュラムが異なり、①卒業まで一貫しての航海・機関両用教育、②途中の学年からプロパー教育へ変更、③入学時から一貫してのプロパー教育の3種類をさす。）

2004年（平成16）、STCW条約に基づく船員教育の資質認定を受けるべく「資質基準システム運用マニュアル」を作成のうえ船員教育カリキュラムの内部監査を実施した。以降、毎年、マニュアルに従い内部監査を行い、船員教育施設と

しての資質を検査している。

2006年（平成18）以降、船員と海技者のライフサイクルを踏まえた制度設計や船員の定着を図るための魅力ある職場環境の整備を図り、優秀な日本人船員を確保・育成し、将来の海技者の確保に確実に繋げていくために、関係業界及び関係団体から寄せられる様々なニーズに対応して、国土交通省所管の船員教育訓練機関として対処すべき方向を示すことを目的とした国土交通省海事局船員政策課主導で「船員教育のあり方に関する検討会」が設立され、種々の提言が行われた。また、2007年（平成19）、「海洋基本法」の制定を機に新たな高専の商船学科のあり方について検討が始められた。

第五表 商船学科カリキュラム（一般科目79単位、専門科目80単位）

一般科目（商船学科）

授業科目		単位数	学年別配当					備考
			1年	2年	3年	4年	5年	
必修科目	国語	8	4	2	2			*は第14条4項に定める授業科目による単位を示す。 音楽又は美術を選択 航海・機関英語
	地歴	2	2					
	地歴Ⅰ	1		1				
	地歴Ⅱ	1		1				
	公民	現代社会	2			2		
	数学	18	6	6	6			
	物理	4	2	2				
	化学	4	2	2				
	理科総合	1	1					
	英語	英語講読 英語演習 EC 英語表現 現代英語	9 4 2 2 2	3 2 1 2	3 2 1 2			
	保健・体育	9	2	2	2	2	1	
	芸術	1	1					
	法学	1				1		
	哲学	1				1		
選択科目	外国語演習	3				2	1	
	必修科目計	75	26	22	17	8	2	
	日本文学	2					2*	2科目から1科目を選択
	日本史特論	2					2*	
	英語特論Ⅰ	2					2*	
	数学概論	2					2*	
	日本語学	2				2*		
	英語特論Ⅱ	2				2*		
	化学特論	2				2*		
	企業と法	2				2*		
	アメリカ文学概論	2				2*		
	開設科目計	18				10	8	

	履修科目計	4				2	2	
一般科目計		79	26	22	17	10	4	

特別活動

特別活動	単位時間	学年別配当						備考
		一年	二年	三年	四年	五年	一年	
	90 単位時間以上	90 単位時間以上						

専門科目（商船学科航海コース）

必修科目	共通	授業科目	単位数	学年別配当					備考
				一年	二年	三年	四年	五年	
必修科目	共通	応用数学	2					2	*は第14条 4項に定め る授業科目 による単位 を示す。
		情報処理	4	2	2				
		工業力学	2			2			
		電気・電子基礎	4		2	2			
		制御工学	2					2	
		船舶工学	1					1	
		設計製図	2		2				
		航海学概論	2	1	1				
		舶用機関学概論	1		1			1	
		操艇実習	3	3					
		実験実習	8		2	3	3		
		校内練習船実習	4	1	1	1	1		
		創造演習	1					1	
		卒業研究	4					4	
選択科目	コース別	測位論	4			2		2*	
		航路論	3				2	1	
		航海計測学	5			1	2*	2*	
		海洋気象学	2			2			
		船舶整備論	3			1	2*		
		船舶載貨論	3				2	1	
		船体運動論	4				4*		
		船舶安全学	3				2	1	
		航海法規	2			2			
		海事法規	3				2	1	
		必修科目計	72	7	11	16	26	12	
選択科目	共通	物流システム	2				2		
		船舶衛生学	2.5				2	0.5	
		電気・電子工学特論	1					1	
		計算機科学	1					1	
		システム制御工学	1					1	
		信頼性工学特論	1					1	

	海運論	1				1	
	オーラルコミュニケーション	1				1	
	国際物流論	1				1	
	インターンシップ	2			1	1	
コース別	無線法規	1.5			1	0.5	
	交通工学	2			2		
	気象特論	2			2		
	流体力学	2			2		
	航路計画論	1				1	
	通信工学	1				1	
	海事法規特論	1				1	
	開設科目計	24			12	12	
	履修科目計	8			4	4	
	専門科目計	80	7	11	16	30	16
	一般科目計	79	26	22	17	10	4
	合計	159	33	33	33	40	20
	大型練習船実習	上記単位数以外で12月実施する					

専門科目（商船学科機関コース）

必修科目	共通	授業科目	単位数	学年別配当					備考
				一年	二年	三年	四年	五年	
コース別		応用数学	2				2		*は第14条
		情報処理	4	2	2				4項に定める授業科目による単位を示す。
		工業力学	2			2			
		電気・電子基礎	4		2	2			
		制御工学	2				2		
		船舶工学	1				1		
		設計製図	2		2				
		航海学概論	2	1	1				
		舶用機関学概論	1		1		1		
		操艇実習	3	3					
		実験実習	8		2	3	3		
		校内練習船実習	4	1	1	1	1		
		創造演習	1				1		
		卒業研究	4					4	
		材料力学	4				4*		
		流体力学	2				2		
		工業材料	1					1	
		熱力学	2			2			
		燃焼工学	1					1	
		電気・電子工学	4				4*		

	機械設計	4			1	1	2*	
	計測工学	1				1		
	内燃機関学	4			2	2		
	蒸気機関学 I	2			2			
	蒸気機関学 II	3				1	2*	
	補助機械工学	2			1	1		
	冷凍・空調工学	1					1	
	燃料・潤滑工学	1					1	
	海事法規	1					1	
	必修科目計	73	7	11	16	26	13	
選択科目	共通	物流システム	2			2		
		船舶衛生学	2.5			2	0.5	
		電気・電子工学特論	1				1	
		計算機科学	1				1	
		システム制御工学	1				1	
		信頼性工学特論	1				1	
		海運論	1				1	
		オーラルコミュニケーション	1				1	
		国際物流論	1				1	
		インターナショナル	2			1	1	
コース別	計測工学特論	2				2		
	冷凍空調工学特論	2				2		
	電気機器	2				2		
	補助機械工学特論	1					1	
	蒸気機関学特論	1					1	
	内燃機関学特論	1					1	
	エネルギー管理工学	1					1	
	開設科目計	23.5				11	12.5	
	履修科目計	7				4	3	
	専門科目計	80	7	11	16	30	16	
	一般科目計	79	26	22	17	10	4	
	合計	159	33	33	33	40	20	
	大型練習船実習	上記単位数以外で12月実施する						

3 教育施設と設備

1988年(昭和63)の情報工学科の新設に伴って、航海学科と機関学科のそれぞれの実験室及び教官室を譲渡したので、商船学科としての実験室、講習室及び倉庫としては次のようなものがある。設備については、高専の設置基準に準拠しているが近年における技術革新の発展は著しく、これに伴い船舶の運航技術の進歩に対応した近代化船の運航に必要な教育及び施設の整備拡充が求められた。また、1982年(昭和57)に船舶職員法の一部を改正する法律が公布され、海技従事者の免許資格にSTCW条約の要件を満たした実技課程であると運輸大臣が認めて指定した講習を学生は修了しなければならず、そのなかにレーダシミュレータ講習があり、レーダシミュレータ関連設備の更新が必要であった。以下に八十周

年以降の主要な設備の設置について述べる。

レーダシミュレータ実験室

1972年（昭和47）に本校では初の船舶用レーダシミュレータ（日本無線JPZ-108）が設置されていたが、1981年以降、3ヶ年計画で設備の更新等が行われ、1981度（昭和56）にレーダシミュレータ演算部（富士通PFU1400）と衝突予防訓練装置（日本無線AC-800）を導入、翌年度、海岸線発生装置（日本無線NJS-9）を購入、続いて1983年度（昭和58）にこれらを衝突予防装置と結合させ、2船同時に演習が可能なタイプとした。その後、各種航海計器や海上衝突予防法実験装置が統合されたものとして、1988年（平成11）以降、操船シミュレータが導入され、2010年（平成22）には再度刷新され、大型円筒形スクリーン及びプラズマディスプレイに投影をする模擬船橋を1室ずつ有し、第一船橋、第二船橋、ブリーフィングルームの3室で構成される商船学科シミュレータセンターが完成した。

消火救命講習室

救命及び消火講習の実施に伴い、膨張式救命袋、ライフジャケット、イマーションスーツ、酸素検知器、消火ビデオなどの教材を整備し、救命艇及び膨張式救命袋の展開・格納及び煙管式火災探知器の実習などを行っている。

電波航海計器実験室

航海計器の実験実習として、1979年度（昭和54年）に総合電波測位システムを設置した。その航海計器によく採用されている電子回路や理論回路に関する知識を理解させるための機材を購入整備した。

近代化総合実験室

船舶の近代化に伴い、航海船橋における総括制御方式の標準化を想定し、機関制御卓によりディーゼル機関を遠隔操縦する設備を設けた近代化総合実験室の建物と内燃総合実験装置が1980年度（昭和55）に完成了。制御室には始動前及び運転終了後の補機類のシーケンス制御、動力計の負荷制御及び機関の集中監視装置を備えたもので実験のみならず実習にも大きく寄与する設備となっている。

また、安全運航に関する実習のうち、主に機関部において重要なもののひとつである舶用推進機関の故障など、運転状態の異変の発見と対処方法を会得するために、コンピュータを活用した故障診断演習装置を1988年度（昭和63）に設置している。

電気工学実験室

船内発電機自動制御装置を導入した船舶の登場により、船員としての乗船時に対応できよう実習が必要になりつつあったため、1982年度（昭和57）にマイクロコンピュータ制御によるディーゼル発電装置自動化システムを設置した。これにより、発電機の並列運転操作など自動化船の発電装置に対応した実習が可能になった。

補機実験室

1984年度（昭和54）、冷凍冷房性能実験装置を設置した。船内の居住環境改善、船倉内空気の防湿についての教育に資するための空気調和装置として活用してきた。

蒸気機関実験室

1970年（昭和45）、実験実習用ボイラーとして、二胴D型自然循環式水管ボイラー（NHA-600 よしみね汽缶工業）が設置されたが、老朽化に伴い、1993年度（平成5年）にHKA1000荏原ヘンシェルボイラー（自然循環式水管ボイラー）に新替えされた。ボイラーの集中監視をCRTディスプレーモニターに更新し、実験実習設備の近代化された。

大島丸係留桟橋

1991年（平成3）9月に襲来した台風19号により、大島丸係留桟橋として設置した浮ドック2基のうち根元（岸壁側）のもの1基が沈下した。このため平成4年度および5年度にわたって浮ドック1基を新製し、浮きドックの間の渡橋も更新した。また、1994年度（平成6）には、ソフトテニスコートの北側の空き地に穴を掘り、大島丸用の「燃料給油タンク」を建設した。

実習船係留桟橋

1991年（平成3）9月に来襲した台風19号により、桟橋の防波堤の積石が崩れたので、翌年度（平成4）にこれを補修した。

4 練習船「大島丸」と3代目の建造

船舶自職員を目指す学生が授業や実験実習で学んだ知識を実際に応用し、その経験を通して自分のものとしたり、自然を相手にする船員がこれに対応すべき場としての校内練習船は、学校にとって最も必要なものである。遠隔操縦装置を備えた自動化船の2代目大島丸は、1969年（昭和44）3月11日三保造船所で建造され、学生の航海実習や卒業研究、また本船を使用しての調査・研究と大きな役割を果たし、教育と研究に多大な成果をあげてきた。しかし、長い年月の経過で船体部及び機関部は老朽化し、計装機器類は旧式化していた。一方、電子技術の進歩や新素材の開発を背景に驚異的な技術革新が進展し、船舶においても電子計算機を多面的に活用した「超自動化船」が出現し、運航士で動かす近代化船も就航していたので、これに対応するため「大島丸代船建造委員会」を設置して近代的な装備をもつ代船を計画していた。

しかし、外航海運界は急激な円高の到来でスリム化しており、学校側も学科改組を行って要請人員を縮小していたので文部省は「練習船の共同利用」の検討を求めていた。各校とも教育実習実施状況を検討したが、その結果、共同利用は現実には難しいとの結論を出した。このため文部省は各校に代船建造の必要は認めたものの、トン数は現有の練習船より小型とすべきとしていた。そのため5商船高専の校長会で各校とも船の大きさ、主機関の出力、船速は共通としてそれぞれの建造仕様で代船建造の概算要求を行うことになった。

本校の練習船建造目的は、学生の航海実習によって船舶の運搬技術の習得及び船内における基本的生活習慣の体得、卒業研究並びに本校教官の船舶運航の研究、船内労働環境調査、瀬戸内海西部の周辺海域の海洋などに関する調査や海上交通実態調査そして公開講座などの仕様による海事思想の普及を行うなど多目的教育練習船である。この目的に沿い建造に関する基本計画として、航行区域は近海区域とし、旅客船に準ずる設備を保有、低船首樓型船、やせ形、幅広、浅吃水であることを考慮した適切な操縦性の確保、機関室無人化船の基準に適合、良好な居住環境を考慮した防振、防音機能の施工などを検討した。

幸いにも1992年度（平成4）の補正予算で代船建造が認められ、同年12月21日付の官報で入札公告が公示された。本校の会議室にて1993年（平成5）1月5日入札説明会及び2月8日競争入札があり、三菱重工（株）下関建造所が落札した。2月25日同所で起工式があり、同所の第986番船として起工スイッチを道嶋校長が押され3代目大島丸の建造がスタートした。

2代目大島丸よりひとまわりちいさくなつたが装備品は多く、艦装監督にあたられた大島丸乗組員の方がうまくおさめるのにひと苦労されたようだった。

9月9日同所の第一船台で進水式が行われた。今度は山崎校長が大島丸と命名されると森山文部大臣の揮毫による大島丸の文字が船体に現われた。続いて支綱切断に移りドックの水門から海水が注入されその勇姿を瀬戸の海に浮かべた。

その後、造船所関係者と本船乗組員の熱意と努力により艤装工事が順調に進められ、予定通り11月17～19日には海上公試が行われた。各種の諸試験が行われたが、17日山口県蓋井島沖の海域における速力試験では排水量445トンのコンディションのなか、主機関最大出力で13.69ノットの船速が記録された。平成5年12月6日、小松港練習船桟橋に新船の晴れ姿を現わした大島丸はここで竣工引渡を無事終了した。この3代目大島丸の完成を祝うため同年12月9日文部省をはじめ校外、校内の多くの関係者の参加のもと大島丸竣工記念式典が第一体育館で挙行され、テープカットによって大島丸の一般公開があり、大観荘において祝賀会が催された。

本船の建造目的に従って最新の高性能機器を搭載しているが、その特徴をまとめると

- (1) CPP、バウスラスター及び特殊舵の組合せによる操縦性能の向上
- (2) 高精度な測位システムと電子海図を組合せた航海管理支援システム
- (3) 機関室における主機関、発電機関及び関連補機の基本的なスタンバイ作業及び停止後の終了作業のシーケンス制御システム
- (4) 主機関の燃焼解析装置、故障予知診断装置並びに中間軸から得られるトルクやスラスト信号による機関の経時変化を

把握する推進系総合監視システム

(5)航海情報、船体運動情報、気象海象情報、機関運動情報などの情報を収集処理及び操舵機、CPP、パウスラスタの制御が可能なデータ処理システム

(6)監視カメラなどからの映像を編集・保存し、また教室のスクリーンに表示可能な映像処理システムを備えている。

その他海洋関係の調査機器として海底地形探索装置(HS200M II)、水中テレビロボット(DELTA200)、多項目水質計などを保有している。水中テレビロボットは画像が鮮明で水線下の船体やプロペラの海洋生成物の付着状況が映し出された。1994年(平成6)4月6日電源開発(株)より四国電力(株)と共同で徳島県の橘湾に石炭火力発電所建設にあたり、海底ケーブルを通す紀伊水道の海底調査の協力依頼を受けた。受託研究としてケーブルの調査測量会社と合同で本船の海底地形探索装置を使用して、同年5月31日～6月2日紀伊水道の四国寄りの一部海域における海底起伏の調査を行った。その結果、探索装置によって1m内外の海底起伏をある程度まで調査できることがわかった。同時にジョイスティックによる操船のノウハウも得ている。(前脚航平)

表 大島丸主要要目

船名	大島丸(同名としては3代目)	主機関	ヤンマーMF29-UTD1 4サイクルディーゼル機関 1,300ps×370rpm×1基
建造所	三菱重工業 下関造船所		
進水	1993年(平成5年)9月9日		
航行区域	近海区域(非国際航海)	推進器	かもめ 4翼スクュー可変ピッチプロペラ
総トン数	228トン	発電機	西芝電機 225KVA 1,200rpm×2台
全長	41.90m	パウスラスタ	推力 1.0t×1台
垂線間長	38.00m	航海速力	12.5ノット
型幅	7.60m	航続距離	約2,100海里
型深	3.50m	救命設備	膨張式救命いかだ(定員20人)×6他
吃水	3.00m		
定員	乗組員	その他	合計
近海区域	9人	49人	58人
沿海3時未満間	9人	90人	99人



進水式



本校棧橋へ着桟

第3節 「情報工学科」の設置

1 情報工学科の発足

我が国の産業構造が、従来の労働力集約型から知識集約型に変革を迫られ知識・情報を正確にかつ迅速に交換する情報通信システムとそれを分析評価する情報処理システムが必要となってきた。これらのシステムを設計、製作あるいは運用する情報技術者の養成が急がれるようになり、1988年(昭和63)4月1日に航海学科1学級、機関学科1学級を商船学科1学級40名、情報工学科1学級40名に改組した。

情報工学科の教育目標はハードウェア技術者よりもソフトウェア技術者の育成を考えた。企業の業務を理解し計算機システムの有効利用を計画できるソフト系情報技術者であった。1年次からプログラミング教育を行い、経営工学に関する科目も習得させるようにしていた。

本学科が当時開設したころは、他高専の既設情報工学科では、大学工学部と同様に、電子工学科の伝統を残したハードウェア関連の授業科目の比重が高い教育課程となっていた。しかし、大学・高専の情報工学科卒業者の終業職種は90%程度がシステムエンジニアあるいはプログラマーのいわゆるソフトウェア部門という追跡調査結果が報告されており、在学中の教育内容と卒業後の職務内容の差が目立つ状況であった。これを裏付けるように、計算機本体の販売価格が急激に下がり始めたのに対してソフトウェアに係る経費にはかなりの上昇傾向がみられる、マスコミは10万人単位のソフト技術者の不足を報じていた。同時に、本校の近隣地域には計算機メーカーあるいは系列企業はほとんどみられず、他高専と同様の教育内容では卒業生が学校で修得した知識や技術を地元で生かすことは困難と考えることができるが、計算機の営業活動における利用は個人商店にも及んでおり非情報系企業への卒業生の就職を考慮した教育内容とすれば地元企業での活躍が可能と考えた。このため、計算機エンドユーザーである非情報系企業の業務を理解し計算機システムの有効利用を計画し得るソフト系情報技術者の養成を本学科の教育目標としており、情報工学の他に機械工学(製造業関連)、構造工学(土木建築業関連)あるいは経営工学(経営ならびに生産管理業務関連)の基礎を必修科目とした。1年時から実習を重視したプログラミング教育を実施し、学科開設当初から実習授業は全学生について1人1台のパソコンにより実施した。

採用活動等で企業が実施するプログラマー適性試験からも明らかのように、学生のプログラマー適性が学習効果に与える影響が大きいと考え、学科発足とほとんど同時にこの対策の必要に迫られた。また、高専は中学校から学生を受け入れるが、当時の中学校の進路指導にプログラマー適性の判定を期待することはできなかった。幸いに教官として優れた人材を得たことと女子学生が多い状況から、生物工学系の授業を専門選択科目として開設すると共に卒業研究にも工夫を加え、大学の生物工学科や農学部への編入学の便を図った。この便宜により、本学科からの大学編入学者の半数以上をこれらの分野に進学させることができた。また、卒業生の大多数は企業に就職したが、非情報系の授業科目を履修させていたことから本人の適性や将来計画に応じて非情報系企業を選択する場合にも柔軟に対応できた。1993年(平成3)以降になると、経済不況並びに就職難という厳しい状況となつたが、苦難の末生まれたこの教育目標により卒業予定者は幅広い業種から柔軟な就職活動を行うことができた。

2 教育課程

教育目標がソフトウェア技術者の養成にあることから授業、実験実習にプログラミング等、計算機実習を多くしていた。情報工学科発足当時から教育課程の大きな改正は行われていなかったが、1992年(平成4)4月から学校週5日制になり単位数等の変更があった。

表 1988年(昭和63)度一般科目(電子機械工学科・情報工学科共通)

授業科目	単位数	学年別配当					備考
		1年	2年	3年	4年	5年	
国語	9	3	3	2	1		
倫理・社会	2			2			
哲学	1					1	
政治・経済	2			2			
法	1					1	
経済学	1				1		
歴史	4	2	2				
地理	2	2					
数学	18	7	6	5			音楽又は美術を選択

物	理	4	2	2					
化	学	4	2	2					
生	物	2	1	1					
保	険	・	体	育	10	2	2	2	2
芸	術		2	1	1				
外 国 語	英 語	19	6	6	5	2			
	ド イ ツ 語	4				2	2		
計		85	28	25	18	8	6		
特 別 教 育 活 動		90	30	30	30				

表 1988年(昭和63)度専門科目(情報工学科)

授業科目	単位数	学年別配当				
		1年	2年	3年	4年	5年
必修科目	工業英語	2				2
	応用数学	4				2
	応用物理	4			2	2
	弹性体力学	2				2
	流体力学	2				2
	工業製図	2		2		
	統計学	4			2	2
	人間工学	2				2
	情報処理概論	2	2			
	電気・電子工学	6		2	2	2
	通信工学	2				2
	制御工学	2				2
	計算機アーキテクチャ	2			2	
	演算素子	2				2
	計算機システム	2				2
	プログラミング言語	6	2	2	2	
	情報数学	2			2	
	情報理論	2				2
	オペレーティングシステム	2				2
	データベース	4		2	2	
	画像工学	2			2	
	数理計画学	2				2
	オペレーションズリサーチ	2				2
	実験実習	10	3	3	2	2
	卒業研究	8				8
必修科目計		80	7	11	18	24
選	電子物性工学	2				2
	集積回路工学	1				1
	センサ工学	2				2
	リモートセンシング	1				1
	システムプログラム	2				2

科 目	知識工学	2						2
	生産管理	2					2	
	経営管理	2						2
	品質管理	1						1
	技術計算	1						1
	C A D / C A M	2						2
	コンピュータグラフィックス	2						2
	輸送工学	2					2	
	ロボット工学	2						2
	情報工学特論 I ~ IV	4						4
開設選択科目計		28					6	22
履修選択科目計		12					4	8
専門科目計		92	7	11	18	28	28	
一般科目計		85	28	25	18	8	6	
合計		177	35	36	36	36	34	

表 1992年(平成4)度一般科目(電子機械工学科・情報工学科共通)

授業科目	単位数	学年別配当					備考
		1年	2年	3年	4年	5年	
必修科目	国語	9	3	3	2	1	
	倫理・社会	2			2		
	法	1				1	
	政治・経済	2			2		
	歴史	4	2	2			
	地理	2	2				
	数学	17	6	6	5		
	物理	4	2	2			
	化学	4	2	2			
	生物	2	1	1			
選択科目	保健・体育	10	2	2	2	2	
	芸術	2	1	1			音楽又は美術を選択
	英語	18	6	6	4	2	
	ドイツ語	4			2	2	
必修科目計	81	27	25	17	7	5	
選択科目	哲学	1			1		2科目から 1科目を選択
	経済学	1				1	
	開設科目計	2				2	
	履修科目計	1				1	
一般科目計	82	27	25	17	8	5	
特別教育活動		90単位時間以上					

表 1992年(平成4)度専門科目(情報工学科)

授業科目	単位数	学年別配当				
		1年	2年	3年	4年	5年
工業英語	2					2

必修科目	応用数学	4					2	2
	応用物理	4				2	2	
	弹性体力学	2						2
	流体力学	2						2
	工業製図	2		2				
	統計学	4			2			
	情報処理概論	2	2					
	電気・電子工学	6		2	2	2		
	通信工学	2					2	
	制御工学	2					2	
	計算機アーキテクチャ	2			2			
	演算素子	2					2	
	計算機システム	2						2
	プログラミング言語	6	2	2	2			
	情報数学	2				2		
	情報理論	2					2	
	オペレーティングシステム	2					2	
	データベース	4				1	2	
	画像工学	2			2			
	数理計画学	2					2	
	オペレーションズリサーチ	2						2
	実験実習	10	3	3	2	2		
	卒業研究	8						8
必修科目計		75	7	9	17	22	20	
選択科目	電子物性工学	2					2	
	集積回路工学	1						1
	応用統計学						2	
	センサ工学	2						2
	リモートセンシング	1						1
	システムプログラム	2						2
	知識工学	2						2
	生産管理	2					2	
	経営管理	2						2
	品質管理	1						1
	技術計算	1						1
	C A D / C A M	2						2
	コンピュータグラフィックス	2						2
	生体情報工学	2					2	
	ロボット工学	2						2
情報工学特論 I ~ IV		4						4
開設選択科目計		30					8	22
履修選択科目計		15					4	11
専門科目計		90	7	9	17	26	31	
一般科目計		82	27	25	17	8	5	
合計		172	34	34	34	34	36	
校外工場実習		4年又は5年の夏期休暇中に2週間程度の校外工場実習を行うことができる。						

表 2002年(平成14)度一般科目(電子機械工学科・情報工学科共通)

授業科目	単位数	学年別配当					備考
		1年	2年	3年	4年	5年	
必修科目	国語	9	3	3	2	1	
	倫理・社会	2			2		
	法学	1				1	
	政治・経済	2			2		
	歴史	4	2	2			
	地理	2	2				
	数学	17	6	6	5		
	物理	4	2	2			
	化学	4	2	2			
	生物	2	1	1			
	保健・体育	10	2	2	2	2	
	芸術	2	1	1			音楽又は美術を選択
外国語	英語	18	6	6	4	2	
	ドイツ語	4				2	2
必修科目計		81	27	25	17	7	5
選択科目	哲学	1				1	
	経済学	1				1	
	開設科目計	2				2	
	履修科目計	1				1	
一般科目計		82	27	25	17	8	5
特別教育活動		90単位時間以上					

表 2002年(平成14)度専門科目(情報工学科)

授業科目	単位数	学年別配当				
		1年	2年	3年	4年	5年
必修科目	工業英語	2				2
	応用数学	4				2 2
	応用物理	4			2	2
	弹性体力学	2				2
	流体力学	2				2
	工業製図	2		2		
	統計学	4			2	
	情報処理概論	2	2			
	電気・電子工学	6		2	2	2
	通信工学	2				2
	制御工学	2				2
	計算機アーキテクチャ	2			2	
選択科目	演算素子	2				2
	計算機システム	2				2
	プログラミング言語	6	2	2	2	
	情報数学	2			2	
	情報理論	2				2

	オペレーティングシステム	2					2	
	データベース	4				1	2	
	画像工学	2				2		
	数理計画学	2					2	
	オペレーションズ・リサーチ	2						2
	C A D / C A M	2					2	
	コンピュータグラフィックス	2						2
	実験実習	10	3	3	2	2		
	卒業研究	8						8
必修科目	目計	79	7	9	17	24	22	
選択科目	集積回路工学	2					2	
	生産管理	2					2	
	数値計算	2						2
	システムプログラム	2					2	
	センサ工学	2					2	
	知識工学	2					2	
	制御工学特論	2					2	
	情報工学特論Ⅰ	1						1
	情報工学特論Ⅱ	1						1
	情報工学特論Ⅲ	1						1
	情報工学特論Ⅳ	1						1
	情報工学特論Ⅴ	1						1
専門科目	目計	19				4	15	
一般科目	目計	11					9	
合計		172	34	34	34	34	36	
校外工場実習		1	4年又は5年の夏期休暇中に2週間程度の校外工場実習を行うことができる。					

3 教育施設と設備

各実験室は、卒業研究、実験実習、クラブ活動等に使用していた。設備としてはソフト系ではパソコン、ワークステーションが多く、ハード系ではマイコンや集積回路などの基本的な実験ができるよう整備している。

(1) 数理計画実験室（情報棟1階）

情報数学、工業製図、データベース、プログラミング言語等の実習に使用している。

(2) データベース実験室（情報棟1階）

画像、音響等を加えたデータベース等の実習に使用している。

(3) 画像工学実験室（情報棟2階）

コンピュータグラフィック等に関する実習に使用している。

(4) 人工知能実験室（情報棟2階）

知識工学、プログラミング等の実習に使用している。

(5) 演算回路実験室（情報棟3階）

デジタル回路等の実験実習に使用していた。現在は、通信システム系の実験実習に使用している。

(6) 生体工学実験室（現在 半導体工学実験室、情報棟3階）

植物を対象に遺伝あるいは培養に関する実験実習に使用していた。現在は、電気・電子系の実験実習に使用している。

(7) プログラミング演習室（本館南棟3階）

プログラミング言語等の実習に使用している。

(8) 通信工学実験室（本館南棟4階 現在 本館南棟3階）

通信工学棟に関する実験実習に使用していた。現在、学科会議室および就職資料室として使用している。

(9) 情報電子工学実験室（本館南棟1階、現在 本館南棟3階 人間工学実験室）

電気計測、直流回路、交流回路の実験実習に使用していた。現在は、プログラミング言語の実習に使用している。

(10) センサ工学実験室（本館南棟1階）

各種計測器、制御工学等の実験実習に使用している。

4 校舎「情報工学科棟」竣工

本学科は商船学科からの改組新設であったために、実験室は商船学系学科から移籍した本館校舎内と新設の情報工学科実験棟（現情報工学科棟、3階建、960m²）の2か所に分かれて設置した。竣工時に、3～5年生の教室がある校舎南棟の3階と情報工学科棟3階とを渡り廊下で結び、学科関係の各部屋間の交通や計算機ネットワークLANの設置を容易とすることができた。

しかしながら、当時、情報工学科棟を含めた実験実習設備における問題として、工事予算の関係で設備導入が不十分な実験室があるところや、設備の大部分を計算機システムやパソコンが占めていたため、陳腐化が5年程度と早く、更新を検討する必要が間もなく生じた。実験実習については、可能な限り学科内での共同利用を進めたが、当時各研究室1～2名の態勢で行っていた卒業研究とクラスのグループ単位で実施した実験実習に対する設備整備方針を区別して対処するのが精一杯の状況であった。

以下に情報学科棟を含めた情報工学科の実験室について、竣工当時の状況と、現在の実験実習テーマと卒業研究テーマとで紹介する。

(1) 数理計画実験室 情報工学科棟1階

竣工当時は山中教官が在室し、パソコン12台を設置して、10人単位の実験実習を対象とした。工業製図、データベース、OAソフト等、2年生以上が利用する機会が多くあった。現在は北風教員が在室して、実験実習テーマとして3年生の情報数学実習を担当し、卒業研究テーマとして、潮流発電システムの開発、がん細胞のタンパク質情報を用いた特微量抽出などを担当する。

(2) データベース実験室 情報工学科棟1階

竣工当時は、松井教官が在室し、マッキントッシュQuadratic 950を中心として画像や音響等を加えたデータベースシステムを構成して、船の機関室シミュレータの試作に挑戦していた。現在は松村教員が在室して、実験実習テーマとして、2年生のマルチメディア実習、4年生のデータベース実習を担当し、卒業研究テーマとして、ファッションにおけるカラーコーディネート評価システムの開発、生成型学習による害獣検出の研究などを担当する。

(3) 画像工学実験室 情報工学科棟2階

竣工当時は神田教官が在室し、コンピュータグラフィックに関する実験室として整備して、パソコンやワークステーションを活用して卒業研究やプロコンの準備に利用した。現在では、浦上教員が在室して、実験実習テーマとして、1年生と2年生のPC基礎、4年生の通信工学実習を担当し、卒業研究テーマとして、過疎高齢地域におけるICTを用いた安全な津波避難経路導出の研究、4定期船運航情報管理システムの構築と管理手法の開発などを担当する。

(4) 人工知能実験室 情報工学科棟2階

竣工当時より岡村教官が在室し、当時、いわゆる知識工学と呼ぶ計算機応用技術分野を対象に整備をした実験室でSUN社製S4/330とパソコン10台をいち早く学科内LANシステムに接続して、他の実験室や研究室から利用することができた。今でも、放課後も実験実習課題に取り組む学生が多く、公開講座等の学外サービス活動への利用もあった。実験実習テーマとして、4年生のOS実習やデータ構造実習を担当し、卒業研究テーマとして、パーティクルフィルタによる海上を対象とした移動物体追跡法の研究、講義動画と講義資料が同期したe-Learningコンテンツ生成システムの開発などを担当する。

(5) 演算回路工学実験室 情報工学科棟3階

竣工当時は塩田教官が在室し、デジタル回路や論理回路の実験実習を中心として整備した。現在では、河合教員が在室

して、実験実習テーマとして、3年生の画像工学実習、4年生のマイコン実習を担当し、卒業研究テーマとして、没入型仮想空間における効果的な非接触フィードバックの研究、定性情報を付加した類似画像検索による画像の感性検索の研究などを担当する。

(6) 生体情報実験室 情報工学科棟3階

竣工当時は高橋教官が在室し、植物を対象に遺伝あるいは培養に関する実験実習を整備した。当時から変わらずに、プログラマー適性が不足気味の学生の進路指導に当たる部屋のようであった。生体情報系の研究課題を通じて多くの学生を大学編入学へと導いている。現在は、半導体工学実験室と名称を変えて山田教員が在室して、実験実習テーマとして、2年生の電気電子実習、3年生の電子工学実習、4年生のデジタル回路実習を担当し、卒業研究テーマとして、スプレー法による透明電極膜の研究、DTMを用いた伝統唱歌の音源製作などを担当する。

(7) プログラミング演習室 本館南棟3階

竣工当時は田中教官・石原教官・市村教官が在室した。ミニコンに10台のパソコンを接続したTSSシステムを2セットほど設置して、本学科の共通実験室的な運用が行われ、中級レベルのプログラミング演習、端末操作、OS関係の実習に利用していた。石原教官は、その後、新しく第2体育館横に竣工したものづくり棟2階の実験室に移った。現在実験実習として、2年生のソフトウェインストール実習、4年生の数理計画実習を担当し、卒業研究テーマとして、完成車の輸送計画の研究、SAを用いた時間枠制約付き運搬経路問題の解放研究などを担当する。

(8) 通信工学実験室 本館南棟4階

竣工当時は塩田教官が在室、管理していた。現在は就職資料室および学科会議室として利用している。

(9) 情報電子工学実験室 本館南棟1階

竣工当時は海田教官が在室し、2年生の電気電子工学の実験実習に使用していた。現在は、人間工学実験室として本館南棟3階に移り、橘教員が在室、管理している。実験実習テーマとして、1年生のC言語実習、3年生のJava言語実習を担当し、卒業研究テーマとして、視覚特性を考慮した胸部X線CT画像における肺腫瘍の領域抽出、Level Set法を用いた台帳電子洗浄システムにおける領域抽出精度の改良などを担当する。

(10) センサー工学実験室 本館南棟1階

竣工当時は星出教官が在室し、各種計測機器や制御工学の実験実習に使用していた。現在は、本館南棟3階に移り、杉野教員が在室、管理している。実験実習テーマとして、4年生のCG実習や制御工学実習を担当し、卒業研究テーマとして、面型パターン照明を用いた光沢評価法の研究、スポーツフォームシミュレータの開発などを担当する。



情報工学科棟

第3章 後援会・同窓会と記念事業

第1節 奨学後援会・体育後援会と同窓会

1 奨学後援会と体育後援会

奨学後援会は、1947年（昭和22）9月「学校と家庭との連絡を緊密にし、両々相協力して各生徒の教育に当り人格の完成に努めることが教育の完璧を期する所以である。」との目的から「大島商船学校奨学後援会」の名称で結成され、10月1日から発足した。途中、1951年（昭和26）4月から「大島商船高等学校奨学後援会」と名称変更を行い、1968年（昭和43）4月高等専門学校への昇格に伴い再び「大島商船学校奨学後援会」と変更になり、高等学校が廃止された1971年（昭和46）6月、現在の「大島商船高等専門学校奨学後援会」が確立された。

（目的及び事業）

奨学後援会は、学校の教育方針に基づいて会員と学校の協調を図り、教育の充実振興に寄与することを目的として設立されている。

会則第4条に定める事業として実施している主なものには、次のようなものがある。

- 学校行事への援助（入学式、卒業式2回、卒業生への記念品、校内成人式記念品、皆勤賞品）
- 商船祭への補助
- 大島丸実習、校外見学引率教員旅費補助
- 就職対策費補助
- 学生用図書購入
- 教員研究、研修旅費補助
- 理事会、総会、地方部会の開催
- 会員名簿の作成
- 会員に対する慶弔

体育後援会については、1964年（昭和39）大島商船高等学校奨学後援会会則第3条1項7号により内規を別に定め、会計上では「大島商船高等学校体育後援会」の名称が見受けられる。この内規も1969年（昭和44）4月から「大島商船高等専門学校体育後援会内規」と名称変更を行なっている。現在の大島商船高等専門学校体育後援会規則が制定されたのは1971年（昭和46）6月である。この日から体育後援会は奨学後援会から分離し、名実ともに体育後援会として発足した。

（目的及び事業）

体育後援会は、学生の体位向上及びスポーツの振興等を援助し、体育の健全な発達に資することを目的として設置されている。

会則第4条に定める事業として実施している主なものには、中国地区高専体育大会、全国高専体育大会の引率教員旅費補助、各クラブの大会引率教員旅費補助等がある。

2 同窓会

同窓会発足前は卒業生、在籍生徒ならびに職員をもって組織された校友会と称する会があり、会長は校長が兼務していた。校友会がいつ頃発足したか不明であるが、卒業生と学校との連絡が主たる活動であったようである。またこれとは別に昭和初期頃、阪神地区及び関門地区で小松会と称する会が生まれ、地域的な同窓会活動が行われるようになった。

戦時色が濃くなった1939年（昭和14）8月に校友会は廃止され、学友会という校内ののみの組織に縮小され、次いで名前も報国團となり活動は衰退した。

1942年（昭和17）6月海軍大佐中島新太郎氏が校長に着任されたのを機に当時本校に在職中の卒業生と校長の間で校友会を復活するために協議を重ねられ、同年9月校友会は大島商船同窓会として復活した。

同窓会長は校友会時代と同様校長兼務であったが、1949年（昭和24）商船学校の存続が問題となって、同窓会が存置

運動に立ち上がった際、公務員である校長が同窓会長として政治運動を行うのは制約が多いということになり、1950年(昭和25)以降卒業生が会長を務めるようになった(創立60周年記念誌および80年史より)。

第2節 記念事業

1 創基九十周年・高専創立二十周年

1-1 記念行事

創基九十周年・高専創立二十周年記念行事は、1987年(昭和62)11月1日から3日間、本校を主会場に次の行事が挙行された。

11月1日(日)

行事名	時間	場所
運輸省航海訓練所 練習船「海王丸」 (帆船)見学	9:00~15:00	大島町開作沖
学校施設公開 (商船祭)	9:30~15:00	校舎地区

11月3日(火)文化の日

行事名	時間	場所
運輸省航海訓練所 練習船「海王丸」 (帆船)見学	9:00~15:00	大島町開作沖
学校施設公開 (商船祭)	9:30~15:00	校舎地区

11月2日(月)

行事名	時間	場所
記念式典	10:00~10:50	第1体育館
記念講演会	11:00~12:00	第1体育館
記念祝賀会	12:20~13:30	第2体育館
運輸省航海訓練所 練習船「海王丸」 (帆船)見学	13:45~17:00	大島町開作沖
学校施設公開 (商船祭)	13:45~17:00	校舎地区
同窓会行事 慰靈祭 同窓会総会	11:00~12:00 13:45~15:30	慰靈碑前 視聴覚教室

文部省・運輸省

6名

山口県関係者

2名

市長関係者	14名	
学校（大学・高専・高校・中学）	27名	記念式典
後援会	16名	同年11月2日10時から本校第1体育館において、南校長式辞、文部大臣（代読）、山口県知事（代読）、地元大野大島町町長祝辞の後、57通の祝電及びメッセージが披露され、10時50分、式典は厳肅かつ盛大なうちに終了した。式次第及び式典出席者は次のとおりである。
同窓会	200名	
官庁・諸団体・企業	135名	
職員・学生	500名	

式典出席者

式次第

- 一 開式の辞
- 二 君が代齊唱
- 三 校長式辞
- 四 文部大臣式辞
- 五 来賓祝辞
- 六 祝電披露
- 七 校歌齊唱
- 八 閉式の辞

記念講演会

式典終了後、11時から同じく第1体育館において記念講演会が開催された。講師には、広島大学長沖原豊先生をお迎えして、「心の教育」の演題で、1時間の講演が実施された。

記念祝賀会

記念式典及び講演終了後、12時20分から13時30分まで来賓・同窓生・旧職員等約400名の参加で盛大に開催された。会場設営は職員で行い、内部の演題、テーブル、音響設備、料理等は業者委託をして準備された。同窓会長閉会挨拶、奨学後援会副会長の乾杯発声により開催され、テーブルスピーチ、アトラクションありで会も盛り上がり、1時間余りの時間も瞬時に経過した。大島町議会議長の万歳三唱で盛会裡に閉会した。

運輸省航海訓練所・練習船「海王丸」見学

10月31日11時30分に海の白鳥、帆船練習船・「海王丸」がその優美な姿を開港沖合に表し投錨した。本校桟橋と「海王丸」との間を、交通艇として「大島丸」「ちどり」偕上艇「ことかぜ」「笠佐丸」をピストン運航し、見学者を運んだ。見学者は、

11月1日・3日 一般公開 2,730名

11月2日 来賓・職員・学生 330名

であった。なお一般公開に当たっては、整理券として一日当たり1,000枚を用意していた。

学校公開

各学科等の公開施設は次のとおり。

・航海学科

模型室、電波公開計器室、レーダーシミュレータ実験室、航法実験室、荒天候航伯実験室

・機関学科

模型室、電気工学実験室、内燃機関総合実験室、蒸気実験室、水力学実験室

- ・電子機械工学科
機械工作総合実験室、制御システム実験室、計算機システム実験室、材料実験室
- ・一般科目
化学実験室、物理実験室
- ・電子計算機室

商船祭（学生記念祭）

「未来の港へ」とのテーマをかかげ、学生全員が参加、一致協力して多彩な行事を盛会裡に終了させた。

同窓会行事

- ・慰靈祭

夜半から降り始めた雨も 11 時前には上がり、予定通り慰靈塔前でしめやかに挙行された。「創基 90 周年高専開校 20 周年記念記録集」42 頁が語るように若い同窓生の合祀がなされた。今もって、誠に悲しい心痛む思いである。慰靈祭終了後、商船会館研修室において直会が実施された。

- ・同窓会総会

記念祝賀会終了後、視聴覚教室で同窓会総会が開催された。

1-2 記念誌の発行

1987 年（昭和 62）10 月 26 日、A4 判 43 頁、写真点数 144 点の記念誌「創基 90 周年・高専 20 年のあゆみ」（二千部）が完成発行された。1985 年（昭和 60）9 月 18 日開催の運営委員会で記念誌を発行することが決まり、内容は写真集にすることとなり、編集委員長に大畠（図書館主事）教官、副委員長に小倉（電子機械工学科主任）教官がそれぞれ指名され、次の運営委員会（12 月 19 日）で 12 名の編集委員（教官 10 名・事務官 2 名）が任命されて、総勢 14 名による委員会が発足した。編集委員会の開催及び審議事項は次のとおり。

第1回委員会 1986 年（昭和 61）1 月

- ・編集全体についての方針。

第2回委員会 同年 2 月

- ・誌名の検討
- ・体裁を A4 判、40 頁とする。
- ・内容、項目の検討。

第3回委員会 同年 3 月

- ・誌名を「創基 90 周年・高専 20 年のあゆみ」と決定。
- ・内容について、全体の 4 分の 1 を創基から高校時代に割り当て、残りを高専時代とすることに決定。
- ・「思い出の分」執筆依頼者の人選。
- ・編集委員を 4 班に分け、班ごとに内容を分担して編集することとした。

※春休みに班ごとに内容の検討、写真の選出を行った

第4回委員会 同年 4 月

- ・各班提出の原案を検討、修正を行った。
- ・今後は、各班責任者の会議を頻繁に持つこと。
- ・掲載用、写真撮影の担当者を決めた

※1986 年（昭和 61）11 月 執筆者に原稿依頼文を発送

第5回委員会 1987 年（昭和 62）3 月

- ・原案が完成。
- ・印刷依頼業者の決定。

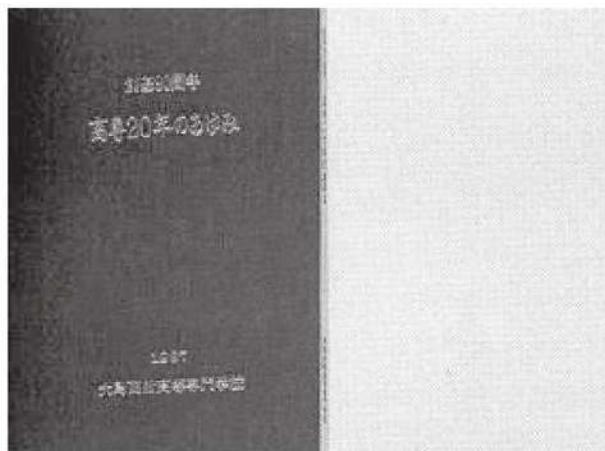
第6回委員会 同年7月

・最終原稿の検討、全員一致で了承。

※数回の校正を経て完成をみた



90周年記念式典



記念誌「創立90周年・高専20年のあゆみ」

2 創基百周年・高専創立三十周年

2-1 記念行事

朝方の激しい風雨がウソのように、青空をのぞかせる天気となり、1997年（平成9）10月31日午前10時30分、花火を合図に記念式典が挙行された。式典には、文部省（当時）をはじめとして、山口県と大島町を含む近隣市町の教育関係者、高専関係者、海運団体会計者及び多数の同窓会員を迎へ、教職員・学生を含め総勢約千名が参加した。

山崎直樹校長の式辞、文部大臣をはじめとする来賓祝辞、本校の発展に寄与された方々への感謝状贈呈と続き、最後に本校女子学生のピアノ伴奏により校歌を斎唱し、11時10分厳粛盛会のうちに式典は終了した。

式典終了後、場所を柳井クルーズホテルに移動して、記念祝賀会が開かれ、来賓・同窓生・旧職員を含め総勢約400名が出席した。

山崎校長のあいさつのあと、来賓祝辞、鏡割りと進行し、木村同窓会長の乾杯の音頭により祝宴が始まった。途中、テーブルスピーチなどにより大いに盛り上がった。名残を惜しみつつ、最後は大島町議会議長の万歳三唱で幕を閉じた。

翌11月1日サンビームやないにおいて記念講演会が開催された。講師は、ラジオパーソナリティの榎本勝起氏で、演題は「爆笑と感動の人間学（じんかんがく）」である。約千名の聴衆は、榎本氏の独特な語り口に引き込まれ、笑いの絶えない1時間半であった。

記念行事の一大イベントとなった「帆船日本丸」の公開は、1日の特別公開と2~3日の一般公開の三日間で行われた。

見学者の輸送は、大島丸桟橋から日本丸に設置した浮き桟橋間を、大島丸（定員80名）、ちどり（定員30名）、幸丸（定員24名）の三隻を用いて行った。秋晴れに恵まれ、三日間で見学者が七百名を超える盛況であった。

行事名	時間	場所
10月31日(金)		
記念モニュメント除幕式	10:00~10:15	第1体育館北側
記念式典	10:30~11:10	第1体育館
記念祝賀会	12:20~11:50	柳井クルーズホテル(柳井市)
11月1日(土)		
記念講演会 講師 榎本勝起 (ラジオパーソナリティ) 「爆笑と感動の人間学」	9:00~10:30	サンビームやない(柳井市)

2-2 百周年記念誌の発行

1994年(平成6)1月21日第1回創基百周年・高専創立三十周年記念事業準備委員会で、記念事業の一環として記念誌の発行が決定された。同月、岡本昭彦図書館主事(当時、現:図書館長)を委員長とする十二名の委員が任命され、百周年記念誌編纂専門委員会が発足した。

同年2月第1回の同編纂専門委員会が開かれ、編纂の進め方などについて検討がなされた。その後も委員会が継続的に開かれ、企画・編集などについて意見の交換が活発に行われた。その結果、すでに本校にはこれまでの集大成といえる『八十年史』が豊富な資料と詳細な記録をもとに記述されていることを考慮し、同年9月の第4回委員会で次のように編纂方針が決定された。

- (1) 記念誌の名称: 「百周年記念誌」とする
- (2) 規格・体裁: A4判 400頁 横書二段組み
- (3) 編集方針:
 - ①「史」ではなく「誌」としたように、できるだけ写真・図・表などを多く取り入れ、見やすく読みやすいように心掛ける
 - ②通史編では創立八十周年まではできるだけ簡単な記述にし、高専二十年を詳しく記述する
 - ③部門史編の記述は主に高専二十年についてとする
 - ④寄稿文の依頼は幅広く、特定の年代・分野に偏らないようにする
 - ⑤資料の収集については、この機会にできるだけ多く集め、その保存についても留意する。

翌年(平成7)4月校内的人事異動で、赤松道弘先生が図書館主事となり、編纂専門委員会委員長を引き継ぐことになった。そこで、新たに小倉、山田両副委員長と13名の委員体制で、従来の編集方針を確認し、以下の役割分担を決めた。

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 総括班 : ○赤松、小倉、山田 | 写真班 : ○星出、藤元、東村 |
| 通史班 : ○赤松、古藤、東村 | 資料班 : ○山田、海田、坂本、野本、吉田 |
| 部門史班 : ○小倉、中村、岡原、笛川 | 年表 : ○古藤、赤松 |
| 寄稿文班 : ○吉田、坂本、岡野内、山田 | (○印は班長) |

以後の編纂作業は主として各班で班長を中心に進められ、執筆者の選定や原稿依頼などが行われた。

第7編 独立行政法人国立高等専門学校機構大島商船高等専門学校

平成16年（2004）～

第1章 独立行政法人国立高等専門学校機構大島商船高等専門学校の発足

第1節 発足の経緯

独立行政法人国立高等専門学校機構は、国立高等専門学校（高専）を設置・運営するため、独立行政法人通則法及び独立行政法人国立高等専門学校機構法に基づき、2004年（平成16）に設立された。

国立高等専門学校機構では、全国に51の国立高専を設置し、積極的なアクティブラーニングの展開、グローバル化を先端的に進める新たな高専づくり、スケールメリットを最大限に活かした研究活動の推進などにより、地域と世界が抱える諸課題に果敢に立ち向かう、深い科学的思考に根差した実践的人材を養成する（高専法人化の意義と目的）。

近年、少子化に伴う社会構造の変化やグローバル化、情報通信技術の進展に伴う国際的な競争的環境の醸成など、特に我が国の高等教育を取り巻く状況は大きく変化してきた。今回の法人化は、まさにこのような状況の中で高等教育のあり方を大きく転換し、更なる発展を図ろうとするものである。すなわち、この法人化の意義は、端的に言えば「国立高専の裁量の拡大」を図り、それによって各高専がこれまで以上に「個性化」「活性化」「教育研究の高度化」を推進して行こうとするものである（文部科学大臣の国専協での挨拶）。

また、機構法第3条において機構の目的は、「55校の国立高専を設置することにより、「職業に必要な実践的かつ専門的な知識及び技術を有する創造的な人材を育成するとともに、我が国の高等教育の水準の向上と均衡ある発展を図ることを目的とする」とうたっており、特に実践的な技術を身につけた創造的な人材を育てて、我が国科学技術立国としての地歩をしっかりと固めて行こうとするものである。（川原秀夫）

第2節 教育課程の変遷

1 一般科目

1-1 教育目標

語学力、論理力、状況判断力、さらには人格形成に至る学問的素養を育むことを目標とする一般科目の授業において、教育の射程は多岐に渡るが、技術的専門知識に関して一般的な敷衍性を与える必要性が求められる。

1-2 教育課程

2002年（平成14）の学習指導要領では、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」などの「生きる力」の育成が求められた。学生の主体性に学問習得をゆだねる、いわゆる「ゆとり教育」である。翌年に「発展的な学習内容」を教育機関では扱えないとの縛りを解くものの、「発展的な学習内容」を掲載した教科書が使用できたのは、高等学校では2007年（平成19）まで待たねばならず、そこからさらに移行期間も含めれば、約10年程度、学習内容に関する懸隔が認められた。知識偏重教育の見直しが、知識習得それ自体の妨げとなつた例といえよう。特に人文社会学系の授業において、高専の場合「発展的な」レベルへの到達が求められない分野も多い。したがってこの改定の影響は実際として相対的に小さいと映るが、入学以前の段階での学習内容の量の低下は、高等教育機関での発展的な学習への移行を鈍らせるなど、少なくない影を落としたことは事実である。

この10年間、従来システムへの引き戻しから、さらに、2017年（平成29）3月に改定された学習指導要領では、知識を習得した上で、その知識をいかに応用へと、学生自らが導く過程を重要視したアクティブルーニングの導入が図られる。2017年度の改定の主眼目は、学生の考える力の育成である。学生自らが思考

し、教員がその補助に充る感のあるアクティブ・ラーニングの功罪の是非を問うことはこれからの課題であるが、公式的ではなく、最大公約数の判断が許される人文社会学系の学習領域における変化に影響が顕著に認められる。

1-3 モデルコアカリキュラム

学習指導要領では、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力」「基礎的・基本的内容の徹底」「個性を生かす教育」の3つの柱が据えられる。高専教育が推進するモデルコアカリキュラム構想内の一般科目の位置づけを確認しておきたい。高専では、技術者が有すべき能力を大きく分けて3つに分類している。

「技術者が分野共通で備えるべき基礎的能力」、「技術者が備えるべき分野別の専門的能力」、及び「技術者が備えるべき分野横断的能力」である。さらにこの大別を10分野に細分化した場合、一般科目が主に占める項目は、「技術者が分野共通で備えるべき基礎的能力」の中、

I 数学

II 自然科学（物理、物理実験、化学、化学実験、ライフサイエンス・アースサイエンス）

III 人文・社会科学（国語、英語、社会）

である。もちろんその他の大別に振り分ける要素を併せ持つ教科もあるが、区別化による卓越化、特権化がなされている訳ではなく、分類化による明確化と、そこから分野を連結する横断化の目的を看取できる。到達目標の明確化と、対外的に披歴できるシステム化の構築の中で、専門科目との乖離ではなく、融合化が一般科目強化にも意識される必要性が強く求められているといえよう。

一般科目として、この10年の変遷で顕著なのが、第二外国語と選択科目の選択幅の増加である（別添表参照）。第二外国語として、従来のドイツ語から、ハングル、ドイツ語、中国語と幅広い選択が認められ、より国際的なコミュニケーションスキルの育成の意図が看取できる。また、一般科目授業の目的の一つでもある文化的教養の涵養に関しては、選択科目教科の増設に、目的意識を見出せよう。国際関係から文学、語学、法律、経営学と、学生に対してより多くの選択肢を提示し、学問習得に平衡感覚を養う目的は、これから的一般科目の授業展開にも反映され、優れた人格を有す技術者の育成の礎となっていることは疑えない。

表 2004年度（平成16）一般科目

授業科目 / Subjects	単位数	学年別配当					備考
		1年	2年	3年	4年	5年	
必修科目	国語	9	3	3	2	1	
	倫理・社会	2			2		
	法學	1				1	
	政治・経済	2			2		
	歴史	4	2	2			
	地理	2	2				
	数学	17	6	6	5		
	物理	4	2	2			
	化学	4	2	2			
	生物	2	1	1			
選択科目	保健・体育	10	2	2	2	2	
	芸術	2	1	1			音楽又は美術を選択
	英語	18	6	6	4	2	
外国語	ドイツ語	4			2	2	

必修科目計		81	27	25	17	7	5	
選択科目	哲 学	1				1		2科目から 1科目を選択
	経 済 学	1				1		
	開設科目計	2				2		
	履修科目計	1				1		
一般科目計		82	27	25	17	8	5	
特別教育活動		90単位時間以上						

2 商船学科

2-1 STCW条約の改正に基づく船員教育の資質認定

2004年（平成16）、STCW条約に基づく船員教育の資質認定を受けるべく「資質基準システム運用マニュアル」を作成して船員教育カリキュラムの内部監査を実施することになった。毎年、マニュアルに従い内部監査を行い、船員教育施設としての資質を検査している。

2005年（平成17）に、船員教育施設卒業生の船員離れと外航船員不足の問題から始まった国土交通省の「船員教育あり方検討会」において種々の提言が行われた。また、2007年（平成19）「海洋基本法」の制定により、同年から新たな高専の商船学科のあり方についての検討が始められた。以後、新カリキュラム策定のための作業が行われた。（第五表を参照）

第五表 商船学科カリキュラム（一般科目79単位、専門科目80単位）

一般科目（商船学科）

授業科目		単位数	学年別配当					備考
			1年	2年	3年	4年	5年	
必修科目	国語	8	4	2	2			*は第14条4項に定める授業科目による単位を示す。 音楽又は美術を選択
地歴	世界史	2	2					
	地歴I	1		1				
	地歴II	1		1				
公民	現代社会	2			2			
数学		18	6	6	6			
物理		4	2	2				
化学		4	2	2				
理科総合		1	1					
英語	英語講読	9	3	3	3			
	英語演習	4	2	2				
	EC	2	1	1				
	英語表現	2			2			
	現代英語	2				2		
保健・体育		9	2	2	2	2	1	
芸術		1	1					
法学		1				1		
哲学		1				1		

	外国語演習	3				2	1	航海・機関英語
	必修科目計	75	26	22	17	8	2	
選択科目	日本文学	2					2*	2科目から 1科目を選択
	日本史特論	2					2*	
	英語特論 I	2					2*	
	数学概論	2					2*	
	日本語学	2				2*		
	英語特論 II	2				2*		
	化学特論	2				2*		
	企業と法	2				2*		
	アメリカ文学概論	2				2*		
	開設科目計	18				10	8	
	履修科目計	4				2	2	
一般科目計		79	26	22	17	10	4	

特別活動

特別活動	単位時間	学年別配当						備考
		一年	二年	三年	四年	五年	一年	
	90 単位時間以上			90 単位時間以上				

専門科目（商船学科航海コース）

必修科目	共通	授業科目	単位数	学年別配当					備考
				一年	二年	三年	四年	五年	
		応用数学	2				2		*は第 14 条 4 項に定め る授業科目 による単位 を示す。
		情報処理	4	2	2				
		工業力学	2			2			
		電気・電子基礎	4		2	2			
		制御工学	2				2		
		船舶工学	1					1	
		設計製図	2		2				
		航海学概論	2	1	1				
		舶用機関学概論	1		1			1	
		操艇実習	3	3					
		実験実習	8		2	3	3		
		校内練習船実習	4	1	1	1	1		
コース別		創造演習	1				1		
		卒業研究	4					4	
		測位論	4			2		2*	
		航路論	3				2	1	
		航海計測学	5			1	2*	2*	
		海洋気象学	2			2			

		船舶整備論	3		1	2*		
		船舶載貨論	3			2	1	
		船体運動論	4			4*		
		船舶安全学	3			2	1	
		航海法規	2		2			
		海事法規	3			2	1	
		必修科目計	72	7	11	16	26	12
選 択 科 目	共 通	物流システム	2			2		
		船舶衛生学	2.5			2	0.5	
		電気・電子工学特論	1				1	
		計算機科学	1				1	
		システム制御工学	1				1	
		信頼性工学特論	1				1	
		海運論	1				1	
		オーラルコミュニケーション	1				1	
		国際物流論	1				1	
		インターナーシップ	2			1	1	
コ ース 別		無線法規	1.5			1	0.5	
		交通工学	2			2		
		気象特論	2			2		
		流体力学	2			2		
		航路計画論	1				1	
		通信工学	1				1	
		海事法規特論	1				1	
		開設科目計	24			12	12	
		履修科目計	8			4	4	
		専門科目計	80	7	11	16	30	16
		一般科目計	79	26	22	17	10	4
		合計	159	33	33	33	40	20
		大型練習船実習	上記単位数以外で 12 月実施する					

専門科目（商船学科機関コース）

必修科目	共通	授業科目	単位数	学年別配当					備考
				一年	二年	三年	四年	五年	
		応用数学	2				2		*は第 14 条
		情報処理	4	2	2				4 項に定める授業科目による単位を示す。
		工業力学	2			2			
		電気・電子基礎	4		2	2			
		制御工学	2				2		
		船舶工学	1					1	
		設計製図	2		2				

	航海学概論	2	1	1				
	舶用機関学概論	1		1		1		
	操艇実習	3	3					
	実験実習	8		2	3	3		
	校内練習船実習	4	1	1	1	1		
	創造演習	1				1		
	卒業研究	4					4	
コース別	材料力学	4				4*		
	流体力学	2				2		
	工業材料	1					1	
	熱力学	2			2			
	燃焼工学	1					1	
	電気・電子工学	4				4*		
	機械設計	4			1	1	2*	
	計測工学	1				1		
	内燃機関学	4			2	2		
	蒸気機関学Ⅰ	2			2			
	蒸気機関学Ⅱ	3				1	2*	
	補助機械工学	2			1	1		
	冷凍・空調工学	1					1	
	燃料・潤滑工学	1					1	
	海事法規	1					1	
	必修科目計	73	7	11	16	26	13	
選択科目	共通	物流システム	2			2		
		船舶衛生学	2.5			2	0.5	
		電気・電子工学特論	1				1	
		計算機科学	1				1	
		システム制御工学	1				1	
		信頼性工学特論	1				1	
		海運論	1				1	
		オーラルコミュニケーション	1				1	
		国際物流論	1				1	
		インターンシップ	2			1	1	
コース別		計測工学特論	2			2		
		冷凍空調工学特論	2			2		
		電気機器	2			2		
		補助機械工学特論	1				1	
		蒸気機関学特論	1				1	
		内燃機関学特論	1				1	
		エネルギー管理工学	1				1	
		開設科目計	23.5			11	12.5	

履修科目計	7				4	3	
専門科目計	80	7	11	16	30	16	
一般科目計	79	26	22	17	10	4	
合計	159	33	33	33	40	20	
大型練習船実習	上記単位数以外で12月実施する						

2-2 2013年（平成25）の新カリキュラム導入

2013年（平成25）、新カリキュラムが策定され、同年の入学者より適用し実施した。新設された主な科目としては「海事実務」が挙げられる。当該科目は、従来からの実験実習に準ずる形式で行われ、実験的要素より実地実習＝実機の操作、各種機関の発停所作等にも重点が置かれている。第3学年以降は、航海と機関のコース別でさらにカリキュラムが組まれており、航海コースではECDIS（電子海図表示装置）等の制度化に対応した内容を、機関コースでは各種機関が緊急停止した場合などに行う応急運転等を行う内容も含んでものとなっている。

なお商船学科設置以降、学生は入学試験前に航海もしくは機関コースのどちらかを志願し、入学時には原則、コースも決定のうえ入学していたが、2015年度（平成27）1年生から、第2学年修了時に学生個人の希望によりコースを決定する方式となった。

そのほか、商船学科に関わらず全学科・全学年的な取り組みとして、中国・四国地区の高専における共働による遠隔授業等の実施、試行が始まっていることへの対応として、2016年（平成28）以降は90分間連続して行う授業が原則となり、時間割表上での表記こそ1日8时限とされるものの、1から6时限目は例外を認めない2时限続きの90分間連続した授業制へ移行している。（第六表を参照）

第六表 平成28年度 授業時間

時限	時刻		
1時限	08:50～10:20		
2時限			
休み	10分		
3時限	10:30～12:00		
4時限			
休み	10分		
5時限	12:50～14:20		
6時限			
休み	10分		
7時限	14:30～16:00		
8時限			

50分授業として実施する場合
(7, 8时限のみ)

7时限	14:30～15:20
休み	
8时限	15:25～16:15

2-3 サンドウィッチ方式による乗船実習の導入

2015年度（平成27）入学者より、学内における座学と学外所属の練習船等による乗船実習を織り交ぜて実施するサンドwich方式による教育、通称「サンドwich教育」が採用された。

商船高専におけるサンドwich教育は、従来は、学内において連続4年半の席上課程修了後、すなわち第5学年前学期終了後に1年間連続して航海訓練所（2016年以降「海技教育機構 航海訓練部」に改組）等が所有する大型船等での乗船実習を行う形式であった。しかし、2015年度（平成27）に大型練習船等での乗船実習の「時期」のみについて大幅な変更がなされ、第2学年次に1ヶ月間、第4学年次に5ヶ月間、第

5学年終了後に6ヶ月間乗船するという形に変更された。これに伴い、2016年度（平成28）に5学年在籍する学生は、入学時のカリキュラムでは従前のままであったため前年度の4学年時に1年間の履修計画が組まれていたが、後期に5ヶ月間乗船することとなったため、各科目担当教員が検討の末、実施時期や単位数の5年次へ変更、配分することで対応した。（第七表を参照）

サンドウィッチ教育は、本校でも高等学校時代頃までは行われてきたが、1966年（昭和41）の高専昇格を機に、その後「サンドウィッチ教育」が途絶えた状態にあった。

現代の商船高専においても、サンドウィッチ教育は、学生にとって大きな効果が期待されており、商船学科の学生が就職活動時に不利とされてきた懸案事項が関係している。その懸案事項とは、従来の商船学科の学生は、比較的小型とされる学校所属の練習船での乗船実習の経験しかないまま第5学年に進級し、自身が大型船への乗務について向き不向きの判断をするための経験がないまま就職活動を取り組んできた結果、海上職の志望者の学生なかには、戸惑いを持ったまま、大型船を運航する海運会社の採用試験等に臨んできたという状況にある。結果として、従前の学生は、第5学年の秋季以降すなわち席上課程修了後に初めて大型船での実習を体験し、そこで「自身は大型船よりも中規模程度の船員の方が向いている」等と気付いた場合でも、多くの学生は内定等の取り下げを申し出ることが難しく、卒業後、そのまま就職し早期に退職するといったケースが見られた。今後、サンドウィッチ教育の実施により、大型船での実習が第2学年及び第4学年といった早い段階で組み込まれることで、前述の懸案事項が改善されるものと考えられる。

ただし、サンドウィッチ教育の実施により新たに生ずる懸案としては、学内での席上と学外での実習を繰り返すことになるため、就学環境、特に居住環境が幾度となり替わることで、学生によっては精神的あるいは経済的に負担が増す可能性がある。また、大半が未成年である第2学年及び第4学年の学生の乗下船時には、受入先である海技教育機構より、トラブル等防止のため、学生を教員が引率し、受け入れ先である大型練習船等に直接引き継ぐことを求められておいることと、従前は一度で済んでいた乗船開始前の手続き（健康状態や外地渡航前の諸手続き等）がその都度必要になるため、教職員の事務的な負担がかさみつつあり、海上技術学校や旧商船系大学における対応を参考にするなど、今後、対策が必要になってくるものと思われる。

第七表 2016年度（平成28）商船学科カリキュラム

一般科目（平成28年度第1学年に適用）

必修科目	授業科目	単位数	学年別配当					備考
			1年	2年	3年	4年	5年	
人文・社会	国語Ⅰ	2	2					
	国語Ⅱ	2	2					
	国語Ⅲ	4		2	2			
	世界史	2	2					
	日本史	2		2				
	地理	1	1					
	倫理社会	2		2				
	政治経済	2			2			
	法学	1					1	
	哲学	1						
自然	数学1	4	4					
	数学2	2	2					
	数学3	4		4				

選 択 科 目	数学4	2		2				音楽又は美術を選択 *は学修単位	
	数学5	4			4				
	数学6	2			2				
	物理	4	2	2					
	化学	4	2	2					
	総合化学	1	1						
	外国語	英語講読	9	3	3	3			
		英語演習	4	2	2				
		英語表現	2			2			
		現代英語	3				1 2		
	保健体育	9	2	2	2	1	2		
	芸術	1	1						
	履修単位数計	74	26	23	17	3	5		
選 択 科 目	日本文学	2					2*	*は学修単位	
	経営学	2					2*		
	実践英会話	2					2*		
	英語特論	2					2*		
	日本語学	2					2*		
	企業と法	2					2*		
	国際文化論	2					2*		
	日本史特論	2					2*		
	開設単位数計	16					16		
	履修単位数計	2					2		
履修単位数合計		76	26	23	17	3	7		

専門科目（平成28年度第1学年に適用）

必修科目	共通	授業科目	単位数	学年別配当					備考
				1年	2年	3年	4年	5年	
		基礎セミナー	1	1					
		キャリアセミナー	2		1			1	
		情報処理	2	1	1				
		船舶工学	1		1				
		電気電子基礎	2		2				
		力学基礎	2		2				
		工学基礎	1		1				
		海運概論	2	2					
		船舶管理	2					2	
		制御工学	1				1		
		応用数学	2					2	
		卒業研究	6					6	

航海コース	地文航法	2			2			
	天文航法	2				2		
	航海計器	2			2			
	電波航法	2				2		
	航路論	2				1	1	
	操船論	2			2			
	海洋気象学	2			2			
	船舶整備論	2			1	1		
	船舶載貨論	2				1	1	
	海上交通法	2			2			
	海事法規	2				1	1	
	海事英語	3			2	1		
	コミュニケーション	2					2	
	校内練習船実習	5	1	1	1	1	1	
	海事実務	7	1	1	2	1	2	
	実験実習	8	2	2	2	2		
機関コース	内燃機関学	3			1	2		
	蒸気工学	2			1	1		
	推進工学	1				1	1	
	舶用補機	3				2	1	
	電気電子工学	2			2			
	電気機器学	2				2		
	計測工学	1			1			
	熱流体力学	1			1			
	工業力学	1			1			
	材料力学	1			1			
	金属材料学	1			1			
	燃料潤滑油	1					1	
	設計製図	2			2			
	海事法規	1					1	
	海事英語	3			2	1		
	コミュニケーション	2					2	
選択科目	校内練習船実習	5	1	1	1	1	1	
	海事実務	7	1	1	2	1	2	
	実験実習	8	2	2	2	2		
	各コース履修単位数計	71	8	12	18	15	18	
	海上安全学	2					2	
共通	海運経済	2					2	
	海洋管理	2					2	
	エネルギー・プラント管理	2					2	
	造船工学	2					2	

	海洋環境工学	2					2		
	インターンシップ	1				1			
	開設単位数計	13				1	12		
	履修単位数計	6				0	6		
大型練習船実習		上記単位数以外で 12 月実施する							
			単位数	学年別配当					備考
				1年	2年	3年	4年	5年	
専門科目履修単位数合計			77	8	12	18	15	24	
一般科目履修単位数合計			76	26	23	17	3	7	
合計			153	34	35	35	18	31	

一般科目（平成 28 年度第 2 学年に適用）

授業科目		単位数	学年別配当					備考
			1年	2年	3年	4年	5年	
必修科目	人文・社会	国語 I	2	2				
		国語 II	2	2				
		国語 III	4		2	2		
		世界史	2	2				
		日本史	2		2			
		地理	1	1				
		倫理社会	2		2			
		政治経済	2			2		
		法学	1				1	
		哲学	1					1
	自然	数学 1	3	3				
		数学 2	3	3				
		数学 3	4		4			
		数学 4	2		2			
		数学 5	4			4		
		数学 6	2			2		
		物理	4	2	2			
		化学	4	2	2			
		総合化学	1	1				
		英語講読	9	3	3	3		
	外国語	英語演習	4	2	2			
		英語表現	2			2		
		現代英語	3				1	2
		保健体育	9	2	2	2	1	2

	芸術	1	1					音楽又は美術を選択
	履修単位数計	74	26	23	17	3	5	
選択科目	日本文学	2					2*	*は学修単位
	経営学	2					2*	
	数学概論	2					2*	
	実践英会話	2					2*	
	英語特論 I	2					2*	
	英語特論 II	2					2*	
	日本語学	2					2*	
	日本史特論	2					2*	
	化学特論	2					2*	
	企業と法	2					2*	
	国際文化論	2					2*	
	開設単位数計	22					22	
	履修単位数計	2					2	
	履修単位数合計	76	26	23	17	3	7	

一般科目（平成 28 年度第 3・4 学年に適用）

必修科目	授業科目	単位数	学年別配当					備考
			1年	2年	3年	4年	5年	
人文・社会	国語 I	2	2					
	国語 II	2	2					
	国語 III	4		2	2			
	世界史	2	2					
	日本史	2		2				
	地理	1	1					
	倫理社会	2		2				
	政治経済	2			2			
	法学	1				1		
	哲学	1					1	
自然	数学 1	3	3					
	数学 2	3	3					
	数学 3	4		3				
	数学 4	2		3				
	数学 5	4			4			
	数学 6	2			2			
	物理	4	2	2				
	化学	4	2	2				
	総合化学	1	1					
外	英語講読	9	3	3	3			

	英語演習	4	2	2				音楽又は美術を選択
	英語表現	2			2			
	現代英語	3				1	2	
	保健体育	9	2	2	2	1	2	
	芸術	1	1					
	履修単位数計	74	26	23	17	3	5	
選択科目	日本文学	2				2*		
	経営学	2				2*		
	数学概論	2				2*		
	実践英会話	2				2*		
	英語特論 I	2				2*		
	英語特論 II	2				2*		
	日本語学	2				2*		
	日本史特論	2				2*		
	化学特論	2				2*		
	企業と法	2				2*		
	国際文化論	2				2*		
	開設単位数計	22				22		
	履修単位数計	2				2		
履修単位数合計		76	26	23	17	3	7	

専門科目（平成 28 年度第 2・3・4 学年に適用）

必修科目	共通	授業科目	単位数	学年別配当					備考
				1年	2年	3年	4年	5年	
必修科目	共通	基礎セミナー	1	1					
		キャリアセミナー	2		1			1	
		情報処理	2	1	1				
		船舶工学	1		1				
		電気電子基礎	2		2				
		力学基礎	2		2				
		工学基礎	1		1				
		海運概論	2	2					
		船舶管理	2					2	
		卒業研究	6					6	
航海コース	航海コース	地文航法	2			2			
		天文航法	2				2		
		航海計器	2			2			
		電波航法	2				2		
		航路論	2				1	1	
		操船論	2			2			

	海洋気象学	2			2			
	船舶整備論	2			1	1		
	船舶載貨論	2				1	1	
	海上交通法	2			2			
	海事法規	2				1	1	
	海事英語	3			2	1		
	コミュニケーション	2					2	
	校内練習船実習	5	1	1	1	1	1	
	海事実務	7	1	1	2	1	2	
	実験実習	8	2	2	2	2		
機 関 コ ース	内燃機関学	3			1	2		
	蒸気工学	2			1	1		
	推進工学	1				1	1	
	舶用補機	3				2	1	
	電気電子工学	2			2			
	電気機器学	2				2		
	計測制御工学	1			1			
	熱流体力学	1			1			
	工業力学	1			1			
	材料力学	1			1			
	金属材料学	1			1			
	燃料潤滑油	1					1	
	設計製図	2			2			
	海事法規	1					1	
	海事英語	3			2	1		
	コミュニケーション	2					2	
	校内練習船実習	5	1	1	1	1	1	
	海事実務	7	1	1	2	1	2	
	実験実習	8	2	2	2	2		
各コース履修単位数計		71	8	12	18	15	18	
選 択 科 目	共 通	海上安全学	2					2
		海運経済	2					2
		海洋管理	2					2
		エネルギー・プラント管理	2					2
		造船工学	2					2
		海洋環境工学	2					2
		応用数学	2					2
		インターンシップ	1				1	
	開設単位数計		15				1	14
	履修単位数計		6				0	6
各コース履修単位数合計			77	8	12	18	15	24

大型練習船実習	上記単位数以外で 12 月実施する						
	単位数	学年別配当					備考
		1年	2年	3年	4年	5年	
専門科目履修単位数合計	77	8	12	18	15	24	
一般科目履修単位数合計	76	26	23	17	3	7	
合計	153	34	35	35	18	31	

一般科目（平成 28 年度第 5 学年に適用）

必修科目	授業科目	単位数	学年別配当					備考
			1年	2年	3年	4年	5年	
	国語	8	4	2	2			*は第 14 条 4 項に定める授業科目による単位を示す。
	世界史	2	2					
	地歴	地歴 I	1		1			
		地歴 II	1		1			
	公民	現代社会	2			2		
	数学	18	6	6	6			
	物理	4	2	2				
	化学	4	2	2				
	理科総合	1	1					
	英語	英語購読	9	3	3	3		
		英語演習	4	2	2			
		EC	2	1	1			
		英語表現	2			2		
		現代英語	2				2	
	保健・体育	9	2	2	2	1	2	
	芸術	1	1					音楽又は美術を選択
	法学	1					1	
	哲学	1					1	
	外国語演習	3				1	2	航海・機関英語
	必修科目計	75	26	22	17	2	8	
選択科目	日本文学	2					2*	5 年生選択科目の履修単位数は最低 2 単位、 4 単位までとする
	日本史特論	2					2*	
	日本史概論	2					2*	
	数学概論	2					2*	
	英語特論 I	2					2*	
	英語特論 II	2					2*	
	日本語学	2					2*	
	化学特論	2					2*	
	企業と法	2					2*	

	国際文化論	2					2*	
	開設科目計	20					20	
	履修科目計	2					2	
	一般科目計	77	26	22	17	2	10	

専門科目（商船学科航海コース：平成28年度第5学年に適用）

授業科目			単位数	学年別配当					備考
				一年	二年	三年	四年	五年	
必修科目	共通	応用数学	2					2	*は第14条 4項に定める授業科目による単位を示す。
		情報処理	4	2	2				
		工業力学	2			2			
		電気・電子基礎	4		2	2			
		制御工学	2					2	
		船舶工学	1					1	
		設計製図	2		2				
		航海学概論	2	1	1				
		舶用機関学概論	1		1				
		操艇実習	3	3					
		実験実習	8		2	3	1.5	1.5	
		校内練習船実習	4	1	1	1		1	
		創造演習	1					1	
		卒業研究	4					4	
コース別		測位論	4			2		2*	
		航路論	3				1	2	
		航海計測学	5			1	2*	2*	
		海洋気象学	2			2			
		船舶整備論	3			1	2*		
		船舶載貨論	3				1	2	
		船体運動論	4					4*	
		船舶安全学	3				1	2	
		航海法規	2			2			
		海事法規	3				1	2	
		必修科目計	72	7	11	16	12.5	25.5	
選択科目	共通	物流システム	2				2		
		船舶衛生学	2.5				1.5	1	
		電気・電子工学特論	1					1	
		計算機科学	1					1	
		システム制御工学	1					1	
		信頼性工学特論	1					1	

	海運論	1					1	
	オーラルコミュニケーション	1					1	
	国際物流論	1					1	
	インターンシップ	2				1	1	
コース別	無線法規	1.5				0.5	1	
	交通工学	2				1	1	
	気象特論	2					2	
	流体力学	2				2		
	航路計画論	1				1		
	通信工学	1				1		
	海事法規特論	1					1	
開設科目計		24				10	14	
履修科目計		8				3	5	
専門科目計		80	7	11	16	15.5	30.5	
一般科目計		77	26	22	17	2	10	
合計		157	33	33	33	17.5	40.5	
大型練習船実習		上記単位数以外で 12 月実施する						

専門科目（商船学科機関コース：平成 28 年度第 5 学年に適用）

必修科目	共通	授業科目	単位数	学年別配当					備考
				一年	二年	三年	四年	五年	
コース別		応用数学	2				2		*は第 14 条 4 項に定め る授業科目 による単位 を示す。
		情報処理	4	2	2				
		工業力学	2			2			
		電気・電子基礎	4		2	2			
		制御工学	2					2	
		船舶工学	1					1	
		設計製図	2		2				
		航海学概論	2	1	1				
		舶用機関学概論	1			1			
		操艇実習	3	3					
		実験実習	8		2	3	1.5	1.5	
		校内練習船実習	4	1	1	1		1	
		創造演習	1					1	
		卒業研究	4					4	
		材料力学	4				2*	2*	
		流体力学	2				2		
		工業材料	1					1	
		熱力学	2			2			
		燃焼工学	1					1	
		電気・電子工学	4				2*	2*	

		機械設計	4			1	1	2*
		計測工学	1				1	
		内燃機関学	4			2		2
		蒸気機関学 I	2			2		
		蒸気機関学 II	3				1	2*
		補助機械工学	2			1		1
		冷凍・空調工学	1					1
		燃料・潤滑工学	1					1
		海事法規	1					1
		必修科目計	73	7	11	16	13.5	25.5
選 択 科 目	共 通	物流システム	2				2	
		船舶衛生学	2.5				1.5	1
		電気・電子工学特論	1					1
		計算機科学	1					1
		システム制御工学	1					1
		信頼性工学特論	1					1
		海運論	1					1
		オーラルコミュニケーション	1					1
		国際物流論	1					1
		インターンシップ	2				1	1
コ ー ス 別	計測工学特論	2				1	1	
	冷凍空調工学特論	2					2	
	電気機器	2				1	1	
	補助機械工学特論	1					1	
	蒸気機関学特論	1					1	
	内燃機関学特論	1					1	
	エネルギー管理工学	1					1	
	開設科目計	23.5				6.5	17	
履修科目計		7				2	5	
専門科目計		80	7	11	16	15.5	30.5	
一般科目計		77	26	22	17	2	10	
合計		157	33	33	33	17.5	40.5	
大型練習船実習		上記単位数以外で 12 月実施する						

2-4 GI ネットによる協働授業

瀬戸内海に所在する商船高専 3 校（広島、弓削、大島）を IT ネットワーク(GI ネット)でつなぎ、同時に授業を行う試みとして、2016 年（平成 28）10 月 3 日、17 日、24 日及び 11 月 144 日の合計 4 回にわたりて実施された。3 校の商船学科 1 年生が対象となり、本校では「海運概論」の科目として行われた。本校からは商船学科村田助教と大島丸山口一等機関士が担当にあたるとともに、事後において、今後の実施についての課題等の検討がなされた。

3 電子機械工学科

3-1 学科概要

近年、電子技術・コンピュータ技術の急速な発展に伴い、これが機械技術や計測制御技術に結びつき、複合化されることによって機械装置の機能が大幅に向かっている。ロボットはその代表的な存在である。

さらには通信技術と組み合わされることにより、各種の機械装置がネットワーク化されて有機的・組織的な生産活動も展開されつつある。

本学科では、このような時代に対応するため電子電気と機械の2分野を中心として、これに情報処理・計測制御を含めた幅広い学習を基礎理論と実験実習との両面から実施している。

3-2 授業内容

専門課程では、基礎科目に重点をおき、理論的な学習だけでなく実験実習、設計製図及び卒業研究を通じて、技術の応用能力や自発的研究態度を養い、真に実践的な技術者の養成を目指している。

3-3 専攻科設立に伴う大幅なカリキュラム変更

専攻科の設立に伴い、これまで本科のみの授業科目系統図だったものが、専攻科の授業科目とも連動した授業科目系統図に変更された。また、これまで独立して学習してきた流体力学・熱力学が複合され熱流体力学にカリキュラム変更されたり、平成18年度より導入された大学単位科目（自学自習）に向けた準備であったり、企業等における就業体験を通して実社会の課題に取り組む訓練を積むことを目的とした、インターンシップがカリキュラムとして取り入れられた。

なお専攻科の発足等については同第2章に記載されている。

3-4 大学単位科目（自学自習）における対応

平成18年度より、本校において大学単位科目が導入され、それに伴い自学自習時間を授業時間内に組み込むことになった。自学自習時間とは、講義以外の学生が自立して学習することである。よって本校教員は、学生の自学自習の意思意欲を補助する責務を負っており、さらに教室での講義と教室外での自学自習により学生の学力向上を目指すことが求められている。また今後、本校が取り組む日本技術者教育認定機構（JABEE: Japan Accreditation Board for Engineering Education）および機関認証制度においては、この自学自習時間がどのように運用され、学生の学力向上に役立っているかを示す必要がある。

このことについて以下の内容を学生および教員に周知された。

(1) 自学自習時間における学生の心得

- ① 担当教員の指定した課題、レポートさらに担当教科の予習復習
- ② 担当教員の科目以外の課題およびレポートさらに他の教科の予習復習
- ③ 卒業研究と関連づけた調査研究および卒業研究（5年生）

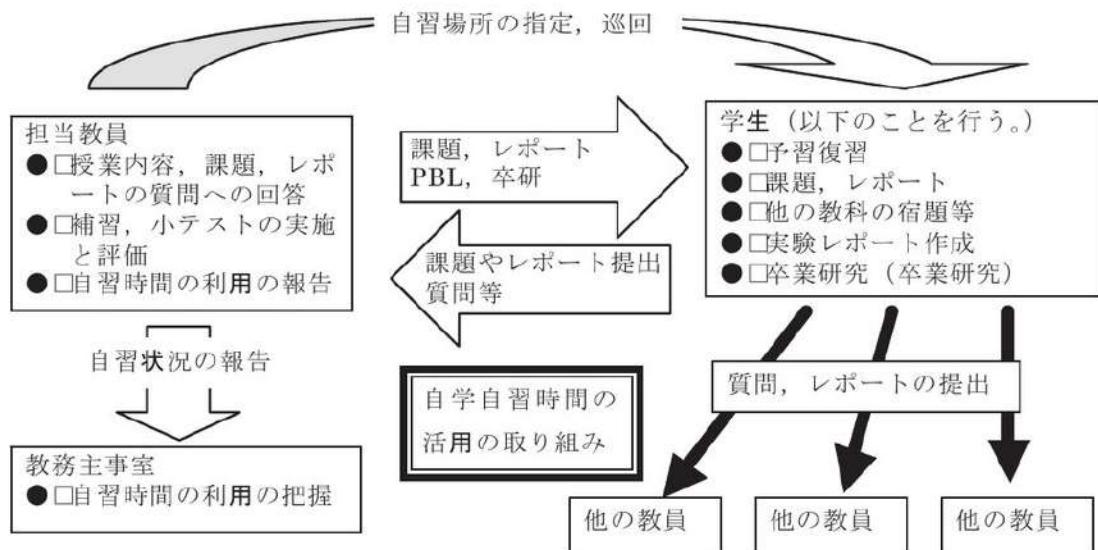
(2) 自学自習時間における教員の心得

- ① 自学自習の方法の手助けとなる課題、レポートの作成
- ② 学生の質問への対応
- ③ 補講や小テストの実施等

(3) 教務関係における自学自習時間の扱いについて規定等

自学自習時間で実施した事例を把握し JABEE や機関認証の際の基礎的資料の作成を行う。

以上のイメージ図を図*に示す。



図* 大学単位科目（自学自習）におけるイメージ図

3-5 JABEE プログラム

プログラム名：システムデザイン工学プログラム (System Design Engineering Program)

目的と概要：

JABEE の目的は「大学や高等専門学校などの高等教育機関で行われている教育活動の品質が満足すべきレベルにあること、また、その教育成果が技術者として活動するために必要な最低限度の知識や能力 (Minimum Requirement) の養成に成功していることを認定すること」であるとされている。認定は、非政府団体の日本技術者認定機構 (JABEE) によって行われる。

本プログラムで養成する技術者像：

システムデザイン工学プログラムで養成する技術者は、企業や社会での新しいシステムやものづくりの世界で、設計や構築をするメンバーとして活躍できる人材である。

現代のものづくり分野では、ユーザの立場を重視した発想と新しい技術の社会や環境に与える影響を配慮してデザイン能力が必要とされている。技術者としての確かな倫理観と対応能力を身につけ、ものづくりを通して社会貢献できる人材の育成を実現する。

3-6 専攻科審査およびJABEE審査に向けたカリキュラム変更

これまでの科目系統図から、専攻科審査（平成 22 年度）および JABEE 審査（平成 26 年度）に向けて、それぞれの学習・教育目標（10 細目）に対応した関連付けがなされた。この関連付けに伴い、授業カリキュラム内容の変更が行われた。

JABEE 対応コースの学習・教育目標

JABEE 対応コースの学習・教育目標は、次の 10 項目からなる。

表* 「システムデザイン工学プログラム」における学習・教育目標

1. 豊かな人間性と責任感	(1) 歴史・文化・社会・環境などの教養を広く学び、地球的視野を身につける
	(2) 技術者倫理について学び、技術者としての責任を自覚できる
2. 工学の基礎知識	(3) 数学・自然科学および情報技術の知識を修得し、その知識を専門分野に応用できる

3.専門知識を持つ ものづくりを完遂 する能力	(4) 自らのアイデアを基に実施計画を立案し、自主的、継続的に実行できる
	(5) 基礎的かつ複合的な工学専門知識（設計・システム系、情報・倫理系、材料・バイオ系、力学系、社会技術系の科目群）を修得し、具体的な工学問題の解決に応用できる
	(6) 電気・電子・情報・機械分野の基礎知識を修得し、実験、問題分析、工学的な問題解決に応用できる
	(7) 複合的視点による問題解決能力と対応能力を身につける
4.コミュニケーション能力	(8) 日本語による論文的文章の表現力を高め、プレゼンテーションができる
	(9) 英語で表現された文章や技術論文を理解でき、英語による簡単なコミュニケーションができる
	(10) 目標達成のために問題点を討議し、協働で問題解決にあたる能力

非 JABEE コースの学習・教育目標：

非 JABEE コースの名称は「電子・情報システム工学コース」である。電子・機械・情報などの専門的技術分野をより深く修め、資格取得などにも積極的に取組み、専門分野に特化した技術者の育成を実現する。

3-7 モデルコアカリキュラムの策定による教育内容の変化

「より高度で幅広い場で活躍する多様な実践的・創造的技術者の養成」を期待されている国立高専の教育改革・改善の方向を端的に示すものとして、モデルコアカリキュラム（試案）が平成 24 年 3 月 23 日に策定された。このモデルコアカリキュラムにおいては、カリキュラム編成の指針となるような、学生が身につけるべき到達目標（アウトカムズ）が整理されており、インプットとしてのカリキュラムを意味するものではない。

この策定による効果としては、①実践的・創造的技術者養成に向けた各国立高専におけるカリキュラム改善に資すること、②教育内容及び到達目標を明示・公表することにより、「教育の質」について社会的説明責任を果たすこと、③学生が自らの学習成果の達成状況について点検・評価する斎野基準にもなること、④他高専・他大学との単位互換、⑤大学編入に際しての既修得単位認定の円滑化に資すること、などが挙げられる。もちろん、モデルコアカリキュラムが示す指針の到達度については、基本的に各国立高専が主体的に適切な方法により確認すべきものであり、第三者評価に位置づけられる認証評価や、日本技術者教育認定機構（JABEE）のプログラム認定・審査に関しては、教育の成果に関する自己評価の指標として有効に活用できると考える。

以上を背景とし、各分野における学習内容やその到達目標に対応した横断的・縦断的カリキュラムになるよう、各教科のカリキュラムが変更された。

4 情報工学科

情報工学科が開設した 1988 年（昭和 63）から独立行政法人化する前までは、まだまだ若い学科であり、情報工学分野の学術並びに技術進歩に応じた教育課程の基本に関わる改正は行われていなかった。僅かに、1992 年（平成 4 年）度から実施した学校週 5 日制に関連して、修得単位数の変更と選択科目についてハードウェア系とソフトウェアケアを系統的に受講できるように履修指導することとなった。独立行政法人化するまでの教育課程は、一般科目 8 2 単位と専門科目 9 0 単位（必修 7 5 単位、選択 1 5 単位）1 7 2 単位を修得することとしていた。専門科目については、1～3 年次のプログラム能力と専門基礎知識、4～5 年次は計算機応用能力の習得を念頭に教育課程を組んだ。開設当時からのカリキュラムの特徴として、情報工学分野ではプログラミング言語、データベース、オペレーティングシステムや通信工学等を必修として計算機応用技術の基礎を、実験実習と組み合わせて学習させるところは現在も受け継いでおり、効果的な学習法であ

る。また、計算機応用の対象となる分野として、開設当時の他の情報工学科ではほとんど履修しない科目を必修として工業製図、数理計画学、OR（オペレーションズ・リサーチ）、流体力学や弾性体力学を開設し、選択科目として生産管理、経営管理、CAD/CAMや知識工学を開設していた。実践的技術者の養成を目指す高専の特徴である実験実習は、1～4年次まで計10単位とした。卒業研究（8単位）を実施する5年次には実験実習を課していない。1年次はクラス単位でのプログラミング実習とし、2年次から10名程度のグループに分かれて、1シリーズ4～6テーマを巡回する方式で年間6シリーズの課題を学生に課していく。この6ラウンドシステムは、独立行政法人化した現在も、正にアクティブラーニングの最前線としての位置づけをもつ実践教育手法として受け継いでいる。

2000年に入ると、携帯電話やインターネットをはじめとして社会は、情報技術と通信技術が高度に融合したICT社会へと時代背景は激動することとなり、この大きな変革期においてもこれまでと同様に社会に対し実践的教育活動を果たすために、積極的な教育内容の新展開をこの後に進めることになる。2004年（平成16）の独立行政法人化以降におけるカリキュラムの特徴として、4～5年次に大学単位（学修単位）制度の科目を導入して、学生の学習時間確保や教員の授業負担軽減をまず図ることになった。4年次の一般選択科目と5年次の専門選択科目を中心に大学単位を導入したため、4年次では放課後の補講時間が低学年に近いかたちで確保できた。また、5年次にも授業時間の自己管理が可能となったことで、前期には学生は就職活動の書類準備、企業面接練習などができる精神的な余裕が生まれ十分な就活準備を行うことが可能となった。一方で後期からは、卒業研究に取り組むなど授業時間の有効活用が可能となった。

その後も、2010年頃からは世界的なスマートフォンの爆発的な普及をきっかけに、日常生活や医療・福祉・商取引・自動車の自動運転やセキュリティ管理にいたるまで、ありとあらゆるものをネットワーク活用するいわゆるスマート社会へと時代は突き進んで行く。本学科においても、授業内容の変更が比較的フレキシブルな実験実習を中心に新しい情報実習を取り込んでいる。授業科目においては、通信系の科目としてコンピュータネットワークや信号処理、画像処理系ではパターン認識などを新設し、ハードウェア系の科目では、デジタル電子回路やデジタル・アナログ集積回路などを新設した。また、大学編入学においてTOEICスコアを入学の評価とする大学が増えている実情や、企業の採用活動においても英語のコミュニケーション能力を重要とする動きを受けて、一般科目に英語系の科目を16単位必修で開設している。さらに、一般選択科目として実践英会話や英語特論などを少人数授業で丁寧に指導する体制が整えられている。

2015年度（平成27）より、モデルカリキュラム（MCC）を導入し、本学科においてもMCCが掲げる技術者として備えるべき能力の内不足していた汎用的技能、総合的な学習経験や創造的思考力、態度や志向性（人間力）を系統的に養う科目として、情報教育活動実習と創造演習Ⅰ～Ⅲを学年進行で開設した。創造演習Ⅰでは、ブレインストーミングをはじめとしたグループディスカッション、実践的コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、人材力などを2年次に養う。情報教育活動では、実習を通じて実践的なサイバーセキュリティについてグループで体験・学習する。創造演習Ⅲでは5年生で大島丸の乗船実習を課し、商船学科の教員の指導を通じて社会人として必要な態度や志向性（人間力）を磨く。およそ30年前に新たな道を歩み出した情報工学科が商船学科の大島丸に里帰りして身も心も鍛え直す授業である。

表 2004年度（平成16）一般科目（電子機械工学科・情報工学科共通）

授業科目／Subjects	単位数	学年別配当					備考
		1年	2年	3年	4年	5年	
必修	国語	9	3	3	2	1	
	倫理・社会	2			2		
	法學	1				1	
	政治・経済	2			2		
	歴史	4	2	2			
	地理	2	2				

科 目	数 学	17	6	6	5			
	物 理	4	2	2				
	化 学	4	2	2				
	生 物	2	1	1				
	保 健 ・ 体 育	10	2	2	2	2	2	
	芸 術	2	1	1				音楽又は美術を選択
	外 国 語	英 語	18	6	6	4	2	
		ド イ ツ 語	4				2	2
必 修 科 目 計		81	27	25	17	7	5	
選 択 科 目	哲 學	1				1		2科目から 1科目を選択
	經 濟 學	1				1		
	開 設 科 目 計	2				2		
	履 修 科 目 計	1				1		
一 般 科 目 計		82	27	25	17	8	5	
特 別 教 育 活 動		90単位時間以上						

表 2004年度(平成16)専門科目(情報工学科)

授 業 科 目	単位数	学 年 別 配 当				
		1年	2年	3年	4年	5年
必 修 科 目	工 業 英 語	2				2
	応 用 数 学	4				2
	応 用 物 理	4			2	2
	彈 性 体 力 学	2				2
	流 体 力 学	2				2
	工 業 製 圖	2		2		
	統 計 学	4			2	
	情 報 處 理 概 論	2	2			
	電 氣 ・ 電 子 工 学	6		2	2	2
	通 信 工 学	2				2
	制 御 工 学	2				2
	計 算 機 ア ー キ テ ク チ ャ ー	2			2	
	演 算 素 子	2				2
	計 算 機 シ ス テ ム	2				2
	プロ グ ラ ミ ン グ 言 語	6	2	2	2	
	情 報 数 学	2			2	
	情 報 理 論	2				2
	オペレーティングシステム	2				2
	データベース	4			1	2
	画像工学	2			2	
	数理計画学	2				2
	オペレーションズ・リサーチ	2				2
	C A D / C A M	2				2
	コンピュータグラフィックス	2				2
	実 験 実 習	10	3	3	2	2
	卒 業 研 究	8				8
必 修 科 目 計		79	7	9	17	24
選	集 積 回 路 工 学	2				2
	生 产 管 理	2				2
	数 值 計 算	2				2

選 科 目	シス テ �ム プ ロ グ ラ ム	2					2
	セ ン サ 工 学	2					2
	知 識 工 学	2					2
	制 御 工 学 特 論	2					2
	情 報 工 学 特 論 I	1					1
	情 報 工 学 特 論 II	1					1
	情 報 工 学 特 論 III	1					1
	情 報 工 学 特 論 IV	1					1
	情 報 工 学 特 論 V	1					1
	開 設 科 目 計	19				4	15
	履 修 科 目 計	11				2	9
専 門 科 目 計	90	7	9	17	26	31	
一 般 科 目 計	82	27	25	17	8	5	
合 計	172	34	34	34	34	36	
校 外 工 場 実 習	1	4年又は5年の夏期休暇中に2週間程度の校外工場実習を行うことができる。					

表 2015年度(平成27)一般科目(電子機械工学科・情報工学科共通)

科 目 分 類	授 楽 科 目	単位数	学 年 别 配 当					備 考
			1年	2年	3年	4年	5年	
必 修 科 目	人 文 社 会	国語I	2	2				
		国語II	2	2				
		国語III	4		2	2		
		世界史	2	2				
		日本史	2		2			
		地理	1	1				
		倫理社会	2		2			
		政治経済	2			2		
		法学	1				1	
		哲学	1				1	
	自 然	数学1	4	4				
外 国 語		数学2	2	2				
		数学3	4		4			
		数学4	2		2			
		数学5	4			4		
		数学6	2			2		
		物理	4	2	2			
		化学	4	2	2			
		総合科学	1	1				
		英語講読	8	3	3	3		
		英語演習	4	2	2			
選 択 科 目		英語表現	2			2		
		現代英語	2				2	
		第二外国語	4				2	2
		保健体育	10	2	2	2	2	
		芸術	1	1				
		履修単位数計	77	26	23	16	8	4
	日本文学	2					2*	
	経営学	2					2*	
	実践英会話	2					2*	
	英語特論	2					2*	

*は学修単位

ハングル、ドイツ語、中国語のいずれかを選択

音楽又は美術を選択

	履修単位数計	2				2	
	履修単位数合計	79	26	23	16	8	6

表 2015 年度(平成 27) 専門科目(情報工学科)

授業科目	単位数	学年別配当					備考
		1年	2年	3年	4年	5年	
必修科目	コンピュータリテラシー	2	2				△は学修単位
	情報工学概論	2		2			
	情報数学	2			2		
	情報理論	2				2*	
	データ構造とアルゴリズム	2				2*	
	数理計画法	2				2	
	オペレーションズリサーチ	2					
	プログラミング I	2	2				
	プログラミング II	2		2			
	プログラミング III	2			2		
	システムプログラム	2				2*	
	計算機アーキテクチャ I	2			2		
	計算機アーキテクチャ II	2				2*	
	オペレーティングシステム	2				2*	
	データベース	2				2	
	コンピュータネットワーク	2				2	
	通信工学 I	2					
	ソフトウェア工学	2				2*	
	信号処理	2				2*	
	画像工学	2		2			
	コンピュータグラフィックス	2				2*	
	電基基礎・電気回路	2		2			
	アナログ電子回路	2			2		
	デジタル電子回路	2				2*	
	制御工学	2				2	
	統計学	2			2		
	応用数学 I	2				2	
	応用物理学 I	2			2		
	技術英語	2				2	
	情報工学演習	2		1			
	情報教育活動実習	1			1		
	創造演習 I	1		1			
	創造演習 II	1				1	
	創造演習 III	1				1	
	実験実習	8	2	2	2	2	
	卒業研究	8					8
選択科目	履修単位数計	80	6	10	17	25	22
	応用物理学 II	2				2	5年間の修得単位数の合計が 167 単位以上となるように選択科目を選択、履修すること。
	生産管理	2				2	
	応用数学 II	2				2	
	数値計算	1				1	
	通信工学 II	1				1	
	コンピュータ解析法	1				1	
	パターン認識	1				1	
	デジタル・アナログ基盤回路	1				1	
	制御システム工学	1				1	
	CAD/CAM	1				1	
	工業力学	1				1	
	信頼性工学	1				1	
	情報工学特論 I	1				1	
	情報工学特論 II	1				1	
	情報工学特論 III	1				1	
	インターネット	2			1	1	
	開設単位数計	20			5	15	
	履修単位数計	8			2	6	
	履修単位数合計	88	6	10	17	27	28
専門科目計		88	6	10	17	27	28
							備考

一般科	目計	79	26	23	16	8	6	
合	計	167	32	33	33	35	34	

第3節 「専攻科」の発足

1 発足の経緯

2005年（平成17）4月1日の専攻科設置は、大学評価・学位授与機構から2月14日付けで正式に認定された。

この専攻科設置に向けて、和氣校長を中心として準備が進められ、2002年（平成14）5月7日には、教務主事を委員長とし、各学科及び一般科目から選出された各2名の委員、事務部長、3課長からなる専攻科設立準備委員会を立ち上げた。当初は、2004年（平成16）4月1日設置に向け、概算要求に努力したが、残念ながら採用されなかった。

2004年（平成16）の独立行政法人化後に、国立高等専門学校機構のもと、全国5つの商船高専が今年こそはそろって専攻科の設置をとの意気込みで、一致協力して概算要求をおこなった。その結果この概算要求については、同年12月22日に予算内示があった。「専攻科認定申請書」は、大学評価・学位授与機構へ提出し審査を受けていたが、翌年2月14日付けで専攻科の設置が認定されたのである。

本校の専攻科の入学定員内訳は、次のとおりである。

- | | |
|------------------------|------|
| （4月入学） ■ 電子・情報システム工学専攻 | 8名 |
| （10月入学） ■ 海洋交通システム学専攻 | 4名 |
| | 計12名 |



2 海洋交通システム学専攻

商船学科卒業生は航海士、機関士としての免許も取得することができる。しかし、近年海運会社では船舶運航のコスト削減のために、日本人船員からアジア人船員への移行を終え、日本人は船舶運航管理や物流管理を陸上で担っている。また、船舶運航管理は、運航管理と機関管理からなっているため、専攻科では、商船学、物流管理を必修専門として学び、運航管理及び機関管理を選択専門としている。そうすることで、運航技術を持ち、さらに管理ノウハウをも学んで陸上から船舶運航を管理、支援する人材を育成する。

● 海洋交通システム学専攻

Major Course in Advanced Course of Marine Transport Systems

区分 Classification	必修選択の別 Required or Elective	授業科目 Subjects	単位数 Number of Credits	学年別配当				
				1年 1st	2年 2nd	秋学期 Fall Semester	春学期 Spring Semester	
				秋学期 Fall Semester	春学期 Spring Semester			
一般科目 Liberal Art Subject	必修 Required	実践英語 I <i>Practical English I</i>	2	2				
		履修単位数 Necessary Credits	2					
	選択 Elective	ボランティア <i>Volunteer</i>	1	1				
		実践英語 II <i>Practical English II</i>	2		2			
		異文化論 <i>Inter-Cultural Studies</i>	2		2			
		技術者倫理 <i>Engineering Ethics</i>	2	2				
		日本文学概論 <i>Introduction to Japanese Literature</i>	2		2			
		開設単位数 Total of Elective Credits	9					
		履修単位数 Necessary Credits	4単位以上 (ボランティアを含まない) Over 4. (excluding Volunteer)					
専門共通科目 Basic	必修 Required	実用技術英語 <i>Practical English</i>	2	2				
		応用数学特論 I <i>Advanced Course of Applied Mathematics I</i>	2	2				
		コンピュータシミュレーション <i>Computer Simulation</i>	2	2				
		履修単位数 Necessary Credits	6					
	選択 Elective	応用数学特論 II <i>Advanced Course of Applied Mathematics II</i>	2		2			
		応用物理科学 <i>Applied Physical Science</i>	2		2			
		環境科学 <i>Environmental Science</i>	2	2				
		材料科学 <i>Material Science</i>	2		2			
		数値解析特論 <i>Advanced Course of Numerical Analysis</i>	2		2			
		機械システム工学 <i>Mechanical System Engineering</i>	2			2		
		電子機器特論 <i>Electric Equipment Engineering</i>	2		2			
		情報システム学 <i>Information System</i>	2		2			
		エネルギーシステム学 <i>Energy System</i>	2			2		
		産業論 <i>Theory of Industry</i>	2			2		
		開設単位数 Total of Elective Credits	20					
		履修単位数 Necessary Credits	10	単位以上	Over 10.			
専門科目 Major Course Subjects	必修 Required	海洋交通システム学特別研究 I <i>Thesis Work I</i>	4	4				
		海洋交通システム学特別研究 II <i>Thesis Work II</i>	12			12		
		海洋交通システム学特別実験 <i>Particular Experiments</i>	4	2	2			
		海洋交通システム学特別演習 <i>Particular Laboratory</i>	4		2	2		
		履修単位数 Necessary Credits	24					
	専門専攻科目 Specialized	インターンシップ <i>Internship</i>	2		2			
		交通システム工学 <i>Traffic System Engineering</i>	2	2				
		海事統計学 <i>Marine Statistics</i>	2	2				
		海洋ロボット工学 <i>Marine Robotics</i>	2			2		
		機関システム工学 <i>Management of Propulsive Engine for Marine</i>	2	2				
		船舶安全学特論 <i>Maritime Safety Advanced</i>	2	2				
		流通ターミナル論 <i>Terminal Planning</i>	2			2		
		船体運動学特論 <i>Advanced Ship Maneuvering</i>	2				2	
		船舶ヒューマンマシン <i>Human Interface of Shipping</i>	2	2				
		インターフェース論 <i>Interface of Shipping</i>	2					
		エネルギー変換工学 <i>Energy Conversion Engineering</i>	2		2			
		反応工学論 <i>Reaction Engineering</i>	2			2		
		冷凍空調システム工学 <i>Refrigeration & Air Conditioning System</i>	2				2	
		燃焼工学特論 <i>Combustion Engineering Advanced</i>	2				2	
		情報工学特論 <i>Advanced Information Engineering</i>	2	2				
		開設単位数 Total of Elective Credits	28					
		履修単位数 Necessary Credits	16単位以上(インターンシップを含まない) Over 16. (excluding Internship)					
一般・専門科目 開設単位数合計		Total of All Credits	89					
修得単位数合計		Total of Necessary Credits for Graduation	62単位以上(ボランティア、インターンシップを含まない) Over 62. (excluding Volunteer and Internship)					

3 電子・情報システム工学専攻

メカトロニクス分野とIT分野をシステム化した電子・情報システムに関する高度な研究開発ができる実践的開発技術者の育成を目的としている。そのため、電子・制御システム系、情報・通信ネットワーク系の高度な専門知識と技術を教育し、これらの複合領域に関する素養と国際化にも対応できる能力を備えた実践

的な研究開発能力を育成する。さらに、高齢化社会が到来している地元地域に密着し、福祉と環境を考慮した社会システムにも対応できる総合力も育成する。

● 電子・情報システム工学専攻

Major Course in Advanced Course of Electronic & Information Technology Systems

区分 Classification	必修選択の別 Required or Elective	授業科目 Subjects	単位数 Number of Credits	学年別配当			
				1年 1st		2年 2nd	
				前学期 The First Semester	後学期 The Second Semester	前学期 The First Semester	後学期 The Second Semester
一般科目 Liberal Art Subject	必修 Required	実践英語 I Practical English I	2		2		
		履修単位数 Necessary Credits	2				
	選択 Elective	ボランティア Volunteer	1		1		
		実践英語 II Practical English II	2				2
		異文化論 Inter-Cultural Studies	2	2			
		技術者倫理 Engineering Ethics	2			2	
		日本文学概論 Introduction to Japanese Literature	2	2			
	開設単位数 Total of Elective Credits		9				
		履修単位数 Necessary Credits		4単位以上 (ボランティアを含まない) Over 4. (excluding Volunteer)			
専門科目 Major Course Subjects	必修 Required	実用技術英語 Practical English	2	2			
		応用数学特論 I Advanced Course of Applied Mathematics I	2		2		
		コンピュータシミュレーション Computer Simulation	2		2		
		履修単位数 Necessary Credits	6				
	選択 Elective	応用数学特論 II Advanced Course of Applied Mathematics II	2	2			
		応用物理学 Applied Physical Science	2	2			
		環境科学 Environmental Science	2				2
		材料科学 Materials Science	2			2	
		数値解析特論 Advanced Course of Numerical Analysis	2	2			
		機械システム学 Mechanical System Engineering	2		2		
		電子機器特論 Electric Equipment Engineering	2			2	
		情報システム学 Information System	2	2			
	選択 Elective	エネルギーシステム学 Energy System	2				2
		産業論 Theory of Industry	2			2	
		開設単位数 Total of Elective Credits	20				
		履修単位数 Necessary Credits	10	単位以上 Over 10.			
	必修 Required	電子・情報システム工学特別研究 I Thesis Works I	4	4			
		電子・情報システム工学特別研究 II Thesis Works II	12				12
		電子・情報システム工学特別実験 Experiments of Electronics & Information System	4	2	2		
		創造工学演習 Creative Engineering Exercise	2		2		
		電子・情報システム工学特論 Advanced Course of Electronics and Information Systems	2			2	
	選択 Elective	履修単位数 Necessary Credits	24				
		インターンシップ Internship	2	2			
		画像処理 Image Processing	2			2	
		電子物性工学 Electronic Physical Properties Engineering	2	2			
		集積回路工学特論 Integrated Circuits Physics & Technology	2	2			
		高電圧工学特論 Advanced High Voltage Engineering	2			2	
		電子制御工学 Electric Control Engineering	2	2			
		デジタルシステム Digital System	2		2		
		マルチメディア応用技術 Multimedia Applied Technology	2	2			
		応用画像工学 Applied Image Engineering	2		2		
		通信ネットワーク工学 Network Technology	2	2			
		認識工学 Pattern Recognition	2			2	
		応用信号処理 Applied Signal Processing	2			2	
		生産管理特論 Advanced Course of Production Control	2			2	
		人間感性システム特論 Human System Engineering	2			2	
	選択 Elective	開設単位数 Total of Elective Credits	28				
		履修単位数 Necessary Credits		16単位以上(インターンシップを含まない) Over 16. (excluding Internship)			
一般・専門科目 General and Specialized Courses	開設単位数合計 Total of All Credits		89				
	修得単位数合計 Total of Necessary Credits for Graduation			52単位以上 (ボランティア、インターンシップを含まない) Over 52. (excluding Volunteer and Internship)			

4 ものづくり教育研究棟（専攻科棟）竣工

専攻科設立に伴い、専攻科学生のための鉄筋コンクリート3階建の講義・実習棟が2009年（平成21）2月に完成し、同年4月から利用されている。この棟には専攻科教員の研究室や高度専門教育のための実験室、共同実験室がある。また、外部企業の講師をお招きし、特別講義も実施される。



ものづくり教育研究棟

第4節 寄宿舎（学寮）

1 学寮の概要

1-1 学寮の目的と性格

学寮は、団体生活を体験することによって協調性を培い責任と規律ある生活習慣を身に付け、自主性を高め、将来立派な社会人としての資質を養うための高等専門学校独特の教育寮である。

1-2 学寮の施設及び定員

南寮（男子本科生が入居）		
構造	定員	参考
鉄筋 3階建	223名	低学年（主に1年から3年生）は二人部屋 高学年（主に4年から5年生）は一人部屋

北寮（主に女子が入居）		
構造	定員	参考
鉄筋 5階建	127名	低学年（主に1年から3年生）は二人部屋 高学年（主に4年から5年生）は一人部屋 間仕切りにより様々な学生の入居が可能

1-3 入寮制度

- 男子1, 2年生は全寮制（特別な事情のある者は校長の許可により入寮が免除される）
- 男子3年生以上は許可入寮制

- ・女子学生は全学年、許可入寮制

1-4 現在の寮生数

2016年（平成28）4月の寮生数は254名でした。現在寮生が増加する傾向にある。
(2006年4月の寮生数199名)

2 最近の出来事と変更点

2-1 主な改修工事

- ・1996年（平成8） 北寮および管理棟の改修
- ・2000年（平成12） 南寮の改修
- ・2008年（平成20） 南寮および北寮の居室内塗装等の工事
- ・2013年（平成25） 北寮の耐震改修工事
- ・2014年（平成26） 全寮各居室に対するエアコン設置を行うための電源等工事
冷蔵庫・無線LAN設置工事、男子寮生居室数拡充工事
- ・2017年（平成28） 各種センサなどの侵入防止設備の一新・拡充工事

2-2 寮日課

これまで寮の日課は、学生の要望などに合わせて微修正が行われてきた。2016年度（平成28）から中国・四国地区の高専において年間の授業日程や授業時間が変更、統一された。そのため、従来の寮日課では不具合が生じることになり、抜本的な寮の日課変更が行われた。同年度の寮日課を下の表に示す。

今後も、高専機構の要請や社会情勢に照らし合わせ、学生、保護者と相談をしながら、より適した日課に隨時変更を行う予定である。

日課	平日	休日
点灯	6:00 起床時刻まで速やかに自習すること	
起床	7:00	
洗面等	7:00～7:10	
起床点呼	7:10～7:20	
掃除	7:20～7:40	—
朝食	7:40～8:25	
登校	8:40	—
昼食	11:50～12:40	
登校	12:45	—
夕食	17:30～18:45	
入浴	17:30～20:00 (水曜17:30～ 21:00)	17:30～21:00
帰寮点呼	20:05	21:20 女子寮20:05
自習	20:10～22:10 (水曜21:00～22:10)	—
巡回点呼	22:20	—
消灯	23:00	
就床	24:00	

2-3 経費

2014年度（平成26）より各居室にエアコンが設置されたことなどから、主に寮費に関する見直しが行われた。2016年度（平成28）の月額諸経費を下の表に示す。

(月額)	金額	備考
寄宿料	800 円 (700 円)	1人部屋 800 円；2人部屋 700 円
寮費	7,800 円	電気代・水道代・燃料費 等に使用
食費	32,700 円	食事材料費及び厨房管理費
寮生会費	100 円	寮生会運営費

2-4 商船学科のカリキュラム変更に伴う入退寮などの主な変更点

これまでの商船学科学生は、5年生の後期から航海訓練所（現海事教育機構）で長期の乗船訓練を行う教育カリキュラムであったため、寮を5年生の後期に退去していた。2012年度（平成24）入学生から新しい教育カリキュラムが適用され、2年次3月に1カ月間、4年次の10月から翌年2月までの5か月間、5年生終了後の4月から9月までの6か月の乗船訓練を行うことになった。

上記教育カリキュラム変更に伴い、入退寮に関する時期などを変更した。商船学科4年生は、前期終了後に一旦寮から退去することになった。また、寮生会長などの寮生会役員は、以前は後期開始後、主に5年生から4年生に変更（選出）されていたが、現在は商船学科4年生が後期不在になることから、年度はじめに役員選挙を行うことになった。

3 寮生会、寮行事、留学生及び寮の運営など

3-1 寮生会

寮生会は規律ある生活を営み、寮生活を自主的に送り、健全な勉学環境を作るため、本校寮生全員をもつて組織される。この目的を達成するため、最高決議機関である寮生総会をはじめ、役員会、学寮委員会、会計監査委員および選挙管理委員会の各機関が置かれている。役員会は寮生会長、副寮生会長、学寮委員長および会計長により構成される。学寮委員会は、学寮委員と指導寮生により構成される。

寮生会は寮務主事および寮務主事補と密接な連携を保ち、その指導・助言を受けながら、学寮の円滑な運営を努めることになっている。現状は、寮務主事および寮務主事補ならびに寮生会長を含む指導寮生が中心となって学寮の運営に努めている。今後は寮生自身の手による自主的・自律的な活動が期待される。

3-2 寮行事

現在、寮で行っている行事としては、次のようなものがある。

- ・新入生歓迎会
- ・寮祭
- ・クリスマス会
- ・お別れ会
- ・避難訓練
- ・防火訓練
- ・部屋替え
- ・大掃除

そのほか、主に寮生が参加する夜間に行う部活動として、詩吟部、太鼓部、天文部、茶道部などがある。

3-3 留学生

1983年（昭和58）に初めて留学生が編入して以来多くの留学生が卒業した。2006年（平成18）から10年間で10名卒業し、2016年（平成28）は5名の留学生が在籍している。カンボジアやラオスなどから来日し勉学に励んでいる。基本的な寮生活に関して寮生がチューターとして留学生を支援している。時には留学生が英語などで日本人学生を支援することもあり良好な関係が築けている。

3-4 ゴミ分別

2010年（平成22）に施行された特定家庭用機器再商品化法など、ゴミの分別やリサイクルが社会的要請となっている。周防大島町および小松寮においても同様にゴミの分別回収が行われている。しかし、寮生は多様な地域出身であり、ゴミの分別方法が地域によって違うことなどから、分別不良など不法投棄が目立っている。そのため、ゴミの回収日を設け、学生主体で分別を行い、不法投棄減少を推進している。

3-5 寮における生活習慣向上に向けての取り組み

大島商船高等専門学校学寮管理規則や寮生心得を基に、寮生活の向上を目指して、ルール違反に対する指導や寮に対する貢献に感謝を行ってきた。しかし、違反や貢献内容や量が分かりにくいという意見があり、違反や貢献内容や量を明確化するため、平成26年度より点数制度を導入した。点呼に遅れてくるなどルールに対する違反行為を行うと違反点（減点）が付与され、また公共場所のダンボール整理など寮の運営に寄与する行動によってボランティア点（加点）が付与される。違反点が一定量に達した場合、保護者への通知・離寮・退寮などの措置が取られる可能性があるが、寮への貢献度としてボランティア点も考慮されるようになっている。

第2章 組織の編制

第1節 校内施設

1 情報教育センター

1-1 情報教育センターの概要

大島商船高等専門学校の情報システムは、校内LANシステム（俗称OCEAN）、第1演習室、第2演習室及び各学科研究室所属のコンピュータから構成され、校舎・管理棟・専門科棟及び練習船間の情報交換ができる環境とするため全てのコンピュータがLANで接続されている。これらのコンピュータは、学生や教職員の教育研究活動や学内外との情報交換での利用のほか、公開講座等の地域協力にも利用されている。現在、学術情報ネットワーク（SINET）とADSL2回線を通してインターネット接続されており、日本国内はもとより世界各国のWWWサーバなどとも通信できる。

1-2 設備

2016年度（平成28）の情報教育センター第1演習室及び第2演習室の授業・実験実習の利用について紹介する。第1演習室においては前期週22.5時間、後期週18時間、第2演習室においては前期週19.5時間、後期週21時間に及ぶ（同年4月より、1時限50分から1・2時限90分の授業時間に変更）。両演習室は、平日7時から19時まで利用可能であり、授業・実験実習の無い時間及び放課後は、課題、実験、研究への取り組み等、学生の自学のために開放している。また、17時から19時の間は本校の専攻科生を技術補佐員として配置し、学生からの質問対応、コンピュータ利用中のトラブル対応、演習室内の美化等を行い、利用環境を整えている。なお、演習室には、それぞれ51台、合計102台のPCを設置しています。通常授業以外では、補習授業、各種資格試験のCBT試験等でも利用している。さらに、オープンキャンパスでの体験授業、島スクエアなどにも利用され（Web基礎、全5回）、中学生や地域の方々の利用に貢献している。



図 1-1 情報教育センター



図 1-2 サーバ室



図 1-3 第 1 演習室



図 1-4 第 2 演習室

2 学生相談室

本校の学生相談室の歴史は、2004 年（平成 16）に現在の名称の学生相談室と呼ばれる以前から学生支援をしていた組織がある。最初に組織として活動したのは、1981 年（昭和 56）から公立学校元教諭が非常勤カウンセラーとして月 2 回、1 回あたり 2 時間、寮地区の一角にカウンセラー室を設け学生相談にあたっていたところから始まる。利用者は、少なく寮地区のため通学生が利用しにくいことを理由に、1999 年（平成 11）に場所を保健室近くに移設してきた。カウンセラーも有資格者（認定心理士）に交代し学生相談にあたっていた。

学生気質の多様化に伴い、カウンセリングが必要と思われる学生が増加した。教職員も学生への理解を深め援助する力を高める必要があり、学生が相談しやすい環境を整えなければならないことから、2000 年（平成 12）4 月から教員をスタッフにカウンセラー室という名称で本格的なスタートをした。その当時のカウンセラーの勤務形態は月 2 回 1 回あたり 2 時間であった。その後、2004 年（平成 16）4 月に名称を変更し、現在の学生相談室となる。現在は、カウンセラーが 2 名体制で月 4 回（1 回 4 時間）となっている。学生や保護者の学生相談室への要望は年々高まっており、カウンセラーの人数も増員した。

2011 年度（平成 23）から 2 年間、松江高専が主幹となって中国地区 8 高専共同事業「発達障害に関わる特別支援教育体制の整備」に取り組み、本校では 2 名の教員が発達障害学生の支援に携わる「特別支援教育士」の資格を取得し、学習障害・自閉症スペクトラムの学生に対する全校的な支援体制の構築を行うことができた。

また、2013年度（平成25）に山口県の支援事業「若者世代に対する心の健康づくり」の一環として、本校で講習会と講演会を開催した。とりわけ、テレビキャスター山本華世氏を講師に迎えた講演会では、山本氏が自身の経験をもとに、ユーモアをまじえて語っていただいた現代社会に生きる若者の困難さや、それを克服し自分らしく生きる意義について学生たちは大いに学ぶことができ、大好評であった。



「若者世代に対する健康づくり」講演会チラシ

3 地域協力センター

大島商船高等専門学校地域連携交流会は2009年（平成21）12月2日に設立された。これは、地元企業および自治体が中心となり設立されたもので、大島商船高専と海運業界および地域産業界等との各種交流を通じ、海事産業・地域産業等の発展に寄与するとともに大島商船高専の教育研究の振興を図ることを目的として発足した。

初代会長には長年、大島商船高専の产学連携コーディネータとして活躍されてきた小泉達也氏が選出された。小泉会長はその後、2015年度（平成27）まで会長としてご尽力された。2016年度（平成28）以降、



平成25年地域交流会総会 小泉会長

現在は伊藤秀行会長がその任務に就いている。発足当時の会員は特別会員として4団体（周防大島町、柳井市、やまぐち産業振興財団、日本製作金融公庫岩国支店）。法人会員35法人および個人会員48名から構成されていた。会長および会員のご尽力により事業計画の柱を次の3事業に決定した。

- ① 情報交換等による交流促進
- ② 共同研究等による地域振興
- ③ 大島商船高専への支援事業

各事業概要の詳細を以下に列記する。

1. 情報交換等による交流促進

- ① 総会及び交流会開催



平成 25 年地域交流会総会 石田校長
基調講演：気候変動と健康

- ② 企業及び大島商船高専への相互訪問促進
- ③ 人材養成講座及び出前授業の開催
- ④ 大島商船高専の島スクエア起業教育研究センターとの連携および支援

- ⑤ 会報発刊及び产学連携行事の案内
- ⑥ 学生・専攻科生及び教職員の地域イベントへの参加・支援の促進

2. 共同研究等による地域振興

- ① 技術相談
- ② 技術講演会開催
- ③ 地域連携研究成果発表会の開催
- ④ 各種助成金の共同申請

3. 大島商船高専への支援事業

- ① インターンシップへの協力
- ② 学生・専攻科生を含む若手研究者への支援

設立時のセンター長は当時、情報工学科の岡田泰邦教授でした。その後、商船学科の古本啓二教授、角田さらに一般科目の杉村先生が歴任される。初回の設立総会では 62 名の参加者があり。設立総会報告後に、NPO 法人地域交流センター副理事（当時）の米村洋一氏による講演“コミュニティー・テクノロジー - 地域を支える技術 -” が行われた。

第 2 回から総会において事業報告、決算報告、監査報告、事業計画や予算について報告がなされた。その他の項目として本校と会員との共同研究や企業訪問報告などがあった。また交流会に外部講師を招いて、招待講演を現在まで 6 年間で 16 件ほど実施している。

地域協力センターのその他の事業内容を以下に列記する。



平成 28 年度 地域交流会総会

【本校と会員企業との共同研究】

- ① 竹魚礁プロジェクト（平成 21 年～現在）
竹魚礁プロジェクトは竹コンクリート魚礁を周防大島町、柳井および周南市の海域に 40 基設置し、その効果を確認するための設備や人材が不足していました。そこで、本校教員と企業との共同によって竹魚礁の集魚効果、付着物の調査および水質調査しました。今後は竹コンクリート魚礁に関する研究調の継続とともに竹を利用したアマモ場の造成について検討していきます。

- ② モノフィラメント製造における省エネルギー化熱延伸装置の開発
この研究は財団法人やまぐち産業振興財団研究開発支援事業助成金を 2012 年（平成 24）に取得しました。この研究の目的は釣り糸のモノフィラメントの製

造過程のうち特に熱延伸の省エネルギー化であります。いかに熱延伸する機械をコンパクトにするかがポイントであり。本校の複数教員の協力もあり、査収的には省エネルギー化に成功しました。

【企業訪問】

学校と会員企業との交流を深め今後の活動に生かすため、各企業の抱えている課題や本校への要望等を調査した。



H28年度 地域交流会 長岡技科大学山本麻希先生
基調講演：イノシシとサルによる被害対策

平成 22	7 社
平成 23	3 社
平成 24	5 社

【会員企業様による大島丸洋上研修】

平成 26年 新入社員 8名の研修を練習船大島丸で1回実施
平成 27年 新入社員および幹部候補生の研修を2回実施
平成 28年 新入社員および幹部候補生の研修を3回実施

【企業への出前授業】

平成 24 2社
FA 講習、データベース講習、PIC マイコンボード講習

最後に2年間他のセンター長との兼任ということもあり、当初通りの内容が遂行できず、結果的に会員企業が減少してしまったことを後悔している。今後は現会員企業様のご意見を受け賜り、センター業務の充実を図りたいと思う。さらに、本校の学生は周防大島町、柳井市ののみならず、岩国市からも多く在籍しているので、学生の出身地でもある岩国市の会員企業を開拓する必要性を感じている。

4 国際交流推進室（現 国際交流室）

2006年（平成 18）に、本校において「国際交流推進室」が設立されて以来、国際的視野を持つ学生の育成と優秀な留学生を積極的に受け入れることは、本校の国際化の日本の柱となってきたと言える。国際的視野を持つ学生の育成において、海外研修の経験はたとえそれが短期であっても極めて大きな役割を果たす。本校は、これまで米国（ハワイ）、シンガポール、台湾の教育機関と協定を結び、3校への短期留学・語学等研修の機会を日本人学生に提供してきた。また、外国人留学生に対しては、本校の教育はほぼ全て日本語によって行われているが、同時に、外国人留学生と日本人学生のコミュニケーションは英語によって行われている。これは、日本との架け橋になるような外国人留学生を養成するには大きな効果をあげてきたと言える。

また、日本人が「国際交流」と口にする際、それを単なる「海外かぶれ」とはき違えている人間が非常に多いように思われる。本校の国際交流室を運営していくに当たって、根本から肝に命じてきたことは、「外国人」との交流である以前に、「人間同士」の交流だということを忘れてはいけないということである。日本人同士、自分の身近にいる友人とのコミュニケーションがうまくできない人間、相手の立場に立って配慮ができない人間が、どうして外国人とコミュニケーションが取れ流だらうか。人間対人間のコミュニケーションであることへの理解は、英語力を身につけるのと同じぐらいに重要視されるべきことであろう。大切なのは、自分とは異なる人間がいるということを理解する包容力、異文化を理解する柔軟性を身につけることである。その意味で、本校の国際交流室は設立以来、本当の意味の「交流」を目指して学生の国際感覚を養成

してきた。

4-1 Singapore Maritime Academy(SMA)との国際交流

2009年(平成21)3月に学術交流協定を結んで以来、両校の海事教育訓練分野における専門知識の交換及び学生交換プログラムの促進を目的に交流活動を続けている。

具体的には、毎年10月上旬の大島プログラム及び毎年3月上旬に実施されるシンガポール・プログラムがある。前者においては、毎年SMAから一週間にわたって8名の学生を受け入れ、学校見学や本校学生との交流活動の他、下関や神戸、丸亀への練習船大島丸による1泊から3泊にわたる体験航海を実施している。このプログラムでは、本校の練習船大島丸の体験航海が最重要視されているが、これは、SMAが本校のように独自の練習船をもたないため、大島丸実習に重点を置きたいという希望によるものである。体験航海では、SMA学生と本校学生が全て英語により大島丸の運航操作を行った。また、3月のシンガポール・プログラムでは、本校から8名の学生を派遣している。期間は一週間であるが、前半はSMAの宿泊施設に滞在し、学内見学及びシンガポールの社会見学を行い、後半は大型クルーズ船における3泊4日の船上キャンプが活動の中心となる。通称MEL Camp(Maritime Experiential Learning Camp)と呼ばれているが、参加学生は、シンガポールからマレーシアを巡る航海中に、シンガポールの学生とともにグループを形成し、各種ワークショップ活動に参加する。

交流参加学生は、参加希望者の中から書類及び面接審査を経て選抜される。派遣3か月前から海外渡航準備、派遣国事情、英会話などの事前研修を行い、帰国後は英語による報告会を実施している。

10月実施の大島プログラムでは、SMAと本校学生(商船学科3年と5年生)とが参加する大島丸体験航海が中心となるよう計画され、両者が協力して相互補完作用が効果的に働き相乗効果を上げた。

3月実施のシンガポール・プログラム(本校学生を派遣)においては、ワークショップを通じて英語によるコミュニケーションスキルの重要性を実感するとともに、将来に向けた目標設定及びその達成のためにすべきことを考える重要な機会となっている。特に昨今では、本プログラムに参加を希望する学生が多く、厳しいプレゼンテーション試験が課せられるようになり、参加学生のレベルアップが確実になされていると思われる。また、参加学生には本校より一人5万円の補助金が支給される。これは奨学金的な要素もあるため、プレゼンテーション試験による選抜はより厳格なものとなり、参加学生のレベルアップに繋がっていると考えられる。

また、2014年度(平成26)からは、シンガポール・プログラムに参加し、その学習効果が認められた学生に対して、「国際交流プログラム」修了による単位修得が認定され、学生の参加意識が高められた。



SMA MEL Camp

4-2 Kauai Community College (KCC)における英語研修

本校のある周防大島町と姉妹島の関係にあるハワイ・カウアイ島のKCCとの交流協定に基づき、夏季休業中に3週間の体験型英語研修を実施しており、毎年6名～9名の学生が参加している。

研修内容は、KCC側担当者と本校教員が本校学生の現状の英語レベル及び将来要求される英語能力を考慮して共同で作成したプログラムに基づいて実施されている。

第1週は、ディスカッション、プレゼンテーション、パラグラフライティングなどの基本スキルを重点的に学び、続く第2週及び第3週では、第1週に学んだスキルを使い、「ハワイにおける日本移民の歴史」、「ハワイの自然と文化」、「ポリネシア伝統航海術」などのテーマ別に、教室での学習と屋外での体験学習を組合せ、内容学習を通じた英語能力の向上を図っている。

交流参加学生は、参加希望者の中から書類及び面接審査を経て選抜される。派遣3か月前から海外渡航準備、派遣国事情、英語学習（会話、プレゼンテーション、ライティング）などの事前研修を行い、帰国後は英語による報告会を実施し、学生の参加意識が高められた。

英語によるテーマ別体験学習、KCC学生との交流、ホームステイ体験などを通じて、参加学生にとって生きた英語能力向上の機会であるとともに、異文化理解、日本文化の再認識、さらに、社会、自然とのつながりの再認識の機会となっている。また、KCCのあるカウアイ島が周防大島町と姉妹島提携の関係にあることから、本プログラムが両島の更なる国際交流に大きく貢献している。本プログラムは3週間と言う長期にわたるため、滞在費等が幾分高額になることもあり、SMAに比較すると参加を希望する学生は必ずしも多いと言うわけではないが、本プログラムも参加学生には本校より一人10万円の補助金が支給されるので、こちらも奨学金的な要素があるため、プレゼンテーション試験による選抜はより厳格なものとなり、参加学生のレベルアップに繋がっている。

また、2014年度（平成26）からは、KCCにおける英語研修に参加し、その学習効果が認められた学生に対して、「国際交流プログラム」修了による単位修得が認定され、学生の参加意識が高められた。



KCC英語研修プログラム



カウアイ島郡長訪問

4-3 国立高雄海洋科技大学（NKMU）との国際交流

2014年（平成26）年3月14日に、NKMUと国際交流協定を締結した。同年4月16日には、NKMUから周学長一行（6名）が本校に視察に訪れ、施設視察や学位互換協定等について審議が行われた。

NKMUとの交流は派遣だけではなく、受入れも実現している。7月中旬の約一週間、NKMUの商船学部の学生数名を受入れ、本校の授業見学、大島丸の体験航海、日本文化見学会等を行っている。さらに、夏季休業中（9月）に2週間、本校の学生を派遣し、主に英語・中国語の研修及び専門分野の研究（英語による研究指導）などを実施した。交流参加学生は、参加希望者の中から書類及び面接審査を経て選抜され、帰国後は英語による報告会を実施した。

受入れに関しては、先方の大学より今後、継続的に本校への派遣希望が出ており、今後も学生を受け入れる計画である。今年、国際交流を開始したばかりで、今後、より有効な国際交流プログラムの改善を検討し行く予定であるが、先方の希望ができるだけ考慮するようにして、最大2週間の受け入れを計画している。

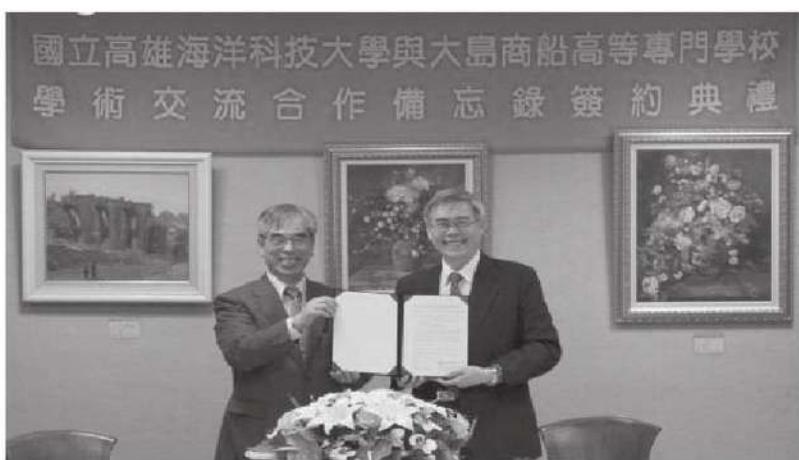
台湾はシンガポール、ハワイに次いで3カ国目の学生国際交流実施校である。これは本校の国際交流が年々活発化し、大きな効果を上げている証左である。また、経費の面においても、他の2カ国（シンガポール、米国ハワイ）とは異なり学生負担が少なく、参加しやすいプログラムとなっている。NKMUへの海外研修においても、本科においては「国際交流プログラム」修了による単位修得が認定される。また、専攻科においては、「インターンシップ」の扱いとなり、短期海外留学の履歴が付加され、学生の参加意識が高められている。また、参加学生には本校より一人3万円の補助金が支給される。本プログラムにおいても、この補助金は奨学金的な要素もあるため、プレゼンテーション試験による選抜はより厳格なものとなり、参加学生のレベルアップに繋がっていると考えられる。



高雄海洋科技大学・大島プログラム

4-4 国立台湾海洋大学（NTOU）との国際交流

2015年（平成27）8月、NTOUと国際交流協定を締結した。学生の受入れや派遣については、1～2年をかけて（現在NTOUの学生寮が改修工事のため派遣学生の受入余裕がないため）教員や学生の国際交流の具体的な協議、検討を行う。台湾で2校目の国際交流を締結した。実質的な国際交流について1～2年をかけて検討、計画することにより、今後具体的な国際交流が期待できる。



国立台湾海洋大学との国際交流協定締結

4－5 留学生支援

本校に在学する留学生宇野支援も国際交流室の仕事である。具体的には、毎年5月頃に留学生に依頼して、3学年を対象とした交流会を実施している。この交流会では、各留学生の自国の歴史と文化について、英語と日本語でプレゼンテーションを実施して、日本人学生との交流を図ることが主眼とされている。

また、毎年7月には、留学生とチューター学生を対象とした研修旅行を実施している。松江、長崎など、日本の歴史と文化が学習できる地域を選択し、留学生たちが日本について学ぶ機会が得られることを主眼としたものである。



留学生研修旅行

5 技術支援センター

5－1 技術支援センターの役割と発足の経緯

技術支援センターは、本校の技術教育及び共同研究のための技術支援並びに実習工場及び共同利用機器の管理運営の推進を図り、かつ幅広い視野と独創性の高い自主技術開発力を持つ技術者の養成及び地域社会の発展に寄与することを役割としている。

技術支援センターが発足するまでは学生課実験実習第一係と学生課実験実習第二係として学生課の下で業務が行われていた。2008年（平成20）5月の組織改編によりセンター化が検討され、それまで学生課の組織内にあった2つの係を1つにし、学生課組織から独立した組織へと改編が行われた。それに伴い名称を「技術支援センター」と改名し、初代の技術支援センター長には当時の教務主事であった平畠幸作先生が兼任することとなり、副センター長には電子機械工学科の岡本正典先生が任命された。

5－2 組織編制

新組織には新しく技術支援センター長・技術支援副センター長・技術支援センター員のポストが設置され教員が配置されている。技術長のポストには技術職員が配置され、技術長の下に第1技術室（船舶部門）、第2技術室（機械・熱機関、電気・電子部門）、第3技術室（情報部門）の3つの技術室が配置されており技術職員による技術業務が行われている（図4-1組織図参照）。

5－2－1 第1技術室

第1技術室では主として船舶部門を担当しており、練習船『すばる』や小型艇の運航・整備・管理を行っている。また練習船『大島丸』の綱取り業務や運航に関する一部事務手続きなども行っている。陸上では救命艇や技業室で行われる実習の支援が行われ、実習工場では旋盤・溶接や熱機関（蒸気ボイラー、内燃機関）の実験補助・管理等の支援が行われている。またカッターパークやヨット部のクラブ活動の支援業務なども行われており全国大会や新人戦などの大会運営にも貢献している。

5-2-2 第2技術室

第2技術室では主として機械・熱機関・電気電子部門を担当しており、実習工場の旋盤・溶接・鍛造・NC工作機械の実習支援、各学科で行われる実験補助、電気電子関係の実験補助や実習支援などの支援業務を行っている。また各研究室からの研究用機器の製作や加工依頼、ロボットコンテストに出場するロボットの部品製作や技術指導なども行っている。

5-2-3 第3技術室

第3技術室では主として情報部門を担当しており、各学科で行われる情報関係の実験補助・実習や演習の支援業務を行っている。また、学内ネットワークの管理・保守、情報教育センターの管理・運営支援を行つており、本校において、非常に重要な業務を行つている。

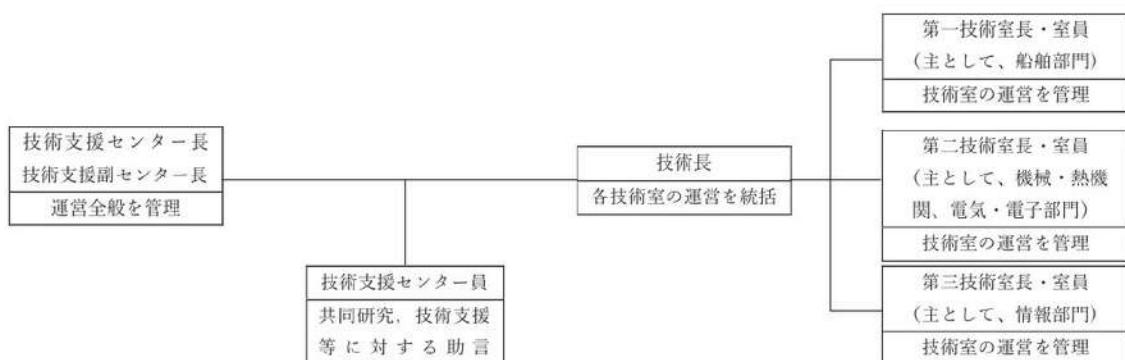


図5-1 技術支援センター組織図

5-3 技術支援センター設備紹介

5-3-1 実習工場

表5-1 工作機械などのリスト

レーザー加工機	アマダ Quattro
立型フライス	IWASHITA 2RC
横型フライス	ENSHU
万能工作機	大日金属 DUM-2型
CNC 旋盤	三菱 L8B
旋盤	滝沢 TSL-550
直立ボール盤	KIWA KUD-550FP
帶鋸盤	アマダ H250SA II
万能工具研削盤	伊藤製作所 DP-540
コンターマシン	アマダ VA-400
交流アーク溶接機	パナソニック YK-306AJ2
ガス溶接機	酸素アセチレン溶接
TIG 溶接機	パナソニック YC-WX4T0
CO2MAG 溶接機	ダイヘン DM350
エアプラズマ切断機	ダイヘン M-5500C II
小型 NC フライス盤	オリジナルマインド
ガス置換マッフル炉	アズワン HPM-1G
鍛造用コークス炉	送風機付き
サンドブラスト	TR-206SB

図5-2 レーザー加工機



図5-3 CNC 旋盤



図5-4 旋盤



5-3-2 艇庫

艇庫では表5-2の船舶設備および表5-3の陸上設備を管理している。

表5-2 船舶設備のリスト

練習船「すばる」	ヤマハ発動機
カッター	9mカッター
小型艇「疾風」	ヤンマー造船 ZD25E2
小型艇「伝馬7号」	ヤンマー造船 ZD25D2
救命艇	Nishi-F N-610
膨張式筏	藤倉ゴム
ゴムボート	藤倉ゴム
水上オートバイ	カワサキ JTT50BE ヤマハ F1W SEA-DOO GTX4-TEC

表5-3 陸上設備のリスト

天井クレーン	Kamiuchi 1.4t×2
ポストジブクレーン	日本ホイスト 2.8t
救命艇降下装置	MANSEIInc M-60
揚艇装置	上原鉄工 UMW-3000
消火講習設備	能美防災
空気呼吸具	ライフゼム L1-08
高圧洗浄機	ARIMITSU AHC-7200
引張試験機	島津製作所

図5-5 練習船「すばる」



図5-6 救命艇



図5-7 カッター



5-4 依頼業務

技術支援センターに寄せられる業務依頼は、年間200件以上(情報教育センターに関連する依頼も含む)と非常に多い。最近では専門性の高い業務依頼に応えることが多く、2017年度(平成29)は第28回全国高等専門学校プログラミングコンテストに関する業務依頼が増加する見通しである。

5-5 安全教育

安全教育には特に力を入れており、本科生及び専攻科生を対象とした「工作機械の安全講習」を年間に4回程度実施し安全教育の強化を行っている。また労働安全衛生法に基づく産業医及び衛生管理者の職場巡視が定期的に行われている。技術支援センターではこれとは別に、情報教育センター、艇庫、実習工場などの安全巡視を実施し、職場の環境整備を心がけている。

5-6 公開講座

地域貢献および広報活動を目的として、2008年度(平成20)より技術支援センター主催の公開講座を開催している。受講者がものつくりの設備や機械を実際に使用して作品の制作に取り組むことでものつくりの楽しさを知ってもらい、ひいては当センターが保有する設備を地域に役立ててもらう場となっている。またこうした体験を通して参加者に本校の技術教育に対する理解を深めてもらうことは、高専教育への親近感が

増すなどの広報上の貴重な機会となっている。2016年度（平成28）は「レーザー加工機でオリジナル チタンプレートをつくろう」と題して公開講座を開催し、公開講座後にアンケートを実施したところ、満足度90%以上を達成することができた。技術教育の実技部分を担う当センターにおいて、今後も参加者が高い満足度を得られるような充実した内容の公開講座を提供できるよう、高い技術力の保持に努めている。

5-7 キャリア支援

学生に対するキャリア支援として資格試験のサポートを行っている。情報系では、「基本情報技術者試験」の受験申込みを技術職員が窓口となり支援している。また、電気系では2010年（平成22）より「第二種電気工事士試験」の技能試験対策講座を上期・下期と年間に2回放課後に開講しキャリア支援の一環として支援を行っている。

5-8 外部資金採択

技術職員は優れた専門技術を教育活動だけでなく、地域協力活動や研究活動にも活かしている。表5-4に獲得した外部資金の一例を示す。

表5-4 外部資金

年度	外部資金	テーマ	所属室	氏名
H21年度	科研費奨励研究	学習教材用「星座判別・観察アプリケーション」の開発	第3技術室	宮元章
H22年度	科研費奨励研究	竹を利用したバイオディーゼル燃料（BDF）の改質及び廃グリセリンの燃料化	第1技術室	砂田智裕
H23年度	科研費奨励研究	ろ過した廃天ぷら油を用いたディーゼルエンジンの長期運用試験	第2技術室	本庄孝光
H24年度	水西俱楽部	廃天ぷら油を燃料としたディーゼル実験車両の東日本大震災への貸し出しによる寒冷地運用実験	第2技術室	本庄孝光

5-9 今後の取組み

2016年度（平成28）からの新しい取組みとして、機械検査などで使用される計測機器の取扱いや測定方法の技能向上に取り組んでいる。この取組みにより実習で使用される計測機器の取扱いが標準化され、誤差のない計測が行われるようになる。また、将来の目標として金属加工などで行われる品質検査資格の一つである「機械検査技能士」の取得を目指している。さらに、時代の進歩とともに最近、急速に普及しつつある3Dプリンターを利用した新しい技術を導入するなど、将来的に学生のキャリアアップに反映できるような取組みを計画的に進めている。

今後、測定技術、加工技術、ICTなど、技術職員のスキルアップも必要になると予想される。学外の研修の機会を積極的に活用するなど、技術職員の自己研鑽についても積極的に推進していきたい。

6 キャリア支援室

学生のキャリアデザインと就職活動をサポートする部署として「キャリア支援室」が2012年（平成23）5月に発足される。それに先立つこと2年前の2010年（平成21）に、当時の久保雅義校長の命により、「キャリア支援室」の設立準備ワーキンググループとして「キャリア支援室WG」が立ち上げられた。現在のキャリア支援室はその当時のキャリア支援室WGの活動を発展させたものである。

キャリア支援室の体制は、室長、副室長、室員で構成され、室長および副室長は校長が任命する。室員は、専攻科長、各学科主任、一般科目主任、各学科就職担当及び4・5年生学級担任で構成される（「大島商船高等専門学校キャリア支援室規定」参照）。

キャリア支援室は、本科1年次から5年次まで段階に応じた一貫したキャリア教育を目指し活動している。

支援室の活動として、低学年（本科1年～3年）対象のキャリアデザイン能力の育成を目指したキャリア教育、及び高学年（本科4年、専攻科1年）対象の就職・進学を見据えたキャリア教育を実施している。

低学年のうちから自分のキャリア（人生設計、職業観）について少しずつ考えてもらおうとキャリア教育のテーマを設定し、主にHRの時間を利用し、担任の指導のもと各回のテーマを実施している。これにより自身のキャリアデザインを行う能力を身に着けることを狙っている。大きな枠組みで漠然と将来を考えさせるテーマから、具体的なキャリア設計案や職業観が得られるようなテーマをこなし、4年次のインターンシップや就職・進学合同説明会を経て、5年次の就職・進学活動につなげていくことを目的としている。

高学年キャリア教育として、翌年の就職・進学活動を見据えた実践的なキャリア支援を実施している。主な取組みは、インターンシップの支援、就職セミナー開催、就職・進学合同説明会開催、S P I 模擬試験実施、ビューティーアップマナー講座開催などである。

キャリア支援室の活動は以下の4つに大別される。

- (1) キャリア形成のためのキャリア HR
- (2) インターンシップ支援
- (3) 就職・進学支援
- (4) 資格取得の促進

6-1 キャリア形成のためのキャリアHR（ホームルーム）

本科1年、2年次ではHRの時間を使い、ワーク（アンケート）形式の課題を担任主導のもと実施している。本科1年次から5年次まで段階に応じた一貫したキャリア教育を想定し、高学年、特に就職活動の準備期間である本科4年次へスムーズに繋げることを目的としている。そのため連続的なテーマを設定し、HRでのアンケートを中心に学生の意見を引き出し、自分の生き方を考えさせる。中学校卒業してすぐの学生にとって、いきなり具体的な将来設計をするのは困難であることは容易に想像できる。そのため、まず大きな枠組みで漠然と将来を考えさせるテーマからスタートし、回を追うごとに、また学年が進行することにより具体的なキャリア設計案や職業観が得られるようなテーマを設定している（図6-1、図6-2参照）。最終的に本科4年次で就職活動の準備としてインターンシップ、合同会社説明会に取り組める環境の構築を目指している（表6-1参照）。

本科3年次では、アンケート以外に職業適性検査（「キャリアステップ」）、就職面接官の経験もある外部講師による講演会（『働くこととは何か「将来の職業を見据えて』図6-3参照）、工場見学（2社程度・希望者のみ図6-4参照）を実施している。

表6-1 低学年のキャリア教育

学年	実施回数	内容
本科1年	3	ワーク（アンケート）、適正検査
本科2年	2	ワーク（アンケート）
本科3年	5	ワーク（アンケート）、適性試験、講演会、工場見学

(1) 10年後の自分に対して質問したいこと
10年後の自分へ卒業して5年後に今何といひまちか。仕事をしていく ついでいまちか。生い立ちか。
自分の好きな仕事についていたか。どの仕事についてどうんじとか。
大変でいたか。
というか、大変でいたか。何もなかつてなか。實は済は 今は、早いけど、4年後はどうなりまいか。

図 6-1 本科 1 年のワーク(10 年後の私)の例

① 短期的な目標と計画									
短期的とは例えば毎日の生活を考え、1週間単位の生活の仕方を考えます。つまり、何時に起きて、何時に学校に行き、何時に家庭(学寮)に帰り、どのくらい勉強するかという計画です。									
細かく決めてなくてもいいですが、だいたい自分の日常の計画がありますか?									
ア ある <input checked="" type="radio"/> ない <input type="radio"/>									
今ないに○をした人も例を参考に、次に書いて見てください。									
例 6:30 7:30 8:35 16 18 20 23									
起床	朝食	登校	授業	クラブ	帰宅	夕食	勉強	就寝	
平日(月～金)									
起床	準備	登校	授業	部活	帰宅	夕食	片づけ	勉強	遊び
6:30	7:30	8:35		16	19:30	19	20:30		23
土、日									
起床	朝食	片づけ	手作り	昼食	休憩	移動	翌	帰宅	(平日に大体同じ)
7:30	8:30	9:30	11:30	12	12:30	13:30	14:30	16	19

図 6-2 本科 2 年のワーク(働くことの意味を考える)の例



図 6-3 本科 3 年の講演会の様子



図 6-4 本科 3 年の工場見学の様子

6-2 インターンシップ支援

インターンシップは職業体験(職場体験・就業体験)としてアメリカでは 1906 年ごろから導入されているが、日本でも 1997 年(平成 9 年)「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」を政府が取りまとめ、関係諸制度を整備し、政府の政策として導入を促進してきた。近年の日本では就職採用活動の側面もあるが、それでも就職活動前に職業体験することによる“働くことへの動機づけ”や“働く意味”、“働くということの理解”といった効果は高い。

就職のミスマッチが社会問題となってきた現実では、就職活動前に会社・業界の実情を体験でき、「仕事観・人生観を醸成する」、「残りの学生生活すべきことを明確にすること」を目的とするインターンシップの重要性は高まっている。本校でも、できるだけ多くの学生が参加するよう奨励及び支援を行っている。主な支援活動として、山口県インターンシップ推進協議会の協力のもと山口県内に事業所のある企業へのインターンシップに積極的に参加支援している。

各学科の状況（表6-2参照）として、商船学科では船舶企業を中心に80%程度のインターンシップ参加率である。電子機械工学科では、前述の山口県インターンシップ推進協議会が推し進める山口県内のインターンシップを中心に例年90%近いインターンシップ参加率を示している。情報工学科では例年、他科に比べ参加者が少ないが、これは情報系の企業が主に大都市に多く、県外企業のインターンシップを念頭におく学生が多いいためである。多数の企業から希望企業を複数選択できる県内のインターンシップと異なり、インターンシップへの参加可否が夏季休暇直前まで不透明なため、インターンシップ参加の意志があっても県外で応募して落選し、結局インターンシップ不参加となる学生が多数いるため参加率が低くなる。しかしながら、近年は企業の積極的なインターンシップ受け入れとあいまって80%程度の参加率を達成している。

インターンシップの参加後は、電子機械工学科と情報工学科では報告会を企画開催し、次年度インターンシップ参加予定の学生なども聴講できる機会を作っている。（商船学科は、4年次後期に航海訓練所における航海実習があるため報告会が開催できず、報告書の提出でこれに代えている。）

表6-2 インターンシップ参加者数（本科生）

本科	平成23年度			平成24年度			平成25年度		
	学生数	参加数	参加率	学生数	参加数	参加率	学生数	参加数	参加率
商船学科4年	27	26	96.3%	42	41	97.7%	38	2*	*5.3%
電子機械工学科4年	38	35	92.2%	46	39	84.8%	43	38	88.4%
情報工学科4年	45	26	57.8%	46	28	60.9%	39	27	69.3%
合計	110	87	79.1%	134	108	80.6%	120	67	55.9%

本科	平成26年度			平成27年度			平成28年度		
	学生数	参加数	参加率	学生数	参加数	参加率	学生数	参加数	参加率
商船学科4年	43	43	100%	43	43	100%	43	43	100%
電子機械工学科4年	43	37	86.0%	43	37	86.0%	43	37	86.0%
情報工学科4年	41	24	58.5%	41	24	58.5%	41	24	58.5%
合計	127	104	81.9%	127	104	81.9%	127	104	81.9%

*平成25年度の商船学科4年は乗船実習が夏季休業期間に設定されたため参加者数が少ない

6-3 就職・進学支援

本科5年次、専攻科2年次の就職に備え、2011年度（平成23）から本校卒業生の就職先を中心に多くの企業、大学等の参加をもって、「就職・進学合同説明会」を開催し、学生に就職と進学に関する多くの情報と機会を与えていている。本説明会が企業と接する最初の場となり、ここで実際に就職活動をする企業を決める学生も多い。（図6-5参照）表6-3に参加企業団体、参加人数等の推移を示す。近年は100社に迫る企業・団体の参加があり、企業側の採用熱意も感じられる。2014年度（平成26）からは、就職時期の後ろ倒し（広報活動開始3月1日）を受け、例年12月開催していた説明会を3月開催としている。

就職・進学合同説明会以外の就職・進学支援として、就職セミナー（外部の就職支援サイト：マイナビにより年2回開催）、S P I 模擬試験、ビューティーアップマナー講座などを開催している。S P I 模擬試験については、年2回実施のうち1回目を学校全額負担とすることで就職活動における適正検査のスタンダード

であるS P I試験への取り組みを促している。またビューティーアップマナー講座については、就活時の化粧・身なり・立ち振る舞いを大手化粧品メーカー（資生堂）の指導のもと、就職活動を控えた女子学生が受講できるもので毎年好評を博している（図6-6参照）。

実際の就職活動では、各科の就職担当の指導のもと就職活動を行っている。キャリア支援室では各科の就職状況を取りまとめている（表6-4参照）。

表6-3 就職・進学合同説明会実績

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
参加学生数	約180名	約200名	約160名	約160名	約170名	約150名
参加企業等数	60	56	59	76	97	94



図6-5 就職進学合同説明会の様子



図6-6 ビューティーアップマナー講座の様子

表 6-4 就職・進学状況

年度	学科・専攻科名	区分		卒業・終了者数	進学者数	就職者数	その他	求人数	求人倍率	
		商船学科	電子機械工学科							
平成二十三年度	商船学科	29	(2)	5	(1)	23	(0)	1	255	11.1
	電子機械工学科	39	(4)	6	(0)	31	(4)	2	318	10.3
	情報工学科	36	(16)	11	(0)	23	(15)	2	247	10.7
	海洋交通システム学専攻	4	(0)	0	(0)	4	(0)	0	121	30.3
	電子・情報システム工学専攻	15	(0)	2	(0)	13	(0)	0	236	18.2
	計	123	(22)	24	(1)	94	(19)	5	1,177	
平成二十四年度	商船学科	33	(6)	7	(2)	25	(4)	1	212	8.5
	電子機械工学科	34	(3)	6	(0)	28	(3)	0	310	11.1
	情報工学科	43	(21)	4	(2)	34	(16)	5	233	6.9
	海洋交通システム学専攻	3	(0)	0	(0)	3	(0)	0	96	32.0
	電子・情報システム工学専攻	19	(1)	3	(0)	16	(1)	0	310	19.4
	計	132	(31)	20	(4)	106	(24)	6	1,161	
平成二十五年度	商船学科	27	(4)	5	(2)	22	(2)	0	196	8.9
	電子機械工学科	39	(3)	10	(1)	28	(2)	1	354	12.6
	情報工学科	44	(20)	8	(1)	35	(18)	1	284	8.1
	海洋交通システム学専攻	3	(0)	0	(0)	1	(0)	2	104	104.0
	電子・情報システム工学専攻	9	(0)	3	(0)	5	(0)	1	312	62.4
	計	122	(27)	26	(4)	91	(22)	5	1,250	
平成二十六年度	商船学科	32	(7)	3	(1)	24	(5)	5	196	8.2
	電子機械工学科	41	(3)	7	(0)	34	(3)	0	366	10.8
	情報工学科	38	(22)	15	(4)	23	(18)	0	302	13.1
	海洋交通システム学専攻	3	(0)	0	(0)	3	(0)	0	128	42.7
	電子・情報システム工学専攻	8	(0)	5	(0)	3	(0)	0	339	113.0
	計	122	(32)	30	(5)	87	(26)	5	1,331	
平成二十七年度	商船学科	38	(4)	5	(0)	33	(4)	0	201	6.1
	電子機械工学科	40	(2)	10	(0)	30	(2)	0	325	10.8
	情報工学科	39	(15)	7	(0)	31	(14)	1	261	8.4
	海洋交通システム学専攻	4	(1)	1	(0)	3	(1)	0	135	45.0
	電子・情報システム工学専攻	13	(0)	3	(0)	10	(0)	0	263	26.3
	計	134	(22)	26	(0)	107	(21)	1	1,185	
平成二十八年度	商船学科	42	(4)	6	(0)	34	(3)	2	194	5.7
	電子機械工学科	41	(2)	9	(0)	30	(2)	2	404	13.5
	情報工学科	45	(23)	9	(2)	33	(19)	3	332	10.1
	海洋交通システム学専攻	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	90	
	電子・情報システム工学専攻	10	(1)	4	(1)	6	(0)	0	319	53.2
	計	138	(30)	28	(3)	103	(24)	7	1,339	

6-4 資格取得の促進

最近は大学生でも資格を取る時代である。資格取得はその資格そのものも大切であるが、資格を学生時代に取得する姿勢も企業側は見ていると考えられる。そのため本校では資格の取得を推進している。具体的な活動として、各学年で取得可能な（もしくは推奨する）資格一覧を学科ごとに作成し、年度始めに学生へ配付している。さらに、学生それぞれの資格取得状況の調査を年に一度行うことで、自分の置かれている状況の再確認と資格取得意欲の向上を図っている。調査結果は、学生及び保護者に公表することで資格取得を啓蒙している。（表 6-5 参照）

また、文部科学省系の一部の資格試験合格者には本校の制度として単位認定しているほか、他省庁系の資格試験合格者のうち、各科にとって有用であると推奨される資格試験合格者については「校長賞」として表彰している(表6-6、表6-7参照)。

資格試験取得の学校全体の支援活動として、各資格に関連のある教科担当教員による講習や、実技を伴う資格試験における技術支援センターでの実技練習を実施し、近年の資格取得に貢献している。

表6-5 平成28年度資格試験取得状況(学科・クラス別)

学年	商船学科			電子機械工学科			情報工学科		
	資格名	級／グレード	取得人数	資格名	級／グレード	取得人数	資格名	級／グレード	取得人数
5	海事災害者国家試験(航海)	2級(筆記試験:全科Ⅰ)	3	トレース技能検定	2級	6	情報活用試験【検】	情報活用試験1級	4
	海事災害者国家試験(機関)	1級	1	3級	1	情報活用試験3級	情報活用試験3級	5	
	2級(筆記試験:全科Ⅱ)	1	1	CAD利用技術者試験	2級	2	CGクリエイター検定	ペーシング(田3級)	1
	小型船舶操縦士	1級	2	3次元CAD利用技術者試験	2級	2	CGエンジニア検定	ペーシング(田3級)	11
	2級	14	14	電気工事士	第2種	16	画像処理エンジニア検定	ペーシング(田3級)	9
	特務(水上バイク)	6	6	情報活用試験2級	5	マルチメディア検定	ペーシング(田3級)	1	
	海上特殊無線技士	1級	14	情報活用試験3級	3	基本情報技術者試験	応用情報技術者試験	1	
	情報活用試験2級	3	TOEIC(正式なTOEIC)	11	情報活用試験3級	3	基本情報技術者試験	基礎情報技術者試験	7
	情報活用試験3級	6	TOEIC IP(学校で実施したTOEIC)	42	情報活用試験3級	3	ITパスポート	ITパスポート	15
	TOEIC(正式なTOEIC)	6	実用英語技能検定【英検】	H27年度全員受験	6	TOEIC(正式なTOEIC)	8		
	TOEIC IP(学校で実施したTOEIC)	39			4級	2	TOEIC IP(学校で実施したTOEIC)	H27年度全員受験	45
	実用英語技能検定【英検】	準2級	3	実用数学技能検定【数学検定】	5級	1	実用英語技能検定【英検】	準2級	4
	3級	7			4級	1	3級	3級	3
	4級	4			3級	2	4級	4級	2
	5級	4	日本語漢字能力検定【漢検】	2級	1	5級	2	5級	2
	実用数学技能検定【数学検定】	2級	2		準2級	7	実用数学技能検定【数学検定】	2級	1
	日本語漢字能力検定【漢検】	準2級	3		3級	1	3級	3級	1
	3級	4			4級	2	2級	2級	1
	4級	1	日本語検定	準2級	1	日本語漢字能力検定【漢検】	2級	1	
	危険物取扱者	乙4	7		3級	7	3級	3級	9
					4級	2	3級	3級	3
					乙4	12	日本語検定	3級	3
4	海事災害者国家試験(航海)	2級(筆記試験:全科Ⅰ)	3	トレース技能検定	2級	1	情報活用試験【検】	情報活用試験1級	1
	海事災害者国家試験(機関)	1級	1	TOEIC IP(学校で実施したTOEIC)	2	2	情報活用試験3級	情報活用試験3級	20
	小型船舶操縦士	1級	1	実用英語技能検定【英検】	準2級	2	基本情報技術者試験	基本情報技術者試験	4
	2級	16			3級	3	ITパスポート	ITパスポート	3
	特務(水上バイク)	2			4級	2	TOEIC(正式なTOEIC)	3級	2
	海上特殊無線技士	1級	7		5級	2	実用英語技能検定【英検】	準2級	8
	情報検定【J検】	3級	3	実用数学技能検定【数学検定】	4級	4	3級	3級	2
	情報活用試験3級	19			3級	2	4級	4級	1
	TOEIC(正式なTOEIC)	1	日本語漢字能力検定【漢検】	2級	3	5級	1	5級	1
	実用英語技能検定【英検】	2級	1		準2級	3	6級	6級	4
	3級	2			3級	2	2級	2級	4
	4級	1	危険物取扱者	乙4	9	日本語漢字能力検定【漢検】	2級	2級	7
	5級	3					3級	3級	10
	実用数学技能検定【数学検定】	2級	1				3級	3級	1
	準2級	1					乙4	乙4	1
	3級	7	日本語検定	3級	4				
	4級	1							
	5級	3							
	日本語漢字能力検定【漢検】	2級	2						
	準2級	2							
	3級	2							
	日本語検定	2級	2						
	危険物取扱者	乙4	5						
3	小型船舶操縦士	1級	2	実用英語技能検定【英検】	3級	7	情報検定【J検】	情報活用試験3級	16
	2級	16			4級	3	基本情報技術者試験	基本情報技術者試験	1
	特務(水上バイク)	1			5級	2	ITパスポート	ITパスポート	2
	海上特殊無線技士	1級	8	実用数学技能検定【数学検定】	準2級	3	実用英語技能検定【英検】	準2級	1
	情報検定【J検】	12			3級	4	3級	3級	8
	実用英語技能検定【英検】	準2級	1	日本語漢字能力検定【漢検】	2級	1	4級	4級	3
	3級	12			準2級	1	5級	5級	2
	4級	3			3級	7	3級	3級	2
	5級	3			4級	1	日本語漢字能力検定【漢検】	準2級	4
	実用数学技能検定【数学検定】	2級	1	日本語検定	3級	1	3級	3級	14
	準2級	1			4級	1	4級	4級	5
	3級	2			5級	1	5級	5級	1
	日本語漢字能力検定【漢検】	2級	2	危険物取扱者	乙4	4	日本語検定	3級	1
	準2級	1							
	3級	2							
	日本語検定	2級	2						
	危険物取扱者	乙4	5						
2	小型船舶操縦士	1級	1	実用英語技能検定【英検】	準2級	1	基本情報技術者試験	ITパスポート	1
	2級	11			3級	6	実用英語技能検定【英検】	3級	7
	特務(水上バイク)	1			4級	3	4級	4級	2
	海上特殊無線技士	1級	4		5級	7	5級	5級	1
	実用英語技能検定【英検】	3級	8	実用数学技能検定【数学検定】	3級	4	実用数学技能検定【数学検定】	3級	4
	4級	6			2級	2	日本語漢字能力検定【漢検】	3級	9
	5級	3			準2級	1	4級	4級	2
	実用数学技能検定【数学検定】	3級	2	危険物取扱者	乙4	3	危険物取扱者	乙4	1
	準2級	1							
	3級	2							
	日本語漢字能力検定【漢検】	2級	1						
	準2級	1							
	3級	8							
	4級	1							
	危険物取扱者	乙4	5						
1	実用英語技能検定【英検】	3級	12	実用英語技能検定【英検】	2級	1	実用英語技能検定【英検】	3級	12
	4級	11			準2級	2	4級	4級	8
	5級	7			3級	15	5級	5級	4
	実用数学技能検定【数学検定】	3級	6	実用数学技能検定【数学検定】	4級	8	実用数学技能検定【数学検定】	3級	4
	準2級	1			5級	4	日本語漢字能力検定【漢検】	準2級	3
	3級	10	実用数学技能検定【数学検定】	3級	3	日本語漢字能力検定【漢検】	3級	10	
	4級	3	日本語漢字能力検定【漢検】	準2級	2		4級	4級	3
					3級	11			
					4級	4			

表 6-6 学科別校長賞表彰学生数

学科 \ 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
商船学科	11	5	9	16	16	5
電子機械工学科	11	14	27	19	6	21
情報工学科	4	8	1	7	9	9
海洋交通システム学専攻	0	0	0	0	0	0
電子・情報システム工学専攻	2	0	3	2	1	0
合 計	28	27	40	44	32	35

表 6-7 資格種目別校長賞表彰学生数

学科 \ 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
TOEIC (400 点以上)	7	4	7	12	6	9
1級海技士（航海）	1	0	0	0	0	0
1級海技士（機関）	0	0	0	1	0	0
2級海技士（航海）	3	2	6	3	7	4
2級海技士（機関）	6	3	0	6	5	0
第一種電気工事士	0	0	0	1	0	0
第二種電気工事士	9	11	26	19	5	17
第三種電気主任技術者試験	0	0	1	0	0	0
工事担任者試験 DD 第 1 種	2	1	0	0	0	0
基本情報処理技術者	0	6	0	2	8	5
応用情報処理技術者	0	0	0	0	1	0
合 計	28	27	40	44	33	35

7 島スクエア起業教育研究センター

「島スクエア」は、2008 年度（平成 20）文部科学省科学技術振興調整費事業（現在は科学技術戦略推進費）地域再生人材創出拠点の形成「山海空コラボレーション みかん島再生クルー」と題して採択された 5 年間のプロジェクトの愛称である。このプロジェクトは人口減少と高齢化が進む地域で起業家を養成し、地域再生につなげようという試みとしてスタートした。文部科学省からの補助金がなくなった平成 25 年度以降も「起業や新たな事業展開を目指す意欲的な人が集まり、それぞれの得意とする能力を生かして結びつけ、地域再生へつなげる取り組み」と位置づけ、事業規模を縮小して形を変えながら活動を継続している。

平成 28 年度は、柳井広域自治体 1 市 4 町からのご支援を得て、大島商船高専島スクエア起業教育研究センターを拠点に、島スクエア修了生が中心となって、平成 25 年 10 月に立ち上げた N P O 法人島スクエアプラス、周防大島町商工会と一緒に活動を行った。

島スクエア起業教育研究センターの施設は、2013 年度（平成 25）以降の島スクエア事業の継続を見込んで 2011 年（平成 23）10 月、同年に廃校となった山口県立田布施農業高等学校大島分校の実習棟の一部を山口県から移管された周防大島町から借り受けたものである。この施設を 1 年かけて整備し、翌年（平成 24）10 月に大島商船高専島スクエア起業教育研究センターを設立し、島スクエア事業の活動拠点としてスタートした。

図1は田布施農業高等学校大島分校跡地の外観、図2は10月に島スクエア修了生へ行ったセンターの利用説明会の様子である。田布施農業高等学校大島分校の跡地は、おげんきハグニティや周防大島ふるさとづくり「のん太の会」など5団体が利用している。また、敷地内には周防大島町の食品の加工施設もあり、農産物の加工食品開発にも利用できる。

借り受けた実習棟は農作業の実習機材の倉庫として利用されていたため、修了生の理事の方々とスタッフで消毒・燻煙し、隅々まで掃除を行い、修了生の販売実習や島スクエア講座、地域活動の会議に使用できるように片付けた。また、机や椅子などの備品を揃え、島スクエアの活動拠点として整備した。



図1 田布施農業高等学校大島分校跡地



図2 センター2階での説明会



図3 開所を待つ人の行列



図4 開所イベントの餅つき



図5 ふれあい市場での実験店舗



図6 ふれあい市場での販売テント



図7 小中学校ボランティア生徒への諸注意



図8 大島商船高専のロボットコーナー

2013年（平成25）11月、島スクエア起業教育研究センターの開所式を行い、同時に第1回「ふれあい市場」を実施した。図3は11月の開所式で入場を待つ人の行列、図4は開所式のイベントとして実施した餅つきの様子である。

島スクエア起業教育研究センターは、島スクエア修了生の実習、起業準備のための実験販売の場であるとともに、地域活動の支援や次世代の育成の場として利用している。2016年度（平成28）の内容は、20日程度の島スクエア講座、奇数月の第2日曜日に定期的に行う「ふれあい市場」、今年度は修了生が自主的に偶数月の第2日曜日に始まった「ふれあいマルシェ」など、オープン当初に比べ、センターの利用は増えている。図5は「ふれあい市場」のときのセンター1階での実験販売の様子である。

図6は「ふれあい市場」での屋外テントでの販売の様子である。ふれあい市場には平均的に25店舗が出店しており、その半分は修了生の出店である。また、ふれあい市場は、次世代を担う小中学生の体験学習の場としても活用されるようになっている。図7は、ふれあい市場でのボランティアの生徒さんへの諸注意の様子である。また、図8は「ふれあい市場」のとき、本校のロボットコーナーで行っているレゴバトルの様子である。レゴバトルは体験学習であると同時に、ボランティアの生徒さんの休憩の場でもあり、人気は高い。

本校では島スクエア起業教育研究センターを拠点に、起業や新たな事業展開に役立つ「島スクエア講座」、地域交流や修了生の実験店舗などの実践的な活動の場としての「ふれあい市場」、次世代育成の活動を行っており、地域貢献活動の一つとして外部から高い評価を得ている。予算の減少やスタッフの労力の多さを考えると島スクエアの運営は容易なものではない。しかしながら、地域に根差した本校の役割として地域人材養成の一助となることを願って、活動を続けている。

第2節 教育研究設備等

1 実習船「すばる」建造

本船は、旧実習船「ちどり」の老朽化に伴い更新した実習船である。小型実習船兼1級小型船舶操縦士免許教習艇として本校の実習業務に従事することができるよう、屋外操舵席に加え船内操舵席を装備し、学生・教員席の中央に機関操作レバーを設置している。また、海図を使用可能な大型のテーブルを実習室に装備し、免許関係財団等の実習船の実習室相当の面積を有しているため、1級小型船舶操縦士免許教習艇としての十分な機能を有している。

船型は、FRP製单胴V型、高速舶用ディーゼル機関2台（2基2軸）を搭載し、最大速力にて対航性の優れた高速艇をベースとして建造されている。また、フライングブリッジを有し、屋外操舵席を後方に設置しているため、ヨット・カッター等の曳航作業のための後方視界も十分確保されている。

第1表 すばる

全 長	14.5 m
全 幅	4.1 m
深 さ	2.3 m
総 ト ン 数	14トン
速 力	常備状態最大28.0ノット
主 機 関	4サイクル高速船用ディーゼル機関 2基 (VOLVO TAMD75P EDC)
航 続 時 間	8時間
実 習 時 定 員	船員1名+その他22名
資 格	J C I 限定沿海
清 水 タンク 容量	300リットル



図1-1 実習船すばる

2 県道バイパスの寮地区への開通と舟艇設備の改修

山口県が計画している「県道大島環状線小松地区バイパス」について 1978年（昭和53）7月に山口県大島土木事務所から協議があり、同年8月に学内に「バイパス建設対策委員会」を設置、委員会で協議事項について検討し、同年11月に県知事及び山口県大島土木事務所長に教育環境保全のための要望書を提出した。しかし要望書についての回答がないまま約10年が経過した。

1988年（昭和63）5月に山口県大島土木事務所からこの問題について、再度協議があり、同年11月に改めて「小松バイパス建設対策委員会」を設置、委員会により協議し、同年12月に山口県大島土木事務所に要望書を提出する等、学校としては海岸実習施設機能の補償を条件に、学校敷地（246m²）を売却することで合意した。その後、山口県との協議を行い、1995年（平成7）6月にバイパス建設工事に向け覚書に調印した。1997年（平成9）12月から工事を開始し、2002年（平成14）6月に工事が完成し、防波堤、船揚場、船置場、その他付属設備の引渡しを受けた。

3 校舎耐震改修

校舎・管理棟は1969年（昭和44）に延面積7,004m²（鉄筋コンクリート造4階建）で建築され、建物・設備の老朽化が著しく、耐震性能も低く、教室・実験室等も狭隘化であったため、学生の基礎学力の向上は

図るとともに、専門基礎知識の習得に加え、実験実習を重視し、創造性豊かで高度な幅広い「ものづくり」基盤を支える技術者の養成に務めるため、ゆとりある効率的な教育研究施設、安全な教育研究環境を確保し、近年の情報通信技術をはじめとして高度な研究開発に対応できる技実践的技術者の育成を目指し、新たな教育・研究施設に対応するため、既存の講義室・研究スペース狭隘の見直しを行い、教育・研究の環境改善による教育研究レベルの向上を計ることを目的とし、老朽改善及び耐震補強の整備を2009年度（平成21）とその翌年の2ヶ年で行った。



図1-2 校舎・管理棟



図1-3 校舎・管理棟

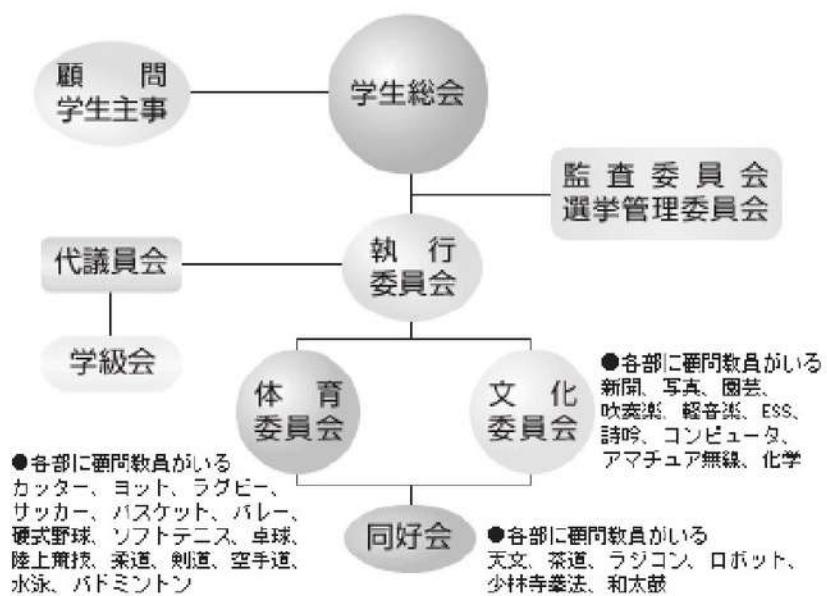
第3章 学校行事と諸活動

第1節 学校行事

1 学生会活動とクラブ活動

学生会は、学生の自発的な活動を通して人間形成をはかり、相互の親和と啓発につとめ学生生活の向上をはかることを目的として運営されている。

学生会の組織図



学生会には以下の機関が設置されている。総会、代議員会、執行委員会、学級会、専門委員会、監査委員会、選挙管理委員会、寮生活委員会（昭和 60 年度からは切り放された）。

学生会の活動の中心は、執行委員会である。その役員は、会長、副会長等であり、その任期は 1 年間である。

学生の学校生活の有意義な活動の一つがクラブ活動である。クラブ活動は、体育クラブと文化クラブの二つに分けられ、その他に同好会がある。体育クラブは、商船学校ならではのカッター、ヨットがあり、その他にラグビー、サッカー、バスケット、バレー、硬式野球（平成 6 年度まで軟式野球）、ソフトテニス、卓球、陸上競技、柔道、剣道、空手道、水泳、パドミントンである。文化部は、園芸、写真、吹奏楽、軽音楽、ESS、詩吟、コンピュータ、ロボット研究である。同好会は、天文、茶道、少林寺拳法、和太鼓、美術、PWC レスキューであり、それぞれ活発に活動している。

2 商船祭

商船祭は、昭和 45 年に第 1 回商船祭が行われて以来、毎年 11 月 3 日文化の日を中心として企画運営する本校最大の文化行事である。伝統の手旗踊りをはじめ、クラス毎の研究発表や企画、各クラブによるバザー、そして有志による音楽のイベント等が行われ、町民の方や地元の小中学生・高校生との交流の場として活用されている。近時は校内見学会も兼ねている。



手旗踊り



手旗踊り

3 校内マラソン大会等

学生のスポーツイベントとして、毎年5月のクラスマッチと、冬季の校内マラソン大会が開催されている。

特に、校内マラソン大会は、当初毎年1月に行われていたクラブの「寒稽古」に由来し、学生の体力づくりの目的で1週間から10日間程度行われるようになった全学的なトレーニング「耐寒訓練」の打ち上げの意味合いを持っていた。その後の学科改組に伴い、1993年度（平成5）から「耐寒訓練」は廃止され、「校内マラソン大会」として単独で行われるようになった。



校内マラソン大会

第2節 創基百十周年・高専創立四十周年

1 記念行事

2007年（平成19）10月1日に、本校は創基百十周年・高専創立四十周年を迎える。10月6日に記念式典を催した。これには学生・教職員をはじめ、来賓・本校卒業生など約七百名が参加した。

式典後、場所を大観荘に移し、記念祝賀会を開いた。

翌7日には、「海猿」の原案や漫画「トッキー」の原作者で知られる、小森陽一氏を講師に招き、「モノ作りを語る」と題し講演会を開催した。

さらに翌年2月26日に記念植樹祭を行った。使用した桜の苗木は、大漁桜という品種で、財団法人「日本花の会」より40本の寄贈を受けたものである。

10月6日（土）

行事名	時間	場所
吹奏楽部演奏	10:00~10:25	第1体育館
記念式典	10:30~11:30	第1体育館
記念祝賀会	12:30~14:00	大観荘
10月7日（日）	13:45~17:00	校舎地区
記念講演会 講師 小森陽一 (作家、漫画原作者) 「モノ作りを語る」	10:00~11:30	第一体育館

2 DVD「創立百十周年記念」の制作

百十周年史編纂専門委員会（委員長：岡田泰邦教授）は一年半に及ぶ編纂作業を行い、本校の百十年間の歴史と関係各位からの寄稿文、そして本校の現在の姿を収めたDVDを制作した。

これは、通史編と部門史編を映像化し、資料編はPC用コンテンツとして過去百十年の資料を収録したものである。構成としては、①百十年の歴史を当時の写真や映像を織り込ませながら音声で紹介する章、②学校行事・クラブ活動・教育環境といった本校の現在を紹介する章、そして③卒業生からの寄稿文を紹介する章の三部構成となっている。



百十周年史編纂委員会

委員長	岡田 泰邦		
副委員長	岡野内 悟		
委員	出川 隆富	浦上美佐子	田口 由香
	田村 和彦	中村 昭治	藤元 美晴
	松浦 政裕	三原 伊文	山重 宏幸
	吉田 常子	(敬称略 あいうえお順)	

第8編 創基百二十周年・高専創立五十周年

第1章 記念行事の概要

第1節 記念式典・記念講演会

2017年（平成29）10月1日に、本校は創基百二十周年・高専創立五十周年を迎えるにあたり、11月18日に記念式典を本校第一体育館で催した。これには学生・教職員をはじめ、来賓・本校卒業生約百四十名を含む総勢約八百名が参加した。

式典では、石田廣史校長が「地域社会並びに関連産業界との連携をより深め、広く社会が求める有為な人材育成の教育に全力を注ぐ」と今後の抱負を含む式辞を述べ、続いて岸信夫衆議院議員、江島潔参議院議員、林芳正文部科学大臣代理、村岡嗣政山口県知事、柳居俊学山口県議会議長、椎木巧周防大島町長代理からそれぞれ祝辞があり、谷口功国立高等専門学校機構理事長から謝辞が述べられた。



校長式辞

式典後、学生会主導で作成された120周年記念マスコットキャラクター「かもぞう」がお披露目され、カモメをイメージした理由として、福喜碧海学生会長から「人と人をつなぐ渡り鳥となってもらいたい」というキャラクターコンセプトが紹介された。



お披露目された「かもぞう」

続く記念講演会では、『伝統と最新の技と革新』をテーマに、リニア開発者である上西寛一郎氏による「ザ・リニアモーターカー」の講演と、本校卒業生で萩焼陶芸家である守田唐七氏による「伝統工芸と萩焼」の講演が行われ、参加者は熱心に聞き入っていた。

その後、場所を大観荘に移し、記念祝賀会が開かれた。



上西寛一郎氏



守田唐七氏

11月18日（土）

行事名	時間	場所
記念式典	13:00~14:00	第一体育館
記念講演会 ①講師 上西寛一郎（リニア開発者） 「ザ・リニアモーターカー」 ②講師 守田唐七（萩焼陶芸家） 「伝統工芸と萩焼」	14:10~16:00	第一体育館
記念祝賀会	17:00~18:30	大観荘



祝賀会

第2節 百二十周年誌の発刊

百二十周年誌の発刊のため、記念誌専門委員会（委員長：古藤泰美）は2015年（平成27）7月21日に第一回会議が開かれ、今後のスケジュール、編集方針、執筆担当について協議を行った。その後、一年半に及ぶ執筆作業を行い、本校の百二十年間の歴史と関係各位からの寄稿文、そして本校の現在の姿を収めた記念誌を制作した。

今回の記念誌の特徴は、本校ホームページからダウンロード可能な電子ファイルとし、誰もが閲覧できる形式にしたことである。ただし、保存用として、CD100枚と書籍100冊を作成している。

百二十周年記念誌専門委員会

委員長	古藤 泰美		
副委員長	川原 秀夫		
委員	野本 敏生	大久保健治	田口 由香
	前畑 航平	本木 久也	村田 光明
	岡野内 悟	中村 翼	山田 博
	番場 葉一	山平 宜孝	上山真理子
	瀧野 康幸	岡田 隆宏	小野 史雄
	敬称略、順不同		

第2章 寄稿文

手旗踊りのルーツと創基六十周年記念行事

航海科59期生 内田成孝

小生も大島商船独自の手旗踊りのルーツを知りたいと思っていましたが、紐ぞいてみればまさか、我々が生みの親とは感激です。それがどんどん進化して現在に至っていること、感無量です。

最初に手旗踊りの手ほどきを屋代の先生に受けたことが、白井さんの記憶にきっちりと残っていたことが何よりです。それがこの紐ぞきの原点でした。まだボケが回っていませんね。

電話でも話しましたが、本科3年生で「生徒会長」を任せられ、白井さんが「副会長」で共に運動会を盛り上げるための、運動会の企画を随分したように思います。だんだん思い出してくださいました。

また、お蔵入りの写真を出して眺めているとタイムスリップしたように当時が思い出されます。

2年生の時にコーラス部を結成し、商船学校にも（怒鳴り声でなく）ハーモニーの歌声を響かせたいと練習した記憶があります。最初はダークダックス風に4人結成だったと思います。もちろん白井さんは最初からのメンバーです、6人メンバーにと会員を増やし、60周年記念音楽祭には多くのメンバーで合唱しました。島内の高校の文化祭では独唱での参加の依頼もありました。女子高校生のピアノ伴奏で歌う時の気持ちの高ぶりが鮮明に思い出されます。

2年生時は60周年記念行事で展示会や、相撲大会、音楽祭、等いろんな行事が重なり、運動会はどうだったのか？

そこで3年となり、しかも「生徒会長」に選ばれたので61年の第一ステップとして記憶に残る今までにない大運動会をやろうとの思いが強かったと思います。

1. 機関（E）。航海（N）対抗が識別できるようシャツにN,Eのマークを入れる事、鉢巻は色で識別する。

2. N.Eの大型応援陣地の構築と応援合戦
3. 各部屋別の仮装大会
4. 各クラブの演舞 ····· 空手部、柔道、吹奏楽部、ヨット（陸上でのセット）
5. 全員での踊り

①手旗を使用したもの、（通常服作業着に着替える）手旗踊り

②着物着用 盆踊り的なもの

6. 出身別県対抗レース
7. 締めくくりは、夜のキャンプファイア

今までにない企画を持ち出したので学校側（直接校長に直談判）との折衝は結構やった気がします。ようやく、しっかりやれとの許可が取れて準備に取り掛かったと思います。それと、全生徒の参加と協力を得るために生徒会関係役員の奮闘が始まり、分担を決めて事を進めていったと思います。

白井さんは、手旗踊りと、民謡踊りを担当していただいたと思います。したがって、白井さんは息のかかった者達を引き連れて紹介され先生に習いに行ったのだと思います。夕食後全員に手旗踊り、民謡踊りの振り付け訓練が執り行われたことでしょう。

フィナーレはキャンプファイアを全員で囲み、肩を組みながら歌を歌い静かに消える火を懐かしんだのが昨日のように思い出されます。

最後に教官より、すばらしい運動会だった。ありがとう声をかけていただき、生徒の皆さんのが頑張りと団結力に改めて頭が下がる思いが今でも思いだされてジンと来ます。

全船協創立 80 周年記念行事で横浜係留中の帆船日本丸にて記念式典を行い、余興として、ギター伴奏（自分が参加）で海の詩を 4 曲参加者に歌っていただくこととした。その時最後は、海の男たちに歌っていただこうと「海のロマンス」を組み入ることにしました。

当然譜面は大島商船高専にあると思って連絡を入れたところ、吹奏楽部でも演奏していなくて譜面は無く昔のテープ音で踊っているとのことでした。前奏部分が不確実でしたが歌集の譜面からギター用にアレンジして準備しました。

その後大島商船高専学校の音楽担当先生に連絡を入れ、「海のロマンスを吹奏楽部で演奏し、全員で踊れる手旗踊りはどうですか」「素晴らしいと思いますよ！」とお話ししました。直ちに検討してみますとの返事をいただきました。その後しばらくして分厚い封書が届き、中から「海のロマンス」の吹奏楽譜譜面が出てきてびっくり、早速食い入るように見ましたが素晴らしいアレンジでまさにバージョンアップ完成の一瞬でした。

これからさらに吹奏楽部の演奏に合わせた歌も入れ、そして手旗踊りをさらに進化して欲しいものです。

57 年前の出来事がこんなに鮮明によみがえってくるんですね、全船協時代商船学校のルーツをめぐることは全船協としての使命だと巻頭言でも述べましたが、まさか地域の皆さんから愛され続けた「手旗踊り」のルーツがこの手の中にあったとは…・。永遠の親友白井さんありがとう！

白井さんの頭の中の整理のために 60 周年記念行事（2 年生）大運動会（3 年生）を識別しました。



60 周年記念音楽会
内田、白井さん参加（2 年生 1 年生）
伴奏：富岡校長夫人

1957 年 60 周年記念行事（59 期生 2 年生）
町内の皆さんによる飾り付け



1958 年 秋季第運動会（59 期生 3 年生）



入場行進 旗手内田 2 番旗スタンド白井



航海科本部（本陣）



機関科本部（本陣）



手旗踊り（運動会での第1回目の披露）

民謡踊り（先頭が内田）





大運動会フィナーレ（キャンプファイヤー）

回想「手旗踊り」

航海科59期生 白井政美

1. 秋季運動会の企画

内田成孝君の手記にもあるように、昭和33年の生徒会長が内田君、私白井が副会長であった。内田君は何事をするにも積極的で、熱い情熱を傾注するタイプである。私はどっちかというと人を引っ張るというより2番手にあって、一番手にぶら下がって実務の上で、アシストするのが自分に向いているキャラであると自己分析している。

生徒会の頂上にあって意見集約にかかり、皆の期待に応え得る能力があるなどとは思ってもいなかつたし、他にも優秀な人材は大勢いた。どういった風の吹き回しか内田君はともかく、自分を全校生徒が選んでくれたことは、面映ゆく感じたことである。

リーダーとしての資質を持った内田君と、2番手に徹するタイプの自分が組み合わされたことは、怪我の功名なのか組み合わせとしてはよかつたのかと思う。生徒会活動では内田君と呼吸が合い、いろいろな企画の相談を重ねたものである。

3年生2学期になり、今年の運動会は商船高校最後の運動会となるので、大いに盛り上げようと会長内田君の掛け声で企画を練る作業にかかった。

運動会の企画は仮装行列や4人乗り連結長下駄のムカデ競争、騎馬戦、ヨット組立て競争、借りもの競争、等色々と日夜検討され、従前行われていなかったものもいくつか取り入れることになった。その中の一つとして、東北地方かどこかの民謡の踊りを加えることになった。

2. 踊りの振り付けのお師匠さん

民謡踊りと後述の手旗踊りの振り付けをしていただいたのが、当時屋代口に舞踊教室を開いておられた名取で「花柳梨園（はなやぎりえん）」というお師匠さんであったそうである。「あったそうで」というのは、この度同窓会事務局長前田幸男氏から手旗踊りの起源を尋ねられ、お師匠さんについては容姿や人柄、立ち居振る舞いははっきりと思い出せたものの、お名前は思い出すことも探すことも出来なかった。

ところが、N-61期の小形武正君が当時のことを知っているという人を探しあててくれた。その人の名前は岡村かつ子さんといい、当時学校の事務職員か何かをやっておられた方である。

岡村さんは運動会当日の放送を担当され、三谷教官が書かれた放送原稿「手旗踊りの振り付けをされたのは花柳梨園さんです」という主旨の内容を放送で読みあげたと明瞭に記憶されているとのことである。この岡村さんのご記憶で師匠の名前が判明した。

花柳梨園さんは、慎ましく、誠実で、気品のある中年女性のお師匠さんであった。因みに師匠の本名は河岡文恵といい、屋代口に河岡酒屋という店があり、そこの娘さんという。ご結婚後黒川とかいう姓に替わり大阪方面行かれたという。花柳師匠に民謡と手旗踊りの振り付けをしていただいて、それを全校生徒に伝授するため、代表者を4～5名引き連れ数回舞踊教室に通ったものである。花柳師匠に口利きをしていただいたのが、三谷教官であったであろうと思う。運動会の放送原稿を書いたことや、「信号」学科の担当教官、屋代口に住まわっていたことなどからほぼ間違いないであろう。

3. 手旗踊りの誕生

民謡踊りを習い始めてのち、誰の提案であったかはわからないが、民謡踊りの他に手旗を音曲に合わせて踊ってはどうかという案が出てきた。検討した結果、商船学校の踊りとしてはふさわしく、「海のロマンス」の曲がよいのではないかということになった。早速、花柳師匠に話してみると快く振り付けを引き受けてくださった。

航海科出身者には説明の必要はないが、ここで少し手旗について触れてみる。

当時、航海科の授業に手旗信号や、SOSで知られている・・・—・—・・・のような記号を使ったモールス信号、国際信号旗などを習得する教科があった。この授業の担当は三谷教官であった。後に同教官著作の「旗と船舶通信」とい著書が成山堂からが刊行されている。

手旗は音声が届かないほど離れた船や陸上との間で手旗を使って「イロハ」文字などを描いて相手側に送ることによる通信手段である。海軍時代から使われていたもので、手旗は赤白2本の旗があれば簡便に通信できた。また、電波による通信は敵方に傍受される恐れがあるが、手旗にはそれがなかったので活用されたのかもしれない。

手旗信号は赤旗を右手に、白旗を左手に持ち、赤旗、白旗を上下左右に動かして文字を書き相手側に「イロハ」文字などを送る。数字のゼロから14までの形があり、これを数字原画といい、手旗信号の基本形である。これら数字原画を組み合せたものが「イロハ」文字となる。

まずは、数字原画をお師匠さんにこちらから教える作業から始まった。お師匠さんは数日かけて数字原画を「海のロマンス」に合うように組み合わせを考えて振り付けを創作して下さった。

振り付けが終わったところでまたメンバーは舞踊教室に通い手旗踊りを習得し、学校に持ち帰り、放課後などに全校生徒に伝授した。

運動会当日全校生徒によって「海のロマンス」の曲で手旗踊りがなされ、マスゲームの美が評価されたのか喝采を浴びた。

そして運動会は成功裏に終わった。

60年経った今なおこの手旗踊りが綿々と後輩に受け継がれていることを聞き、創作にかかわったものとして嬉しくて感動を禁じ得ません。

今思うこと

情報工学科1期生 柳井貴志
(平成4年度卒業)

この度は学校創基120周年、高専設立50周年、情報工学科設立30周年おめでとうございます。このような節目に投稿させて頂く機会を与えて頂きありがとうございます。私は情報工学科1期生で、豊橋技術科学大学に編入学、修士課程を修了。計測器メーカのアンリツに就職。その後2006年にトヨタ自動車に転職し、現在トヨタ自動車本社技術部で電子制御プラットフォームの開発に従事しております。電子制御プラットフォームというのは、最近コマーシャルなどで見かける、トヨタセーフティーセンス、他社だとホンダセンシング、プロパイロットのような運転支援、予防安全機能を開発しやすくするためのソフトウェアのプラットフォームになります。

約30年前の大島商船入学前を思い出しますと、甲子園を目指して野球をすることが高校生活の夢だった私にとって大島商船を選択するのは難しい選択でした。しかし、周囲からの説得もあり、甲子園出場の夢を諦め（当時、大島商船は軟式野球）、大島商船の門をくぐったのでした。そして、学校では情報工学科でソフトウェア、プログラミングなどコンピュータに関わる事を学び、寮では規則正しく、様々な土地から集まってきた仲間達との共同生活、合わせて先輩からの温かく厳しい指導。部活では野球、ラグビーでチームワークとリーダーシップを学ばせて頂きました。これも一重に中学当時、大島商船を推してくれた親、先生。そして大島商船学生時代の様々なシーンで色々な事を教えて下さった先生方のおかげです。心より感謝しています。このような経験があったからこそ、今トヨタでソフトウェアに関わる業務に従事できていると自負しています。

話は変わりますが、昨年、文科省は2020年から小学校に於けるプログラミング教育の必須化を発表しました。「第4次産業革命」とも言われる、人工知能、IoTに適用していく為の一つの施策だと思います。又、その中でプログラムを書く事を教えるのではなく、プログラミング的思考を教える事が目的と記載されており、非常に共感しているところです。それは、プログラミング言語は時代とともに変化しますが、物事を論理的に考えるということはいつの時代も変化しないからです。

大島商船に情報工学科が設立されて30年、当時と状況は違いますが、この業界における人材不足は続きます。とはいもののこの業界で戦うのは簡単ではありません。そこに立ち向かうためにも、何事にもこだわり、最後までやり抜く気持ちを強く持ってほしいと思います。やってやるんだという強い気持ちは周りに伝搬し、おのずと周りの協力を得ることが出来ます。在校生の皆さんには残りの学生生活を有意義に過ごし、これから日本を支える人材になって頂ければと思いますし、卒業生の私たちはそれを支える存在になればと思います。

これまでも、これからも

電子機械工学科14期生 村上泰樹
(平成14年度卒業)

本校へ入学した当時はコンピュータとインターネットが各家庭に普及し始めたころで、入学してすぐにインターネットを学生が自由に使うことができるということに驚いたことを覚えています。そこから先の在学中の記憶を思い出してみると、多くの記憶がそうであるように、どれも断片的で脈絡もなく、意味も分からぬものばかりです。それなりに悩みもあったと思います。しかし、それらは今になってみると些細なことなのかもしれません、その些細なことの積み重ねがあって今があるのは確かなことだと思います。

本校を卒業してからは大学に編入学をし、大学院を修了し博士号をいただくことができました。その間、論文誌に投稿しては書いた論文を編集者から突き返されては落ち込み、データがうまくとれなければ頭を抱えていました。そのような状況の中、支えていただいた家族ならびに諸先生方には表しきれないほどの感謝の気持ちしかありません。

大学院修了後、平成28年4月より本校に教員として勤務することになりました。慣れないことばかりで、特に学生の皆さんには迷惑ばかりかけているような気がします。しかし、それでもおおらかに私のことを許してくれる皆さんには大変感謝しています。気が付いているか分かりませんが、授業が始まる直前は緊張で手が震えています。2年目に入りましたが、まだ手の震えはおさまりません。

久しぶりの母校は変わらないこともあります、他がそうであるように学生ならびに教職員の方々にもせわしさを感じる気がします。もっとゆっくり時間をかけて行いたいことは多くあります。しかし、日常の多忙さに追われて、ついせわしなくしてしまいます。人はそれぞれに違うので均質的に考えることはできませんが、特に高専在学中の15歳から20歳までの間は、ゆっくりと考えてtry and errorを繰り返すことが大切だと思っています。丸い煎餅が割れても味は変わらないので、ぜひ挑戦して失敗して、その理由をゆっくり私も考えていくたいです。

学生時代の思い出

情報工学科16期生（平成19年度卒業）

専攻科2期生（平成21年度修了） 軍神有由美

大島商船高等専門学校、創基120周年、高専創立50周年おめでとうございます。

私は、2003年に大島商船に入学し、高専5年および専攻科2年の計7年間、大島商船高等専門学校で過ごすことができ、たくさんの経験・思い出が出来ました。

入学してすぐは、慣れない寮生活や専門教科の勉強が難しくついていくだけで一生懸命なほど大変でしたが、7年間で得た知識は大学院時代や社会人になってとても役に立っています。また、知識だけでなく、寮生活や部活動、学生生活を通じたくさんの人々と関わることで今の私があると思っています。

高専4年生の時にやった商船際実行委員長は学生時代で一番大変な仕事でしたが、とても大きな経験をする機会になりました。まず、実行委員を探すことから始まり、スポンサー探し、手旗や模擬店、体育館での催しものの把握をしながらも色々と発生する問題をどう対処していくか・・・など、本当にやることが多くとても苦労しました。そして、何といってもたくさんの人をまとめることの大変さを身をもって痛感しました。けれど、大変な仕事ではありますが、たくさんの方々の助けや協力のおかげで無事に商船際を終了することができ、物事を一生懸命に最後までやりとおす達成感を味わうことができました。社会人として会社で仕事をしていくなかで、やはり難しく大変なことは多く、最後までやりとおすこと、また自分の考えを貫き通すことはとても難しいですが、学生時代に物事を一生懸命に最後までやりとおすこと、またその達成感を知っているからこそ、あきらめず、どんな仕事でもやっていっているのではないかと思います。

学生のみなさんには学生時代に、勉強や部活動、アルバイトでもなんでもいいので何か1つ自分が決めた目標を最後まで一生懸命に貫き通すこと、その達成感を味わっていてほしいなと思います。

また、学生時代ほとんどの時間を共に一緒に過ごした友達とは、今でも気兼ねなく連絡を取り合ったり、一緒に遊んだり他愛ない話で盛り上がれます。就職して同期や仲間が出来ますが、気兼ねなく話が出来たり出来る友達や仲間は学生時代の友達だと思います。ぜひ周りの友達や仲間を大切にしていってほしいなと思います。

在学中の思い出

電子機械工学科23期生 鶴谷 梨菜
(平成23年度卒業)

私の思い出はバレーボールの高専大会で全国への切符を手に入れた事です。

その道のりは決して楽ではありませんでしたが、多くのものを得ることが出来ました。

中学から始めたバレー。同級生の誘いで軽い気持ちで入部しました。1年の夏に初めて高専大会を経験しその時の5年生の悔し涙を見て「自分達の代では絶対に全国へ行くんだ。悔し涙ではなく嬉し涙で終わるんだ」と強く決意しそこから全国へ行く事が私の目標となりました。

しかしそこから苦悩の連続でした。同学年の部員が突然辞めてしまい私の代は1人になってしまいました。チーム編成のためにセッターへの転向を余儀なくされ主力がほとんど抜けてしまったチームで勝てない試合が続きました。更に追い打ちをかけるように、4年の高専大会の直前に腰を負傷し医者からは試合に出ない方が良いと言われてしまいました。それでも「大好きな先輩達とコートに立ちたい!」—その思いだけは譲れずコートに立つ事を目標に必死で努力しました。そして痛み止めを飲みながら大会へ出場。しかし結果は3位に終わってしまい大好きな先輩を全国へ連れていいく事が出来ませんでした。

なんでこんなに頑張っているのに報われないのか。もう無理かも・・・頑張っても報われない状況が続き次第に頑張ることが苦痛になっていきました。

5年になり先輩が引退しキャプテンとして選手として全てをこなさなければいけなくなりました。後輩への指導や指示出し練習メニューに加えて重圧やプレッシャーが重くのしかかり一人で全てを背負い込み逃げ出したくなる時もありました。その度に「全国へ行く」という目標が私を頑張らせてくれました。チームは着実に力をつけ遂に!全国への切符を手に入れ最後は嬉し涙で終える事が出来ました。

「全国へ行きたい」—この思いだけで突っ走った5年間。何度も無理だと思ったし何度も挫折しそうになりました。たかが部活で大袈裟、と思われるかもしれません。私みたいにハッピーエンドとは限らないかもしれません。けれど逃げずに努力をし続けたから自分の可能性を広げる事が出来たと思います。素敵な景色を見ることが出来たと思います。何の取り柄もない私が唯一努力をする事で手に入れた全国への切符。辛い事なんて腐る程ある中で諦めなければ不可能を可能にすることが出来ると私は思います。努力は絶対に裏切らない。

だからこれを読んでいる方も何か目標を見つけて誰よりも努力をしてほしいと思います。人生は一度きり。後悔のない素敵な高専生活を送って下さい。

外航船員として乗船して、そして陸上勤務へ

商船学科41期生（平成24年度卒業）

専攻科7期生（平成26年度修了） 城戸 裕晶

幾多の海運不況を乗り越え、この大島商船高等専門学校が、創立以来120年間、山口・大島の地から多数の学生を送り出し続けていることは偏に諸先輩皆様のご尽力と、海運業界初めとする海事クラスターの皆さまのご理解があればそのこと。会社や学校の存続無くしてこの勤務もありませんので、私自身も感謝の念に堪えません。

この度、創基120周年に向けた記念誌への寄稿依頼を受け、社会人としてまだ浅い年月の私事で大変恐縮ですが、ご依頼の趣旨に沿って文章を書き綴らせていただきます。

平成24年9月に商船学科（本科）を卒業した私は、本科ではできないような事にチャレンジしたいとう気持ちから専攻科へ進学し、本科・専攻科を含め7年半、母校に大変お世話になりました。平成26年9月に専攻科を修了し、翌10月1日に運良く外航海運会社である現在の会社に航海士として入社できた私は早速、翌11月に次席三等航海士として豪州航路の石炭運搬船に乗りました。初めて航海士として乗船した船の船長が本校の卒業生であり、暖かく時には厳しく接して下さり、航海士としてはもちろん社会人としての大切な教えを胸に刻んでいます。また乗船中に本校の卒業生である水先案内人が嚮導される場面にも遭遇し、本校の先輩方の活躍の広さを実感しました。

現在の外航船員の仕事内容としては、認識はしておりましたが、船上業務に対する要求、船長・機関長以下航海士・機関士に至るまで誰もが、書類作成に追われている現実は如何ともし難しく、SOLAS条約などの国際ルールの対応や、特に、船長は昼夜問わずトラブル発生時の船・会社間の情報共有を衛星回線経由の電話や電子メールにて緊密に行っていました。

私自身も乗船中は例外なく書類作成に追われ、三等航海士の担当職務の消火・救命設備の月例・週例点検を行い、世界一厳しいと言われるオーストラリアのポートステートコントロールの臨検を何度も経験し、学校では教えてくれない外航船員の厳しさ実感しました。厳しいことばかりでは無く、航海士として、輻輳海域を操船した時の船長に任せられて船の安全を引き受けているという責任や出入港配置では、船橋で船長や水先案内人の補佐を行い、配置が解かれた後の船長の補佐を的確に行い終えた時には、非常にやりがいを感じました。また乗船中は、三等航海士の職務はもちろんのこと、さらに上の職務である二等航海士や一等航海士の勉強を行い、海図の改補やバラストタンクの内検などを経験し、まだまだ自分の知らない船の事を知った分だけ船上での仕事は面白くなるなと思いました。

休暇中は、故郷である鹿児島で、本校の同窓会支部である鹿児島小松会の活動に積極的に参加し、鹿児島小松会の会長とともに航海訓練所（現、海技教育機構航海訓練部）の練習船が鹿児島寄港の度に乗船中の後輩の顔を見に練習船へ訪船していました。乗船実習の途中である後輩の生き生きとした顔を見ることができ、自分の気が付かない間に蓄積された乗船への不安を払拭し、本校の後輩である彼・彼女らが、自分らの後に続くように、見本となるように頑張って行こうと何度も思いました。

平成29年1月27日に船長・機関長以下フィリピン人船員全乗の社船に日本人一人、三度目の三等航海士として乗船を果たしました。以前からフィリピン人船員全乗の船舶に乗船したかった希望があり、不安もありましたが期待しながら乗船しました。乗船直前に本船の着岸を眺めていると、偶然、前船と一緒に乗っていたクルーが乗船しており、今回は当直のパートナーだったので、見張

りをしながら前船での思い出などを語ったりしていました。メンバーが違えど陽気なフィリピンクルーと共に毎日の賑やかな船内生活を過ごし、国籍も日本とフィリピンに分かれていますが、船上に国境は無く皆が一体となり、安全且つトラブルの無い迅速な航海を目指し、「同じ釜の飯を食べる仲間」という連帶意識の重要性を胸に刻み、より良い船内融和に育まれる安全運航に、数少ない日本人航海士として微力ではありますが貢献できるように精進していきたいと思いました。今の時代、日本人が航海士・機関士として外航船に乗る機会が少なくなっているとよく耳にします。また、外地の港へ寄港の際には、その地の水先案内人や代理店職員などが、日本人を久しぶりに見たとよく話をされています。実際、国際 VHF 無線電話の交信を傍受するとよく耳にするのはフィリピン人・インド人・中国人・ギリシャ人が話す訛りのある英語が飛び交っています。世界規模の船員業界の厳しい競争を目の当たりにし、外航日本人船員がいない状況を改めて実感しました。

フィリピン人船員全乗の船で一航海が終わり、ようやくこの船に慣れた頃、会社から急遽、次の帰港時に下船・陸上勤務を命じられ、最近の船乗りの宿命である陸上勤務へ思いを馳せる日々が始まることとなった。

初乗船を振り返り、乗船当初、英語のボキャブラリーの無さに右も左も分からない状態から、現在までに怪我も無く元気でこれまでの乗船勤務ができたのは、船長・機関長をはじめとする先輩航海士・機関士の暖かく時には厳しい教え、困ったときにいつも明るく接してくれたフィリピン人の一等航海士をはじめとするフィリピンクルーの助けがあったからだと思います。また乗船中や休暇中に多くの人達に巡り会った幸運に感謝しています。数年後、再び海上復帰するときは現在の状況が維持されているのか、もしくは条約が改訂され、国際ルールが更に厳しくなっているのか、さては海上復帰自体あるのかと不安はありますが、初心を忘れずに新しいステージへ向けて全力で挑戦していきたいと思うところです。

末筆ながら、大島商船高等専門学校の益々の隆盛を祈念致しまして、創基 120 周年への感謝とお祝いの言葉とさせていただきます。

第9編 資料編

1 現況

1. 1 組織及び各種委員会等

1. 1. 1 現員

職位等 Title	人数 Number
校長 President	1
教授 Professor	19
准教授 Associate Professor	18
講師 Lecturer	5
助教 Assistant Professor	12
助手 Assistant	1
小計 Total	56
事務職員 Administrative Staff	43
合計 Grand Total	99

	現員	教授	准教授	講師	助教	助手
商船学科 Shipping Technology Dept	15	6	3	0	5	1
電子機械工学科 Electronic-Mechanical Engineering Dept	11	4	4	1	2	0
情報工学科 Information Science and Technology Dept	11	5	3	0	3	0
一般科目 General Education Division	14	4	6	4	0	0
練習船大島丸 Training Ship "Oshima-maru"	4	0	2	0	2	0
合計 Grand Total	55	19	18	5	12	1

1. 1. 2 組織図

校長
President

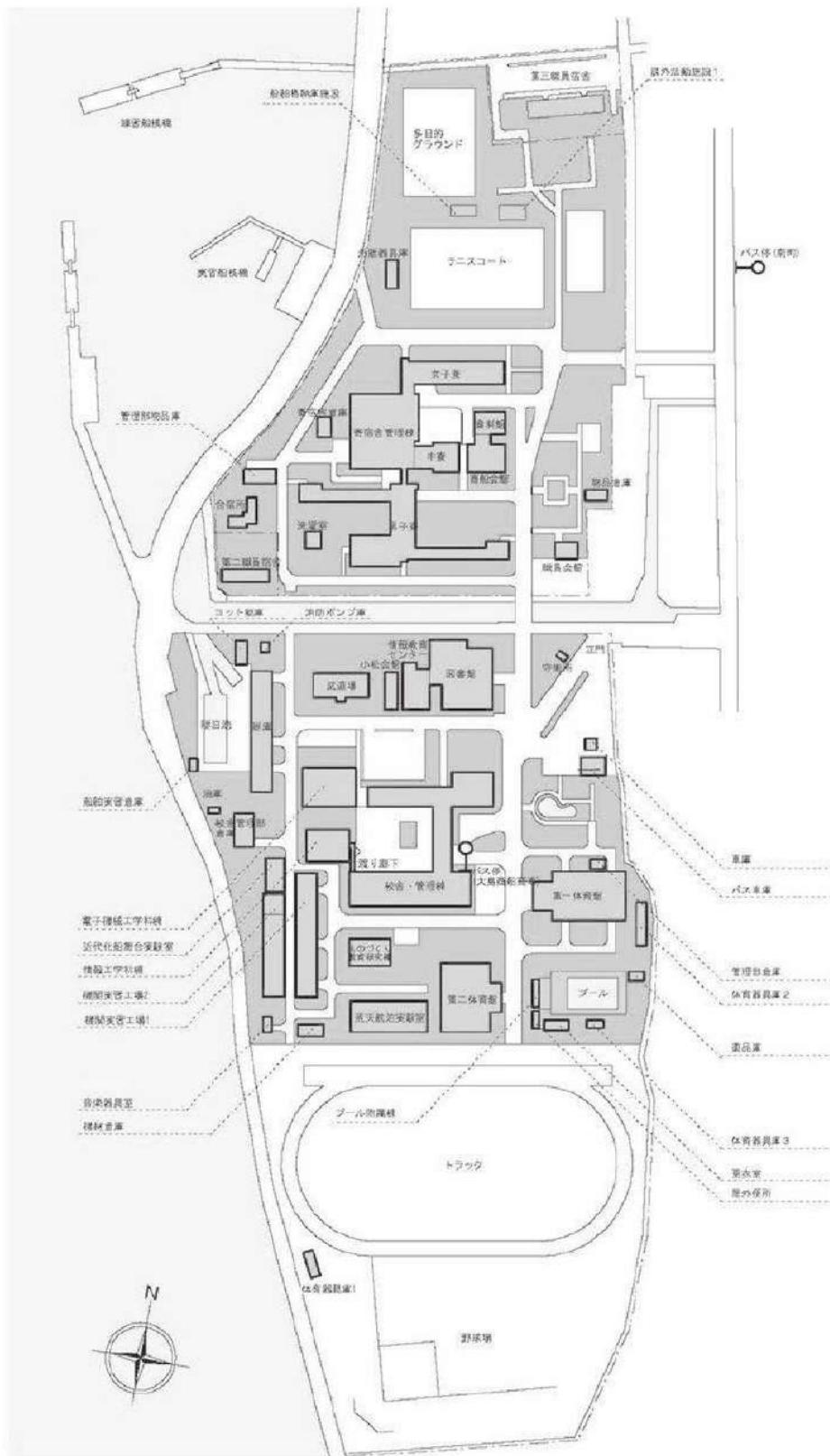


1. 1. 3 各種委員会

委員会等の名称					
運営委員会	将来構想検討委員会	自己点検・評価委員会	情報公開委員会	教員人事委員会	防災委員会
リスク管理室	安全衛生委員会	船内安全衛生委員会	職員レクリューション委員会	放射線障害防止管理委員会	知的財産委員会
地域協力委員会	国際交流委員会	国際交流室	施設整備委員会	情報教育センター運営委員会	情報セキュリティ管理委員会
情報セキュリティ推進委員会	宿舎委員会	環境委員会	予算委員会	島スクエア起業教育研究センター運営委員会	男女共同参画推進委員会
図書館運営委員会	ハラスメント防止対策委員会	教務委員会	専攻科委員会	J A B E E 委員会	練習船運航委員会
厚生補導委員会	キャリア支援室会議	寮務委員会	入試選考委員会	入学試験委員会	学生相談室運営委員会
F D 委員会	技術支援センタ一運営委員会	教員会議	ヒト研究倫理委員会	評議員会	

1. 2 施設の現況

1. 2. 1 配置図



1. 2. 2 施設

土地

敷地総面積	校舎敷地	寄宿舎敷地	運動場敷地	その他
112,540 m ²	45,767 m ²	29,911 m ²	33,770 m ²	3,092 m ²

建物

棟名称	構造	延面積 m ²	棟名称	構造	延面積 m ²
校舎・管理棟	R 4	7,004	音楽器具室	B 1	31
電子機械工学科棟	R 4	1,769	艇庫	R 1	606
情報工学科棟	R 3	974	バス車庫	R 1	108
ものづくり教育研究棟	R 3	734	車庫	R 1	34
渡り廊下	R 1	33	守衛所	R 1	15
機関実習工場 1	R 1	622	校舎管理部倉庫	R 1	150
機関実習工場 2	R 1	519	ヨット艇庫	W 1	63
荒天航泊実験室	S 1	565	舟艇器具庫	B 1	82
近代化船総合実験室	R 1	164	機材倉庫	R 1	72
情報教育センター	R 1	300	船舶実習倉庫	B 1	26
図書館	R 2	1,681	物品倉庫	W 2	94
第一体育館	R 1	997	薬品庫	B 1	33
第二体育館	R 1	880	油庫	B 1	19
武道場	R 1	322	消防ポンプ庫	B 1	21
プール付属棟	B 1	49	管理部倉庫	B 1	34
体育器具庫 1	B 1	61	男子寮	R 3	3,781
体育器具庫 2	B 1	102	女子寮・中寮・管理棟	R 5	4,385
体育器具庫 3	B 1	31	管理部物品庫	R 1	110
小松会館（食堂）	R 2	164	洗濯室	S 1	64
職員会館（宿泊所）	R 2	193	寄宿舎倉庫	R 1	63
商船会館	R 3	690	第二職員宿舎	B 1	256
資料館	R 1	164	第三職員宿舎	R 4	1,100
合宿所	W 2	180	課外活動施設 1	S 1	94
更衣室	B 1	60	船舶格納庫施設	S 1	87
屋外便所	B 1	30			
			面積計	m ²	29,616

1. 2. 3 練習船等

練習船「大島丸」

船 型	低船首樓型		
資 格	近海区域		
主要寸法	41.0 m × 7.6 m × 3.5 m (全長×全幅×全深)		
総トン数	228 トン		
主 機 関	ディーゼル機関 (1300ps/370rpm) 1 基		
最大速力	13.69 ノット		
航続距離	約 2,100 海里		
発 電 機	225KVA/AC 225V 3 φ /60HZ 1,200rpm 2 台		
バウスラスター	推力 1.0 t 1 台		
定 員	乗務員	その他	計
近海区域	9	49	58
沿海区域	9	90	99

実習船「すばる」

主要寸法	14.5 m × 4.1 m × 2.3 m (全長×全幅×全深)		
総トン数	14 トン		
定 員	乗務員	その他	計
実習時	1	23	24
交通時	1	14	15

その他

ヨット	15 艇
カッター	5 艇
救命艇・小型船等	6 艇
水上バイク	3 艇

2 学生（高専一期生から高専五十期生）

2. 1 出身県別入学者数

年度	山口	広島	鳥取	島根	岡山	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	愛媛	徳島	香川	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	静岡	新潟	埼玉	千葉	東京	神奈川	山形	岩手	米沢	計
H29	99	9				8	2	1	2	3	3	1										1				1	1	1	127		
H28	102	9			1	6	4	2	2	2	2														1	1	1	1	136		
H27	102	5				5	2	6	2	1											1				1				125		
H26	104	5			2	7	3	4	3	3								1	1	2					1				133		
H25	99	5			2	12	1	7	5	1				1											1				125		
H24	102	6			2	10	1	5	1									1											129		
H23	105	6			3	10	4	2	1	1	1	1	1																133		
H22	105	4				6		2	1	1	1	1									1								121		
H21	129	12			1	5	4	1	1	1	1										1								146		
H20	106	6				3	5	4																						123	
H19	107	7				4															1									126	
H18	113	7				7	4	1	1	1	1										1								133		
H17	104	11				4	3	2													1									125	
H16	101	7				8	2	1	1		1										1								122		
H15	118	11			4	2	2				1																		138		
H14	99	5				9	5	1			1																		126		
H13	109	12				6		2	1	1	1										1								123		
H12	109	6				8	1	2		1											1								119		
H11	112	7			9	1		1	1																				191		
H10	110	7				3	1	1	2											1	1								125		
H9	111	8			1	4	1	1	1	1	2										1								129		
H8	109					13	1	1	1	3	3	4	1							1								126			
H7	111	2				3	1	1	1	2											1								121		
H6	88	9				10	11	1	1	2	2																		113		
H5	93	11				10	11	2	3	3	1	1									1								123		
H4	96	11				6	3	1	1	3	1										1								121		
H3	97	14				8	1		1	2	1										4								129		
H2	105	8				5	2	4	1	6	1	1								1	2								136		
H元	87	8			2	19	1	1	4												1					1	1		125		
S63	71	18			1	15	1		1	4	1	2								1	5								120		
S62	56	9			1	16	2	4	3	4										1	4								106		
S61	65	7			2	15	2	6	1	1	2									1	3								106		
S60	75	5			5	17	5	6	1	4		1								2									126		
S59	33	6	1			26	3	16	1	7	4	3	1							4									105		
S58	44	9	1	2		17	3	14	6	6	1	1	1	1	1				1	1	2							116			
S57	29	9	1	3	1	19	3	9	3	7	2	7	1	2				1	1	5								104			
S56	23	4			3	13	3	8	7	9	7	4	1						2									91			
S55	38	2				16	4	3	4	10	5	9								1								93			
S54	36	7	1	1	12	5	9	8	6	7	1									1								94			
S53	28	7	1	3	19	1	14	5	15	1	13									1								106			
S52	27	2			4	27	3	7	7	13										2								100			
S51	46	4			3	11	22	1	9	2	5	3	16		3													115			
S50	43	5			4	25	3	16	3	6	2	11	1						1								126				
S49	46	1			1	13	8	15	2	10	1	15		1														113			
S48	45	3	1	3	12	7	6	11	8	1	21																	119			
S47	52	2	2		17	5	6	5	13	2	14																	126			
S46	49	2			3	11	14	8	7	4	23	1																121			
S45	59	1	2		19	4	11	3	16	2	17		1	1	1					1								123			
S44	51	1	2	4	17	3	7	5	6	1	16		2		1				2		1							126			
S43	47	2			17	1	4	7	4	3	5																	96			
S42	39	1		3	18	2	1	3	6	1	5																	86			
計	3,975	324	9	60	8	599	90	219	133	201	41	233	4	18	3	1	4	4	4	15	44	1	3	3	2	3	5	1	1	1	6,040

2.2 本科卒業生数

年度	商船学科	電子機械工学科	情報工学科	航海学科	機関学科	計
H28	42	41	44			127
H27	38	40	39			117
H26	32	40	38			110
H25	27	39	44			110
H24	33	34	43			110
H23	29	39	36			104
H22	33	38	41			112
H21	37	39	34			110
H20	39	43	33			115
H19	32	41	41			114
H18	31	42	35			108
H17	28	32	36			96
H16	42	35	36			113
H15	31	38	34			103
H14	26	32	33			91
H13	26	41	39			106
H12	27	39	32			98
H11	30	35	39			104
H10	26	38	35			99
H9	32	37	42			111
H8	29	43	37			109
H7	30	33	42			105
H6	26	38	40			104
H5	19	44	39			102
H4		35	31	21	14	101
H3		36		25	26	87
H2		36		28	39	103
H元		31		26	44	101
S63				28	50	78
S62				28	40	68
S61				24	37	61
S60				26	27	53
S59				19	44	63
S58				31	41	72
S57				23	46	69
S56				27	48	75
S55				31	63	94
S54				36	49	85
S53				27	68	95
S52				35	68	103
S51				29	53	82
S50				28	65	93
S49				34	57	91
S48				38	33	71
S47				32	32	64
計	745	1,059	943	596	944	4,287

2.3 専攻科修了生数

年度	海洋交通システム工学専攻	電子・情報システム工学専攻	合計
H28	0	10	10
H27	4	13	17
H26	3	8	11
H25	3	9	12
H24	3	19	22
H23	4	15	19
H22	2	13	15
H21	3	9	12
H20	2	7	9
H19	6	9	15
H18		6	6
合計	30	118	148

2.4 大学編入学者数・高専専攻科進学者数

年 度	学科	大学																	専攻科		小計	合計		
		東京 海洋	東京 商船	東京 水産	神戸 神戸	神戸 商船	豊橋 技科	長岡 技科	九州 工業	山口	広島	岡山	島根	愛媛	熊本	鹿児 島	山梨	電気 通信	千葉	広島 市立	立命 館	他の 大学	大島 商船	他の 高専
H29年度 (2017)	商船	3																				(3)	3	
	電子																					4	10	22
	情報																					4	9	
H28年度 (2016)	商船	2																				3	7	
	電子																					1	2	10
	情報																					3	7	24
H27年度 (2015)	商船	2																				1	4	
	電子																					7	26	
	情報																					1	2	
H26年度 (2014)	商船																					1	5	10
	電子																					4	8	
	情報																					1	4	
H25年度 (2013)	商船	1																				3	1	7
	電子																					5	6	17
	情報																					4		
H24年度 (2012)	商船																					3	5	
	電子																					2	6	22
	情報																					6	11	
H23年度 (2011)	商船																					3	6	
	電子																					8	11	32
	情報																					1	11	15
H22年度 (2010)	商船																					5	6	
	電子																					12	13	28
	情報																					1	4	
H21年度 (2009)	商船	1																				5	8	
	電子																					1	9	15
	情報																					1	4	7
H20年度 (2008)	商船	1																				2	4	
	電子																					2	6	15
	情報																					5	5	
H19年度 (2007)	商船	1																				3	6	
	電子																					3	12	23
	情報																					1	5	
H18年度 (2006)	商船																					2	3	
	電子																					4	4	15
	情報																					1	1	8
H17年度 (2005)	商船																					3		
	電子																					0	9	
H16年度 (2004)	商船																					1		
	電子																					2	6	8
	情報																							
H15年度 (2003)	商船	2	1	3																		6		
	電子																					6	14	
	情報																					1	2	
H14年度 (2002)	商船																					2		
	電子																					1	1	16
	情報																					1	1	
H13年度 (2001)	商船	2	1	3																	6			
	電子																					6	10	24
	情報																					3		
H12年度 (2000)	商船																					8	19	
	電子																					1	2	
	情報																					8		
H11年度 (1999)	商船	1		3																		4		
	電子																					1	8	16
	情報																					1	4	
H10年度 (1998)	商船	1		2																		4		
	電子																					1	7	17
	情報																					1	6	
H9年度 (1997)	商船	2		2																		5		
	電子																					9	19	
	情報																					2		
H8年度 (1996)	商船	1		3																		4		
	電子																					1	6	17
	情報																					1		
H7年度 (1995)	商船	2		2																		4		
	電子																					3	6	13
	情報																					1		
H6年度 (1994)	商船																					0		
	電子																					5	9	
	情報																					4		
H5年度 (1993)	航海			1																		1		
	機関																					2		
	電子																					5		
H4年度 (1992)	航海	1																				4		
	機関																					0	5	
	電子																					3		
H3年度 (1991)	航海	2		1																		2		
	機関																					2	7	
	電子																					2		

H2年度 (1990)	航海 機関 電子			1		1																1	5		
H1年度 (1989)	航海 機関		1			1	2															1	5		
S63年度 (1988)	航海 機関		1																			1	5		
S62年度 (1987)	航海 機関				2	1	1														4	5			
S61年度 (1986)	航海 機関					1	1														0	2			
S60年度 (1985)	航海 機関						1														0	0			
S59年度 (1984)	航海 機関							1													1	2			
S58年度 (1983)	航海 機関																				0	0			
S57年度 (1982)	航海 機関							1													1	1			
S56年度 (1981)	航海 機関																				0	0			
S55年度 (1980)	航海 機関																				0	0			
S54年度 (1979)	航海 機関																				0	0			
S53年度 (1978)	航海 機関							1													0	1			
S52年度 (1977)	航海 機関								1	1											2	3			
S51年度 (1976)	航海 機関																				1	1			
小計	商船	11	11	3	22	22	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	2	103		
	電子	0	0	0	0	0	53	25	17	10	2	1	1	0	2	2	2	1	2	0	3	11	58	1	191
	情報	0	0	0	1	0	37	8	22	10	2	0	1	3	2	0	0	5	1	11	2	14	54	5	178
	航海	0	5	0	0	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	13
	機関	0	1	0	0	2	10	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
合計		11	17	3	23	30	101	40	41	20	4	1	2	3	4	2	2	6	3	11	5	26	142	8	505

2.5 寄生及び通学生数

年度	学科	寄生							
		1年	2年	3年	4年	5年	専1	専2	合計
H29 (2017)	商船	34	32	36	33	31			166
	電子機械	8	11	10	8	3			40
	情報	9	4	6	11	6			36
	海洋交通					1	1	2	
	電子・情報					0	1	1	
H28 (2016)	合計	51	47	52	52	40	1	2	245
	商船	36	35	34	37	26			168
	電子機械	14	11	11	4	3			43
	情報	5	7	10	8	7			37
	海洋交通					1	0	1	
H27 (2015)	電子・情報					1	4	5	
	合計	55	53	55	49	36	2	4	254
	商船	36	38	40	27	31			172
	電子機械	13	11	5	3	12			44
	情報	9	10	10	7	4			40
H26 (2014)	海洋交通					0	1	1	
	電子・情報					4	5	9	
	合計	58	59	55	37	47	4	6	266
	商船	38	40	27	31	30			166
	電子機械	14	8	4	12	5			43
H25 (2013)	情報	16	11	7	6	6			46
	海洋交通					1	3	4	
	電子・情報					5	2	7	
	合計	68	59	38	49	41	6	5	266
	商船	40	28	31	30	26			155
H24 (2012)	電子機械	10	6	13	6	10			45
	情報	12	4	6	5	6			33
	海洋交通					3	1	4	
	電子・情報					2	2	4	
	合計	62	38	50	41	42	5	3	241
H23 (2011)	商船	29	35	31	28	18			141
	電子機械	8	15	5	11	5			44
	情報	6	5	4	8	6			29
	海洋交通					1	2	3	
	電子・情報					2	2	4	
H22 (2010)	合計	43	55	40	47	29	3	4	221
	商船	36	33	32	17	20			138
	電子機械	20	6	11	5	2			44
	情報	5	5	9	6	1			26
	海洋交通					2	2	4	
H21 (2009)	電子・情報					3	1	4	
	合計	61	44	52	28	23	5	3	216
	商船	34	31	17	19	17			118
	電子機械	7	12	4	2	7			32
	情報	6	8	5	2	10			31
H20 (2008)	海洋交通					2	1	3	
	電子・情報					1	1	2	
	合計	47	51	26	23	34	3	2	186
	商船	35	24	21	17	20			117
	電子機械	13	7	2	7	5			34
H19 (2007)	情報	9	3	3	10	6			31
	海洋交通					1	1	2	
	電子・情報					1	3	4	
	合計	57	34	26	34	31	2	4	188

通学生							
1年	2年	3年	4年	5年	専1	専2	合計
6	10	6	5	11			38
38	30	35	40	29			172
33	40	38	33	33			177
					2	0	2
					8	7	15
77	80	79	78	73	10	7	404
8	6	4	5	13			36
28	33	38	29	39			167
39	37	36	31	38			181
					0	0	0
					7	6	13
75	76	78	65	90	7	6	397
4	4	2	13	11			34
31	39	32	40	28			170
34	37	29	36	37			173
					0	3	3
					6	8	14
69	80	63	89	76	6	11	394
5	2	15	12	9			43
33	31	39	31	36			170
32	28	38	36	32			166
					3	0	3
					8	6	14
70	61	92	79	77	11	6	396
3	13	13	8	9			46
31	39	31	37	29			167
30	40	38	34	39			181
					0	2	2
					6	7	13
64	92	82	79	77	6	9	409
13	10	8	14	9			54
40	31	37	35	29			172
38	40	33	38	38			187
					2	1	3
					7	17	24
91	81	78	87	76	9	18	440
9	10	15	10	16			60
32	37	34	33	37			173
36	36	39	39	36			186
					2	2	4
					18	14	32
77	83	88	82	89	20	16	455
12	16	10	18	12			68
37	38	32	40	31			178
36	38	42	35	31			182
					3	1	4
					15	12	27
85	92	84	93	74	18	13	459
15	11	17	14	13			70
42	30	41	31	34			178
42	43	34	35	28			182
					1	2	3
					12	6	18
99	84	92	80	75	13	8	451

H20 (2008)	商船	23	24	18	19	22		106		10	21	14	15	15			75
	電子機械	7	1	7	5	8		28		36	44	32	36	35			183
	情報	3	3	10	4	4		24		48	34	36	30	29			177
	海洋交通						1	0	1						2	2	4
	電子・情報						2	0	2						7	7	14
	合計	33	28	35	28	34	3	0	161						9	9	453
H19 (2007)	商船	27	23	21	25	26		122		19	15	16	13	14			77
	電子機械	1	8	6	8	5		28		40	36	36	35	36			183
	情報	6	10	6	4	6		32		34	40	31	31	36			172
	海洋交通						1	3	4						1	3	4
	電子・情報						0	3	3						7	6	13
	合計	34	41	33	37	37	1	6	189						9	9	449
H18 (2006)	商船	31	24	25	27	20		127		11	15	13	14	12			65
	電子機械	7	6	8	5	4		30		40	36	35	38	38			187
	情報	8	5	5	7	10		35		43	33	35	38	25			174
	海洋交通						3		3						3		3
	電子・情報						3	1	4						6	5	11
	合計	46	35	38	39	34	6	1	199						9	5	440
H17 (2005)	商船	30	25	28	20	19		122		13	12	16	12	12			65
	電子機械	8	7	6	4	5		30		36	34	39	39	29			177
	情報	7	8	12	8	12		47		33	32	36	27	25			153
	海洋交通																
	電子・情報						0		0						6		6
	合計	45	40	46	32	36		199		82	78	91	78	66	6		401
H16 (2004)	商船	24	27	23	20	14		108		15	16	11	12	14			68
	電子機械	9	6	4	5	6		30		34	39	40	32	30			175
	情報	6	13	7	11	5		42		36	34	30	29	31			160
	合計	39	46	34	36	25		180		85	89	81	73	75			403
	商船	28	27	20	20	19		114		17	12	16	9	24			78
	電子機械	10	6	5	7	10		38		38	37	38	29	28			170
H15 (2003)	情報	13	6	10	5	8		42		36	32	33	33	27			161
	合計	51	39	35	32	37		194		91	81	87	71	79			409
	商船	26	23	23	20	12		104		13	15	9	23	19			79
	電子機械	6	7	7	11	11		42		38	34	35	27	25			159
	情報	7	8	5	8	4		32		34	33	37	28	29			161
	合計	39	38	35	39	27		178		85	82	81	78	73			399
H13 (2001)	商船	28	22	21	13	16		100		14	11	21	24	11			81
	電子機械	11	7	12	12	8		50		32	36	26	27	33			154
	情報	8	4	9	5	5		31		35	37	31	30	34			167
	合計	47	33	42	30	29		181		81	84	78	81	78			402
	商船	27	24	16	19	12		98		12	20	18	17	16			83
	電子機械	12	14	14	11	7		58		31	26	30	32	32			151
H12 (2000)	情報	6	8	5	4	5		28		37	31	35	37	27			167
	合計	45	46	35	34	24		184		80	77	83	86	75			401
	商船	30	18	19	22	10		99		17	17	20	13	20			87
	電子機械	18	15	14	10	9		66		26	27	33	32	26			144
	情報	16	7	4	8	8		43		26	35	39	30	31			161
	合計	64	40	37	40	27		208		69	79	92	75	77			392
H11 (1999)	商船	25	20	33	11	18		107		15	13	8	27	14			77
	電子機械	16	14	14	11	13		68		26	33	29	27	25			140
	情報	13	6	9	8	8		44		31	40	29	31	28			159
	合計	54	40	56	30	39		219		72	86	66	85	67			376
	商船	23	34	19	22	10		108		15	8	20	14	19			76
	電子機械	15	16	11	15	6		63		32	28	30	23	32			145
H9 (1997)	情報	8	10	10	8	12		48		38	26	32	30	30			156
	合計	46	60	40	45	28		219		85	62	82	67	81			377

H8 (1996)	商船	35	22	24	13	7		101
	電子機械	17	11	18	5	6		57
	情報	13	19	10	16	7		65
	合計	65	52	52	34	20		223
H7 (1995)	商船	24	22	23	18	14		101
	電子機械	15	16	11	8	9		59
	情報	18	15	19	12	7		71
	合計	57	53	53	38	30		231
H6 (1994)	商船	32	31	33	17	19		132
	電子機械	16	17	13	10	9		65
	情報	21	24	19	10	5		79
	合計	69	72	65	37	33		276
H5 (1993)	商船	29	33	24	22	7		115
	電子機械	19	14	15	12	11		71
	情報	23	21	15	12	7		78
	合計	71	68	54	46	25		264
H4 (1992)	商船	34	33	34	15	9		125
	電子機械	18	21	20	16	5		80
	情報	21	24	20	15	3		83
	合計	73	78	74	46	17		288
H3 (1991)	商船	39	41	24	25			129
	電子機械	28	21	24	12	3		88
	情報	24	24	26	17			91
	航海				14			14
	機関				5			5
H2 (1990)	合計	91	86	74	54	22		327
	商船	41	27	32				100
	電子機械	23	24	18	18	8		91
	情報	24	29	25				78
	航海				16	10		26
H元 (1989)	機関				9	10		19
	合計	88	80	75	43	28		314
	商船	32	33					65
	電子機械	29	24	25	10	13		101
	情報	32	27					59
S63 (1988)	航海			23	14	23		60
	機関			10	23	32		65
	合計	93	84	58	47	68		350
	商船	42						42
	電子機械	27	24	16	15			82
S62 (1987)	情報	29						29
	航海		28	29	25	21		103
	機関		15	26	34	39		114
	合計	98	67	71	74	60		370
	航海	33	33	29	24	26		145
S61 (1986)	機関	22	30	38	42	49		181
	電子機械	26	16	16				58
	合計	81	79	83	66	75		384
	航海	36	26	33	31	27		153
S60 (1985)	機関	37	35	58	56	35		221
	電子機械	25	20					45
	合計	98	81	91	87	62		419
	航海	33	34	35	29	23		154
S60 (1985)	機関	44	67	66	41	35		253
	電子機械	25						25
	合計	102	101	101	70	58		432

9	16	14	18	25			82
27	29	22	33	37			148
25	23	28	27	30			133
61	68	64	78	92			363
15	14	11	20	15			75
26	23	31	38	24			142
24	23	25	28	35			135
65	60	67	86	74			352
6	6	4	20	11			47
22	26	33	25	30			136
16	20	22	34	35			127
44	52	59	79	76			310
8	5	15	13	18			59
23	28	25	29	34			139
21	22	28	32	32			135
52	55	68	74	84			333
4	10	2	15	12			43
23	21	24	31	32			131
21	19	26	26	28			120
48	50	52	72	72			294
3	3	3	3				12
16	25	22	25	38			126
19	23	17	21				80
				6			6
				8			8
38	51	42	49	52			232
5	2	1					8
23	19	22	23	28			115
22	16	16					54
			6	16			22
			7	18			25
50	37	39	36	62			224
2	3						5
16	16	18	25	19			94
14	14						28
		4	12	5			21
		6	12	7			25
32	33	28	49	31			173
							0
13	19	23	17				72
12							12
	4	8	4	5			21
	3	9	6	6			24
25	26	40	27	11			129
4	4	1	4	2			15
3	6	7	6	1			23
17	24	18					59
24	34	26	10	3			97
4	2	1		1			8
4	4	4		6			18
11	20						31
19	26	5		7			57
2				1			3
2	1		5	2			10
16							16
20	1	0	5	3			29

2.6 外国人留学生数

年度	国籍													計		
	アジア															
	インドネシア	イラン	カンボジア	スリランカ	中華人民共和国	バングラデシュ	フィリピン	ベトナム	マレーシア	ミャンマー	モンゴル	ラオス	カメルーン	アルゼンチン	コロンビア	ブラジル
H29									1 (SE)		1 (I)		1 (M)			3
H28																0
H27			1 (SE)								1 (D)					2
H26	1 (I)		1 (M)					1 (SN)								3
H25											1 (I)					1
H24											1 (I)					1
H23													1 (SE)			1
H22	1 (I)															1
H21											1 (I)	1 (M)				2
H20																0
H19										1 (SE)		1 (I)				2
H18		1 (I)						1 (M)								2
H17			1 (D)											1 (SN)		2
H16	1 (I)								1 (M)							2
H15						1 (I)			1 (I)							2
H14	1 (I)															1
H13							1 (I)									1
H12			1 (M)			1 (SN)			2 (SE,M)							3
H11							1 (I)			1 (I)						1
H10				1 (M)				1 (SN)		1 (M)						2
H9								1 (M)		1 (SE)						2
H8							1 (I)		1 (M)							2
H7								1 (I)		1 (M)						2
H6									1 (M)				1 (M)			2
H5									1 (M)					1 (I)		2
H4																0
H3									2 (M)							2
H2																0
H1																0
S63				1 (N)												1
S62				1 (N)												1
S61				1 (N)												1
S60				1 (E)												1
S59									1 (E)							1
S58					1 (N)											1
計	3	1	3	3	5	1	3	3	15	1	3	4	2	1	1	50

※記号は以下の略称である。

SN:商船学科航海コース SE:商船学科航海コース M:電子機械工学科 I:情報工学科
K:海洋システム学専攻科 D:電子・情報システム工学専攻科 N:航海学科 E:機関学科

図書館統計

3.1蔵書冊数の推移

年度	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年
総記	4,419	4,462	4,516	4,566	4,683	4,902	5,031	5,105	5,216	5,297	5,393	5,480	5,577	5,645	5,225	5,314	5,557	5,657	5,740	5,723
哲学	1,538	1,540	1,541	1,548	1,568	1,602	1,617	1,643	1,657	1,687	1,724	1,733	1,757	1,770	2,639	2,652	2,670	2,681	2,701	2,689
歴史	3,645	3,663	3,706	3,758	3,839	3,936	3,991	4,064	4,100	4,236	4,297	4,355	4,374	4,444	5,737	5,754	5,771	5,787	5,834	5,684
社会科学	6,039	6,057	6,068	6,088	6,187	6,357	6,504	6,571	6,629	6,708	6,791	6,885	6,943	7,451	7,507	12,935	12,935	12,935	12,935	7,906
自然科学	10,546	10,562	10,595	10,663	10,832	11,001	11,095	11,164	11,239	11,314	11,445	11,523	11,619	11,706	12,358	12,471	12,623	12,770	12,736	12,736
和書	20,204	20,334	20,477	20,578	20,820	21,140	21,343	21,487	21,522	21,790	21,991	22,135	21,927	22,109	19,886	20,183	20,436	20,738	20,410	20,410
産業	1,570	1,574	1,581	1,584	1,602	1,618	1,640	1,649	1,666	1,681	1,696	1,710	1,735	1,752	1,755	1,784	1,802	1,818	1,865	1,895
芸術	1,874	1,883	1,889	1,897	1,929	1,977	2,003	2,039	2,139	2,256	2,304	2,356	2,422	2,474	2,798	2,834	2,896	2,930	2,956	2,985
語学	2,520	2,534	2,537	2,578	2,640	2,723	2,777	2,802	2,826	2,837	2,871	2,882	2,906	2,981	3,014	3,056	3,160	3,200	3,267	3,272
文学	6,142	6,160	6,195	6,211	6,421	6,694	6,926	7,054	7,173	7,261	7,458	7,621	7,878	8,037	13,204	13,363	13,488	13,658	13,713	13,713
計	58,497	58,769	59,105	59,511	60,521	61,950	62,927	63,578	64,267	65,067	65,970	66,649	67,080	67,861	73,516	74,443	75,651	76,456	77,445	77,013
総記	218	218	218	218	219	219	221	221	221	224	235	236	236	245	248	250	251	254	255	255
哲学	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	44	44	44	45	45	46
歴史	37	37	37	38	38	39	42	42	42	42	42	42	42	42	49	49	52	52	53	53
社会科学	64	64	64	64	64	64	66	66	66	66	66	66	67	67	67	67	51	51	52	52
自然科学	693	693	695	700	706	710	713	713	713	713	713	713	713	713	756	765	765	770	770	770
洋書	585	585	586	586	605	607	610	610	610	610	611	611	611	611	533	535	543	544	558	567
産業	13	13	13	13	18	18	19	19	19	19	19	21	22	22	25	26	26	26	28	28
芸術	6	6	6	6	6	6	6	6	6	7	7	7	7	7	9	28	28	29	29	30
語学	331	331	331	331	350	359	359	359	359	359	359	359	359	359	368	370	390	397	399	399
文学	523	523	523	523	525	528	528	529	529	530	530	530	533	475	513	521	529	546	546	546
計	2,486	2,486	2,487	2,487	2,490	2,542	2,562	2,575	2,578	2,582	2,586	2,599	2,602	2,609	2,616	2,671	2,676	2,711	2,746	2,746
和雑誌	135	127	125	136	131	133	130	105	101	101	90	86	73	73	358	388	389	389	389	389
洋雑誌	11	11	11	9	8	9	7	6	4	6	5	3	3	3	17	20	21	21	21	21
視聴覚資料															356	375	737	779	386	399

3.2 年度別学生貸出冊数

年度	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年
貸出人數	2,856	2,434	2,451	2,841	1,927	2,476	2,097	1,472	1,334	1,732	1,401	1,261	1,420	1,577	2,119	2,409	2,542	2,207	1,909	1,842
貸出冊數	5,502	4,383	4,681	5,044	3,309	4,357	3,463	2,938	2,977	3,931	3,088	3,262	3,066	3,386	4,525	5,202	5,227	4,630	4,133	4,152

4 年表（明治三十年～平成二十九年）

元号	校名	西暦	月日	本 校 関 係	国内外の情勢
明治 30	郡立 大島 海員 学校	1897	8. 14 10. 1	設立許可 山口県大島海員学校開校・第1回入学式挙行	
明治 31		1898	4. 1 5. 15	第2回入学式挙行 開校式挙行	
明治 32		1899	4. 1	第3回入学式挙行	
明治 32	大島	1899	7. 14	山口県大島甲種商船学校と改称	
明治 33	甲種 商船 学校	1900	4. 13 11. 2	第4回入学式挙行 船舶職員試験規定充当校に認定される	北清事変起こる
明治 34		1901	4. 1	第5回入学式挙行	山陽本線全線開通
明治 32	大島	1899	7. 14	山口県大島甲種商船学校と改称	
明治 33	甲種 商船 学校	1900	4. 13 11. 2	第4回入学式挙行 船舶職員試験規定充当校に認定される	北清事変起こる
明治 34		1901	4. 1	第5回入学式挙行	山陽本線全線開通
明治 35	県立 大島 商船 学校	1902	5. 11 2. 22 4. 1 8. 31	山口県立大島商船学校と改称 校則改正 生徒定員180名となる 大島郡小松志佐村（現周防大島町小松）に新校舎落成 第6回入学式挙行 陸上帆船建設	
明治 36		1903	4. 1	第7回入学式挙行	
明治 37		1904	4. 1	第8回入学式挙行	日露戦争起こる
明治 38		1905	5. 1 4. 1	練習船「海平丸」進水 第9回入学式挙行	
明治 39		1906	3. 24 4. 1	第1回卒業式挙行（卒業生28名） 第10回入学式挙行	日露講和条約（ポーツマス条約）調印 南満州鉄道株式会社設立
明治 40		1907	3. 21 4. 1	第2回卒業式挙行 第11回入学式挙行	「小学校令」改正で尋常小学校の修業年限が6か年となり義務教育となる (翌年4月から実施)
明治 41		1908	1. 28 3. 5 4. 1	校則改正 生徒定員180名を200名とする 練習船「海平丸」屋島沖で軍艦「赤城」と衝突沈没 第12回入学式挙行	
明治 42		1909	4. 1	第13回入学式挙行	伊藤博文 ハルビンで暗殺
明治 43		1910	7. 20 4. 1	練習船「山口丸」進水 第14回入学式挙行	大逆事件起こる 日韓併合条約 白瀬中尉南極探検隊出発
明治 44		1911	4. 1	第15回入学式挙行	

明治 45		1912	4. 1	第 16 回入学式挙行	山陰本線全線開通 第 5 回オリンピック（ストックホルム）日本初参加
大正元		1912	7. 30		明治天皇崩御 大正と改元
大正 2		1913	4. 1	第 17 回入学式挙行	第一次世界大戦起こる
大正 3		1914	4. 8	第 18 回入学式挙行	パナマ運河開通
大正 4		1915	4. 6	新潟商船学校からの転入生（17名）入校	
			4. 8	第 19 回入学式挙行	
大正 5		1916	4. 8	第 20 回入学式挙行	
			10. 1	創立 20 周年記念式典挙行	
大正 6		1917	3. 2	練習船「山口丸」南鳥島において難破	
			4. 8	第 21 回入学式挙行	
大正 7		1918	4. 8	第 22 回入学式挙行	シベリア出兵 第一次世界大戦終わる
大正 8		1919	3. 22	「甲種商船学校規定」改正に基づき校則改正、本科 3 年、練習科 3 年、本科卒業の上海兵團において軍事教育 3 ヶ月	
				第 19 期本科卒業式挙行	
			3. 22	第 23 回入学式挙行	
			4. 8	第 20 期本科卒業式挙行	
大正 9		1920	3. 22	第 24 回入学式挙行	
			4. 8	創立 24 周年を記念し校旗規定	
大正 10		1921	3. 22	第 21 期本科卒業式挙行	ワシントン軍縮会議開催
			4. 8	第 25 回入学式挙行	
大正 11		1922	3. 14	第 22 期本科卒業式挙行	
			4. 10	校旗新調、校歌制定	
大正 12		1923	10. 1	第 23 期本科卒業式挙行	
			3. 13	第 27 回入学式挙行	関東大震災
			4. 11	新練習船「防長丸」入港	
大正 13		1924	3. 21	第 24 期本科卒業式挙行	
			3. 22	「商船学校規定」改正に基づき校則改正、修業年限本科 4 年、練習科 3 年、本科生徒定員	
			4. 1	320 名となる	
大正 14		1925	4. 8	第 28 回入学式挙行	
			2. 24	練習船「防長丸」東京府神津村松山海岸で遭難沈没	治安維持法公布 普通選挙法公布
			3. 23	第 25 期本科卒業式挙行	
			4. 8	第 29 回入学式挙行	
大正 15		1926	3. 23	第 26 期本科卒業式挙行	

昭和元		1926	4. 8 12. 15	第 30 回入学式挙行	大正天皇崩御 昭和と改元
昭和 2		1927	4. 9	第 31 回入学式挙行	
昭和 3		1928	3. 15 4. 8	第 28 期本科卒業式挙行 第 32 回入学式挙行	普通選挙法による初の衆議院議員選挙
			4. 12	「大進丸」建造	
			10. 1	創立 30 周年記念式典挙行	
昭和 4		1929	3. 12 4. 1	第 29 期本科卒業式挙行 第 33 回本科入学式挙行	ロンドン海軍軍縮会議 金輸出解禁
			7. 10	「大典丸」進水	
昭和 5		1930	3. 15 4. 8	第 30 期本科卒業式挙行 第 34 回入学式挙行	
			12. 1	増築校舎落成式挙行	
昭和 6		1931	3. 14 4. 10 7. 10	第 31 期本科卒業式挙行 第 35 回入学式挙行 講堂落成	満州事変起こる
昭和 7		1932	3. 15 4. 11	第 32 期本科卒業式挙行 第 36 回入学式挙行	五・一五事件
昭和 8		1933	3. 10 4. 10	第 33 期本科卒業式挙行 第 37 回入学式挙行	国際連盟脱退
昭和 9		1934	3. 15 4. 9	第 34 期本科卒業式挙行 第 38 回入学式挙行	
昭和 10		1935	3. 15 4. 8	第 35 期本科卒業式挙行 第 39 回入学式挙行	
昭和 11		1936	3. 17 4. 8	第 36 期本科卒業式挙行 第 40 回入学式挙行	二・二六事件
昭和 12		1937	3. 16 3. 31 4. 10 5. 11 10. 3	第 37 期本科卒業式挙行 式道場・短艇庫落成 第 41 回入学式挙行 帆船練習船「大徳丸」進水式挙行 創立 40 週年記念式典	日中戦争始まる 日独伊三国防共協定
昭和 13		1938	3. 15 4. 11	第 38 期本科卒業式挙行 第 42 回入学式挙行	国家総動員法
昭和 14		1939	3. 15 4. 8 8. 18	第 39 期本科卒業式挙行 第 43 回入学式挙行 山口県立大島商船学校廃校	ノモンハン事件起こる 米国 日米通商航海条約 廢棄を通告 第二次世界大戦始まる
昭和 14	官立 大島 商船 学校 ／	1939	8. 19 8. 25	「文部省直轄学校管制」一部改正により文部省直轄学校となる 「修業年限」6 年（席上課程 3 年、練習課程 3 年） 官立大島商船学校開校式挙行	

昭和 15	文部省	1940	9. 1 3. 19 4. 8	通学生入寮し、全寮制度となる 第 40 期本科卒業式挙行 第 44 回入学式挙行	日独伊三国軍事同盟 大政翼賛会を結成
昭和 16		1941	3. 23 4. 8	第 41 期本科卒業式挙行 第 45 回入学式挙行	太平洋戦争起ころ
昭和 17	官立 大島 商船 学校 ／ 通信 省	1942	1. 1 3. 17 4. 8	通信省所管となる 第 42 期本科修了式挙行 第 46 回入学式挙行	関門海底トンネル開通
昭和 18		1943	3. 23 4. 1	第 43 期本科修了式挙行 新校舎落成式挙行 第 47 回入学式挙行	イタリア無条件降伏
昭和 18 昭和 19	官立 大島 運輸 商船 学校 ／ 通信 省	1943 1944	1. 1 3. 17 4. 8 3. 23 4. 1	運輸通信省所管となる 第 44 期本科修了式挙行 第 48 回入学式挙行 第 45 期本科修了式挙行 第 49 回入学式挙行	ノルマンディー上陸 サイパン島日本軍全滅 ドイツ無条件降伏
昭和 20	官立 大島 商船 学校 ／ 運輸 省	1945	5. 18	運輸省所管となる	米軍 沖縄占領 広島・長崎に原爆投下 天皇 終戦の詔勅放送 太平洋戦争終わる 連合国最高司令官マッカーサー 厚木到着 天皇 人間宣言 第一次農地改革 第 1 回国民体育大会 日本国憲法公布（施行 1947. 5） 南海大地震
昭和 21		1946	3. 8 4. 8 4. 15	第 46 期本科修了式挙行 元鹿児島商船学校生徒の転校式挙行 転校生は席上 110 名、実習 93 名 第 50 回入学式挙行	マッカーサー 2・1 ゼネストに中止命令 教育基本法、学校教育法公布（6. 3. 3. 4 制） 古橋広之信 400m 自由形競泳で世界新
昭和 22		1947	1. 31 3. 15 4. 21 5. 30 9. 30 10. 1 11. 19	研修科第 1 期生（36 名）入学式挙行 第 47 期本科修了式挙行 第 51 回入学式挙行 研修第 2 期生（航海科 39 名）入学式挙行 大島商船学校奨学後援会結成 創立 50 周年記念式典挙行 研修科第 1 期生修了式挙行	マッカーサー 2・1 ゼネストに中止命令 教育基本法、学校教育法公布（6. 3. 3. 4 制） 古橋広之信 400m 自由形競泳で世界新 100 万円の宝くじの発売 帝銀事件
昭和 23		1948	2. 10 3. 16 3. 26 4. 20	研修第 3 期生（59 名）入学式挙行 第 48 期本科卒業式挙行 研修科第 2 期生修了式挙行 第 52 回入学式挙行	福井大地震 昭電疑獄 極東国際軍事裁判判決

昭和 24	1949	6. 1	研修科第4期生（28名）入学式挙行	(戦犯 25 被告有罪) 初の成人の日 法隆寺金堂炎上 G H Q 1ドル360円の単一為替レート設定 下山事件・三鷹事件・松川事件 シャウプ勧告 湯川秀樹博士 ノーベル物理学賞受賞 千円札（聖徳太子像）発行 朝鮮戦争起る 金閣寺放火で焼失 警察予備隊設置 ジェーン台風、被害甚大 朝鮮戦争による特需景気 八海事件
		12. 11	研修科第3期生修了式挙行	
		1. 31	研修科第5期生（22名）入学式挙行	
		2. 10	航海訓練所練習船による短期実習開始	
		3. 15	第49期本科修了式挙行	
		3. 18	研修科第4期生終了式挙行	
		4. 15	第53回入学式挙行	
		7. 19	研修科第5期生修了式挙行	
		9. 12	研修科第6期生（11名）入学式挙行	
昭和 25	1950	3. 13	研修科第6期生修了式挙行（研修科教育修了）	千円札（聖徳太子像）発行 朝鮮戦争起る 金閣寺放火で焼失 警察予備隊設置 ジェーン台風、被害甚大 朝鮮戦争による特需景気 八海事件
		3. 15	第50期本科修了式挙行	
		4. 17	第54回入学式挙行	
昭和 26	1951	3. 16	第51期本科修了式挙行	マッカーサー罷免 サンフランシスコ講和会議 サンフランシスコ平和条約 日米安全保障条約調印 ルース台風 九州に上陸 被害甚大 韓国 李承晩ライン設定 十勝沖地震 日航機もく星号 三原山に墜落 第15回ヘルシンキオリンピックに戦後初参加 警察予備隊を保安隊に改組・発足
昭和 27	1952	4. 1	大島商船学校を包括した文部省所管大島商船高等学校となる	日米安全保障条約調印 ルース台風 九州に上陸 被害甚大 韓国 李承晩ライン設定 十勝沖地震 日航機もく星号 三原山に墜落 第15回ヘルシンキオリンピックに戦後初参加 警察予備隊を保安隊に改組・発足
		4. 16	第55回入学式挙行 国立商船高等学校としての第1回入学式	
		3. 18	第52期本科修了式挙行	
		4. 8	第56回入学式挙行	
昭和 28	1953	10. 1	創立55周年記念日	NHK テレビ放送開始 ボストンマラソンで山田敬蔵優勝 朝鮮休戦協定 奄美群島返還
		12. 30	「55年の足跡」発行	
昭和 29	1954	3. 14	第53期本科修了式挙行	第5福竜丸 ビキニ水爆実験被災 造船疑獄で指揮権発動
		4. 8	第57回入学式挙行	

昭和 30	1955	3. 18	第 2 回本科（第 55 期）卒業証書授与式挙行	防衛庁・自衛隊発足	
		4. 7	昭和 30 年度（第 59 回）入学式挙行	台風 15 号により青函連絡船洞爺丸転覆 宇高連絡船紫雲丸沈没 戦後初のアルミ貨 1 円発行 砂川闘争始まる 第 1 回原水爆禁止世界大会 森永砒素ミルク事件 神武景気	
昭和 31	1956	3. 17	第 3 回本科（第 56 期）卒業証書授与式挙行	日ソ漁業条約調印 壳春防止法公布	
		4. 8	専攻科第 1 回（第 54 期）卒業証書授与式挙行 昭和 31 年度（第 60 回）入学式挙行	エジプト スエズ運河国有化を宣言 第 16 メルボルンオリンピック開催	
昭和 32	1957	3. 16	第 4 回本科（第 57 期）卒業証書授与式挙行	日本 国際連合に加盟	
		4. 8	専攻科第 2 回（第 55 期）卒業証書授与式挙行 昭和 32 年度（第 61 回）入学式挙行	ソ連 世界初の人工衛星スプートニク 1 号打ち上げ成功	
昭和 33	1958	10. 6	創立 60 周年記念式典挙行	五千円札発行	
		12. 25	「創立 60 周年記念誌」発行	日ソ通商条約調印 百円硬貨発行	
昭和 34	1959	3. 18	第 5 回本科（第 58 期）卒業証書授与式挙行	関門海底国道トンネル開通	
		4. 8	専攻科第 3 回（第 56 期）卒業証書授与式挙行 昭和 33 年度（第 62 回）入学式挙行	テレビ受信契約数 100 万突破	
昭和 35	1960	11. 24	練習船「大島丸」（初代・56 総トン）進水式	一万円札発行	
		12. 5	記念館落成	東京タワー完工	
昭和 36	1961	1. 6	「大島丸」竣工並びに「記念館」落成披露	メートル法実施	
		3. 18	第 6 回本科（第 59 期）卒業証書授与式挙行	キューバ革命	
		4. 8	専攻科第 4 回（第 57 期）卒業証書授与式挙行 昭和 34 年度（第 63 回）入学式挙行	皇太子御成婚 伊勢湾台風、被害甚大 岩戸景気	
		3. 18	第 7 回本科（第 60 期）卒業証書授与式挙行	三池炭鉱大争議	
		4. 8	専攻科第 5 回（第 58 期）卒業証書授与式挙行 昭和 35 年度（第 64 回）入学式挙行	全学連 国会構内で警官隊と衝突 新日米安全保障条約発効 所得倍増・高度経済成長策発表 カラーテレビ本放送開始 小児マヒ流行	

昭和 37	1962	4. 8	専攻科第 6 回 (第 59 期) 卒業証書授与式挙行 昭和 36 年度 (第 65 回) 入学式挙行	東ドイツが東西ベルリンの境界に壁を構築 第 2 室戸台風 被害甚大 東京都在住人口 1000 万人突破
		3. 17	第 9 回本科 (第 62 期) 卒業証書授与式挙行	
		4. 7	専攻科第 7 回 (第 60 期) 卒業証書授与式挙行 昭和 37 年度 (第 66 回) 入学式挙行 本年度から入学定員航機各 40 名となる	日本電気、国産初の大型電子計算機を発表 常磐線 三河島駅事故 サリドマイド系睡眠薬に起因する奇形児問題化
		10. 1	創立 65 周年記念式典挙行	タンカ一日章丸 (当時世界最大) 進水
昭和 38	1963	3. 18	第 10 回本科 (第 63 期) 卒業証書授与式挙行 専攻科第 8 回 (第 61 期) 卒業証書授与式挙行	狹山事件 黒四発電所完工 新千円札 (伊藤博文肖像) 発行
		4. 8	昭和 38 年度 (第 67 回) 入学式挙行	三井三池三河鉱で坑内爆発 死者多数 ケネディ大統領暗殺 初の日米衛星テレビ中継に成功 (ケネディ大統領の暗殺を受信)
		3. 18	第 11 回本科 (第 64 期) 卒業証書授与式挙行 専攻科第 9 回 (第 62 期) 卒業証書授与式挙行	海外渡航自由化 (一人年間 500 ドル制限付き)
昭和 39	1964	4. 8	昭和 39 年度 (第 68 回) 入学式挙行	新潟大地震
		1. 28	「高専問題対策委員会」発足	東海道新幹線開通 第 18 回オリンピック東京大会開催
		3. 18	第 12 回本科 (65 期) 卒業証書授与式挙行 専攻科第 10 回 (第 63 期) 卒業証書授与式挙行	米 北ベトナム爆撃 (ベトナム戦争) 名神高速道路開通
昭和 40	1965	4. 8	昭和 40 年度 (第 69 回) 入学式挙行	タンカ一東京丸進水
		6. 16	寄宿舎「小松寮」(現在の南寮) 竣工	朝永振一郎博士、ノーベル物理学賞受賞
		12. 10	実習船「ちどり」(16.94 トン) 竣工	全日航機 羽田沖で墜落 総人口が 1 億人を越える
昭和 41	1966	3. 18	第 13 期本科 (第 66 期) 卒業証書授与式挙行 専攻科第 11 回 (第 64 期) 卒業証書授与式挙行	国民祝日法改正公布 (9・15 敬老の日 10・10 体育の日)
		4. 8	昭和 41 年度 (第 70 回) 入学式挙行	中国文化革命激化
		3. 18	第 14 期本科 (第 67 期) 卒業証書授与式挙行 専攻科第 12 回 (第 65 期) 卒業証書授与式挙行	初の建国記念日 自動車保有台数 1000 万台突破

				行	
昭和 42	大島 商船 高等 専門 学校	1967	4. 8	昭和 42 年度（第 71 回）入学式挙行（高専第 1 回入学式）	公害対策基本法公布
			6. 1	商船高等専門学校創設 開校式 (入学定員：航海学科 1 学級 40 名、機関学科 1 学級 40 名)	
			6. 16	大島商船高等専門学校初代校長に東京商船大学名誉教授鮫島直人氏発令	
			10. 1	創立 70 周年記念日 式典挙行	
			3. 18	第 15 期科本科（第 68 期）卒業証書授与式挙行 専攻科第 13 回（第 66 期）卒業証書授与式挙行	米原子力空母エンタープライズ佐世保に入港 霧が関ビル完成（初の超高層ビル）
			4. 8	昭和 43 年度（第 72 回）入学式挙行（高専第 2 回入学式）	小笠原諸島 日本に返還 全国郵便番号制実施
			10. 23	高専建物第 1 期工事着工	川端康成氏 ノーベル文学賞受賞
			10. 24	練習船「大島丸」（第 2 代）起工式	いざなぎ景気
			1. 23	練習船「大島丸」（第 2 代）進水式	初の原子力船「むつ」進水
			3. 11	練習船「大島丸」（第 2 代）竣工（327. 9 トン）	米国の宇宙船アポロ 11 号 人類初の月面着陸
昭和 44		1969	3. 18	第 16 回本科（第 69 期）卒業証書授与式挙行 (商船高等学校最後の本科卒業式)	大学臨時措置法
			3. 18	専攻科第 14 回（第 67 期）卒業証書授与式挙行	
			4. 1	文部省令第 8 号「国立学校設置法施行規則の一部改正」により機関学科 1 学級増設	
			4. 10	昭和 44 年度（第 73 回）入学式挙行（高専第 3 回入学式）	
			8. 8	機関学科 2 学級 定員 80 名となる	
			10. 28	高専建物第 2 期工事着工	
			11. 22	高専建物第 1 期工事分竣工	
			3. 6	第 1 回商船祭（11. 22～23）	初の国産人工衛星「おおすみ」を打ち上げ
				専攻科第 15 回（第 68 期）卒業証書授与式挙行	日本万国博覧会開催（大阪）
			3. 30	高専建物第 2 期工事分竣工	日米新安保条約の自動延長を声明
昭和 45		1970	4. 1	文部訓令第 19 号により庶務課及び会計課新設	光化学スモッグ問題化
			4. 10	昭和 45 年度（第 74 回）入学式挙行（高専第 4 回入学式）	
			3. 6	専攻科第 16 回（第 69 期）卒業証書授与式挙行（商船高等学校専攻科最後の卒業式）	自衛隊機と全日航機が空中接触事故（零石事件）
昭和 46		1971	3. 30	舟艇器具庫その他新営工事竣工	米 金とドルの交換停止

昭和 47	1972	4. 12	昭和 46 年度（第 75 回）入学式挙行（高専第 5 回入学式）	(ドル・ショック) 円の変動相場制を採用（1 ドル=308 円）
		9. 16	高専第 1 期生 実習課程開始（練習船乗船式、実習工場入所式）	
		11. 19	校舎落成式ならびに祝賀会	
		4. 11	昭和 47 年度入学式挙行（第 76 回、高専第 6 回）	第 11 回冬季オリンピック 札幌大会
		9. 30	第 1 回卒業証書授与式挙行（高専第 1 期、第 70 期）	連合赤軍、浅間山荘事件 山陽新幹線、新大阪・岡山間開通 沖縄の日本復帰 日中國交正常化宣言 土地ブーム
				ベトナム和平協定調印 円は変動相場制に移行 江崎玲於奈博士、ノーベル物理学賞受賞 石油ショックで買いため騒ぎ 関門橋開通 狂乱物価
昭和 48	1973	3. 17	練習船係留桟橋竣工	元日本兵小野田寛朗少尉
		4. 1	文部訓令第 4 号により学生課新設	ルパング島で発見
		4. 11	昭和 48 年度入学式挙行（第 77 回、高専第 7 回）	三菱重工ビル爆破事件 日本の人口 1 億 1000 万人と発表
		9. 29	卒業証書授与式（高専第 2 期、第 71 期）	佐藤栄作氏 ノーベル平和賞受賞
昭和 49	1974	4. 9	昭和 49 年度入学式挙行（第 78 回、高専第 8 回）	山陽新幹線 岡山・博多間開通
		9. 30	卒業証書授与式（高専第 3 期、第 72 期）	沖縄海洋博覧会 開催 主要先進国首脳会議開催（第 1 回サミット）
				公労協が空前のスト権ストップ 国鉄全線ストップ
昭和 50	1975	4. 1	第 2 代校長に神戸商船大学名誉教授岩永道臣が任命される	ロッキーード事件
		4. 10	昭和 50 年度入学式挙行（第 79 回、高専第 9 回）	日本初の人工衛星「うめ」打ち上げ
		9. 30	卒業証書授与式（高専第 4 期、第 73 期）	第 21 回モントリオールオリンピック開催
				ロッキーード事件で田中前首相逮捕される
昭和 51	1976	3. 23	図書館・電算機室竣工	
		4. 12	昭和 51 年度入学式挙行（第 80 回、高専第 10 回）	
		9. 30	卒業証書授与式（高専第 5 期、第 74 期）	
		10. 1	創立 71 周年記念式典及び慰靈祭	
		10. 23	第 11 回全国商船高専漕艇大会（23~24）広島商船高専	
		10. 27	機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習（27~29）	

			坂出方面 11. 4 第8回商船祭 11. 12 第12回中国地区高専体育大会(冬季大会)本校 11. 17 航海学科3年大島丸海上実習(17~19)坂出方面 11. 24 機関学科3年B組大島丸海上実習(24~26) 坂出方面	福田赳夫内閣が成立
昭和 52	1977		「特別講演」 斎藤 憲氏 1. 29 校内マラソン大会 2. 20 昭和 52 年度入学者選抜学力検査(第一次検査) 2. 23 機関学科4年B組笠戸ドック及び大晃機械見学 3. 6 昭和 52 年度入学者選抜第二次検査 4. 8 始業式 4. 11 昭和 52 年度入学式 4. 12 新入生オリエンテーション(12~13)校内 5. 9 新入生オリエンテーション(9~11)江田島青年の家 6. 3 航海学科5年生三菱重工広島造船所江波工場見学 6. 9 機関学科5年A・B組三菱重工広島造船所観音工場見学 6. 17 クラスマッチ 6. 22 機関学科4年A組大島丸海上実習(22~25) 神戸方面 6. 29 航海学科4年大島丸海上実習(29~7/2)神戸方面 7. 6 機関学科4年B組大島丸海上実習(6~9)神戸方面 7. 21 第13回中国地区高専体育大会(米子・松江高専) 8. 7 獎学会後援会地方部会(鹿児島市) 8. 23 第12回全国高専体育大会(23~24)(福島高専) 8. 29 航海学科・機関学科5年卒業研究発表 8. 30 席上課程修了式 9. 28 第6回卒業証書授与式 10. 8 創立80周年記念式典及び記念祝賀会 航海訓練所練習船「青雲丸」一般公開 慰靈祭 10. 9 記念講演会 講師 永 六輔氏 演題「海は命」	日米漁業協定 静止気象衛星「ひまわり」 1号 打ち上げ 日本赤軍、日航機ハイジャック

			10. 10 記念音楽祭 (エリザベト音楽大学学生) 10. 17 「特別講演」 講師 中山唯雄氏 演題「民主主義と社会人」 10. 19 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (19~21) 小豆島・大三島方面 10. 29 第 12 回全国商船高専漕艇大会 11. 1 機関学科 2 年 A 組国際電電衛星通信所見学 11. 8 機関学科 2 年 B 組国際電電衛星通信所見学 11. 9 航海学科 3 年大島丸海上実習 (9~11) 取出方面 11. 15 航海学科 2 年国際電電衛星通信所見学 11. 18 第 13 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) 米子高専 11. 30 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (30~12/2) 大三島・小豆島方面	
昭和 53		1978	1. 17 耐寒訓練 (17~26) 1. 21 第 2 回スポーツリーダーズセミナー (21~22) 大島青年の家 1. 28 校内マラソン大会 (20Km) 1. 30 航海学科 3 年合宿研修 (30~2/1) 三瓶青年の家 2. 1 機関学科 3 年 A・B 組合宿研修 (1~3) 三瓶青年の家 2. 15 機関学科 4 年 A 組笠戸ドック及び大晃機械見学 2. 19 昭和 53 年度入学者選抜学力検査 (第一次検査) 2. 22 機関学科 4 年 B 組笠戸ドック及び大晃機械見学 3. 5 昭和 53 年度入学者選抜第二次検査 4. 8 始業式 4. 11 昭和 53 年度入学式 4. 12 新入生オリエンテーション (12~13) 校内 5. 2 新入生オリエンテーション (2~4) 江田島青年の家 5. 11 機関学科 2 年 A 組勝坂焼窯元及び秋芳洞見学 5. 18 航海学科 2 年国際電電衛星通信所及び秋芳洞見学 5. 25 機関学科 2 年 B 組勝坂焼窯元及び秋芳洞見学 6. 9 機関学科 5 年 A・B 組三菱重工広島造船所江波工場見学 6. 14 機関学科 4 年 B 組大島丸海上実習 (14~17) 神戸方面	新東京国際空港 (成田空港) 開港 宮城県沖地震

			6. 15 航海学科 5 年 広島市東洋工業及び広島空港見 学 6. 19 クラスマッチ 6. 21 航海学科 4 年 大島丸海上実習 (21~24) 神戸方 面 6. 25 奨学金後援会通常総会 6. 28 機関学科 4 年 A 組 大島丸海上実習 (28~7/1) 神戸方面 7. 21 第 14 回中国地区高専体育大会 (21~23) (津 山・呉高専) 8. 6 奨学金後援会地方部会 (福岡市) 8. 22 第 13 回全国高専体育大会 (22~24) (岐阜高 専) 8. 29 航海学科・機関学科 5 年 卒業研究発表 8. 30 席上課程修了式 9. 21 紀要発表会 9. 30 第 7 回卒業証書授与式 10. 1 創立 81 周年記念式及び慰靈祭 10. 28 第 13 回全国商船高専漕艇大会 11. 3 第 9 回商船祭 11. 8 航海学科 3 年 大島丸海上実習 (8~10) 坂出方 面 11. 17 第 14 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) 津 山高専 11. 4 第 1 回西中国地区高専音楽祭 11. 22 機関学科 3 年 A 組 大島丸海上実習 (22~24) 小豆島方面 11. 25 第 3 回スポーツリーダーズセミナー (25~26) 大島青年の家 11. 29 機関学科 3 年 B 組 大島丸海上実習 (29~12/1) 小豆島方面 12. 8 特別講演 高山一男氏 演題「新エネルギー としての核融合」	日中友好平和条約調印 12 太平正芳内閣が成立
昭和 54	1979	1. 16 耐寒訓練 (17~26) 1. 18 航海学科 4 年 海難審判傍聴 広島海難審判庁 校内マラソン大会 (13Km) 1. 27 2. 1 航海学科・機関学科 3 年 合宿研修 (1~3) 三瓶青 年の家 2. 7 機関学科 4 年 B 組 笠戸ドック及び大晃機械見 学 2. 14 機関学科 4 年 A 組 笠戸ドック及び大晃機械見 学 2. 18 昭和 54 年度入学者選抜学力検査 (第一次検	初の国公立大学共通第一 次学力試験実施	

			<p>査)</p> <p>2. 19 特別講演 新藤清二氏 演題「青年の情熱」</p> <p>2. 22 特別講演 豊田文一氏 演題「生き甲斐と健康」</p> <p>3. 4 昭和 54 年度入学者選抜第二次検査</p> <p>4. 9 始業式</p> <p>4. 11 昭和 54 年度入学式</p> <p>4. 12 新入生オリエンテーション (12~13) 校内</p> <p>5. 14 新入生オリエンテーション (14~16) 江田島青年の家</p> <p>6. 13 機関学科 4 年 B 組大島丸海上実習 (13~16) 神戸方面</p> <p>6. 15 機関学科 5 年 A 組下松発電所及び出光興産徳山精油所見学</p> <p>6. 20 航海学科 4 年 大島丸海上実習 (20~23) 長崎方面</p> <p>6. 21 航海学科 5 年 広島市東洋工業見学</p> <p>6. 22 機関学科 5 年 B 組下松発電所及び出光興産徳山精油所見学</p> <p>6. 24 奨学金後援会通常総会</p> <p>6. 26 クラスマッチ</p> <p>機関学科 4 年 A 組大島丸海上実習 (27~30) 長崎方面</p> <p>6. 27</p> <p>7. 5 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (5~7) 大分・宇和島方面</p> <p>7. 20 第 15 回中国地区高専体育大会 (20~22) (徳山・広島高専)</p> <p>7. 25 公開講座 (スポーツ教室ヨット) (25~28、30~8/2)</p> <p>8. 5 奨学金後援会地方部会 (長崎市)</p> <p>8. 8 第 14 回全国高専体育大会 (8~10) 奈良高専</p> <p>8. 30 航海学科・機関学科卒業研究発表</p> <p>8. 31 席上課程修了式</p> <p>9. 20 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (20~22) 大分・宇和島方面</p> <p>9. 30 第 8 回卒業証書授与式</p> <p>10. 01 創立 82 周年記念式及び慰靈祭</p> <p>10. 2 紀要発表会</p> <p>10. 20 第 14 回全国商船高専漕艇大会 (20~21) 広島高専</p> <p>10. 24 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (24~26) 高松方面</p> <p>11. 1 航海学科 1 年 大島丸海上実習 宮島方面</p>	東京サミット開催
--	--	--	--	----------

			11. 7 航海学科 3 年大島丸海上実習 (7~9) 関門・大分方面 11. 15 機関学科 1 年 A 組大島丸海上実習 宮島方面 11. 16 第 15 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (16~18) 広島高専 11. 19 特別講演 奈良本辰也氏 演題「明治維新と長州」 11. 22 機関学科 1 年 B 組大島丸海上実習 宮島方面 11. 28 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (28~30) 高松方面 12. 5 機関学科 2 年 B 組大島丸海上実習 (12~14) 尾道・大三島方面 12. 12 機関学科 2 年 A 組大島丸海上実習 (5~7) 尾道・大三島方面	第二次石油ショック ソ連軍 アフガニスタン進攻
昭和 55		1980	1. 9 耐寒訓練 (9~24) 1. 26 校内マラソン大会 (14Km) 1. 27 第 2 回西中国地区高専音楽祭 1. 31 航海学科機関学科 3 年合宿研修 (31~2/2) 三瓶青年の家 2. 6 機関学科 4 年 B 組山口県立美術館及び NHK 山口放送局見学 2. 13 機関学科 4 年 A 組山口県立美術館及び NHK 山口放送局見学 2. 24 昭和 55 年度入学者選抜学力検査 (第一次検査) 2. 29 クラスマッチ 3. 9 昭和 55 年度入学者選抜第二次検査 3. 31 実習船「ちどり」竣工、第 2 食堂竣工 4. 8 昭和 55 年度始業式 4. 10 昭和 55 年度入学式 4. 11 新入生オリエンテーション (11~12) 校内 4. 26 第 4 回スポーツリーダーズセミナー (大島青年の家) 5. 7 新入生オリエンテーション (7~9) 江田島青年の家 5. 13 クラスマッチ 6. 11 機関学科 4 年 A 組大島丸海上実習 (11~14) 神戸方面 6. 18 航海学科 4 年 大島丸海上実習 (18~21) 神戸方面 6. 25 機関学科 4 年 B 組大島丸海上実習 (25~28) 神戸方面 6. 29 獎学金後援会通常総会及び体育後援会通常総	富士通が日本語電子タイプライター発売 (ワープロ時代へ)

			<p>会 寮祭</p> <p>7. 05 第 16 回中国地区高専体育大会 (21~23) (宇部高専)</p> <p>7. 25 第 15 回全国商船高専漕艇大会 (25~26) 富山高専</p> <p>7. 28 公開講座 (スポーツ教室ヨット) (28~31、8/1~4)</p> <p>8. 3 獎学金後援会地方部会 (鹿児島市)</p> <p>8. 7 第 15 回全国高専体育大会 (7~9) 長野高専</p> <p>8. 29 航海学科・機関学科卒業研究発表</p> <p>8. 30 席上課程修了式</p> <p>9. 10 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (10~12) 大分・宇和島方面</p> <p>9. 17 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (17~19) 大分・宇和島方面</p> <p>9. 30 第 9 回卒業証書授与式</p> <p>10. 1 創立 83 周年記念式及び慰靈祭</p> <p>10. 2 紀要発表会</p> <p>10. 16 機関学科 1 年 A 組大島丸海上実習 宮島方面</p> <p>10. 22 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (22~24) 高松方面</p> <p>10. 23 航海学科・機関学科 2 年生合宿研修 (23~24)</p> <p>10. 29 航海学科 3 年大島丸海上実習 (29~31) 関門・ 大分方面</p> <p>11. 2 第 11 回商船祭</p> <p>11. 13 機関学科 1 年 B 組大島丸海上実習 宮島方面</p> <p>11. 14 第 16 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (14~16) 宇部高専</p> <p>11. 19 機関学科 2 年 B 組大島丸海上実習 (19~21) 尾道・大三島方面</p> <p>11. 23 第 3 回西中国地区高専音楽祭</p> <p>11. 25 特別講演 宮戸 寛氏 演題「アジアと日本の将来」</p> <p>11. 26 航海学科 2 年大島丸海上実習 (26~28) 尾道・ 大三島方面</p> <p>12. 3 機関学科 2 年 A 組大島丸海上実習 (3~5) 尾 道・大三島方面</p> <p>12. 10 紀要 13 号発刊</p> <p>12. 11 航海学科 1 年大島丸海上実習 宮島方面</p>	<p>第 22 回モスクワオリンピック開催 日本など不参加</p> <p>7 鈴木善幸内閣が成立</p> <p>イラン・イラク戦争</p> <p>80 年代の日本自動車生産台数 1000 万台突破 世界 1 へ</p>
昭和 56	1981	1. 12 1. 31 2. 8	耐寒訓練 (12~28) 校内マラソン大会 (14Km) 昭和 56 年度推薦入学者選抜検査	

		<p>2. 10 内燃機関総合実験室竣工</p> <p>2. 12 航海学科・機関学科 3 年合宿研修 (12~14) 三瓶青年の家</p> <p>2. 18 機関学科 4 年 A 組中国電力下松発電所及び大晃機械工業見学</p> <p>2. 22 昭和 56 年度入学者選抜学力検査 (第一次検査)</p> <p>2. 25 機関学科 4 年 B 組中国電力下松発電所及び大晃機械工業見学</p> <p>2. 27 クラスマッチ</p> <p>3. 8 昭和 56 年度入学者選抜第二次検査</p> <p>4. 8 昭和 56 年度始業式</p> <p>4. 10 昭和 56 年度入学式</p> <p>4. 11 新入生オリエンテーション (11~13) 校内</p> <p>5. 12 新入生オリエンテーション (12~14) 江田島青年の家</p> <p>6. 3 機関学科 4 年 B 組大島丸海上実習 (3~6) 神戸方面</p> <p>6. 10 航海学科 4 年 大島丸海上実習 (10~13) 神戸方面</p> <p>6. 15 クラスマッチ</p> <p>6. 17 機関学科 4 年 A 組大島丸海上実習 (17~20) 神戸方面</p> <p>6. 21 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会</p> <p>7. 18 第 17 回中国地区高専体育大会 (18~20) (松江高専)</p> <p>7. 23 第 16 回全国商船高専漕艇大会 (25~26) 鳥羽高専</p> <p>7. 27 公開講座 (ヨット教室) (27~30, 8/3~6)</p> <p>8. 2 奨学後援会地方部会 (福岡市)</p> <p>8. 8 第 16 回全国高専体育大会 (8~10) 吳高専</p> <p>8. 28 航海学科・機関学科 5 年卒業研究発表会</p> <p>8. 29 席上課程修了式</p> <p>9. 7 福利施設「商船会館」新営工事竣工</p> <p>9. 9 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (9~11) 大分・宇和島方面</p> <p>9. 10 航海学科・機関学科 2 年生合宿研修 (10~11)</p> <p>9. 16 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (16~18) 大分・宇和島方面</p> <p>9. 30 第 10 回卒業証書授与式</p> <p>10. 1 創立 84 周年記念式及び慰靈祭</p> <p>10. 2 紀要発表会</p> <p>10. 14 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (14~16)</p>	<p>第二次臨時行政調査会発足 (土光臨調)</p> <p>神戸で博覧会ポートピア'81 開催</p> <p>北炭夕張新鉱ガス爆発</p> <p>福井謙一博士 ノーベル</p>
--	--	---	--

			<p>高松方面 10. 21 航海学科 3 年大島丸海上実習 (21~23) 関門・ 大分方面</p> <p>10. 28 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (28~30) 高松方面</p> <p>11. 1 第 12 回商船祭</p> <p>11. 5 機関学科 1 年 A 組大島丸海上実習 宮島方面</p> <p>11. 12 機関学科 1 年 B 組大島丸海上実習 宮島方面</p> <p>11. 13 第 17 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (13~15) 松江高専</p> <p>11. 16 低学年寮居室模様替工事竣工</p> <p>11. 18 機関学科 2 年 B 組大島丸海上実習 (18~20) 尾道・大三島方面</p> <p>11. 25 機関学科 2 年大島丸海上実習 (25~27) 尾道・ 大三島方面</p> <p>12. 2 機関学科 2 年 A 組大島丸海上実習 (2~4) 尾 道・大三島方面</p> <p>12. 7 特別講演 下条 哲司氏 演題「世界における 日本海運」</p> <p>12. 9 航海学科 1 年大島丸海上実習 宮島方面</p>	化学賞受賞
昭和 57	1982		<p>1. 18 耐寒訓練 (18~27)</p> <p>1. 30 校内マラソン大会 (14 km)</p> <p>1. 31 第 4 回西中国地区高専音楽祭</p> <p>2. 3 機関学科 4 年 B 組宇部興産宇部鉄鋼所見学</p> <p>2. 4 航海学科・機関学科 3 年合同研修 (4~6) 三 瓶青年の家</p> <p>2. 7 昭和 57 年度推薦入学者選抜試験</p> <p>2. 10 機関学科 4 年 A 組宇部興産宇部鉄鋼所見学</p> <p>2. 21 昭和 57 年度入学者選抜学力検査 (第一次検 査)</p> <p>2. 26 クラスマッチ</p> <p>3. 7 昭和 57 年度入学者選抜第二次検査</p> <p>3. 25 第 2 体育館竣工</p> <p>4. 8 昭和 57 年度始業式</p> <p>4. 10 昭和 57 年度入学式</p> <p>4. 11 新入生オリエンテーション (11~13) 校内</p> <p>5. 12 新入生オリエンテーション (12~14) 江田島 青年の家</p> <p>6. 2 機関学科 4 年 B 組大島丸海上実習 (2~5) 神 戸方面</p> <p>6. 9 航海学科 4 年大島丸海上実習 (9~12) 神戸方 面</p> <p>6. 14 クラスマッチ</p>	<p>ホテル・ニュージャパン 火災</p> <p>日本航空 羽田墜落事故</p> <p>500 円硬貨発行</p> <p>フォークランド紛争</p> <p>東北新幹線大宮・盛岡間 開通</p>

			<p>6. 16 機関学科 4 年 A 組大島丸海上実習 (16~19) 神戸方面</p> <p>6. 20 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会</p> <p>7. 16 第 18 回中国地区高専体育大会 (16~18) (津山高専)</p> <p>7. 23 公開講座 (ヨット教室) (23~26, 28~31)</p> <p>8. 2 大島丸研究航海 (2~12) 沖縄方面</p> <p>8. 9 第 17 回全国高専体育大会 (9~11) 仙台電波高専</p> <p>8. 27 航海学科・機関学科卒業研究発表会</p> <p>8. 28 席上課程修了式</p> <p>8. 30 低学年寮居室模様替工事竣工</p> <p>9. 8 航海学科・機関学科 2 年生合宿研修 (8~9)</p> <p>9. 30 第 11 回卒業証書授与式</p> <p>10. 1 創立 85 周年記念式及び慰靈祭</p> <p>10. 7 紀要発表会</p> <p>10. 13 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (13~15) 大分・津久見方面</p> <p>10. 20 航海学科 2 年大島丸海上実習 (20~22) 丸亀方面</p> <p>10. 23 第 17 回全国商船高専漕艇大会 (23~24) 本校</p> <p>10. 27 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (27~29) 大分・津久見方面</p> <p>11. 2 第 13 回商船祭</p> <p>11. 5 機関学科 1 年 A 組大島丸海上実習 宮島方面</p> <p>11. 12 機関学科 1 年 B 組大島丸海上実習 宮島方面</p> <p>11. 13 第 18 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (13~15) 津山高専</p> <p>11. 17 機関学科 2 年 B 組大島丸海上実習 (17~19) 丸亀方面</p> <p>11. 23 第 5 回中国地区高専音楽祭 柳井市労働会館</p> <p>11. 24 機関学科 3 年大島丸海上実習 (24~26) 関門・大分方面</p> <p>12. 1 機関学科 2 年 A 組大島丸海上実習 (1~3) 丸亀方面</p> <p>12. 10 航海学科 1 年大島丸海上実習 宮島方面</p>	<p>長崎に集中豪雨 死者・行方不明者多数</p> <p>上越新幹線大宮・新潟間開通</p> <p>11 中曾根康弘内閣が成立</p>
昭和 58	1983	1. 17 耐寒訓練 (17~27) 1. 29 校内マラソン大会 (14 km) 2. 3 航海学科・機関学科 3 年合宿研修 (3~5) 三瓶青年の家 2. 6 昭和 58 年度推薦入学者選抜試験 2. 16 機関学科 4 年 A 組新日本製鐵光製作所・東洋		

			<p>工業防府工場見学</p> <p>2. 20 昭和 58 年度入学者選抜学力検査（第一次検査）</p> <p>2. 23 機関学科 4 年 B 組新日本製鐵光製作所・東洋工業防府工場見学</p> <p>2. 25 クラスマッチ</p> <p>3. 6 昭和 58 年度入学者選抜第二次検査</p> <p>4. 1 第 3 代校長に神戸商船大学名誉教授南正己が任命される</p> <p>4. 8 昭和 58 年度始業式</p> <p>4. 11 昭和 58 年度入学式</p> <p>4. 12 新入生オリエンテーション（12～14）校内</p> <p>4. 16 新入生オリエンテーション（16～18）江田島青年の家</p> <p>6. 8 航海学科 4 年 A・B 組大島丸海上実習（8～11）神戸方面</p> <p>6. 14 クラスマッチ</p> <p>6. 15 機関学科 4 年大島丸海上実習（15～18）神戸方面</p> <p>7. 1 機関学科 1 年 A 組大島丸海上実習 宮島方面</p> <p>7. 3 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会</p> <p>7. 23 第 19 回中国地区高専体育大会（16～18）（米子高専）</p> <p>7. 23 公開講座（ヨット教室）（23～26, 30～8/2）</p> <p>7. 28 第 18 回全国商船高専漕艇大会（28～29）弓削商船高専</p> <p>8. 4 大島丸研究航海（4～10）種子島方面</p> <p>8. 7 奨学後援会地方部会 鹿児島市</p> <p>8. 29 航海学科・機関学科卒業研究発表会</p> <p>8. 30 席上課程修了式</p> <p>9. 7 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習（7～9）松山方面</p> <p>9. 8 航海学科・機関学科 2 年生合宿研修（8～9）</p> <p>9. 16 機関学科 1 年 B 組大島丸海上実習 宮島方面</p> <p>9. 21 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習（21～22）松山方面</p> <p>9. 30 第 12 回卒業証書授与式</p> <p>10. 1 創立 86 周年記念式及び慰靈祭</p> <p>10. 3 紀要発表会</p> <p>10. 19 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習（19～21）閔門・大分方面</p> <p>10. 26 機関学科 3 年 A・B 組大島丸海上実習（26～28）大分・臼杵見方面</p>	<p>中国自動車道全線開通</p> <p>日本海中部地震</p> <p>大韓航空機 ソ連軍機に撃墜される</p> <p>三宅島大噴火</p> <p>ロッキー裁判 田中元首相に実刑判決</p>
--	--	--	---	---

			11. 5 11. 9 11. 12 11. 16 11. 21 11. 25 11. 30	第 14 回商船祭 機関学科 2 年 B 組大島丸海上実習 (9~11) 丸 亀方面 第 19 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (13~15) 津山高専 機関学科 2 年大島丸海上実習 (16~18) 丸亀 方面 文化講演 吉原瑩覚氏 「現代社会と生き甲 斐」 機関学科 1 年大島丸海上実習 宮島方面 機関学科 2 年 A 組大島丸海上実習 (30~12/2) 丸亀方面	
昭和 59	1984		1. 17 1. 28 2. 2 2. 2 2. 05 2. 15 2. 19 2. 24 3. 4 4. 9 4. 11 4. 12 4. 20 4. 26 6. 12 6. 13 6. 20 6. 24 6. 27 7. 21 7. 23 7. 30	耐寒訓練 (17~27) 校内マラソン大会 (12 km) 紀要第 16 号発刊 航海学科・機関学科 3 年合宿研修 (2~4) 三 瓶青年の家 昭和 59 年度推薦入学者選抜試験 機関学科 4 年 A・B 組宇部興産見学 昭和 59 年度入学者選抜学力検査 (第一次検 査) クラスマッチ 昭和 59 年度入学者選抜第二次検査 昭和 59 年度始業式 昭和 59 年度入学式 新入生オリエンテーション (12~14) 校内 新入生オリエンテーション (20~21) 十種ヶ 峰青少年野外活動センター 新入生オリエンテーション大島丸海上実習・ 江田島参考館見学 クラスマッチ 機関学科 4 年 A 組大島丸海上実習 (13~16) 神戸方面 機関学科 4 年 A 組大島丸海上実習 (20~23) 神戸方面 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会 機関学科 4 年 B 組大島丸海上実習 (27~30) 神戸方面 第 20 回中国地区高専体育大会 (21~23) (徳 山高専) 公開講座 (ヨット教室) (23~26, 8/2~5) 第 19 回全国商船高専漕艇大会 (30~31) 広島 商船高専	三井三池有明鉱で火災 グリコ・森永脅迫事件 第 23 回オリンピック開催 (ロサンゼルス)

			<p>8. 1 公開講座 パソコン教室 (1~3)</p> <p>8. 5 奨学後援会地方部会 鹿児島市</p> <p>8. 6 大島丸研究航海 (4~10) 種子島方面</p> <p>8. 9 第 19 回全国高専体育大会 (9~11) 和歌山高専</p> <p>8. 29 航海学科・機関学科卒業研究発表会</p> <p>8. 30 席上課程修了式</p> <p>9. 12 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (12~14) 别府方面</p> <p>9. 12 航海学科・機関学科 2 年生合宿研修 (12~13)</p> <p>9. 16 練習船乗船式・造船所入所式</p> <p>9. 19 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (19~21) 别府方面</p> <p>9. 29 第 13 回卒業証書授与式</p> <p>10. 1 創立 87 周年記念式及び慰靈祭</p> <p>10. 5 紀要発表会 航海学科</p> <p>10. 9 紀要発表会 機関学科</p> <p>10. 17 機関学科 3 年大島丸海上実習 (17~19) 関門・大分方面</p> <p>10. 24 機関学科 2 年 B 組大島丸海上実習 (24~26) 丸亀方面</p> <p>11. 3 第 15 回商船祭</p> <p>11. 7 機関学科 2 年大島丸海上実習 (7~9) 丸亀方面</p> <p>11. 10 第 20 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (10~11) 徳山高専</p> <p>11. 14 機関学科 2 年 A 組大島丸海上実習 (14~16) 丸亀方面</p> <p>11. 28 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (28~30) 今治方面</p> <p>12. 05 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (5~7) 今治方面</p>	新札発行 (一円、五千円、千円)
昭和 60	1985		<p>1. 16 耐寒訓練 (16~24)</p> <p>1. 19 紀要第 17 号発刊</p> <p>1. 26 校内マラソン大会 (12 km)</p> <p>2. 3 昭和 60 年度推薦入学者選抜検査</p> <p>2. 6 機関学科 4 年 A 組東洋工業防府工場見学</p> <p>2. 7 航海学科・機関学科 3 年合宿研修 (7~9) 三瓶青年の家</p> <p>2. 24 昭和 60 年度入学者選抜学力検査 (第一次検査)</p> <p>3. 1 クラスマッチ</p> <p>3. 10 昭和 60 年度入学者選抜第二次検査</p>	科学万博つくば'85 開催

			<p>4. 1 文部省令第 9 号「国立学校設置法施行規則の一部改正」により機関学科 1 学級を電子機械工学科に改組 (航海学科 1 学級 40 名、機関学科 1 学級 40 名、電子機械工学科 1 学級 40 名)</p> <p>4. 8 昭和 60 年度始業式</p> <p>4. 10 昭和 60 年度入学式</p> <p>4. 11 新入生オリエンテーション (11~12) 校内</p> <p>4. 16 新入生オリエンテーション (16~17) 十種ヶ峰青少年野外活動センター</p> <p>4. 26 新入生オリエンテーション大島丸海上実習・江田島参考館見学</p> <p>6. 18 クラスマッチ</p> <p>6. 19 機関学科 4 年 A 組大島丸海上実習 (19~22) 神戸方面</p> <p>6. 23 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会</p> <p>6. 26 機関学科 4 年 B 組大島丸海上実習 (26~29) 神戸方面</p> <p>7. 3 機関学科 4 年 大島丸海上実習 (3~6) 神戸方面</p> <p>7. 20 第 21 回中国地区高専体育大会 (20~22) (吳高専)</p> <p>7. 24 第 20 回全国商船高専漕艇大会 (24~25) 富山商船高専</p> <p>7. 29 公開講座 (ヨット教室) (29~8/1)</p> <p>7. 31 公開講座 パソコン教室 (31~8/1)</p> <p>8. 04 奨学後援会地方部会 (長崎市)</p> <p>8. 05 大島丸研究航海 (5~9) 佐世保方面</p> <p>8. 19 第 20 回全国高専体育大会 (19~21) 茨城高専</p> <p>8. 29 航海学科・機関学科卒業研究発表会</p> <p>8. 30 席上課程修了式</p> <p>9. 11 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (11~13) 関門方面</p> <p>9. 14 航海学科・機関学科 2 年生合宿研修 (14~15)</p> <p>9. 16 練習船乗船式・造船所入所式</p> <p>9. 18 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (18~20) 関門方面</p> <p>9. 30 第 14 回卒業証書授与式</p> <p>10. 01 創立 88 周年記念式及び慰靈祭 文化講演 畑 博行氏 「歴史から学ぼう」</p> <p>10. 03 紀要発表会</p> <p>10. 13 一日学校見学会</p> <p>10. 16 航海学科 3 年 大島丸海上実習 (16~18) 関門</p>	<p>N T T (日本電信電話会社) 日本たばこ産業会社設立</p> <p>男女雇用機会均等法成立</p> <p>大鳴門橋開通 淡路島・鳴門間</p> <p>日本航空ジャンボ機墜落</p> <p>メキシコ大地震</p>
--	--	--	--	--

				方面 10. 23 機関学科 2 年 A 組大島丸海上実習 (23~25) 高松方面 10. 30 航海学科 2 年 大島丸海上実習 (30~11/1) 丸 亀方面 11. 03 第 16 回商船祭 11. 08 第 21 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (8~9) 呉高専 11. 13 機関学科 2 年 B 組大島丸海上実習 (13~15) 高松方面 11. 20 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (20~22) 尾道方面 11. 26 特別講演 佐藤 隆博氏 「コンピューター の将来」 11. 27 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (27~29) 尾道方面	
昭和 61		1986	1. 16 耐寒訓練 (16~27) 1. 31 機関学科 4 年 A 組東洋工業防府工場見学 2. 01 校内マラソン大会 2. 03 昭和 61 年度推薦入学者選抜検査 2. 06 航海学科・機関学科 3 年合宿研修 (6~8) 三 瓶青年の家 2. 07 機関学科 4 年 B 組東洋工業防府工場見学 2. 10 紀要第 18 号発刊 2. 28 クラスマッチ 4. 08 昭和 61 年度始業式 4. 10 昭和 61 年度入学式 4. 11 新入生オリエンテーション (11~12) 校内 4. 16 新入生オリエンテーション (16~17) 十種ヶ 峰青少年野外活動センター 4. 21 大韓民国国立群山水産専門大学実習船来航 (4. 21~4. 24、5. 12~15) 6. 11 航海学科 4 年 大島丸海上実習 (11~14) 神戸 方面 6. 18 機関学科 4 年 A 組大島丸海上実習 (18~21) 神戸方面 6. 22 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会 機関学科 4 年 B 組大島丸海上実習 (25~28) 神戸方面 7. 19 第 22 回中国地区高専体育大会 (19~21) (広 島商船高専) 7. 24 第 21 回全国商船高専漕艇大会 (24~25) 鳥羽 商船高専	米のスペースシャトル・ チャレンジャー爆発 打 上げ失敗 ソ連 チェルノブイリ原 発大規模事故	

			7. 28 公開講座 (ヨット教室) (29~31) 公開講座 パソコン教室 (28~31) 8. 3 奨学後援会地方部会 (鹿児島市) 8. 5 大島丸研究航海 (5~9) 対馬方面 8. 23 第 21 回全国高専体育大会 (23~25) 宇部高専 8. 28 航海学科・機関学科卒業研究発表会 8. 29 席上課程修了式 9. 10 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (10~12) 閨門方面 9. 12 航海学科・機関学科 2 年生合宿研修 (12~13) 秋吉台少年自然の家 9. 17 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (17~20) 閨門方面 9. 25 第 15 回卒業証書授与式 10. 1 創立 89 周年記念式及び慰靈祭 文化講演 浜井 高秀氏 「変動する内外の経済情勢」 10. 6 紀要発表会 10. 12 一日学校見学会 10. 15 航海学科 3 年大島丸海上実習 (15~17) 閨門 方面 10. 22 機関学科 2 年大島丸海上実習 (22~24) 水島 方面 10. 23 電子機械工学科 2 年校外見学 宇部興産 10. 29 航海学科 2 年大島丸海上実習 (29~31) 水島 方面 11. 2 第 17 回商船祭 11. 14 第 22 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (14~16) 本校 11. 16 第 2 回中国地区高専英語弁論大会 本校 第 9 回中国地区高専音楽祭 本校 11. 19 機関学科 3 年 A 組大島丸海上実習 (19~21) 伊方・今治方面 11. 26 機関学科 3 年 B 組大島丸海上実習 (26~28) 伊方・今治方面	伊豆大島の三原山噴火 島民非難	87 年度政府予算案 防衛 費 1 % 枠を突破
昭和 62	1987	1. 13 耐寒訓練 (13~27) 1. 28 特別講演 堀江 固功氏 「ニューメディア 時代の教育」 1. 29 校内マラソン大会 2. 3 昭和 62 年度推薦入学者選抜検査 2. 5 航海学科・機関学科 3 年合宿研修 (5~7) 三			

				瓶青年の家 機関学科 4 年 A 組中国電力下松営業所・大晃 機械工業見学 機関学科 4 年 B 組中国電力下松営業所・大晃 機械工業見学 昭和 62 年度入学者選抜検査 クラスマッチ 校舎（電子機械工学科棟）竣工 昭和 62 年度始業式 昭和 62 年度入学式 新入生オリエンテーション（11～13）校内 新入生合宿研修（15～16）十種ヶ峰青少年野外活動センター 大韓民国国立群山水産専門大学実習船来航 (4.24～4.25、5.15～16) 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会 機関学科 4 年 B 組大島丸海上実習（25～28） 神戸方面 第 23 回中国地区高専体育大会（19～21）（広島商船高専） 公開講座（ヨット教室）（27～30） 公開講座 パソコン教室（27～29） 奨学後援会地方部会（福岡市） 大島丸研究航海（3～7）閨門・来島海峡方面 第 22 回全国高専体育大会（10～12）秋田高専 パソコン講習会（19～22） 昭和 63 年度編入学選抜検査 航海学科・機関学科卒業研究発表会 席上課程修了式 2 年生合宿研修 秋吉台少年自然の家 第 16 回卒業証書授与式 紀要発表会 創立 90 周年記念式及び慰靈祭 一日学校見学会 第 22 回全国商船高専漕艇大会（24～25）本校 第 18 回商船祭 創立 90 周年・高専開校 20 周年記念式典及び 慰靈祭 記念講演会 沖原 豊氏 「心の教育」 航海訓練所練習船「海王丸」一般公開 第 23 回中国地区高専体育大会（冬季大会） (13～15) 松江高専	国鉄分割民営化 J R グループ発足 朝日新聞阪神支局襲撃事件
昭和 63		1988	1. 18	耐寒訓練（18～27）	利根川進博士 ノーベル 医学生理学賞受賞 日本航空民営化 11 竹下登内閣が成立

		<p>1. 29 校内マラソン大会</p> <p>2. 1 昭和 63 年度推薦入学者選抜検査</p> <p>2. 4 3 年合宿研修（4~6）三瓶青年の家</p> <p>2. 12 機関学科 4 年校外見学</p> <p>2. 21 昭和 62 年度入学者選抜検査</p> <p>2. 22 電子機械工学科 1 年生校外見学</p> <p>2. 26 クラスマッチ</p> <p>4. 1 文部省令第 7 号「国立学校設置法施行規則の一部改正」により 航海学科 1 学級、機関学科 1 学級を商船学科、情報工学科に改組 (商船学科 1 学級 40 名、電子機械工学科 1 学年 40 名、情報工学科 1 学級 40 名)</p> <p>4. 2 第 4 代校長に神戸商船大学名誉教授道嶋正美が任命される</p> <p>4. 8 昭和 63 年度始業式</p> <p>4. 11 昭和 63 年度入学式</p> <p>4. 12 新入生オリエンテーション（12~13）校内</p> <p>4. 15 新入生合宿研修（15~16）十種ヶ峰青少年野外活動センター</p> <p>6. 19 獎学後援会通常総会及び体育後援会通常総会</p> <p>6. 22 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行（22~24）関西方面</p> <p>7. 2 大島丸表敬訪問及び学術交流（2~8）大韓民国国立群山水産専門大学</p> <p>7. 11 航海学科・機関学科 4 年生大島丸海上実習（11~15）神戸方面</p> <p>7. 20 第 23 回全国商船高専漕艇大会（20~22）弓削商船高専</p> <p>7. 23 第 24 回中国地区高専体育大会（23~25）（津山高専）</p> <p>7. 27 公開講座（ヨット教室）（27~30）</p> <p>7. 29 公開講座 パソコン教室（29~31）</p> <p>8. 07 獎学後援会地方部会（長崎市）</p> <p>8. 21 第 23 回全国高専体育大会（21~22）久留米高専</p> <p>8. 25 昭和 64 年度編入学選抜検査</p> <p>8. 26 大島丸研究航海</p> <p>8. 31 航海学科・機関学科卒業研究発表会</p> <p>9. 1 席上課程修了式</p> <p>9. 7 2 年生合宿研修（9~10）秋吉台少年自然の家</p> <p>9. 16 電子機械工学科 1 年生校外見学 中国電力岩国発電所</p>	<p>青函トンネル開通</p> <p>東京ドーム完工</p> <p>瀬戸大橋開通</p> <p>リクルート事件</p> <p>自衛隊潜水艦なだしおと釣舟第一富士丸が衝突</p> <p>第 24 回オリンピック開催（ソウル）</p>
--	--	---	---

			9. 22 10. 1 10. 12 10. 16 10. 19 10. 21 10. 26 11. 05 11. 11 11. 16	第 17 回卒業証書授与式 (NE 86 期) 創立記念日及び慰靈祭 航海学科 2 年生大島丸海上実習 (12~14) 水島方面 一日学校見学会 機関学科 2 年生大島丸海上実習 (19~21) 水島方面 電子機械工学科 2 年生校外見学 三次電機 航海学科 3 年生大島丸海上実習 (26~28) 関門方式 第 19 回商船祭 第 24 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (11~13) 津山高専 航海学科 3 年生大島丸海上実習 (16~18) 別府方面	
昭和 64 平成元		1989	1. 8 1. 17 1. 27 2. 3 2. 8 2. 10 2. 19 2. 20 2. 27 4. 8 4. 11 4. 12 4. 14 6. 13 6. 14 6. 18 6. 20 6. 21 6. 27 7. 5	耐寒訓練 (17~25) 校内マラソン大会 平成元年度推薦入学者選抜検査 3 年合宿研修 (8~10) 三瓶青年の家 機関学科 4 年校外見学 大晃機会工業他 平成元年入学者選抜検査 電子機械工学科 1 年生校外見学 帝人製機岩国工場他 クラスマッチ 平成元年度始業式 平成元年度入学式 新入生オリエンテーション (12~13) 校内 新入生合宿研修 (14~15) 十種ヶ峰青少年野外活動センター クラスマッチ 機関学科 3 年生大島丸海上実習 (14~16) 関門方面 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会 航海学科 4 年生大島丸海上実習 (20~23) 神戸方面 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行 (21~23) 関西方面 航海学科 4 年生大島丸海上実習 (27~30) 神戸方面 情報工学科 1 年生校外見学 KDD 山口衛星通信所他	昭和天皇崩御 皇太子明仁親王即位 平成と改元 消費税 6 宇野宗佑内閣が成立 6 第二次天安門事件

			7. 7 7. 11 7. 18 7. 22 8. 3 8. 5 8. 6 8. 9 8. 23 8. 26 8. 31 9. 1 9. 6 9. 13 9. 18 9. 19 9. 22 10. 1 10. 3 10. 11 10. 15 10. 18 10. 25 11. 4 11. 10 11. 21	航海学科・機関学科 4 年生救命講習 電子機械工学科 1 年生校外見学 中国電力岩国発電所 第 24 回全国商船高専漕艇大会（18～19）広島商船高専 第 25 回中国地区高専体育大会（22～24）米子高専 大島丸研究航海（3～4）来島方面 公開講座 パソコン教室（5～7） 奨学後援会地方部会（下関市） 大島丸洋上サマーセミナー（9～11）下関市・宇部市・北九州市 第 24 回全国高専体育大会（23～24）鳥羽商船高専 公開講座 「テニス教室」（26～28） 航海学科・機関学科卒業研究発表会 席上課程修了式 商船学科 2 年生大島丸海上実習（6～8）水島方面 2 年生合宿研修（13～14）秋吉台少年自然の家 電子機械工学科 3 年生校外見学 三菱重工広島製作所 情報工学科 2 年生校外見学 KDD 山口衛星通信所 第 18 回卒業証書授与式（NE87期・E87期） 創立 91 周年記念日 創立 92 周年記念慰靈祭 航海学科 3 年生大島丸海上実習（11～13）閲門方面 一日学校見学会 電子機械工学科 2 年生校外見学 東洋工業防府工場 機関学科 3 年生大島丸海上実習（18～20）松山方面 商船学科 1 年生大島丸海上実習（25～26）別府方面 第 20 回商船祭 第 25 回中国地区高専体育大会（冬季大会）（10～12）米子高専 平成 2 年度編入学試験学力試験及び面接	8 海部俊樹内閣が成立 ベルリンの壁崩壊
平成 2		1990	1. 31 2. 3	校内マラソン大会 新校歌校内発表会	

		<p>2. 8 3年合宿研修（8～10）三瓶青年の家</p> <p>2. 16 機関学科 4年校外見学 東洋工業広島工場</p> <p>2. 18 平成 2 年度入学者選抜検査</p> <p>2. 20 電子機械工学科 1 年生校外見学 帝人製機岩国工場他</p> <p>2. 23 クラスマッチ</p> <p>3. 2 電子機械工学科 5 年生卒業研究発表会</p> <p>3. 13 電子機械工学科卒業証書授与式（M1期）</p> <p>4. 9 平成 2 年度始業式</p> <p>4. 11 平成 2 年度入学式</p> <p>4. 12 新入生オリエンテーション（12～13）校内</p> <p>4. 19 新入生合宿研修（19～20）徳地少年自然の家</p> <p>5. 15 情報工学科 3 年校外見学 出光興産徳山他</p> <p>6. 19 航海学科 4 年生大島丸海上実習（19～22）神戸方面</p> <p>6. 20 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行（21～23）関西方面</p> <p>6. 24 獎学後援会通常総会及び体育後援会通常総会</p> <p>6. 26 機関学科 4 年生大島丸海上実習（26～29）神戸方面</p> <p>7. 19 第 25 回全国商船高専漕艇大会（19～20）富山商船高専</p> <p>第 26 回中国地区高専体育大会（21～23）徳山高専</p> <p>7. 31 大島丸研究航海（31～8/3）四国方面</p> <p>8. 4 公開講座 パソコン教室（4～6）</p> <p>8. 5 獎学後援会地方部会（福岡市）</p> <p>8. 10 第 25 回全国高専体育大会（10～12）苫小牧高専</p> <p>8. 22 第 2 回アイデア対決ロボットコンテスト 国立代々木第 2 体育館</p> <p>8. 23 公開講座 「テニス教室」（23～25）</p> <p>8. 31 航海学科・機関学科卒業研究発表会</p> <p>9. 1 席上課程修了式</p> <p>9. 5 商船学科 1 年生大島丸海上実習（5～6）別府方面</p> <p>9. 12 商船学科 3 年生大島丸海上実習（12～14）関門方面</p> <p>9. 13 2 年生合宿研修（13～14）徳地少年自然の家</p> <p>9. 17 電子機械工学科 2 年生校外見学 東洋工業防府工場</p> <p>9. 20 電子機械工学科 3 年生校外見学 キリンビル広島工場</p>	3 ゴルバチョフ氏がソ連大統領に就任
--	--	---	--------------------

			<p>9. 21 第 19 回卒業証書授与式 (NE88 期・E88 期)</p> <p>10. 1 創立 92 周年記念日及び慰靈祭</p> <p>10. 14 一日学校見学会</p> <p>10. 17 商船学科 2 年生大島丸海上実習 (17~19) 丸亀方面</p> <p>10. 26 情報工学科 2 年生校外見学 富士通プラザ広島</p> <p>11. 3 第 21 回商船祭</p> <p>第 1 回全国高専プログラミングコンテスト 国立京都国際会館</p> <p>11. 9 第 26 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (10~12) 米子高専</p> <p>11. 11 第 6 回中国地区高専英語弁論大会 徳山高専</p> <p>11. 19 平成 3 年度編入学試験学力試験及び面接</p>	東西ドイツ統一 即位の礼 90 年の海外渡航者が初の 1000 万人突破 イラク人質全員解放
平成 3	1991		<p>1. 21 耐寒訓練 (21~29)</p> <p>1. 31 校内マラソン大会</p> <p>2. 5 3 年合宿研修 (5~7) 三瓶青年の家</p> <p>機関学科 4 年校外見学 東洋工業広島工場</p> <p>2. 24 平成 3 年度入学者選抜検査</p> <p>2. 28 電子機械工学科 5 年生卒業研究発表会</p> <p>3. 13 電子機械工学科卒業証書授与式 (M2 期)</p> <p>3. 28 校舎 (情報工学科棟) 竣工</p> <p>4. 8 平成 3 年度始業式</p> <p>4. 10 平成 3 年度入学式</p> <p>4. 11 新入生オリエンテーション (11~12) 校内</p> <p>4. 19 新入生合宿研修 (19~20) 徳地少年自然の家</p> <p>6. 11 クラスマッチ</p> <p>6. 18 商船学科 4 年生大島丸海上実習 (18~21) 神戸方面</p> <p>6. 19 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行 (19~21) 関西方面</p> <p>情報工学科 4 年生工場見学旅行 (19~21) 関東方面</p> <p>6. 23 獎学後援会通常総会及び体育後援会通常総会</p> <p>7. 2 情報工学科 1 年校外見学 KDD 山口衛星通信所他</p> <p>7. 3 情報工学科 3 年校外見学 新日鐵光製鉄所</p> <p>7. 20 第 27 回中国地区高専体育大会 (20~22) 吳高専</p> <p>7. 25 第 26 回全国商船高専漕艇大会 (25~26) 烏羽商船高専</p> <p>7. 31 大島丸研究航海 (31~8/2) 神戸方面</p>	90 年の交通事故死者 1 万 1227 人 湾岸戦争で多国籍軍への 支援 90 億ドル追加 4 自衛隊掃海艇のペルシ ア湾派遣 長崎雲仙普賢岳で大火碎 流発生 7 エリツィン氏が露大統領に就任

			<p>8. 3 公開講座「パソコン教室」(3~5)</p> <p>8. 4 奨学後援会地方部会(福岡市)</p> <p>8. 7 大島丸サマーセミナー(7~9) 門司、下関、宇部</p> <p>8. 9 公開講座「海洋教室」(9~11)</p> <p>8. 22 第26回全国高専体育大会(22~24)高松高専</p> <p>8. 30 航海学科・機関学科卒業研究発表</p> <p>8. 31 席上課程修了式</p> <p>9. 4 商船学科1年生大島丸海上実習(4~5)別府方面</p> <p>9. 11 商船学科2年生大島丸海上実習(11~13)丸亀方面</p> <p>9. 20 第20回卒業証書授与式(NE89期)</p> <p>10. 1 創立93周年記念日及び慰靈祭</p> <p>10. 13 一日学校見学会</p> <p>10. 16 商船学科3年生大島丸海上実習(16~18)関門方面</p> <p>10. 25 情報工学科2年生校外見学 富士通プラザ広島</p> <p>10. 28 電子機械工学科3年生校外見学 日立笠戸工場</p> <p>10. 31 電子機械工学科2年生校外見学 KDD山口衛星通信所他</p> <p>11. 3 第22回商船祭</p> <p>11. 8 第27回中国地区高専体育大会(冬季大会)(8~10)吳高専</p> <p>11. 10 第7回中国地区高専英語弁論大会 吳高専</p> <p>11. 13 商船学科3年生大島丸海上実習(13~14)松山方面</p> <p>11. 21 クラスマッチ</p>	<p>11 宮沢喜一内閣が成立</p> <p>12 ソ連解体 独立国家共同体が設立</p> <p>原子力船むつ 最後の実習航海を終える</p>
平成4	1992	1. 30	校内マラソン大会	
		2. 4	3年生合宿研修(4~6)三瓶青年の家	
		2. 12	電子機械工学科5年生卒業研究発表会	
		2. 13	商船学科4年生校外見学 広島マツダ	
		2. 23	平成4年度入学者選抜検査	
		3. 12	電子機械工学科卒業証書授与式(M3期)	暴力団対策法施行
		4. 8	平成4年度始業式	公務員に完全週休2日制の導入
		4. 10	平成4年度入学式	東海道新幹線にのぞみ登場
		4. 13	新入生オリエンテーション(13~14)校内	
		4. 27	新入生合宿研修(27~28)徳地少年自然の家	
		5. 13	商船学科3年生大島丸海上実習(13~15)関門	

				門方面 6. 16 商船学科 4 年生大島丸海上実習 (16~19) 神戸方面 情報工学科 4 年生工場見学旅行 (16~19) 関東方面 6. 17 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行 (17~19) 関西方面 6. 21 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会 7. 7 情報工学科 1 年校外見学 KDD 山口衛星通信所他 7. 18 第 28 回中国地区高専体育大会 (18~20) 本校・広島商船高専 7. 22 大島丸研究航海 (22~24) 神戸方面 8. 2 奨学後援会地方部会 (北九州市) 8. 6 大島丸サマークルーズ (6~7) 别府方面 8. 7 公開講座「海洋教室」(7~11) 8. 8 公開講座「パソコン教室」(8~10) 8. 22 第 27 回全国高専体育大会 (22~24) 東京高専 8. 27 商船学科卒業研究発表 8. 28 商船学科席上課程修了式 9. 2 商船学科 2 年生大島丸海上実習 (2~4) 丸亀方面 9. 16 商船学科 1 年生大島丸海上実習 (16~17) 别府方面 9. 18 第 21 回卒業証書授与式 (NE90 期) 10. 1 創立 94 周年・高専開校 25 周年記念式典 10. 7 研究紀要発表会 10. 18 一日学校見学会 10. 22 電子機械工学科 2 年生校外見学 KDD 山口衛星通信所他 10. 24 第 27 回全国商船高専漕艇大会 (24~25) 本校 10. 26 電子機械工学科 3 年生校外見学 中国電力岩国発電所 10. 30 第 3 回全国高専プログラミングコンテスト (30~11/1) 仙台市 11. 3 第 23 回商船祭 11. 13 情報工学科 2 年生校外見学 富士通プラザ広島 11. 18 クラスマッチ 11. 27 第 28 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (27~29) 山口市 12. 3 校内マラソン大会	国連平和維持活動 (PKO) 協力法成立 山形新幹線開通 PKO 部隊のカンボジア派遣 日本人宇宙飛行士毛利衛さん 宇宙へ
平成 5	1993	2. 8	3 年生合宿研修 (8~10) 三瓶青年の家	多国籍軍のソマリア派遣 クリントン氏が米大統領	

			2. 21 平成 5 年度入学者選抜検査	に就任
			2. 22 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業研究発表会 (22~24)	EC 統合市場が発足
			3. 10 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 (M4 期、I1 期)	
			3. 16 終業式	
			4. 1 第 5 代校長に神戸商船大学名誉教授山崎直樹が任命される	
			4. 7 平成 5 年度始業式	
			4. 8 平成 5 年度入学式	
			4. 9 新入生オリエンテーション 校内	
			4. 19 新入生合宿研修 (19~20) 徳地少年自然の家	
			6. 15 商船学科 4 年生大島丸海上実習 (15~18) 神戸方面	PKO 部隊のモザンビーク派遣
			情報工学科 4 年生工場見学旅行 (15~18) 関東方面	皇太子徳仁親王結婚式
			6. 16 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行 (16~18) 関西方面	
			6. 23 商船学科 3 年生大島丸海上実習 (23~25) 関門方面	
			6. 27 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会	
			7. 19 第 27 回全国商船高専漕艇大会 (19~20) 本校	
			7. 23 第 29 回中国地区高専体育大会 (23~25) 宇部高専	北海道南西沖地震
			7. 26 大島丸研究航海 (26~28)	
			7. 31 奨学後援会地方部会 (福岡市)	
			7. 31 公開講座「パソコン教室」(31~8/2)	
			8. 1 大島丸サマーセミナー (1~6)	
			8. 7 第 28 回全国高専体育大会 (7~9) 松江高専	細川護熙内閣が成立
			8. 30 商船学科卒業研究発表	
			8. 31 商船学科席上課程修了式	
			9. 6 商船学科 2 年生大島丸海上実習 (6~8) 丸亀方面	
			9. 9 新「大島丸」進水式 三菱重工（株）下関造船所	
			9. 16 商船学科 1 年生大島丸海上実習 (16~17) 別府方面	
			9. 22 商船学科卒業証書授与式 (S1 期)	
			10. 1 創立 95 周年記念日及び慰靈祭	
			10. 24 一日学校見学会	
			10. 29 第 29 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (29~31) 山口市	
			11. 2 第 24 回商船祭	アジア太平洋経済協力

			11. 12 11. 15 11. 20 11. 30 12. 6	商船学科 4 年生大島丸海上実習 (11~12) クラスマッチ 第 4 回高専プログラミングコンテスト全国大会 (20~21) 名古屋市 第 6 回高専ロボットコンテスト全国大会 (20~21) 東京 校内マラソン大会 練習船「大島丸」(3 代目) 竣工	(OPEC)が発足 コメ輸入の部分開放決定
平成 6	1994		2. 8 2. 20 2. 23 3. 10 3. 14 4. 7 4. 11 4. 12 4. 26 6. 10 6. 14 6. 15 6. 21 6. 26 7. 22 7. 25 7. 30 8. 5 8. 6 8. 6 8. 30 8. 31 9. 6 9. 13 9. 21	3 年生合宿研修 (8~10) 三瓶青年の家 平成 6 年度入学者選抜検査 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業研究発表会 (23~24) 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 (M5 期、I2 期) 終業式 平成 6 年度始業式 平成 6 年度入学式 新入生オリエンテーション 校内 新入生合宿研修 (26~27) 徳島少年自然の家 クラスマッチ 商船学科 4 年生大島丸海上実習 (14~17) 神戸方面 情報工学科 4 年生工場見学旅行 (14~17) 関東方面 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行 (15~17) 関西方面 商船学科 3 年生大島丸海上実習 (21~23) 関門方面 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会 第 30 回中国地区高専体育大会 (22~24) 宇部高専 大島丸研究航海 (25~29) 奨学後援会地方部会 (北九州市) 第 29 回全国高専体育大会 (5~7) 静岡市 公開講座「パソコン教室」(6~8) 公開講座「海洋教室」(6~8) 商船学科卒業研究発表 商船学科席上課程修了式 商船学科 2 年生大島丸海上実習 (6~8) 丸亀方面 商船学科 1 年生大島丸海上実習 (13~14) 別府方面 商船学科卒業証書授与式 (S2 期)	羽田孜連立内閣が成立 天皇訪米 村山富市連立内閣が成立 関西新空港開港

			10. 1 創立 96 周年記念日及び慰靈祭 10. 8 第 5 回高専プログラミングコンテスト全国大会 (8~9) 富山市 10. 22 第 28 回全国商船高専潜艇大会 (22~23) 広島商船高専 10. 30 一日学校見学会 11. 2 第 25 回商船祭 11. 11 第 30 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (11~13) 富山市 11. 15 クラスマッチ 11. 17 商船学科 4 年生大島丸海上実習 (17~18) 11. 30 校内マラソン大会	大江健三郎氏 ノーベル文学賞受賞 衆議院小選挙区区切り法案成立 三陸はるか沖地震 清水寺など 17 社寺・城、世界遺産
平成 7	1995	2. 8	3 年生合宿研修 (8~10) 三瓶青年の家	阪神・淡路大震災
		2. 19	平成 7 年度入学者選抜検査	世界貿易機構 (WTO) が発足
		2. 22	電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業研究発表会 (22~23)	
		3. 9	電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 (M6 期、I3 期)	地下鉄サリン事件
		3. 10	終業式	
		4. 10	平成 7 年度始業式	
		4. 11	平成 7 年度入学式	
		4. 12	新入生オリエンテーション 校内	
		5. 10	新入生合宿研修 (10~11) 徳地少年自然の家	
		6. 13	クラスマッチ	
		6. 20	商船学科 4 年生大島丸海上実習 (20~23) 大阪方面 情報工学科 4 年生工場見学旅行 (20~23) 関東方面	
		6. 21	電子機械工学科 4 年生工場見学旅行 (21~23) 関西方面	
		6. 25	奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会	
		7. 20	第 30 回全国商船高専潜艇大会 (20~21) 富山商船高専	
		7. 21	第 31 回中国地区高専体育大会 (21~23) 徳山高専	
		7. 29	奨学後援会地方部会 (北九州市)	
		7. 31	大島丸研究航海 (31~8/4)	
		8. 4	第 30 回全国高専体育大会 (4~6) 近畿	
		8. 5	公開講座「パソコン教室」(5~7)	
		8. 18	公開講座「海洋教室」(18~20)	
		8. 22	大島丸洋上サマーセミナー (20~22)	

			8. 31 9. 5 9. 12 9. 20 9. 27 10. 1 10. 17 10. 28 11. 2 11. 10 11. 15 11. 16 11. 28	商船学科卒業研究発表 商船学科 2 年生大島丸海上実習（5～7）丸亀方面 商船学科 1 年生大島丸海上実習（12～13）別府方面 商船学科席上課程修了式 商船学科卒業証書授与式（S3 期） 創立 97 周年記念日及び慰靈祭 商船学科 3 年生大島丸海上実習（17～19）閑門方面 一日学校見学会 第 26 回商船祭 第 31 回中国地区高専体育大会（冬季大会）（10～14）本校 クラスマッチ 商船学科 4 年生大島丸海上実習（16～17） 校内マラソン大会	白川郷などの合掌造集落、世界遺産
平成 8		1996	1. 27 2. 7 2. 18 2. 21 3. 12 3. 13 4. 8 4. 9 4. 10 5. 14 5. 12 6. 18 6. 23 7. 18 7. 20 7. 27 7. 30	平成 8 年度推薦入学試験 3 年生合宿研修（7～9）三瓶青年の家 平成 8 年度入学者選抜検査 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業研究発表会（21～22） 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式（M7 期、I4 期） 終業式 平成 8 年度始業式 平成 8 年度入学式 新入生オリエンテーション 校内 新入生合宿研修（14～15）徳地少年自然の家 クラスマッチ 商船学科 4 年生大島丸海上実習（18～21）大阪方面 情報工学科 4 年生工場見学旅行（18～21）関東方面 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行（21～23）関東方面 奨学後援会通常総会及び体育後援会通常総会 第 31 回全国商船高専潜艇大会（18～19）鳥羽商船高専 第 32 回中国地区高専体育大会（21～23）呉・広島高専 奨学後援会地方部会（北九州市） 大島丸研究航海（30～8/2）	橋本龍太郎連立内閣が成立

			8. 3 公開講座「パソコン教室」(8/3~5、9/22~23) 8. 6 大島丸サマークルーズ (6~7) 8. 9 公開講座「海洋教室」(9~11) 8.10 第 31 回全国高専体育大会 (10~11) 九州 8.30 商船学科卒業研究発表 9. 3 商船学科 2 年生大島丸海上実習 (3~5) 丸亀方面 9.10 商船学科 1 年生大島丸海上実習 (10~11) 別府方面 9.19 商船学科席上課程修了式 9.26 商船学科卒業証書授与式 (S4 期) 10. 1 創立 98 周年記念日及び慰靈祭 商船学科 3 年生大島丸海上実習 (15~17) 関門方面 10.20 一日学校見学会 11. 3 第 27 回商船祭 11. 8 第 32 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (8~14) 広島商船高専 11.13 クラスマッチ 11.14 商船学科 4 年生 N コース大島丸海上実習 (14~15) 松山方面 11.21 商船学科 4 年生 E コース大島丸海上実習 (21~22) 松山方面 1.26 校内マラソン大会	国連総会で包括的核実験禁止条約が採択
平成 9	1997		1. 25 平成 9 年度推薦入学者試験 2. 5 3 年生合宿研修 (5~7) 三瓶青年の家 2.19 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業研究発表会 (19~20) 2.23 平成 9 年度入学者選抜検査 3. 11 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 (M8 期、I5 期) 3. 12 終業式 4. 8 平成 9 年度始業式 4. 9 平成 9 年度入学式 4. 10 新入生オリエンテーション 校内 5. 13 商船学科 3 年生 N コース大島丸海上実習 5. 15 新入生合宿研修 (15~16) 徳地少年自然の家 5. 15 商船学科 2 年生大島丸海上実習 5. 20 商船学科 3 年生 E コース大島丸海上実習 6. 11 クラスマッチ	クリントン氏が米大統領に再選 ペルー大使館公邸で人質事件が起こる 原爆ドーム、世界遺産

			<p>6. 17 商船学科 4 年生大島丸海上実習 (17~20) 神戸方面</p> <p>6. 17 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行 (17~20) 関東方面</p> <p>6. 17 情報工学科 4 年生工場見学旅行 (17~20) 関東方面</p> <p>6. 22 奨学後援会総会</p> <p>6. 28 公開講座「ワープロ教室」(28~29)</p> <p>7. 19 第 33 回中国地区高専体育大会 (19~21) 宇部・米子高専</p> <p>7. 20 第 32 回全国商船高専漕艇大会 (20~22) 弓削商船高専</p> <p>7. 29 大島丸研究航海 (29~8/1)</p> <p>8. 5 大島丸サマークルーズ (5~7)</p> <p>8. 9 第 32 回全国高専体育大会 (9~10) 東海、北陸</p> <p>8. 23 公開講座「毛利元就と巣島の古戦場を訪ねる」</p> <p>8. 23 公開講座「ワープロ、インターネット」(23~24)</p> <p>8. 29 商船学科卒業研究発表</p> <p>9. 2 商船学科 2 年生大島丸海上実習 (2~4) 丸亀方面</p> <p>9. 9 商船学科 1 年生大島丸海上実習 (9~10) 別府方面</p> <p>9. 22 商船学科席上課程修了式</p> <p>9. 26 商船学科卒業証書授与式</p> <p>10. 1 創立記念日</p> <p>10. 14 商船学科 3 年生大島丸海上実習 (14~16) 小倉方面</p> <p>10. 19 一日学校見学会</p> <p>10. 31 創立 100 周年記念行事 (31~11/3)</p> <p>11. 3 第 28 回商船祭</p> <p>11. 7 第 33 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (7~9) 米子高専</p> <p>11. 9 ロボコン中国大会 本校</p> <p>11. 12 クラスマッチ</p> <p>11. 13 商船学科 4 年生 N コース大島丸海上実習 (13~14) 松山方面</p> <p>11. 20 商船学科 4 年生 E コース大島丸海上実習 (20~21) 松山方面</p> <p>11. 27 校内マラソン大会</p> <p>12. 13 公開講座「ウィンドウズ 95 とのつきあい方」(13~14)</p>	イギリスが香港を中国に返還
--	--	--	---	---------------

平成 10	1998	1. 24 2. 4 2. 22 2. 25 3. 11 3. 12 4. 8 4. 9 4. 10 5. 12 5. 14 5. 14 5. 19 6. 16 6. 16 6. 16 6. 25 6. 28 7. 18 7. 28 8. 4 8. 8 8. 22 8. 28 8. 29 9. 2 9. 8 9. 22 9. 25 10. 1 10. 13	平成 10 年度推薦入学試験 3 年生合宿研修 (4~6) 三瓶青年の家 平成 10 年度入学者選抜検査 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業研究発表会 (25~26) 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業証書授与式 終業式 平成 10 年度始業式 平成 10 年度入学式 新入生オリエンテーション 校内 商船学科 3 年生 N コース大島丸海上実習 新入生合宿研修 (14~15) 徳地少年自然の家 商船学科 2 年生大島丸海上実習 商船学科 3 年生 E コース大島丸海上実習 商船学科 4 年生大島丸海上実習 (16~19) 神戸方面 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行 (16~19) 関東方面 情報工学科 4 年生工場見学旅行 (16~19) 関東方面 クラスマッチ 奨学後援会総会 第 34 回中国地区高専体育大会 (18~20) 松江・津山高専 大島丸研究航海・留学生補習航海 (28~31) 大島丸サマークルーズ (4~6) 第 33 回全国高専体育大会 (8~9) 関東、信越 公開講座「戦艦 陸奥 歴史探訪」 商船学科卒業研究発表 公開講座「Windows 95 入門／インターネットの楽しみ方」(29~30) 商船学科 2 年生大島丸海上実習 (2~4) 丸亀方面 商船学科 1 年生大島丸海上実習 (8~9) 別府方面 商船学科席上課程修了式 商船学科卒業証書授与式 創立記念日 商船学科 3 年生大島丸海上実習 (13~15) 小倉方面	第 18 回冬季オリンピック、長野で開催 化学兵器禁止条約が発効 小渕恵三内閣が成立 日韓共同宣言	

			10. 18 10. 25 11. 3 11. 7 11. 11 11. 12 11. 13 11. 15 11. 19 11. 26	一日学校見学会 ロボコン中国大会 竹原 第 29 回商船祭 第 33 回全国商船高専漕艇大会 (7~8) 広島 商船高専 クラスマッチ 商船学科 4 年生 N コース 大島丸海上実習 (12 ~13) 松山方面 第 34 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (13~15) 松江高専 一日学校見学会 商船学科 4 年生 E コース 大島丸海上実習 (19 ~20) 松山方面 校内マラソン大会	地球温暖化防止京都会議 の開催
平成 11		1999	1. 23 1. 27 2. 6 2. 21 2. 24 3. 10 3. 12 4. 8 4. 9 4. 12 5. 11 5. 13 5. 13 5. 18 6. 15 6. 15 6. 15 6. 23 6. 27 7. 17 7. 19	平成 11 年度推薦入学試験 3 年生合宿研修 (27~29) 三瓶青年の家 公開講座「パソコン組立教室」(6~7) 平成 11 年度入学者選抜検査 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業研究 発表会 (24~25) 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業証書 授与式 終業式 平成 11 年度始業式 平成 11 年度入学式 新入生オリエンテーション 校内 商船学科 3 年生 N コース 大島丸海上実習 新入生合宿研修 (13~14) 徳地少年自然の 家 商船学科 2 年生 大島丸海上実習 商船学科 3 年生 E コース 大島丸海上実習 商船学科 4 年生 大島丸海上実習 (15~18) 神 戸方面 電子機械工学科 4 年生 工場見学旅行 (15~18) 関東方面 情報工学科 4 年生 工場見学旅行 (15~18) 関 東方面 クラスマッチ 奨学後援会総会 第 34 回全国商船高専漕艇大会 (17~18) 富 山商船高専 第 35 回中国地区高専体育大会 (19~21) 広 島商船・徳山高専	E U 単一通貨ユーロ、使 用開始 ガイドライン関連法が成 立

			<p>7. 24 公開講座「3 次元コンピュータグラフィックスにチャレンジ」(24~25)</p> <p>7. 27 大島丸研究航海 (28~30)</p> <p>7. 30 公開講座「インターネット入門」(30~8/1)</p> <p>8. 3 大島丸サマークルーズ (3~5)</p> <p>8. 7 第 34 回全国高専体育大会 (7~8) 四国</p> <p>8. 7 公開講座「マルチメディア入門」(7~8)</p> <p>8. 21 公開講座「朝鮮通信使の足跡を訪ねて」(上関町)</p> <p>8. 30 商船学科卒業研究発表</p> <p>9. 7 商船学科 1 年生大島丸海上実習 (7~8) 別府方面 東海村の核燃料施設で臨界事故</p> <p>9. 21 商船学科席上課程修了式</p> <p>9. 27 商船学科卒業証書授与式</p> <p>10. 1 創立記念日</p> <p>10. 13 商船学科 2 年生大島丸海上実習 (13~15) 丸亀方面</p> <p>10. 17 一日学校見学会</p> <p>10. 19 商船学科 3 年生大島丸海上実習 (19~21) 小倉方面</p> <p>10. 24 ロボコン中国大会 呉高専</p> <p>11. 3 第 30 回商船祭</p> <p>11. 11 商船学科 4 年生E コース大島丸海上実習 (11~12) 松山方面</p> <p>11. 12 第 35 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (12~14) 広島商船高専</p> <p>11. 17 クラスマッチ</p> <p>11. 18 商船学科 4 年生N コース大島丸海上実習 (18~19) 松山方面</p> <p>12. 2 校内マラソン大会</p>	
--	--	--	--	--

平成 12	2000	1. 22 1. 26 2. 20 2. 23 3. 10 3. 14 4. 10 4. 11 4. 12 5. 9 5. 11 5. 11 5. 13 5. 16 6. 20 6. 20 6. 20 6. 25 6. 28 7. 2 7. 4 7. 20 7. 22 7. 29 8. 1 8. 5 8. 6 8. 7 8. 8	平成 12 年度推薦入学試験 3 年生合宿研修 (26~28) 三瓶青年の家 平成 12 年度入学者選抜検査 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業研究発表会 (23~24) 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業証書授与式 終業式 平成 12 年度始業式 平成 12 年度入学式 新入生オリエンテーション 校内 商船学科 3 年生 N コース大島丸海上実習 新入生合宿研修 (11~12) 徳地少年自然の家 商船学科 2 年生大島丸海上実習 公開講座「パソコン教室-取り込もう画像-」(13~14) 商船学科 3 年生 E コース大島丸海上実習 商船学科 4 年生大島丸海上実習 (20~23) 神戸方面 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行 (20~23) 関東方面 情報工学科 4 年生工場見学旅行 (20~23) 関東方面 奨学後援会総会 クラスマッチ 公開講座「ソーラーボートで遊ぼう！」 商船学科 1 年生大島丸海上実習 (4~5) 尾道方面 第 35 回全国商船高専漕艇大会 (20~21) 烏羽商船高専 第 36 回中国地区高専体育大会 (22~24) 本校・宇部高専 公開講座「市民生活と法」 大島丸研究航海 (1~3) 公開講座「Mac で作ろうアニメーション 1」(5~6) 公開講座「空き缶スターリングエンジンを作ろう！」 公開講座「Mac で作ろうアニメーション 2」(7~8) 大島丸サマークルーズ (8~10)	ロシア大統領、ブーチン当選 森喜朗内閣が成立 九州沖縄サミットの開催	

			<p>8. 9 公開講座「インターネット入門-ホームページを作ろう 1-」(9~10)</p> <p>8. 18 公開講座「もの作り体験講座-電池とモーターで動く-」(18~19)</p> <p>8. 26 公開講座「新しい基本ソフト Linux を使ってみよう」(26~27)</p> <p>8. 30 商船学科卒業研究発表</p> <p>9. 21 商船学科席上課程修了式</p> <p>9. 26 商船学科卒業証書授与式 (S 8 期)</p> <p>9. 30 慰靈祭</p> <p>10. 1 創立 103 周年記念日</p> <p>10. 11 商船学科 2 年生大島丸海上実習(11~13) 丸亀方面</p> <p>10. 15 一日学校見学会</p> <p>10. 15 ロボコン中国大会 津山高専</p> <p>10. 17 商船学科 3 年生大島丸海上実習(17~19) 小倉方面</p> <p>11. 3 第 31 回商船祭</p> <p>11. 9 商船学科 4 年生 N コース大島丸海上実習 (9~10) 松山方面</p> <p>11. 10 第 36 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (10~12) 宇部高専</p> <p>11. 16 商船学科 4 年生 E コース大島丸海上実習 (16~17) 松山方面</p> <p>11. 21 商船学科 1 年生大島丸海上実習(21~22) 松山方面</p> <p>11. 25 公開講座「インターネット入門-ホームページを作ろう 2-」(25~26)</p> <p>12. 7 校内マラソン大会</p>	
平成 13	2001		<p>1. 20 平成 13 年度推薦入学試験</p> <p>1. 24 3 年生合宿研修 (24~26) 三瓶青年の家</p> <p>2. 18 平成 13 年度入学者選抜検査</p> <p>2. 21 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業研究発表会 (21~22)</p> <p>3. 13 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業証書授与式 (M12 期、 I 9 期)</p> <p>3. 14 終業式</p> <p>4. 9 平成 13 年度始業式</p> <p>4. 10 平成 13 年度入学式</p> <p>4. 11 新入生オリエンテーション 校内</p> <p>5. 10 新入生合宿研修 (10~11) 德地少年自然の家</p> <p>5. 10 商船学科 2 年生大島丸海上実習</p>	<p>ブッシュ氏が米大統領に就任</p> <p>小泉純一郎内閣が成立</p>

		<p>5. 16 クラスマッチ</p> <p>5. 22 商船学科 3 年生 N コース 大島丸海上実習</p> <p>5. 29 商船学科 3 年生 E コース 大島丸海上実習</p> <p>6. 24 奨学後援会総会</p> <p>6. 26 商船学科 4 年生 大島丸海上実習 (26~29) 神戸方面</p> <p>6. 26 電子機械工学科 4 年生 工場見学旅行 (26~29) 関東方面</p> <p>6. 26 情報工学科 4 年生 工場見学旅行 (26~29) 関東方面</p> <p>7. 14 公開講座「ソーラーボートで遊ぼう！」</p> <p>7. 19 第 37 回 中国地区高専体育大会 (19~21) 津山・呉高専</p> <p>7. 19 第 36 回 全国商船高専漕艇大会 (19~21) 弓削商船高専</p> <p>7. 29 公開講座「科学実験を行おう」</p> <p>7. 31 大島丸研究航海 (31~8/3)</p> <p>8. 6 公開講座「Mac で作ろうアニメーション」(6~7)</p> <p>8. 5 公開講座「空き缶スターリングエンジンカー製作」</p> <p>8. 7 大島丸サマークルーズ (7~9)</p> <p>8. 16 公開講座「もの作り体験講座-電池とモーターで動く-」(16~17)</p> <p>8. 30 商船学科卒業研究発表</p> <p>9. 20 商船学科席上課程修了式</p> <p>9. 26 商船学科卒業証書授与式 (S9期)</p> <p>10. 1 創立 104 周年記念日及び慰靈祭</p> <p>10. 10 商船学科 2 年生 大島丸海上実習 (10~12) 丸亀方面</p> <p>10. 17 商船学科 1 年生 大島丸海上実習 (17~18) 松山方面</p> <p>10. 21 一日学校見学会</p> <p>10. 21 ロボコン中国大会 徳山高専</p> <p>10. 23 商船学科 3 年生 大島丸海上実習 (23~25) 小倉、別府方面</p> <p>11. 3 第 32 回 商船祭</p> <p>11. 9 第 37 回 中国地区高専体育大会 (冬季大会) (9~11) 津山高専</p> <p>11. 13 商船学科 4 年生 N コース 大島丸海上実習 (13~14) 松山方面</p> <p>11. 20 商船学科 4 年生 E コース 大島丸海上実習 (20~21) 松山方面</p>	<p>アメリカ同時多発テロが 起る</p> <p>テロ対策特別措置法が成 立</p>
--	--	--	--

			12. 5	校内マラソン大会	
平成 14		2002	1. 23 1. 26 2. 20 2. 24 3. 11 3. 12 4. 8 4. 9 4. 10 4. 30 5. 9 5. 16 5. 21 5. 28 6. 23 6. 25 6. 25 6. 25 7. 6 7. 12 7. 19 7. 30 8. 4 8. 6 8. 10 8. 24 8. 26 8. 30 9. 19 9. 25 10. 1 10. 10	3年生合宿研修（23～25） 三瓶青年の家 平成 14 年度推薦入学試験 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業研究発表会（20～21） 平成 14 年度入学者選抜検査 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業証書授与式（M13 期、 I 10 期） 終業式 平成 14 年度始業式 平成 14 年度入学式 新入生オリエンテーション 校内 新入生合宿研修（30～5/1） 徳島少年自然の家 商船学科 2 年生大島丸海上実習 クラスマッチ 商船学科 3 年生 N コース大島丸海上実習 商船学科 3 年生 E コース大島丸海上実習 奨学後援会総会 商船学科 4 年生大島丸海上実習（25～28） 神戸方面 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行（25～28） 関東方面 情報工学科 4 年生工場見学旅行（25～28） 関東方面 公開講座「ソーラーポートで遊ぼう！」 第 37 回全国商船高専漕艇大会（12～14） 本校 第 38 回中国地区高専体育大会（19～21） 米子・松江高専 大島丸研究航海（30～8/2） 公開講座「スターリングエンジン・カー製作」 大島丸サマークルーズ（6～8） 公開講座「少年サッカー教室」 公開講座「コンピュータネットワークとユーザ管理の基礎」（24～25） 公開講座「もの作り体験講座-電池とモーターで動く-」（26～27） 商船学科卒業研究発表 商船学科席上課程修了式 商船学科卒業証書授与式（S 10 期） 創立 105 周年記念日及び慰靈祭 クラスマッチ	日韓共同のサッカーW杯が開幕 日朝首脳会議

			10. 22 商船学科 3 年生大島丸海上実習 (22~24) 小倉方面 10. 26 一日学校見学会 10. 29 商船学科 1 年生大島丸海上実習 (29~30) 松山方面 11. 3 第 33 回商船祭 11. 6 商船学科 2 年生大島丸海上実習 (6~8) 丸亀方面 11. 8 第 38 回中国地区高専体育大会 (冬季大会) (8~10) 松江高専 11. 12 商船学科 4 年生 N コース大島丸海上実習 (12~13) 松山方面 11. 19 商船学科 4 年生 E コース大島丸海上実習 (19~20) 松山方面 12. 5 校内マラソン大会	
平成 15		2003	1. 25 平成 15 年度推薦入学試験 1. 29 3 年生合宿研修 (29~31) 三瓶青年の家 2. 19 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業研究発表会 (19~20) 2. 23 平成 15 年度入学者選抜検査 3. 7 電子機械工学科・情報工学科 5 年生卒業証書授与式 (M14 期、 I 11. 期) 3. 7 終業式 4. 8 平成 15 年度始業式 4. 9 平成 15 年度入学式 4. 10 新入生オリエンテーション 校内 4. 24 新入生合宿研修 (24~25) 徳地少年自然の家 5. 8 商船学科 2 年生大島丸海上実習 5. 15 クラスマッチ 5. 20 商船学科 3 年生 N コース大島丸海上実習 5. 27 商船学科 3 年生 E コース大島丸海上実習 6. 22 奨学後援会総会 6. 24 商船学科 4 年生大島丸海上実習 (24~27) 神戸方面 6. 24 電子機械工学科 4 年生工場見学旅行 (24~27) 関東方面 6. 25 情報工学科 4 年生工場見学旅行 (24~27) 関東方面 7. 8 商船学科 1 年生大島丸海上実習 (8~9) 別府方面 7. 12 公開講座「ソーラーボートで遊ぼう！」 7. 18 第 39 回中国地区高専体育大会 (18~20) 広	イラク戦争

				島・津山・宇部高専 7. 21 第 38 回全国商船高専漕艇大会（21～22）富山 高専 7. 29 大島丸研究航海（29～8/1） 8. 3 公開講座「ジャンピング・スターリングエンジンカー製作！」 8. 4 公開講座「パズルから入る数学入門」 8. 5 大島丸サマークルーズ（5～7） 8. 9 公開講座「少年・少女サッカー教室」 8. 23 公開講座「針穴写真入門」 8. 25 公開講座「もの作り体験講座-電池とモーターで動く-」（25～26） 8. 29 商船学科卒業研究発表 9. 6 公開講座「パーソナルコンピュータのメンテナンス技術指導」（6～7） 9. 12 公開講座「天体観測会」 9. 12 商船学科席上課程修了式 9. 25 商船学科卒業証書授与式（S11期） 10. 1 創立 106 周年記念日及び慰靈祭 10. 14 クラスマッチ 10. 15 商船学科 3 年生大島丸海上実習（15～17） 下 関方面 10. 21 商船学科 1 年生大島丸海上実習（21～22） 松 山方面 10. 26 一日学校見学会 10. 29 商船学科 2 年生大島丸海上実習（29～31） 丸 龜方面 11. 3 第 34 回商船祭 11. 7 第 38 回中国地区高専体育大会（冬季大会） （7～9） 広島 11. 12 商船学科 4 年生 N コース大島丸海上実習（12 ～13） 松山方面 11. 15 公開講座「初心者のためのパソコン講座」 11. 19 商船学科 4 年生 E コース大島丸海上実習（19 ～20） 松山方面 12. 4 校内マラソン大会	
平成 16	2004	1. 24	平成 16 年度推薦入学試験		
		1. 28	3 年生合宿研修（28～30） 芸北文化ランド		
		2. 18	電子機械工学科・情報工学科卒業研究発表会 （18～19）		
		2. 22	平成 16 年度入学者選抜検査		
		3. 10	電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 （M15 期、 I 12 期）		

		<p>3. 10 終業式</p> <p>3. 22 実習船「すばる」竣工</p> <p>4. 1 独立行政法人へ移行</p> <p>4. 8 平成16年度始業式</p> <p>4. 12 平成16年度入学式</p> <p>4. 13 新入生オリエンテーション 校内</p> <p>5. 6 新入生合宿研修（6～7） 徳地少年自然の家</p> <p>5. 10 商船学科2年生大島丸海上実習</p> <p>4. 23 公開講座「天体観測会－金星・火星・木星・土星を見よう－」</p> <p>5. 12 商船学科2年生大島丸海上実習</p> <p>5. 18 クラスマッチ</p> <p>6. 15 商船学科6年生Nコース大島丸海上実習</p> <p>6. 22 電子機械工学科4年生工場見学旅行（22～25）関東方面</p> <p>6. 22 情報工学科4年生工場見学旅行（22～25）関東方面</p> <p>6. 23 商船学科4年生大島丸海上実習（23～25）福山方面</p> <p>6. 27 獎学後援会総会</p> <p>6. 29 商船学科3年生Eコース大島丸海上実習</p> <p>7. 2 公開講座「Jazzを聴こう！」</p> <p>7. 6 商船学科1年生大島丸海上実習（6～7）別府方面</p> <p>7. 9 第41回中国地区高専体育大会（9～11）硬式野球 松江高専</p> <p>7. 10 公開講座「ソーラーボートで遊ぼう！」</p> <p>7. 16 第41回中国地区高専体育大会（16～18）松江・徳山・呉高専</p> <p>7. 24 公開講座「デジカメ写真を加工しよう」</p> <p>7. 27 大島丸研究航海（27～29）</p> <p>7. 31 公開講座「英語でコミュニケーションしよう！」</p> <p>8. 1 公開講座「もの作り体験講座1」</p> <p>8. 2 大島丸サマークルーズ（2～4）</p> <p>8. 7 公開講座「電腦的音響講座－コンピューターで音を解析しよう合成しよう－」</p> <p>8. 7 公開講座「少年・少女サッカー教室 自分のキックフォームを見てみよう！」</p> <p>8. 21 公開講座「ピンホール写真入門」</p> <p>8. 22 公開講座「ものづくり体験講座1 環境にやさしい熱空気エンジン」</p> <p>8. 23 公開講座「ものづくり体験講座2 電池とモーターで動く」（23～24）</p>	<p>有事関連7法が成立</p> <p>イラク暫定政府が発足</p>
--	--	--	------------------------------------

			<p>8. 30 学校見学会</p> <p>9. 8 商船学科卒業研究発表</p> <p>9. 14 商船学科席上課程修了式</p> <p>9. 24 商船学科卒業証書授与式（S12期）</p> <p>10. 1 創立107周年記念日及び慰靈祭</p> <p>10. 13 商船学科2年生大島丸海上実習(13~15) 丸亀方面</p> <p>10. 24 一日学校見学会</p> <p>10. 25 クラスマッチ</p> <p>10. 27 商船学科1年生大島丸海上実習(27~28) 松山方面</p> <p>10. 30 公開講座「映画で学ぶアメリカの歴史1」</p> <p>11. 3 第35回商船祭</p> <p>11. 6 公開講座「映画で学ぶアメリカの歴史2」</p> <p>11. 12 第40回中国地区高専体育大会（冬季大会） (12~14) 松江高専</p> <p>11. 13 公開講座「映画で学ぶアメリカの歴史3」</p> <p>11. 18 商船学科4年生Nコース大島丸海上実習(18~19) 松山方面</p> <p>11. 25 商船学科4年生Eコース大島丸海上実習(25~26) 松山方面</p> <p>12. 8 校内マラソン大会</p> <p>12. 14 公開講座「雑学おもしろ講座 忠臣蔵を斬る！」</p>	ブッシュ氏が米大統領に再選
平成17	2005		<p>1. 19 商船学科3年生大島丸海上実習(19~21) 松山方面</p> <p>1. 22 平成17年度推薦入学試験</p> <p>1. 26 3年生合宿研修(26~28) 芸北文化ランド</p> <p>2. 16 電子機械工学科・情報工学科卒業研究発表会 (16~17)</p> <p>2. 20 平成17年度入学者選抜検査</p> <p>3. 9 終業式</p> <p>3. 9 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 (M16期、I13期)</p> <p>4. 1 専攻科設置(海洋交通システム学専攻、電子・情報システム工学専攻)</p> <p>4. 1 カリキュラム改編</p> <p>4. 5 始業式</p> <p>4. 6 平成17年度入学式</p> <p>4. 7 新入生オリエンテーション 校内</p> <p>4. 11 平成17年度専攻科入学式(電子・情報システム) (第1期生)</p> <p>5. 9 新入生合宿研修(9~10) 徳地少年自然の家</p>	京都議定書が発効

		<p>5. 10 商船学科 2 年生大島丸海上実習</p> <p>5. 13 公開講座「天体観測会」</p> <p>5. 17 商船学科 3 年生 N コース大島丸海上実習</p> <p>5. 24 商船学科 3 年生 E コース大島丸海上実習</p> <p>6. 21 商船学科 1 年生大島丸海上実習(21~22) 別府方面</p> <p>6. 26 獎学後援会総会</p> <p>6. 28 商船学科 4 年生大島丸海上実習 (28~7/1) 神戸方面</p> <p>7. 5 出前講座「サバイバルレッスン」(5~6)</p> <p>7. 8 第 41 回中国地区高専体育大会 (8~10) 本校・米子・広島高専</p> <p>7. 15 第 40 回全国商船高専漕艇大会 (15~17) 本校</p> <p>7. 18 公開講座「ソーラーボートを作ろう！」</p> <p>7. 29 公開講座「魅惑のジャズをあなたに」</p> <p>7. 30 公開講座「英語でコミュニケーションしよう！」</p> <p>7. 31 公開講座「デジカメ写真を加工しよう！1」</p> <p>8. 5 大島丸サマークルーズ (5~7)</p> <p>8. 6 公開講座「デジカメ写真を加工しよう！2」</p> <p>8. 6 公開講座「少年・少女サッカー教室」</p> <p>8. 6 公開講座「自然と芸術に秘められた数学」</p> <p>8. 7 公開講座「ジャンピングボード製作！」</p> <p>8. 7 公開講座「竹工作教室」</p> <p>8. 9 公開講座「親子サバイバルキャンプ」</p> <p>8. 12 公開講座「パワーポイントを使ったプレゼンテーションに挑戦」</p> <p>8. 12 公開講座「クルーザーで行く朝鮮通信使の航海の足跡」</p> <p>8. 19 公開講座「F L A S H アニメーションに挑戦！」</p> <p>8. 20 公開講座「ピンホール写真入門」</p> <p>8. 22 公開講座「もの作り体験講座－電池とモーターで動く－」(22~23)</p> <p>8. 22 公開講座「初心者向け 設計製図と C A D」 (22・24・26)</p> <p>8. 30 学校見学会</p> <p>9. 6 商船学科卒業研究発表</p> <p>9. 9 商船学科席上課程修了式</p> <p>9. 10 公開講座「幕末講座 幕長戦争（四境戦争） 大島口を巡る①」</p> <p>9. 14 大島丸研究航海 (14~17)</p> <p>9. 27 商船学科卒業証書授与式 (S13 期)</p>	
--	--	--	--

			9. 30 10. 2 10. 3 10. 12 10. 17 10. 18 10. 25 10. 30 11. 3 11. 8 11. 11 11. 12 11. 17 11. 24 12. 17 12. 20 12. 20 12. 22	創立 108 周年記念日及び慰靈祭 公開講座「パソコンのメンテナンス技術指導」 平成 17 年度海洋交通システム専攻科入学式 商船学科 2 年生大島丸海上実習(12~14) 丸 亀方面 公開講座「天体観測会 ほんの少しですが、 部分月食がみえるかな?」 クラスマッチ 商船学科 3 年生大島丸海上実習(25~27) 開 門方面 一日学校見学会 第 36 回商船祭 商船学科 1 年生大島丸海上実習(8~9) 松 山方面 第 41 回中国地区高専体育大会(冬季大会) (11~13) 本校 公開講座「女性学講座 日本の歴史を彩る悪 女・賢女・愚女」 商船学科 4 年生 N コース大島丸海上実習(17 ~18) 松山方面 商船学科 4 年生 E コース大島丸海上実習(24 ~25) 松山方面 公開講座「おもしろ雑学講座第二弾 幕末維 新のアウトロー清水次郎長」 出前講座「サバイバルレッスン」 校内マラソン大会 青島大学と学術交流協定を締結	郵政民営化法が成立
平成 18		2006	1. 22 1. 25 2. 15 2. 19 2. 23 3. 7 4. 2 4. 2 4. 3 4. 3 4. 13 5. 1	平成 18 年度推薦入学試験 3 年生合宿研修(25~27) 芸北文化ランド 電子機械工学科・情報工学科卒業研究発表会 (15~16) 平成 18 年度入学者選抜検査 終業式 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 (M17 期、 I 14 期) 平成 18 年度入学式 平成 18 年度専攻科入学式(電子・情報システ ム工学専攻) 平成 18 年度始業式 新入生オリエンテーション 校内 新入生合宿研修(13~14) 德地少年自然の 家 防火訓練	

		<p>5. 9 商船学科 2 年生大島丸海上実習</p> <p>5. 12 公開講座「天体観測会」</p> <p>5. 13 公開講座「幕末講座 郷土の偉人 青木周弼—歴史を多角的にみようー」</p> <p>5. 16 商船学科 3 年生 N コース大島丸海上実習</p> <p>5. 23 商船学科 3 年生 E コース大島丸海上実習</p> <p>6. 21 商船学科 1 年生大島丸海上実習(21~22) 別府方面</p> <p>6. 25 獎学後援会総会</p> <p>6. 27 商船学科 4 年生大島丸海上実習(27~30) 神戸方面</p> <p>7. 7 第 42 回中国地区高専体育大会(7~9) 津山・宇部・松江高専</p> <p>7. 22 第 41 回全国商船高専漕艇大会(22~23) 富山</p> <p>7. 15 公開講座「ソーラーボートを作ろう！」</p> <p>7. 16 公開講座「クルーザーで行く朝鮮通信使の航海の足跡」</p> <p>7. 22 公開講座「針穴写真入門—ピンホールカメラの製作から撮影・現像まで」</p> <p>7. 22 公開講座「ことばの世界 1 いろは歌と五十音図」</p> <p>7. 28 公開講座「映画で学ぶアメリカ文学 「カサブランカ」と「スカーレット・レター」」</p> <p>7. 29 公開講座「パソコンで自分の家を設計してみよう」</p> <p>7. 29 公開講座「親子サバイバルキャンプ」(29~30)</p> <p>8. 5 公開講座「デジカメ写真を加工しようⅢ」</p> <p>8. 5 公開講座「ヨット教室：ヨットに乗ろう！！」</p> <p>8. 5 公開講座「少年・少女サッカー教室」</p> <p>8. 5 公開講座「数学者～真理の探究者達～」</p> <p>8. 6 公開講座「もの作り体験講座」</p> <p>8. 6 大島丸サマークルーズ(6~7)</p> <p>8. 18 公開講座「もの作り体験講座—電池とモーターで動くー」(18~19)</p> <p>8. 21 公開講座「初心者向け 設計製図と C A D」(21・23・25)</p> <p>8. 29 学校見学会</p> <p>9. 2 公開講座「幕末講座 幕長戦争（四境戦争）大島口を巡る」</p> <p>9. 4 商船学科卒業研究発表</p> <p>9. 8 商船学科席上課程修了式</p> <p>9. 12 大島丸研究航海(12~14)</p>	安倍晋三内閣が成立
--	--	--	-----------

			<p>9. 24 商船学科卒業証書授与式（S14期）</p> <p>9. 29 慰靈祭</p> <p>10. 1 創立109周年記念日</p> <p>10. 2 平成18年度専攻科入学式（海洋交通システム専攻科）</p> <p>10. 14 公開講座「ことばの世界2 平家物語「富士川合戦」を読む」</p> <p>10. 17 クラスマッチ</p> <p>10. 18 商船学科1年生大島丸海上実習（18～19）松山方面</p> <p>10. 22 一日学校見学会</p> <p>10. 24 商船学科3年生大島丸海上実習（24～26）閔門方面</p> <p>11. 1 青島大学との研究シンポジウム（ACOT1）開催</p> <p>11. 3 第37回商船祭</p> <p>11. 8 商船学科2年生大島丸海上実習（8～10）丸亀方面</p> <p>11. 10 第42回中国地区高専体育大会（冬季大会）（10～12）津山高専</p> <p>11. 14 商船学科4年生Nコース大島丸海上実習（14～15）松山方面</p> <p>11. 18 公開講座「おもしろ雑学講座第3弾 「大阪学はどうでっか？！」」</p> <p>11. 21 商船学科4年生Eコース大島丸海上実習（21～22）松山方面</p> <p>11. 23 公開講座「パソコン環境設定講座」</p> <p>12. 9 公開講座「ことばの世界3 古代日本人と外国語」</p> <p>12. 19 校内マラソン大会</p>	
平成19	2007		<p>1. 21 平成19年度推薦入学試験</p> <p>1. 24 3年生合宿研修（24～26）芸北文化ランド</p> <p>2. 7 電子機械工学科・情報工学科5年生卒業研究発表会（7～8）</p> <p>2. 18 平成19年度入学者選抜検査</p> <p>3. 2 終業式</p> <p>3. 18 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式</p> <p>4. 1 平成19年度入学式</p> <p>4. 1 平成19年度専攻科入学式（電子・情報システム工学専攻）</p> <p>4. 2 始業日</p> <p>4. 2 1年生オリエンテーション</p> <p>4. 3 大島丸体験航海（S1・M1）</p>	潘基文氏が国連事務総長に就任

		<p>4. 4 大島丸体験航海 (I1)</p> <p>4. 19 1年生合宿研修 (19~20) 徳地少年自然の家 防火訓練</p> <p>5. 8 大島丸実習 (1日) S2</p> <p>5. 15 大島丸実習 (1日) S3N</p> <p>5. 22 大島丸実習 (1日) S3E</p> <p>6. 19 大島丸実習 (19~20) S1</p> <p>6. 24 獎学後援会 総会</p> <p>6. 26 大島丸実習 (26~29) S4 (神戸)</p> <p>7. 6 第43回中国地区高専体育大会 (6~8) (徳山・ 吳・本校)</p> <p>7. 20 第42回全国商船高専漕艇大会 (20~21) (鳥 羽)</p> <p>8. 3 終業日</p> <p>8. 18 第42回全国高専体育大会 (18~26) (四国地 区)</p> <p>8. 28 オープンキャンパス</p> <p>9. 7 商船学科席上課程修了式</p> <p>9. 24 商船学科卒業証書授与式</p> <p>9. 24 専攻科修了証書授与式 (海洋交通システム学 専攻) (第1期生 6名)</p> <p>10. 1 創立記念日</p> <p>10. 2 平成19年度専攻科入学式 (海洋交通システム 学専攻)</p> <p>10. 2 始業日</p> <p>10. 6 創立110周年・高専創立40周年記念式典</p> <p>10. 7 創立110周年・高専創立40周年記念講演会 講演:「モノ作りを語る」小森陽一氏 (漫画「トッキュー」原作者)</p> <p>10. 15 中国地区高専ロボコン (吳)</p> <p>10. 16 クラスマッチ</p> <p>10. 17 大島丸実習 (17~19) S2 (丸亀)</p> <p>10. 21 オープンキャンパス</p> <p>10. 23 大島丸実習 (23~25) S3 (関門)</p> <p>10. 30 大島丸実習 (30~31) S1 (松山)</p> <p>11. 3 商船祭</p> <p>11. 9 第43回中国地区高専体育大会 (9~11) (冬 季・吳)</p> <p>11. 13 大島丸実習 (13~14) S4N (松山)</p> <p>11. 20 大島丸実習 (20~21) S4E (松山)</p> <p>11. 25 就職・進学懇談会</p> <p>11. 28 後期中間試験 (28~12/4)</p> <p>12. 20 校内マラソン大会</p>	<p>国民投票法が成立</p> <p>福田康夫内閣が成立</p>
--	--	---	----------------------------------

			12. 21	終業日	
平成 20		2008	1. 23 2. 13 2. 14 2. 29 3. 16 3. 16 4. 6 4. 6 4. 7 4. 7 4. 8 4. 9 5. 1 5. 8 5. 13 5. 13 5. 20 5. 27 6. 22 6. 24 6. 25 7. 4 7. 4 7. 8 8. 8 8. 17 8. 26 9. 5 9. 21 9. 21 10. 1 10. 2 10. 2 10. 3 10. 10 10. 11	3 年生合宿研修 (23~25) (芸北) 学年末試験 (13~20) (M5・I5 含む) 平成 20 年度入学者選抜検査 終業式 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 専攻科修了証書授与式 (電子・情報システム 工学専攻) 平成 20 年度入学式 平成 20 年度専攻科入学式 (電子・情報システ ム工学専攻) 始業日 1 年生オリエンテーション 大島丸体験航海 (S1・M1) 大島丸体験航海 (I1) 1 年生合宿研修 (1~2) (徳地少年自然の家) 防火訓練 弓削丸実習 (1 日) S1 大島丸実習 (1 日) S2 大島丸実習 (1 日) S3N 大島丸実習 (1 日) S3E 奨学後援会 総会 大島丸実習 S1 大島丸実習 S1 第 44 回中国地区高専体育大会 (4~6) (米子・ 広島・津山) 第 43 回全国商船高専漕艇大会 (4~6) (本校) 大島丸実習 (8~11) S4 (関門・別府・松山) 終業日 第 43 回全国高専体育大会 (17~24) (北海道 地区) オープンキャンパス 商船学科席上課程修了式 S5 商船学科卒業証書授与式 専攻科修了証書授与式 (海洋交通システム学 専攻) (第 1 期生 6 名) 創立記念日 平成 20 年度専攻科入学式 (海洋交通システム 学専攻) 始業日 慰靈祭 大島丸実習 S1 プログラミングコンテスト (11~12) (福島)	洞爺湖サミットの開催 北京オリンピックが開幕 麻生太郎内閣が成立

			10. 15 大島丸実習 (15~17) S2 (岡山) 10. 19 オープンキャンパス 10. 22 大島丸実習 (22~24) S3 (関門) 10. 26 中国地区高専ロボコン (津山) 11. 3 商船祭 11. 7 第 44 回中国地区高専体育大会 (7~9) (冬季・ 米子) 11. 11 大島丸実習 (11~12) S4N (松山) 11. 17 防災訓練 11. 18 大島丸実習 (18~19) S4E (松山) 11. 30 就職・進学懇談会 12. 18 校内マラソン大会 12. 19 終業日	
平成 21		2009	1. 8 校内成人式 1. 21 3 年生合宿研修 (21~23) (芸北) 1. 24 西中国地区高専音楽祭 (24~25) 2. 20 終業日 2. 22 平成 21 年度入学者選抜検査 3. 15 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 3. 15 専攻科修了証書授与式 (電子・情報システム 工学専攻) 4. 5 平成 21 年度入学式 4. 5 専攻科入学式 (電子・情報システム工学専攻) 4. 6 始業日 4. 6 1 年生オリエンテーション 4. 7 大島丸体験航海 (S1・M1) 4. 7 大島丸体験航海 (I1) 4. 30 1 年生合宿研修 (30~5/1) (徳地少年自然の 家) 5. 8 クラスマッチ 5. 11 防火訓練 5. 12 大島丸実習 S2 5. 14 広島丸実習 S1 5. 19 大島丸実習 (1 日) S3N 6. 9 大島丸実習 (1 日) S3E 6. 24 大島丸実習 (24~25) S1 (別府) 6. 28 獎学後援会総会 7. 3 第 45 回中国地区高専体育大会 (3~5) (宇部・ 松江・徳山) 7. 10 第 44 回全国商船高専漕艇大会 (10~12) (弓 削) 7. 14 大島丸実習 (14~17) S4 (関門・別府・松 山)	オバマ氏が米大統領に就任

			<p>8. 5 終業日</p> <p>8. 18 第 44 回全国高専体育大会 (18~28) (九州地区)</p> <p>8. 26 オープンキャンパス</p> <p>9. 4 商船学科席上課程修了式 S5</p> <p>9. 5 西中国地区高専音楽祭 (5~6) (呉)</p> <p>9. 19 商船学科卒業証書授与式</p> <p>9. 19 専攻科修了証書授与式 (海洋交通システム学専攻)</p> <p>9. 25 慰靈祭</p> <p>10. 1 創立記念日</p> <p>10. 2 平成 21 年度専攻科入学式 (海洋交通システム学専攻)</p> <p>10. 2 始業日</p> <p>10. 13 大島丸実習 S1</p> <p>10. 17 プログラミングコンテスト (17~18) (木更津)</p> <p>10. 18 オープンキャンパス</p> <p>10. 18 中国地区高専ロボコン (周南)</p> <p>10. 20 大島丸実習 (20~22) S2 (丸亀)</p> <p>10. 28 大島丸実習 (28~30) S3 (閨門)</p> <p>11. 3 商船祭 (第 40 回)</p> <p>11. 11 大島丸実習 (11~12) S4N (松山)</p> <p>11. 13 第 45 回中国地区高専体育大会 (13~15) (冬季・宇部)</p> <p>11. 16 防災訓練</p> <p>11. 18 大島丸実習 (18~19) S4E (松山)</p> <p>11. 29 就職・進学懇談会</p> <p>12. 18 校内マラソン大会</p> <p>12. 21 終業日</p>	鳩山由紀夫内閣が成立
平成 22	2010		<p>1. 7 授業開始</p> <p>1. 8 校内成人式</p> <p>1. 20 3 年生合宿研修 (20~22) (芸北)</p> <p>2. 19 終業日</p> <p>2. 21 平成 22 年度入学者選抜検査</p> <p>3. 14 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式</p> <p>3. 14 専攻科修了証書授与式 (電子・情報システム工学専攻)</p> <p>4. 4 平成 22 年度入学式</p> <p>4. 4 平成 22 年度専攻科入学式 (電子・情報システム工学専攻)</p> <p>4. 5 始業日</p> <p>4. 5 1 年生オリエンテーション</p> <p>4. 6 大島丸体験航海 (S1・M1)</p>	

			4. 7	大島丸体験航海 (I1)	
			4. 27	1年生合宿研修 (27~28) (徳地少年自然の家)	
			5. 7	クラスマッチ	
			5. 11	大島丸実習 S2	
			5. 18	大島丸実習 (1日) S3N	
			5. 24	防火訓練	
			5. 25	大島丸実習 (1日) S3E	
			6. 16	大島丸実習 (16~17) S1 (別府)	菅直人内閣が成立
			6. 20	奨学後援会総会	
			7. 2	第46回中国地区高専体育大会 (2~4) (吳・米子・大島)	
			7. 13	大島丸実習 (13~16) S4 (閬門・別府・松山)	
			8. 11	終業日	
			8. 11	第45回全国高専体育大会 (11~25) (東海・北陸)	
			8. 25	オープンキャンパス	
			9. 3	商船学科席上課程修了式 S5	
			9. 18	商船学科卒業証書授与式	
			9. 18	専攻科修了証書授与式 (海洋交通システム学専攻)	
			9. 30	慰靈祭	
			10. 1	創立記念日	
			10. 4	平成22年度専攻科入学式 (海洋交通システム学専攻)	
			10. 4	始業日	
			10. 13	大島丸実習 (13~14) S1 (松山)	
			10. 16	プログラミングコンテスト (16~17) (高知)	
			10. 16	オープンキャンパス	
			10. 16	中国地区高専ロボコン (松江)	
			10. 19	大島丸実習 (19~21) S2 (丸亀)	
			10. 27	大島丸実習 (27~29) S3 (閬門)	
			11. 3	第41回 商船祭	
			11. 5	第46回中国地区高専体育大会 (5~7) (冬季・吳)	
			11. 17	大島丸実習 (17~18) S4N (松山)	
			11. 19	第45回全国商船高専漕艇大会 (19~21) (広島)	
			11. 24	大島丸実習 (24~25) S4E (松山)	
			12. 8	防災訓練	
			12. 22	校内マラソン大会	
			12. 27	就職・進学懇談会	
平成 23	2011	1. 11	授業 開始		

		<p>1. 14 校内成式</p> <p>1. 31 3年生合宿研修（31～2/2）（芸北）</p> <p>2. 21 平成23年度入学者選抜検査</p> <p>3. 4 終業日</p> <p>3. 14 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式</p> <p>3. 14 専攻科修了証書授与式（電子・情報システム工学専攻）</p> <p>4. 3 平成23年度入学式</p> <p>4. 3 平成23年度専攻科入学式（電子・情報システム工学専攻）</p> <p>4. 4 始業日</p> <p>4. 4 1年生オリエンテーション</p> <p>4. 5 大島丸体験航海（S1・M1）</p> <p>4. 6 大島丸体験航海（I1）</p> <p>4. 27 1年生合宿研修（27～28）（徳地少年自然の家）</p> <p>5. 17 クラスマッチ</p> <p>5. 18 大島丸実習 S2</p> <p>5. 23 防火訓練</p> <p>5. 24 大島丸実習（1日） S3N</p> <p>5. 31 大島丸実習（1日） S3E</p> <p>6. 18 ブックハンティング</p> <p>6. 22 大島丸実習（22～24） S5（尾道・今治）</p> <p>6. 26 奨学後援会 総会</p> <p>6. 28 大島丸実習（28～29） S1（別府）</p> <p>7. 4 大島丸実習（4～7） S4（関門・別府・松山）</p> <p>7. 8 第47回中国地区高専体育大会（8～10）（広島・津山・吳）</p> <p>7. 22 第46回全国商船高専漕艇大会（22～24）（鳥羽）</p> <p>8. 9 終業日</p> <p>8. 13 第46回全国高専体育大会（13～9/4）（関東・信越）</p> <p>8. 22 オープンキャンパス</p> <p>9. 2 商船学科席上課程修了式 S5</p> <p>9. 17 商船学科卒業証書授与式</p> <p>9. 17 専攻科修了証書授与式（海洋交通システム学専攻）</p> <p>9. 30 慽靈祭</p> <p>10. 1 創立記念日</p> <p>10. 3 平成23年度専攻科入学式（海洋交通システム学専攻）</p> <p>10. 3 始業日</p> <p>10. 15 オープンキャンパス</p>	<p>東日本大震災、福島第一原子力発電所事故が起こる</p> <p>野田佳彦内閣が成立</p>
--	--	--	---

			10. 16 10. 17 10. 19 10. 25 11. 3 11. 11 11. 14 11. 16 11. 26 11. 29 12. 22 12. 22 12. 22	中国地区高専ロボコン（宇部） 大島丸実習（17～18） S1（松山） 大島丸実習（19～21） S3（関門） 大島丸実習（25～27） S2（今治） 商船祭 第 47 回中国地区高専体育大会（11～13）（冬季・津山） 防災訓練 大島丸実習（16～17） S4N（松山） 就職・進学懇談会 大島丸実習（29～30） S4E（松山） 校内マラソン大会 終業日 プログラミングコンテスト（22～23）（舞鶴）	
平成 24		2012	1. 10 1. 13 1. 21 1. 25 2. 19 3. 2 3. 17 3. 17 4. 4 4. 8 4. 8 4. 9 4. 10 4. 11 5. 7 5. 15 5. 16 5. 21 5. 26 5. 29 5. 30 6. 5 6. 24 6. 26 7. 6 7. 6	授業開始 校内成人式 平成 24 年度入学者選抜検査（推薦） 3 年生合宿研修（25～27）（芸北） 平成 24 年度入学者選抜検査 終業日 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 専攻科修了証書授与式（電子・情報システム工学専攻） 始業日 平成 24 年度入学式 平成 23 年度専攻科入学式（電子・情報システム工学専攻） 1 年生オリエンテーション 大島丸体験航海（M1・I1） 大島丸体験航海（S1） 1 年生合宿研修（7～8）（徳地少年自然の家） クラスマッチ 大島丸実習 S2 防火訓練 ブックハンティング 大島丸実習（1 日） S3N 大島丸実習（30～6/1） S5（尾道・今治） 大島丸実習（1 日） S3E 奨学後援会 総会 大島丸実習（26～27） S1（別府） 第 48 回中国地区高専体育大会（6～8）（徳山・宇部・大島） 第 47 回全国商船高専漕艇大会 カッターボ	プーチン氏が露大統領に就任

			門 (6~8) (弓削) 7. 17 大島丸実習 (17~20) S4 (今治・松山・小松) 8. 8 終業日 8. 18 第 47 回全国高専体育大会 (18~28) (中国) 8. 21 オープンキャンパス 9. 5 商船学科席上課程修了式 S5 9. 15 商船学科卒業証書授与式 9. 15 専攻科修了証書授与式 (海洋交通システム学専攻) 9. 28 慰靈祭 10. 1 創立記念日 10. 2 平成 24 年度専攻科入学式 (海洋交通システム学専攻) 10. 2 始業日 10. 7 中国地区高専ロボコン (宇部) 10. 13 プログラミングコンテスト (13~14) (有明) 10. 15 大島丸実習 (15~16) S1 (松山) 10. 17 大島丸実習 (17~19) S3 (閨門) 10. 20 オープンキャンパス 10. 23 大島丸実習 (23~25) S2 (今治) 11. 3 商船祭 11. 9 第 48 回中国地区高専体育大会 (9~11) (冬季・大島) 11. 12 防災訓練 11. 14 大島丸実習 (14~15) S4N (松山) 11. 16 中国地区英語弁論大会 (大島) 11. 21 大島丸実習 (21~22) S4E (松山) 12. 1 就職・進学懇談会 12. 15 就職・進学合同説明会 12. 20 校内マラソン大会 12. 20 終業日	安倍晋三内閣が成立
平成 25	2013	1. 7	始業日 1. 11 校内成人式 1. 19 平成 25 年度入学者選抜検査 (推薦) 1. 23 3 年生合宿研修 (23~25) (芸北) 1. 28 学生会選挙 2. 14 平成 25 年度入学者選抜検査 (学力) 3. 7 終業日 3. 16 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 3. 16 専攻科修了証書授与式 (電子・情報システム工学専攻) 4. 4 始業日	朴槿恵氏が韓国大統領に就任 習近平氏が中国国家主席に就任

		<p>4. 7 平成 25 年度入学式</p> <p>4. 7 平成 25 年度専攻科入学式 (電子・情報システム工学専攻)</p> <p>4. 8 1年生オリエンテーション</p> <p>4. 9 大島丸体験航海 (M1・I1)</p> <p>4. 10 大島丸体験航海 (S1)</p> <p>4. 15 交通安全教室 1年生</p> <p>4. 25 1年生合宿研修 (25~26) (徳地少年自然の家)</p> <p>5. 15 クラスマッチ</p> <p>5. 20 防火訓練</p> <p>5. 23 大島丸実習 (1日) S2</p> <p>5. 25 ブックハンティング</p> <p>5. 30 大島丸実習 (1日) S3E</p> <p>6. 1 商船学科 公開授業</p> <p>6. 12 大島丸実習 (12~14) S5 (尾道・今治)</p> <p>6. 18 大島丸実習 (1日) S3N</p> <p>6. 25 大島丸実習 (25~28) S4 (関門・別府・松山)</p> <p>6. 30 獎学後援会総会</p> <p>7. 5 第 49 回中国地区高専体育大会 (5~7) (松江・米子)</p> <p>7. 9 大島丸実習 (9~10) S1 (別府)</p> <p>7. 19 第 48 回全国商船高専漕艇大会 (19~21) (大島)</p> <p>8. 2 大島丸サマークルーズ (2~4) (小倉)</p> <p>8. 7 終業日</p> <p>8. 16 第 48 回全国高専体育大会 (16~9/1) (東北)</p> <p>8. 20 オープンキャンパス</p> <p>8. 22 航海訓練所 短期実習 (22~9/21) S4</p> <p>8. 27 商船学科卒業研究発表会 S5</p> <p>8. 30 商船学科席上課程修了式 S5</p> <p>9. 20 商船学科卒業証書授与式</p> <p>9. 20 専攻科修了証書授与式 (海洋交通システム学専攻)</p> <p>9. 27 慰靈祭</p> <p>10. 1 創立記念日</p> <p>10. 2 平成 25 年度専攻科入学式 (海洋交通システム学専攻)</p> <p>10. 2 始業日</p> <p>10. 9 大島丸実習・シンガポール・マリタイム・アカデミー (9~11) (尾道・今治)</p> <p>10. 12 オープンキャンパス</p> <p>10. 17 大島丸実習 (17~18) S1 (別府)</p>	
--	--	---	--

			10. 18 10. 23 10. 29 11. 2 11. 8 11. 13 11. 18 11. 20 11. 30 12. 14 12. 20 12. 20	中国地区高専ロボコン（18～20）（大島） 大島丸実習（23～25） 習 S2（今治） 大島丸実習（29～31） S3（門司・錨泊） 商船祭 第 49 回中国地区高専体育大会（8～10）（冬季・米子） 大島丸実習（13～14） S4N（錨泊） 防災訓練 大島丸実習（20～21） S4E（錨泊） 就職・進学懇談会 就職・進学合同説明会 校内マラソン大会 終業日	
平成 26		2014	1. 7 1. 10 1. 18 1. 29 2. 5 2. 8 2. 16 2. 28 3. 20 3. 20 3. 24 4. 3 4. 6 4. 6 4. 7 4. 8 4. 9 4. 24 5. 21 5. 22 5. 24 5. 28 5. 29 5. 30 5. 31 6. 16 6. 17 6. 22	始業日 校内成人式 平成 26 年度入学者選抜検査（推薦） 3 年生合宿研修（29～31）（芸北） 卒業研究発表（5～6） M5・I5 大島丸補習航海（8～9） 平成 26 入学者選抜検査（学力） 終業日 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 専攻科修了証書授与式（電子・情報システム工学専攻） バイク講習会 始業日（特別日課） 平成 26 年度入学式 平成 26 年度専攻科入学式（電子・情報システム工学専攻） 1 年生オリエンテーション 大島丸体験航海（M1・I1） 大島丸体験航海（S1） 1 年生合宿研修（24～25）（徳地少年自然の家） 大島丸実習（1 日） S3E 大島丸実習（1 日） S2 ブックハンティング 大島丸実習（1 日） S3N クラスマッチ 大島丸体験航海 広島県大竹市立小方中学校 商船学科 公開授業 交通安全教室 1 年生 大島丸実習（17～19） S5（尾道・今治） 奨学後援会総会	

			<p>6. 24 大島丸実習 (24~27) S4 (関門・別府・松山)</p> <p>7. 4 第 50 回中国地区高専体育大会 (4~6) (津山・広島・呉)</p> <p>7. 8 大島丸実習 (8~9) S1 (別府)</p> <p>7. 12 山口県 3 高専合同学校説明会 (岩国)</p> <p>7. 18 第 49 回全国商船高専漕艇大会 (18~20) (大島)</p> <p>8. 1 大島丸サマークルーズ (1~3) (小倉)</p> <p>8. 18 第 49 回全国高専体育大会 (18~31) (四国)</p> <p>8. 19 オープンキャンパス</p> <p>8. 20 オープンキャンパス</p> <p>8. 21 航海訓練所 短期実習 (21~9/21) S2・S3</p> <p>8. 26 商船学科卒業研究 発表会 S5</p> <p>8. 29 商船学科席上課程修了式 S5</p> <p>9. 1 学生海外語学研修 (1~22) カウアイ・コミニティ・カレッジ (米国・ハワイ)</p> <p>9. 9 研修旅行 (9~12) I4 (東京方面)</p> <p>9. 19 商船学科卒業証書授与式</p> <p>9. 19 専攻科修了証書授与式 (海洋交通システム学専攻)</p> <p>9. 26 慥靈祭・同窓会 総会</p> <p>10. 1 創立記念日</p> <p>10. 1 航海訓練所 航海実習 (1~2/28) S5</p> <p>10. 1 始業日</p> <p>10. 5 中国地区高専ロボコン (広島商船)</p> <p>10. 5 シンガポール・マリタイム・アカデミー交流学生来校 (5~11)</p> <p>10. 8 大島丸実習・シンガポール・マリタイム・アカデミー (8~10) (小倉)</p> <p>10. 15 大島丸実習 (15~16) S1 (今治)</p> <p>10. 18 オープンキャンパス</p> <p>10. 18 プログラミングコンテスト (18~19) (一関)</p> <p>10. 22 大島丸実習 (22~24) S2 (丸亀)</p> <p>10. 28 大島丸実習 (28~30) S3 (小倉)</p> <p>11. 1 商船祭</p> <p>11. 8 第 50 回中国地区高専体育大会 (8~11) (冬季・津山)</p> <p>11. 12 大島丸実習 (12~13) S4N (錨泊)</p> <p>11. 17 防災訓練</p> <p>11. 19 大島丸実習 (19~20) S4E (錨泊)</p> <p>12. 13 就職・進学懇談会</p> <p>12. 19 校内マラソン大会</p>	
--	--	--	---	--

			12. 19	終業日	
			12. 20	高専女子フォーラム in 中国（広島）	
平成 27	2015		1. 6	始業日	
			1. 10	校内成人式	
			1. 15	学習到達度試験 3 年生	
			1. 17	平成 27 年度入学者選抜検査（推薦）	
			1. 26	学生会選挙	
			1. 28	3 年生合宿研修（28～30）（芸北）	
			2. 4	卒業研究発表 M5・I5	
			2. 7	大島丸補習航海（7～8）	
			2. 15	平成 27 年度入学者選抜検査（学力）	
			2. 27	終業日	
			3. 2	就職・進学合同説明会	
			3. 20	電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式	
			3. 20	専攻科修了証書授与式（電子・情報システム工学専攻）	
			3. 24	バイク講習会	
			4. 5	平成 27 年度入学式	
			4. 5	平成 27 年度専攻科入学式（電子・情報システム工学専攻）	
			4. 6	始業日	
			4. 6	新入生オリエンテーション	
			4. 7	大島丸体験航海（M1・I1）	
			4. 8	大島丸体験航海（S1）	
			4. 23	1 年生合宿研修（23～24） 徳地青少年自然の家	
			4. 25	中国・四国地区高専専攻科生研究発表会（25～26）（徳山高専）	
			5. 11	防火訓練	
			5. 20	大島丸実習（1 日） S3E	
			5. 21	クラスマッチ	
			5. 21	大島丸・大晃機械 研修航海（1 日）	
			5. 23	ブックハンティング	
			5. 27	大島丸実習（1 日） S3N	
			6. 10	学校見学 広島県大竹市立小方中学校 来校	
			6. 13	第 1 回オープンキャンパス	
			6. 15	交通安全教室 1 年生	
			6. 16	大島丸実習（16～18） S5（尾道・今治）	
			6. 23	大島丸実習（23～26） S4（博多・小倉）	
			6. 22	奨学後援会 総会	
			7. 2	大島丸実習（1 日） S2	
			7. 3	第 51 回中国地区高専体育大会（3～5）（大島・宇部・徳山）	米・キューバの国交回復

		<p>7. 7 大島丸実習 (7~8) S1 (別府)</p> <p>7. 17 第 50 回全国商船高専漕艇大会 (17~19) (広島)</p> <p>7. 24 大島丸 親子 3S キャンプ (24~26)</p> <p>7. 25 山口県三高専合同学校説明会 (岩国)</p> <p>7. 29 卒業研究発表会 S5</p> <p>8. 4 第 23 回世界スカウトジャンボリー カッタ一体験</p> <p>8. 7 大島丸サマークルーズ (7~9) (下関)</p> <p>8. 11 終業日</p> <p>8. 12 商船学科席上課程修了式</p> <p>8. 21 第 2 回オープンキャンパス</p> <p>8. 28 大島丸・周防大島少年の船 (28~30) (江田島)</p> <p>9. 3 海外研修 (9~24) 台湾・国立高雄海洋科技大学 (学生派遣)</p> <p>9. 5 大島丸公開講座・大晃機械研修航海</p> <p>9. 7 学生海外語学研修 (7~27) ・カウアイ・コミニティ・カレッジ (米国・ハワイ)</p> <p>9. 15 大島丸 シニア体験航海 (宮島)</p> <p>9. 18 商船学科卒業証書授与式</p> <p>9. 18 専攻科修了証書授与式 (海洋交通システム学専攻)</p> <p>9. 30 慥靈祭</p> <p>10. 1 航海訓練所 航海実習 (1~2/29) S4</p> <p>10. 1 創立記念日</p> <p>10. 1 平成 27 年度専攻科入学式 (海洋交通システム学専攻)</p> <p>10. 1 始業日</p> <p>10. 4 シンガポール・マリタイム・アカデミー交流学生来校 (4~10)</p> <p>10. 6 大島丸実習・シンガポール・マリタイム・アカデミー (6~9) (神戸)</p> <p>10. 10 第 3 回オープンキャンパス</p> <p>10. 11 ロボコン中国地区大会 (11~12) (呉)</p> <p>10. 11 第 26 回プログラミングコンテスト (11~12) (長野)</p> <p>10. 14 大島丸実習 (14~15) S1 (今治)</p> <p>10. 21 大島丸実習 (21~23) S2 (丸亀)</p> <p>10. 31 商船祭</p> <p>11. 14 第 51 回中国地区高専体育大会 (14~15) (冬季・宇部)</p> <p>11. 16 防災訓練</p> <p>11. 18 大島丸実習 (18~20) S3 (小倉)</p>	<p>安保関連法が成立</p> <p>パリ同時多発テロが起こる</p>
--	--	--	-------------------------------------

			11. 23 柳井まつり (学校 PR) 12. 12 就職・進学懇談会 12. 14 MAAP(Maritime Academy of Asia and Pacific :フィリピン)教員による海事英語セミナー (14~18) 12. 22 校内マラソン大会 12. 22 終業日	
平成 28	2016		1. 6 始業日 1. 8 校内成人式 1. 14 学習到達度試験 3 年生 1. 23 平成 28 年度入学者選抜検査 (推薦) 1. 25 学生会選挙 1. 27 3 年生合宿研修 (27~29) (芸北) 1. 30 大島丸補習航海 (30~31) 2. 17 専攻科特別研究発表会 2. 21 平成 28 年度入学者選抜検査 (学力) 2. 23 専攻科特別研究中間発表会 2. 26 終業日 3. 2 就職・進学合同説明会 3. 9 学生海外語学研修 (9~17) シンガポール・マリタイム・アカデミー学生派遣 3. 18 電子機械工学科・情報工学科卒業証書授与式 3. 18 専攻科修了証書授与式 (電子・情報システム工学専攻) 3. 22 バイク講習会 4. 5 平成 28 年度入学式 4. 5 平成 28 年度専攻科入学式 (電子・情報システム工学専攻) 4. 6 始業日 4. 6 新入生オリエンテーション 4. 7 大島丸体験航海 (M1・I1) 4. 8 大島丸体験航海 (S1) 4. 27 大島丸実習 (1 日) S3E 4. 28 中国・四国地区高専専攻科生研究発表会 (28~29) (徳山高専) 5. 9 1 年生合宿研修 (9~10) 徳地青少年自然の家 5. 11 大島丸実習 (1 日) S3N 5. 18 大島丸 大晃機械 研修航海 (1 日) 5. 23 大島丸実習 (23~27) S5 (鹿児島) 5. 28 ブックハンティング 6. 14 学校見学 広島県大竹市立小方中学校 来校 6. 18 第 1 回オープンキャンパス	伊勢志摩サミットの開催 オバマ米大統領が広島を訪問 イギリスが国民投票で EU

		<p>6. 21 大島丸実習 (21~24) S4 (博多・門司)</p> <p>6. 25 奨学後援会総会</p> <p>6. 28 大島丸実習 (1日) S2</p> <p>7. 2 第 21 回中国地区高専体育大会 (2~3) (呉・広島・津山)</p> <p>7. 5 大島丸実習 (5~6) S1 (松山)</p> <p>7. 10 山口県三高専合同学校説明会 (岩国)</p> <p>7. 16 大島丸補習航海 (16~18)</p> <p>7. 17 大島丸 岩国港体験航海 (17~18)</p> <p>7. 18 第 51 回全国商船高専漕艇大会・カッター (17~18) (弓削)</p> <p>7. 22 大島丸 親子 3S キャンプ (22~24)</p> <p>8. 10 終業日</p> <p>8. 11 第 2 回オープンキャンパス</p> <p>8. 22 学生海外語学研修 (22~9/12) カウアイ・コミュニティ・カレッジ (米国・ハワイ)</p> <p>8. 24 大島丸・周防大島少年の船 (24~26)</p> <p>9. 11 学生海外研修 (11~25) 台湾・国立高雄海洋科技大学</p> <p>9. 3 大島丸 大晃機械研修航海</p> <p>9. 10 大島丸 大晃機械研修航海</p> <p>9. 21 商船学科卒業証書授与式</p> <p>9. 26 慽靈祭</p> <p>9. 26 始業日</p> <p>10. 1 航海訓練所 航海実習 (1~2/28) S4</p> <p>10. 1 創立記念日</p> <p>10. 3 平成 28 年度専攻科入学式 (海洋交通システム学専攻)</p> <p>10. 2 シンガポール・マリタイム・アカデミー交流学生来校 (2~8)</p> <p>10. 6 大島丸実習・シンガポール・マリタイム・アカデミー (6~7)</p> <p>10. 8 第 27 回プログラミングコンテスト (8~9) (伊勢)</p> <p>10. 11 クラスマッチ</p> <p>10. 12 大島丸実習 (12~13) S1</p> <p>10. 18 大島丸実習 (18~20) S2 (丸亀)</p> <p>10. 23 ロボコン中国地区大会 (津山)</p> <p>10. 26 大島丸実習 (26~28) S3 (下関)</p> <p>11. 3 商船祭</p> <p>11. 3 第 3 回オープンキャンパス</p> <p>11. 11 第 52 回中国地区高専体育大会 (11~13) (冬季・呉)</p>	<p>離脱を決定 メイ氏が英首相に就任</p> <p>リオデジャネイロオリンピックが開幕</p>
--	--	--	--

			11. 14 11. 16 11. 23 12. 10 12. 22	防災訓練 大島丸実習（16～17） S5 柳井まつり（学校 PR） 就職・進学懇談会 校内マラソン大会（中止）	
平成 29	2017		1. 10 1. 10 1. 12 1. 21 1. 25 1. 28 2. 16 2. 19 3. 17 3. 17 3. 22 4. 5 4. 5 4. 6 4. 6 4. 7 4. 10 4. 17 4. 21 4. 26 5. 10 5. 16 5. 22 5. 27 6. 17 6. 20 6. 27 7. 1 7. 4 7. 7 7. 15	授業開始 校内成人式 学習到達度試験 3年生 平成 29 年度入学者選抜検査（推薦） 3年生合宿研修（25～27）（芸北） 大島丸補習航海（28～29） 終業式 平成 29 年度入学者選抜検査（学力） 商船学科卒業証書授与式 専攻科修了証書授与式（電子・情報システム工学専攻） バイク講習会 平成 29 年度入学式 平成 29 年度専攻科入学式（電子・情報システム工学専攻） 始業日 新入生オリエンテーション 大島丸体験航海（M1・I1） 大島丸体験航海（S1） 1年生合宿研修（17～18） 徳地青少年自然の家 中国・四国地区高専専攻科生研究発表会（21～22）（宇部高専） 大島丸実習（1日） S3E 大島丸実習（1日） S3N 大島丸 大晃機械 研修航海（1日） 大島丸実習（22～26） S5（長崎） ブックハンティング 第1回オープンキャンパス 大島丸実習（20～23） S4（博多・門司） 大島丸実習（1日） S2 奨学後援会総会 大島丸実習（4～5） S1（松山） 第 53 回中国地区高専体育大会（7～9）（松江・米子） 大島丸補習航海（15～17）	安倍首相が真珠湾を訪問 トランプ氏が米大統領に就任 マクロン氏が仏大統領に就任 5 文在寅氏が韓国大統領に就任 天皇の退位等に関する皇室典範特例法が成立 改正組織犯罪処罰法が成立 国連会議で核兵器禁止条約が採択

		<p>7. 21 大島丸 親子 3S キャンプ (21~23)</p> <p>8. 5 第 2 回オープンキャンパス</p> <p>8. 8 終業日</p> <p>8. 23 大島丸・周防大島少年の船 (23~25)</p> <p>9. 1 大島丸 大晃機械研修航海 (1~2)</p> <p>9. 21 平成 29 年度商船学科卒業証書授与式</p> <p>9. 21 平成 29 年度専攻科修了証書授与式 (海洋交通システム学専攻)</p> <p>9. 25 慰靈祭</p> <p>9. 25 始業日</p> <p>10. 1 創立記念日</p> <p>10. 2 平成 29 年度専攻科入学式 (海洋交通システム学専攻)</p> <p>10. 4 大島丸実習・シンガポール・マリタイム・アカデミー (4~6)</p> <p>10. 8 第 28 回プログラミングコンテスト (8~9) (周南)</p> <p>10. 11 大島丸実習 (11~13) S2 (丸亀)</p> <p>10. 15 ロボコン中国地区大会 (周南)</p> <p>10. 17 大島丸実習 (17~18) S1 (別府)</p> <p>10. 25 大島丸実習 (25~27) S3 (下関)</p> <p>11. 3 商船祭</p> <p>11. 3 第 3 回オープンキャンパス</p> <p>11. 10 第 53 回中国地区高専体育大会 (10~12) (冬季・松江)</p> <p>11. 13 防災訓練</p> <p>11. 15 大島丸実習 (15~16) S5</p> <p>11. 18 創基 120 周年・高専創立 50 周年記念式典 創基 120 周年・高専創立 50 周年記念講演会 『伝統と最新の技と革新』 「リニアモーターカー ～The linear motor train～」 上西寛一郎 氏 (元鉄道総合技術研究所 浮上式鉄道開発本部長) 「伝統工芸と萩焼」 守田唐七 氏 (陶芸家, E65 期卒業)</p> <p>11. 23 柳井まつり (学校 PR)</p> <p>12. 9 就職・進学懇談会</p> <p>12. 22 クラス対抗長縄 8 の字跳び大会 (校内マラソン大会中止のため)</p>	
--	--	--	--

あとがき

2015年7月に第1回記念誌専門委員会が開かれ、創基120周年・高専創立50周年記念誌の作成が企図されてからはや2年。その間に退職された古藤泰美教授の後を受けて、この4月から委員長の大任を頂き、不慣れな編集作業に右往左往しながらなんとか発刊の岸にたどり着くことができ、肩の荷が下りたようで安堵しているというのが私の偽らざる心境です。ここにいたるまでご多忙中にもかかわらずご協力いただいた記念誌専門委員会委員の皆さん、執筆者、ならびに関係者の方々には厚く御礼申し上げます。とりわけ、最終原稿のチェックを快く引き受けてくださった藤井雅之先生（同委員会副委員長）と、CDジャケットのデザインを担当してくださった橋理恵先生のご尽力に心から感謝の意を表します。

とはいえ、記念誌としては決して十分なものではなく、至らない点も多々見受けられるとは存じますが、それはひとえに私の能力の不足によるもので、笑ってご了承いただければ幸いです。

さて、この冬は数十年ぶりの非常に強い寒波が日本列島を襲い、各地に大雪を降らせ、本校でも経験したことのない厳しい寒さを感じています。そのなかでも春の兆しは必ずあると信じ、洋々たる未来へ出航しましょう！

2018年1月 濑戸内の小島にて

120周年記念誌専門委員会

委員長 野本敏生